

2013 年度 専任教員の教育研究等活動業績

〈教授〉

窪内節子	1
荒井直	12
山口勝弘	18
深津容伸	26
渡辺久壽	32
川島秀一	38
関野陽一	45
斎藤信平	51
田代順	58
小菅健一	67
黒田浩司	73
石田千尋	81
田中健夫	89
難波道弘	95

〈准教授〉

川口清泰	101
井草清志	106
石橋泰	112
韓暁宏	118
李尚珍	124
佐柳信男	133
高橋寛子	140

〈専任講師〉

Danny W. Brown	149
森稚葉	156
杉浦学	166

〈助教〉

奥村弥生	172
秋月拓磨	178
飯田敏晴	185
後藤晶	191

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
クボウチ セツコ 窪内 節子		女	非公表	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(心理学)	専門分野	臨床心理学・学校臨床心理学・学生相談		
学 歴	1968年	3月 横浜共立学園高等学校卒業			
	1972年	3月 横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程卒業			
	1979年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学入学			
	1981年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学修了			
	2003年	4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程入学			
	2006年	3月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程修了			
	2007年	1月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻において博士(心理学)取得			
実 務 経 験	1972年	4月 東京都目黒区五本木小学校教諭(～1979年3月)			
	1979年	10月 国際基督教大学カウンセリングセンター 非常勤カウンセラー(～1993年6月)			
	1988年	1月 恵泉女学園大学・短期大学英文科 非常勤カウンセラー(～1993年3月)			
	1989年	4月 恵泉女学園短期大学英文学専攻非常勤講師 心理学及び教育心理学担当(～1996年3月)			
	1990年	4月 青山メンタルヘルスカウンセラー(～現在)			
	1993年	4月 恵泉女学園大学・短期大学英文学専攻 学生相談室専任カウンセラー(～1996年3月)			
	1996年	4月 山梨英和短期大学専任講師(～1996年3月)			
	1997年	4月 富士市立看護専門学校非常勤講師 (～2010)			
	1998年	4月 山梨英和短期大学助教授 大学との兼任(～2003年3月)			
	1999年	4月 甲府市立東中学校カウンセラー(～2000年3月)			
	2000年	4月 玉川大学 非常勤講師(～2002年3月)			
	2001年	4月 甲府市立西中学校スクールカウンセラー(～2001年3月)			
	2001年	4月 山梨県養成訪問カウンセラー(～現在)			
	2001年	4月 山梨大学保健センター非常勤講師 学生相談担当(～2002年3月)			
	2002年	4月 山梨大学工学部非常勤講師 (～現在)			
	2002年	10月 山梨英和大学人間文化学部助教授(～2003年3月)			
2003年	4月 山梨県立看護大学非常勤講師(～2007年3月)				
2006年	4月 山梨英和大学教授(～現在)・山梨英和大学カウンセリングセンター所長(～2008年3月)				
2011年	4月 山梨英和大学副学長(～現在)・同大学院臨床心理学専攻主任(～2012年3月)				
受 賞 歴	2012年	5月 日本学生相談学会学会賞受賞			
	年	月			
	年	月			
所 属 学 会	1994年	4月 日本学生相談学会正会員(理事、編集委員)			
	1982年	4月 日本心理臨床学会正会員			
	1999年	4月 日本精神分析学会正会員			
	2008年	10月 日本臨床動作学会正会員			
	2011年	8月 日本教育心理学会正会員			
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1972年	3月 小学校1級普通免許(小1普第518号)			
	1972年	3月 中学校1級普通免許(中1普第838号)			
	1972年	3月 高等学校2級普通免許(高2普第1000号)			
	1989年	月 臨床心理士(941号)			
e-mail	非公表				

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>臨床心理学は、現実には生活している対象と関わりながら、その実践を研究していく学問である。そこで、学生を教えるにあたって、臨床心理学や学校心理学等の知識として理論や技法を身に着けることはもちろんのこと、①人との関係性の構築、②コミュニケーション、③人間関係を通して自己を発見することの3点を重視している。そのためたとえ講義であっても、学生と教員の双方向のコミュニケーションができるよう学生への問いかけや体験的ワークなどを取り入れ、常に生き生きとした講義ができるよう配慮している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.“学生相談的教育指導”(窪内考案)の実施 長年の学生相談経験を生かし、学生の心理的成長を促すことを目的として、担当した教職課程の授業全体を学生が教師という仕事を「役割実験」する機会として提供した。その指導の仕方を“学生相談的教育指導”と名づけ、その観点を、①人間関係能力の育成、②授業に何らかのハードルを設ける、③学習したことを社会で実践する、④学生へのフィードバック、を挙げ、追跡研究し発表した。この方法がシンポジウム「学生相談の立場から大学教育を考える」(日本学生相談学会17回大会)にも取り上げられ発表討議された。</p> <p>b.講義、臨床体験グループ作業、シェアリング、ふりかえりという形式で、自己理解、他者理解を深め、対人関係能力を高めていく体験的授業の実施 カウンセラーになるは、これまでの臨床心理学の知見を理解し、臨床実践の場で人間関係や援助の相互作用に気づき、有効な相互作用の関係を構築できることが必要となる。そのため、体験学習を取り入れながら、自己理解を深めながら他者との相互関係についての理解をめざしている。具体的には、カウンセリングの基礎を学んでいることを前提として、心理教育プログラムにおけるコンセンサス、問題解決、ロールプレイングなどの実習を行ない、対人援助技法について身につけていく。</p> <p>c. 学生の体験レポートを役立てつつスクールカウンセラーについて学ぶ授業実践 豊富なスクールカウンセラーの経験をもつ筆者の、実際の体験談を述べた後、小レポートで、学生自身のいじめや不登校について記述を求める。そのレポートを匿名で講義で取り上げ、学校臨床心理学側面を加えて筆者が解説することで、より実践的で身近な問題として学生の興味が喚起される授業となっている。</p> <p>d. 臨床心理面接方法習得のための演技的手法の導入 面接をどう始めるか、面接の進め方、「わかる」ということについて、見立て、「ストーリー」の読み方、家族との会い方などについて学ぶ。その際、学生にカウンセラーとクライアントの役を演じさせ、それを他の学生に見せることで、自らの面接のあり方を気付かせるよう配慮する。特にクライアント役には、病理を持つ人を演じさせることで、カウンセラーの応答をより敏感に感じ取り、各人の人間関係のあり方が浮かび上がらせる中で、臨床心理面接を学習させている。その結果実際の臨床心理面接について学ぶと同時に、自らの対人関係のあり方についての気づきを深められる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. メンタルヘルスと心理学:吉武光世・窪内節子・山崎洋史・小野留美子(共著) 4章、6章、7章全202頁のうち41頁 学術図書出版社 1995.2 人間理解の学問である心理学をメンタルヘルスに焦点をあてて書いたものである。第1部は、人間理解の基礎として、不適応行動を理解するための枠組みとなる学習理論、情報処理過程、発達理論、集団の役割と個人の行動について言及した。第2部は、メンタルヘルスの維持・増進の観点から、パーソナリティの理論的枠組みを概観し、心理検査による人格理解の方法、症状形成の背景、心理療法などについて具体例を交えて解説した。</p> <p>b. 楽しく学ぶこころのワークブック:窪内節子編著書 全138ページ 学術図書出版 1997.4</p>

教育能力	<p>心理学の理論をもとに、精神発達過程、人間関係、適性などから本来の自分を探り、身近なこころの問題を中心に、心理学を体験しながら学べるよう理論編と体験を楽しむ実践編とに分けて書いた本である。カウンセラーとしての臨床体験から得られた知恵と実践の仕方が随所に加味され、心理学の基礎知識から心理療法の意味や手法を理解するために分かりやすく書いたが、内容的には専門書を目指した。</p> <p>c. 生徒理解と教育相談：窪内節子(単著)全191ページ 玉川大学通信教育部 2001. 3月筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実際的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談とカウンセリング、問題行動の指導・援助の実際について、心理の専門家の立場から取り上げてある。</p> <p>教育相談(カウンセリングを含む)を中心に生徒指導、進路指導、さまざまな問題行動の実際とその指導援助について書いたものである。</p> <p>筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実際的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談とカウンセリング、問題行動の指導・援助の実際について、心理の専門家の立場から取り上げてある。</p> <p>d. やさしく学べる心理療法の基礎：窪内節子 吉武光世(共著) 培風館 約220頁のうち約110頁 2003.4</p> <p>カウンセラーの基礎姿勢に始まり、精神分析とそれ以後の様々な心理療法に焦点をあて、各章にサイコセラピー練習という項目を設け、各心理療法の課題をこなしていくことで自然と心理療法の理論が学べる仕組みを取り入れ書いた心理療法論である。</p> <p>e. 窪内節子(共著)：学校における心理・社会的な問題の相談と対応 □ 作間慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 2005. 3. 1</p> <p>「教育心理学」のテキストとして、教師がスクールカウンセラーを如何に有効に活用していけるかに焦点をあて、教師の行うカウンセリングの方法など、最新の児童・生徒の心理理解の方法についても言及した。</p> <p>f. 窪内節子(共著)：はじめて学ぶメンタルヘルスと心理学 —「こころ」の健康をみつめて 学文社 3、8、9章(61頁)2005.4. 1</p> <p>前書「メンタルヘルスと心理学」の姉妹書で、よりメンタルヘルスに焦点をあてて書いたものである。心の発達に始まり、病める心の理解のために心理検査や心の病気についてかなり詳細に書き、解決法としての心理療法について具体例を交えながら解説している。</p>
担当授業科目	<p>2013年度： 学部：基礎ゼミⅡ、専門ゼミナール、学校臨床心理学、卒業研究 大学院：臨床心理学特論Ⅰ、心理臨床面接特論、心理臨床事例検討、修士論文</p>
代表的シラバス	<p>例として「生徒指導」のシラバスを取り上げる。(授業概要)</p> <p>学級経営が困難な「学級崩壊」状態にある学級を再生させるための授業と生徒の指導法について学ぶ。</p> <p>学級崩壊に至らないための教師の工夫について、討議形式を用いて学生とともに考えていく。</p> <p>その際、生徒を理解することに重点を置いた生徒指導、進路指導、教育相談についての最新の情報や技法についても取り上げる予定である。以上のように、学生とのディスカッションを加え、主体的に学ぶながらその内容を深めていく授業を心がけている。</p>
教育改善活動	<p>特になし</p>

教育能力に対する評価	<p>(1)①学部学生による授業評価</p> <p>学校臨床心理学：約70%以上の人から満足という評価で、実体験をもとに話されるので、イメージしやすかった、学校現場の「今」に触れられたなど、の評価を得た。</p> <p>・悪い点は、「板書の字が読みにくかった」挙げられ。</p> <p>生徒指導：ほぼ全員から満足をもらい、「学生の意見をもとめ、言いやすい雰囲気だった」学生同士発表したり、ワークをしたりするのが良かったという。</p> <p>その他、基礎ゼミ、専門ゼミ、卒業研究においても同様の評価が得られた。</p> <p>②大学院生による授業評価</p> <p>2009年度・2010年度の学生による授業評価から</p> <p>発達臨床心理学特論：5点評価で4.6を得て、臨床現場の空気が伝わってきた。言葉が心に残った。分かりやすく、受講しやすかったなどの自由記述が寄せられた。</p> <p>臨床心理実習：4.2の評価を得て、自分で動かなければならない実習は有意義だったなどの感想が寄せられた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、本学学部・大学院共に授業評価は行っていない。</p> <p>しかし、文部科学省が後援する全国大学学生相談担当者を対象とする全国学生相談研修会の分科会講師評価において、2009年度・2010年度5点評価で4.94および4.96を獲得した。</p> <p>その際の記述として、本当に楽しかったです。自身の捉え方、認識が広がった気がします。講師のパーソナルパワーにより、内容に深まりができたと感じるなどが挙げられた。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>臨床心理学は、実践を基盤とする学問である。したがって、理論や技法の知識だけでなく対人援助職としての研鑽が不可欠な学問である。その結果として、対象となる者の心理内容を把握しでき、研究が可能となる特徴がある。特に次のような観点について、関心を持ち研究を進めている。</p> <p>a.大学生を対象にする学生相談において、青年の幼児化が進み、内省体験が減少して、主体となる「自分」が希薄になり、アイデンティティの形成が困難となっている。</p> <p>このようなアイデンティティ形成の道筋が多様化している現代の青年の心理内容について検討する。</p> <p>b.アイデンティティ確立を意味する「自分がある」という意識形成に焦点を当てた事例の検討を通して、青年期のクライアントの自我意識形成プロセスと、そのプロセスにおけるセラピスト-クライアント関係のあり方を考察する。</p> <p>c.既知集団の研修型エンカウンター・グループに有効な、様々な身体的表現を媒介とするオリジナルなプログラムの開発と施行方法について</p> <p>d.大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方</p> <p>e. スクールカウンセラーがより有効に機能するための他業種との連携の意義と有り方の検討</p>
研究経歴	<p>1980年 土居健郎から週2回のスーパービジョンを受ける。(1982年12月まで)</p> <p>1983年 関東中央病院精神神経科(小倉清)にて病院研修。(1988年まで)</p> <p>1984年 精神療法研究会で事例研究。(2009年3月まで)</p> <p>1987年 首都圏心理臨床懇話会で事例研究。(2010年3月)</p> <p>1992年 ICU事例研究会で事例研究。(1998年3月まで)</p> <p>1992年 関東地区学生相談研究会で事例研究等。(～現在)</p> <p>1994年 ヒルズ研究会で事例研究。(2008年3月まで)</p> <p>1996年 小倉研究会で事例研究。(1999年3月まで)</p> <p>1997年 日本語臨床研究会にて事例研究。(2002年3月)</p> <p>1997年 自分の言葉で語る臨床研究会主宰。(～現在)</p>

<p>経研 歴究</p>	<p>2007年 青山動作法研修会で臨床動作法の訓練。(～現在) 2011年 さくら会(小倉清主宰事例研究会)。(～現在)</p>
<p>研 究 実 績</p>	<p>(1)著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 窪内節子(分担執筆):学生相談におけるガイダンスとカウンセリング 都留春夫監修 学生相談－理念・実践・理論化 p95-107 星和書店 1994.5 2. 窪内節子 吉武光世 山崎洋史 小野留美子(共著): メンタルヘルスと心理学 p79-94,p155-169,p181-198 学術図書出版社 1995.2 3. 窪内節子(分担執筆):こころの日曜日3 菅野泰蔵編著 p29-30,p187-190 研友企画出版 1995.6 4. 窪内節子(分担執筆):全国大学学生相談ガイドブック 学生相談ガイド編集委員会編 p4-5,p76-77 実務教育出版 1996.4 5. 窪内節子(分担執筆):こころの日曜日4 菅野泰蔵編著 p158-159、p206-207 研友企画出版 1996.6 6. 窪内節子(単編著):楽しく学ぶこころのワークブック 全138頁 学術図書出版 1997.3 7. 窪内節子(分担執筆):いつもこころに休日を 菅野泰蔵編著 p56-58 成美堂出版 2000. 4 8. 窪内節子(単著):生徒理解と教育相談 玉川大学通信教育部 全191頁 2001.3 9. 窪内節子(分担執筆): 短期大学生の学生生活 鶴田和美編著 学生のための心理相談 p. 155-167培風館 2001. 11 10. 窪内節子 吉武光世(共著):やさしく学べる心理療法の基礎 培風館 約220頁のうち、2, 3, 4, 5, 11章(約110頁)2003.4 11. 窪内節子(単監訳):バチエラーズー結婚しない男達の心理 全208ページ 世織書房 2003. 12 12. 窪内節子(共著):学校における心理・社会的な問題の相談と対応 2005. 3. 1 作間慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 p.124-154 13. 吉武光世編著 窪内節子・山崎洋史・平澤浩一(共著):はじめて学ぶ メンタルヘルスと心理学―「こころ」の健康をみつめて 学文社 3,8,9章(61頁)2005.4. 1 14. 窪内節子(分担執筆):学生相談における可変的な面接構造の重要性 鶴田和美・斎藤憲司共編 学生相談シンポジウム-大学カウンセラーが語る実践と研究 培風館 p.86-90 2006. 11 15. 窪内節子(分担執筆):相談対象に応じた援助 短大・高専・専門学校生 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 学生相談ハンドブック 学苑社 p.89-92 2010. 2.20 16. 窪内節子(分担執筆):大学での問題行動ー薬物依存 心理臨床学事典 日本心理臨床学会編 p.196-197 2011.8.31 17. 窪内節子(単編著):やさしく学べる心理療法に実践 培風館 2011. 12 <p>(2)学術論文(最新5年間のもの)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 窪内節子 青年期の心理療法における自我意識の形成に関する実践的研究 ー「甘え」理論を基盤にしてー 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学学位論文 全206頁 2007.1.31 2. 国際交流委員会・宮崎圭子・窪内節子 中国高等教育の現状と留学生問題 ー中国学生相談学会会長 樊 富珉先生を囲んでー 学生相談研究 Vol.27 No.3 p.274-286 2007.3.31 3. 窪内節子 看護学生のための研修型エンカウンター・グループの試み ー学生の状態により適応的なグループ・プログラムを提供するためにー 山梨英和大学紀要 第7号 p.1-14 2008. 3

研究実績	<p>4. 窪内節子 学生相談と心理臨床ー現場に生きる心理臨床の創造とはー 日本心理臨床学会27回大会 準備委員会企画シンポジウム 京都大学カウンセリングセンター紀要 p.94-100 2009.3</p> <p>5. 窪内節子 体験学習を通じた現在学生とのかかわり 日本学生相談学会第25回大会における最首悟先生のトークイン報告 山梨英和大学学生相談室報告書 p.3-23 2009.3</p> <p>6. 窪内節子:大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方 山梨英和大学紀要 8号 p.9-17 2009. 3</p> <p>7. 窪内節子:書評「事例から学ぶ学生相談」鶴田和美・桐山雅子・吉田昇代・若山隆・杉村和美・加藤容子 編著 学生相談研究 第31巻 第2号 p.175-180 2010.11</p> <p>8. 今村亨・窪内節子:効果的な初年次教育の導入に関する研究ー山梨英和大学におけるアカデミックリテラシー の内容分析を中心に 山梨英和大学紀要第10号 p.68-81 2011.3</p> <p>9. 窪内節子:教育臨床30年を生きてーその出会いと喜び 山梨英和大学心理臨床センター紀要第6号 p.94-98 2011.5</p> <p>(3)その他</p> <p>1. 窪内節子:ベテランカウンセラーから若者への生き方案内Ⅲ 山梨英和大学学生相談室報告書 2010.3 10-14</p> <p>2. 窪内節子・鈴木健一:学生相談の基礎 第48回全国学生相談研修会報告書 p.18-19 2011.3</p> <p>3. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅳ 山梨英和大学学生相談室報告書 2011.3 8-10</p> <p>4. 窪内節子:ICU教育が私にもたらせたもの こころの面影 創設30周年・55周年記念文集合本 国際基督教大学心理学研究室 p.54-55 2012.2</p> <p>5. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅴ 山梨英和大学学生相談室報告書 2012.3 10-13</p> <p>6. 窪内節子:学生相談を語る(XVI)ー相談実践と組織づくりの往復から 第49回全国学生相談研修会報告書2013.3</p> <p>7. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅵ 山梨英和大学学生相談室報告書 2012.3 9-12</p>
競争的資金採択課題	<p>2011年 日本臨床心理士資格認定協会平成23年度臨床心理学の実践に関する研究助成 10月 黒田浩司・馬場禮子・窪内節子・五味義夫・山口勝弘・田代順・田中健夫・森稚葉・ 奥村弥生・小野綾子・篠原恵美 「初学者のケース担当における体験をコンティンする教育・訓練システムの研究」 2011年 日本学生相談学会学会賞受賞</p>
学会等発表・役員参加	<p>(1)学会発表等(最新のものを5編を記載)</p> <p>2005年 5月 鈴木奈緒子 窪内節子 鎌田誠: カウンセラーとして授業に携わる試み-新入学生の適応支援のために- 日本学生相談学会第23回大会</p> <p>2006年 5月 保科公彦・鈴木奈緒子・鎌田誠・小野ゆり・窪内節子: 身体的訴え:新入学生の適応支援のキーワード 日本学生相談学会第24回大会 2006. 5.</p> <p>2012年 9月 窪内節子:災害後ケアのための効果的な学級ミーティング実施について 一心のケアのための絵本を用いて簡易的ディブリーフィングを促進するー 第31回日本心理臨床学会 2012.9</p> <p>2012年 9月 本田綾乃・窪内節子:不登校の親の会における母親の変化過程 第31回日本心理臨床学会 2012.9</p> <p>2012年 9月 加賀美くみ・窪内節子:大学留年生におけるすれすれ対処方略に関する研究 第31回日本心理臨床学会 2012.9</p> <p>2012年 12月 内閣府公募事業「子ども・若者支援ネットワーク形成のための研究会事業シンポジウム 基調講演:窪内節子「山梨における若者支援の現状とその連携を探る」</p> <p>2013年 5月 学会賞受賞記念講演:窪内節子「私の学生相談、これまでとこれから」 第31回日本学生相談学会 2013.5.20</p> <p>(2)学会等の役員参加(最新5年間のもの)</p>

<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>2007年 5月 第25回日本学生相談学会準備委員長 2007年 9月 第26回日本心理臨床学会大会準備委員 2008年 5月 日本学生相談学会第26回大会ワークショップ講師 2008年 9月 第27回日本心理臨床学会事例研究司会者 2008年 9月 第27回日本心理臨床学会準備委員会企画シンポジウムシンポジスト 2009年 5月 第27回日本学生相談学会事例研究発表座長 2009年 7月 第16回全国適応指導連絡協議会全国会議第1分科会助言者 2009年 9月 第28回日本心理臨床学会ポスター発表司会者 2010年 5月 第28回日本学生相談学会事例研究発表座長 2010年 8月 山梨県総合教育センター研修会講師・企画運営 2010年 9月 第29回日本心理臨床学会事例研究発表司会者 2011年 5月 第29回日本学生相談学会事例研究発表座長 2012年 5月 第31回日本学生相談学会事例研究発表座長 2012年 5月 内閣府公募事業口 「平成24年度 子ども・若者支援地域ネットワーク形成研修会」世話人 2004年5月～2013年5月 日本学生相談学会理事(編集委員) 2003年～現在 山梨県臨床心理士会幹事 2006年～現在 山梨県臨床心理士会事務局長 2011年4月～2013年3月 山梨県総合計画審議会委員</p>
<p>共同研究・受託研究の実績</p>	<p>(最新のもの) 2004年 4月 学校臨床場面における心理査定活用についての一考察 面接導入への有効性の観点から 山梨英和大学学生相談室との共同研究 2005年 5月 カウンセラーとして授業に携わる試み-新入学生の適応支援のために- 山梨英和大学学生相談室との共同研究 2006年 5月 身体的訴え:新入学生の適応支援のキーワード 山梨英和大学学生相談室との共同研究 2007年 3月 中国高等教育の現状と留学生問題 中国学生相談学会会長 樊 富珉先生を囲んで 学生相談学会国際交流委員会委員として 2009年 3月 学生相談と心理臨床ー現場に生きる心理臨床の創造とはー 京都大学カウンセリングセンターとの共同研究 2011年 10月 日本臨床心理士資格認定協会平成23年度臨床心理学の実践に関する研究助成 黒田浩司・馬場禮子・窪内節子・五味義夫・山口勝弘・田代順・田中健夫・森稚葉・ 奥村弥生・小野綾子・篠原恵美 「初学者のケース担当における体験をコンティンする教育・訓練システムの研究」</p>
<p>大学院指導</p>	<p>大学院修士論文指導教員(副査) 2005年度 1. 子育てサークルにおける心理的効果と母親援助の可能性に 関する一考察 2006年度 1. 職場におけるストレス・コーピングー愛着スタイルとの関連の検討 2. 教師との関係形成を重視したスクールカウンセリングに関する研究 ー予防的観点から 2007年度 1. 抑うつ傾向にある青年への支援プログラムの効果測定 ー認知行動療法による抑うつ軽減プログラムを自己効力感の側面から考える 2. 障害児とその母親の遊び場面に関する一考察 2008年度 1. キャリア支援の一環としての集団コラージュ導入の試み 2. 学生相談における贈り物の意味 ー心理面接過程におけるターニングポイントの視点からー</p>

大学院指導	大学院修士論文指導教員(主査) 2009年度 1. 高齢者の心理に与えるコラージュ継続制作の影響 2. 大学生における対人関係が自己受容に及ぼす影響—愛着との関連— 2010年度 1. グループにおける「語り」を通じた介護職従事者への関わり —ストレスケアの一環としての心理的援助の試み— 2. 小中移行期におけるコンピテンスの変化と学校適応の関係 2011年度 1.不登校の子どもを持つ母親のセルフヘルプグループに関する— 2.大学留年生におけるハーディネスとストレス対処方略との関連 2012年度 1.青年の自尊感情に与える重要な他者の影響に関する—考察 2.「物語としての自己」を支える語り手・聞き手の関係性についての一考察
研究能力に対する評価	①日本学生相談学会の編集委員に推挙され、編集作業に当たっている。 ②日本心理臨床学会における論文査読の推薦を受けた。(2008年度・2009年度) ③学生相談の立場から心理臨床の新しい視点を提供したと京都大学カウンセリング・センター紀要に取り上げられた。 ④長年の学生相談研究や活動に対して学会賞を授与された。

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2003年 4月 山梨英和大学教授・カウンセリングセンター所長 2010年 4月 山梨英和大学共通科目委員長 2011年 4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻主任 2011年 4月 山梨英和大学副学長 2011年 4月 山梨英和大学FD推進委員会・大学院FD推進委員会委員 2012年 4月 山梨英和大学副学長社会連携担当
アドバイザー活動実績	学部基礎ゼミアドバイザーとして、年2回懇親会を開催 学部専門ゼミ及び卒論ゼミアドバイザーとして、懇親会開催・大学祭ゼミ出店・卒業旅行など開催 大学院指導教員として、懇親会開催のほか、修了生も参加する同窓会も主催
後進育成活動実績	事例検討会「自分の言葉で語る臨床研究会」を主宰し、後進の指導に当たっている。 大学院修了生に対し、適宜スーパービジョンを引き受け、事例の指導にあたっている。
社会貢献活動	(1)講演会 2008年 9月 FM甲府ラジオ番組「生涯学習の時間」対談出演「不登校からの学び」 2010年 8月 山梨県総合教育センター研修会講演 「本来の連携の在り方と意義について考える」 2010年 10月 山梨英和大学文化事業 第6回臨床心理講演会講師 「教育臨床30年を生きて-その出会いと喜び」 2011年 1月 名桜大学FD研修会講演講師「大学における学生相談について」 2011年 1月 被害者支援センターやまなし第5期生ボランティア候補者養成講座講演 「被害者支援のためのカウンセリング」 2012年 2月 被害者支援センターやまなし第6期生ボランティア候補者養成講座講演 「カウンセリング概論」 2012年 3月 山梨県臨床心理士会東日本大震災被害者支援報告会講師 「東日本大震災支援福島県におけるSC活動報告」 2012年 7月 山梨県立富士見支援学校旭分校実践報告会講師

社会 貢 献 活 動	2012年	12月 シンポジウム「山梨における若者支援の現状とその連携を探る」基調講演者
	2013年	5月 第31回日本学生相談学会学会賞受賞記念講演
	(2)出前講座	
	2009年	7月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2009年	11月 第47回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」 小講義「カウンセリング入門」講師
	2009年	11月 学校教育相談実践研修会事例検討会講師
	2010年	11月 教育相談における実践力を養う研修会講師
	2010年	11月 第48回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」
	2010年	12月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2011年	5月 ラジオ FM甲府出演「ざっくばらん:新しい場になじみにくい人に
	2011年	7月 曹洞宗山梨県宗務所主催第1回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「カウンセリング入門」
	2011年	9月 曹洞宗山梨県宗務所主催第2回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「自殺について考える」
	2011年	11月 第49回全国学生相談研修会講師「学生相談を語る(XVI)ー相談実践と組織作りの往復から」
	2011年	11月 曹洞宗山梨県宗務所主催第3回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「寄り添いについて考える」
	2012年	1月 山梨県立富士見支援学校PTA研修会講師 「親と子の良い距離を保った関わりとは」
	2012年	7月 ラジオ FM甲府出演 ①いじめ経験者の話 ②臨床心理士を目指して
	2012年	10月・11月 山梨放送ラジオ「GO GO イチ ワンストップ」出演 リスナーの相談に答える
	(3)公開講座	
	2009年	5月 山梨いのちの電話公開講座「こころを考える10章」講師 こころに寄り添う「カウンセリングの技術」
	2011年	10月 大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ講師 「心のケアとしてのリラクゼーション」
	2011年	11月 心のサポート授業 ストレスマネジメント教育 山梨県立都留高校
	2012年	7月 山梨県立富士見支援学校旭分校実践報告会講師
	2013年	5月 山梨英和高校 ストレスマネジメント教育ーみんなでストレスを解消してみよう
	(4)学外審議会・委員会等	
	1995年	4月 日本学生相談学会理事 研修委員
	1998年	5月 日本学生相談学会常任理事 特別委員長 資格検討委員長
	1998年	5月 日本学生相談学会大会準備委員
	2001年	4月 山梨県心の健全育成委員会副会長
	2001年	5月 日本学生相談学会常任理事資格認定委員長
	2002年	4月 山梨県新教育ビジョン策定委員会委員
	2003年	4月 山梨県臨床心理士会幹事
	2004年	5月 日本学生相談学会理事(編集委員)
	2006年	5月 山梨県臨床心理士会事務局長
	2006年	11月 日本心理臨床学会理事長推薦甲信越・北陸地区世話人
	2007年	5月 第25回日本学生相談学会大会準備委員長
	2007年	9月 第26回日本心理臨床学会大会準備委員
2008年	10月 第4回山梨県総合計画審議会委員	
2011年	4月 第5回山梨県総合計画審議会委員	
2013年	5月 日本学生相談学会監事就任	

献社 活会 動貢	(5)その他 年 月 特になし
----------------	--------------------

成果と目標

専門的成果	<p>①著書(窪内, 2001・2010)で、短大生の心理相談の実情や学生の特徴について、大学と短大の学生生活の違い、相談内容からみた短大生の入学期, 中間期, 卒業期の傾向を分析し、①必修授業の多さからくる心理的余裕のなさ、②単位取得失敗するすると挽回することの困難さ、③規模が小さいゆえの目立たない存在であることの困難さがあることを明らかにした。</p> <p>②論文(窪内, 1994・1997・2004)で追及してきた心理療法における治療者とクライアントとの間の心の通い合いを原初的な「気持ちのむすびつき」と名付けた。その関係性概念を導入して、「甘え」理論による青年期の自我意識形成のプロセスを事例から明らかにして博士論文(窪内, 2006)まとめた。</p> <p>③論文(窪内, 1997・1998・1999・2000・2003・2007・2009)一貫して学生相談の立場から事例・調査・ワーク開発などを追及し、大学における学生相談のあり方について考察している。</p> <p>④窪内節子・吉武光世(共著)「やさしく学べる心理療法の基礎」(倍風館)は心理療法の概論として多くの大学の教科書として取り上げられ、大学院入試のための参考書ともなり、現在約13000部が販売されている。</p> <p>⑤「やさしく学べる心理療法の基礎」の続編を出版社から強く求められ2012年度に出版。</p>
専門的目標	<p>①心理療法において、治療的視点ではなく成長的視点に重点を置いて、幼児的な「甘え」の処理の仕方について考察を深めたい。</p> <p>②博士論文は事例研究ゆえに個人のプライバシーを考慮して出版しなかった。匿名性を高めるなどの工夫をして出版にこぎつけたい。</p> <p>③大学での任期終了時に今までの学生相談経験をまとめた著書を出版予定</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
アライ ナオン 荒井 直	男	1954年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	西洋古典学・比較文化・文学	
学 歴	1974年	4月 国際基督教大学教養学部人文学科入学		
	1978年	3月 国際基督教大学教養学部人文学科卒業(教養学士)		
	1980年	4月 国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士前期課程入学		
	1982年	6月 国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士前期課程修了(文学修士)		
	1983年	4月 国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士後期課程入学		
	1987年	9月 ケンブリッジ大学トリニティー・ホール大学院在籍(1988年6月まで)		
	1988年	8月 国際基督教大学大学院博士後期課程単位取得満期退学		
実 務 経 験	1982年	4月 国際基督教大学教養学部人文学科非常勤助手(1986年3月まで)		
	1985年	4月 多摩美術大学非常勤講師(ドイツ語・英語)(~87年3月/88年9月~91年3月)		
	1988年	4月 山梨英和短期大学非常勤講師(文学)(88年10月まで)		
	1990年	4月 立教大学文学部非常勤講師(古典ギリシア語)(1992年3月まで)		
	1990年	4月 山梨英和短期大学専任講師(95年3月まで)・助教授(95年4月~)		
	1995年	4月 青山学院女子短期大学教養学部非常勤講師(西欧古典文化等)(98年3月まで)		
	1995年	4月 在外研究員としてケンブリッジ大学トリニティー・ホールで研究(95年9月まで)		
	1996年	12月 国際基督教大学教養学部非常勤講師(西洋古典文学II)(96年3月)		
	1997年	7月 岩手大学文学部非常勤講師(比較文学特講IX・古代ギリシア文学)97年7月		
	1999年	4月 多摩美術大学非常勤講師(宗教学)(2000年3月)		
	2002年	4月 山梨英和大学教授(現在に至る)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1981年	4月 国際基督教大学比較文化研究会(現在に至る)		
	1990年	4月 日本西洋古典学会(現在に至る)		
	1991年	6月 The Society of Biblical Literature (97年7月まで)		
	1992年	9月 The American Philological Association (98年8月まで)		
	2008年	4月 ICU哲学研究会(現在に至る)		
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>「愛智は驚嘆(タウマゼイン)にはじまる」(アリストテレス)および「知性は人間が生き延びるのに必須のツールである」(ベルクソン)が教育上の指導理念である。レクチャでも語学科目でも、未知の対象に対して心を開くよう、異質なものに対して敬意をもつよう、そして喜びをもって学ぶよう促している。レクチャでは「テキストを読む」とはどういうことかを、語学科目ではある程度科学的で普遍的な方法を試行している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例：以下に、比較文化・思想論、英語、そしてドイツ語の場合について述べた。</p> <p>「比較文化・思想論」は、制度的には「英語圏文化」という枠内で想定されているが、いわゆる「英語圏」の文化も、より広範な「ヨーロッパ文化圏」のなかで捉えないと正確な像を結ばない事象があることを勘案して、学生に「ヨーロッパ文化」の核心に触れてもらえるようなテーマを設定している。また社会人(リピータを含む)のために開放している講座でもあるため、毎年テーマを変えている。2009年アビ・ワールブルク、2010年ロラン・バルト、2011年ヨハン・ホイジンガを取り上げている(ドイツ[北米]、フランス、オランダ)。講義は、知識の修得ではなく、学生が今生きて当然と見なしている現代の社会を自ら改めて見直し考え直し、(可能ならば)喜びをもって生き延びられることができるような視点の提供を目指している。2012年はシモーヌ・ヴェイユ『根を持つこと』をとりあげ、社会的絆を破砕するような力に抗して生き延びるにはどうしたらよいかを考える予定である。</p> <p>「英語」: 英語には、①イギリス文化の精髓である言語 English と②英語を母語としない人々間でのコミュニケーションのツールとして使用される言語—現在の国際社会でのリンガ・フランカである— Globish の二種があることを理解してもらい、学生には主に②の修得にエネルギーと時間を傾注するように促し、折にふれ①の成果にも触れてもらっている。このアプローチにより、English に対する不要なコンプレックスから解放され、修得目標もある程度明確に提示できるようになったので、英語再挑戦者である学生の学習意欲の向上に役立っていると思われる。また、やさしい英語で(日本やアジア独自のものについて)内容のある発信ができる好例として鈴木大拙の講演などを学修している。</p> <p>「ドイツ語」には、はじめての第二外国語の修得にはあまり適格的ではない週一回年間30回で教授しなければならないという制約がある。したがって、①一年後に自力で継続して学び続けられる(あるいは一度放擲しても再挑戦を志したときに容易に再開できる)程度の基礎力の修得を工夫している。しかし、上記の枠内では「実用」になるドイツ語の修得が(一部学生を除いて)困難であることを勘案し、②「言語は諸民族の真髄を忠実に表すもの」(ミシュレ)、「言語は文化を保存する」(ハンナ・アーレント)という立場を採用し、(a)ドイツ語による名句50の説明をし暗記してもらっている。また、(b)バンヴェニスト『インド・ヨーロッパ諸制度語彙』などを利用しながら、語彙や文章にまつわる文化的伝統・社会的背景などに触れ、ヨーロッパ文化に対するある種の「教養」を培ってもらう時間も設けている。</p> <p>以上、レクチャ科目と語学科目の教育実践について述べたが、私の専攻がヨーロッパの古典である古代ギリシア・ローマ文化であるため、ある程度歴史的奥行きをもって授業を展開できていると思う。そして、それが、学生が、日本語だけで考えているのでは立ち入れないような現代の社会や文化の偏移を再考する契機になっているのではないかと考えている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度：基礎ゼミナール2、外国語(ドイツ語2)、インターンシップ、比較文化・思想論、専門ゼミナール、卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>比較文化・思想論： ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス—文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み—』を読みながら、「遊び」「文化」「人間」などについて考えていきます。ブルクハルト、ニーチェ、オルテガ・イ・ガゼット『大衆の叛乱』などが考察の＜補助線＞歴史的・文化人類学的思考のパワー(の一端)に触れて下さい。現代の文化のあり方を考え直す機縁にもなるはずです。</p>
教育改善活動	<p>FD研究会は「皆勤」。どんな発表、レクチャ、ワークショップからも自分の教育実践の改善についてのヒントを得ているが、具体的に教育改善に活かさきれない憾みがある。自分で工夫したことでない現場で臨機応変に使えないからであろう。</p> <p>学生サービス部のアンケートや講義内でのフィードバックの学生によるコメントで、改善の要求の多いのは、板書の丁寧さの欠如と、早口と滑舌の悪さである。この二つにも十全に対応できていない。2011後期による試行の後、2012年4月からは(科目によるが)パワーポイント導入を計画中である。ポイストレーニング考慮中。2012年度は、FD・SD推進委員会座長として、教員の授業実践の更なる改善・PCを最大限に活用する方途に習熟してもらう研究会等を企画予定(勿論自らの講義や授業でのPC運用レベルアップを図る)。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価 学生サービス部アンケートのコメントおよび各講義の学生のフィードバックによれば、「今までに触れたことのないものに触れられてよかった」「大学の講義っぽかった」という意見がよく見られる。これは、講義課目では、「若い頃にこそ本格・大物を」というスタンスで授業をしているからだと思う(恩師の恩師からのモットーである)。具体的な対応も求められている改善点は上記の通りである。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 今のところ実施していない。教育改善の目標を具体的に設定した上で2012年度の前期には実施したい。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>古代ギリシア文学、とくにアリストパネス喜劇の研究を主要なテーマとしている。西欧の知性は、ことある毎に、自己を再把握するために古代ギリシア・ローマに参照枠をもとめる。すなわち、思想的・批判的・学問的新機軸がうち出されると、しばしばそれは古代ギリシア研究に援用される。例えば、構造主義的な・フェミニズム的なギリシア悲劇の読解などが現れる。したがって、現代思想や批判理論などにも配視し、つねに現代にもリアルに示唆を与えうるものとして古代ギリシア文学を研究している。また、喜劇に注目するのは、喜劇が、ヒロイズムを拒否する点に、多く学ぶべきものがあるからである。人間は油断するとつい大きなことを考えてしまいがちである。そのほうが偉そうに思えるからであるが、喜劇は偉そうにすることがみっともないことであることを教えてくれる文学ジャンルだからである。</p> <p>また、古代研究のジャンルの一つに「古代の遺産の後代での展開」を追尋する研究がある。たとえば、ラブレやモンテニューによる「古典」の血肉化のあり方を分析したりする研究(例えばマイケル・スクリーチ教授の著作に典型的な研究)である。現在、アリストパネス・ルキアノス的な喜劇的精神を発揮したエラスムスに関して、少し予備的な勉強をしている。</p>
研究経歴	<p>1974年から1988年まで学部・大学院を国際基督教大学で過ごしたことが学問のスタンスを決めた。ICUでは、ギリシア語で書かれているのだから、ホメロスから新約聖書までギリシア文学であり、そこに人間の偉大と悲愴がリアルに描かれているものとして古代ギリシア文学を学んだ。またこの間ICUに居ながら当代の碩学(ケネス・ドーヴァー)や古典学の枠を越境して研究を進める本物のスカラー(G. ロイド)の講筵に列なれたことは僥倖であった。</p> <p>1987年から大学院の最後の1年をケンブリッジで送れたことで、生活・人生をあげて学問に奉仕する生き方を、そして学生と教師は「同僚」であるという姿勢を、わずかながら身につけられた(ように)思う。</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>2001年 5月刊 地中海文化と語る会編『ギリシア世界からローマへ: 転換の諸相』(彩流社) 所収「喜劇変容の一断面—ギリシアの喜劇からローマの喜劇へ」(121~159頁)</p> <p>2003年 4月刊 川島重成・高田康成編『ムーサよ、語れ—古代ギリシア文学への招待』(三陸書房) 所収「アリストパネス—『女の平和』における厳粛な茶番」(203~223頁)</p> <p>2009年 1月刊 岩波版『ギリシア喜劇全集3 アリストパネス III』所収「テスモポリア祭を営む女たち」の翻訳・脚注・解説(103~198頁、343~358頁)</p> <p>2010年 2月刊 岩波版『ギリシア喜劇全集6 メナンドロス II』所収『ミーメシス(憎まれ者)』~417番までの断片の翻訳(226~352頁)</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>2004年 3月刊 『日本西洋古典学会』52号(岩波書店) 所収『『蛙』の蛙についての一考察—「アゴーン」場面とのディオニュソスとの関連で」(32~44頁: 英文要約152~54頁)</p> <p>2006年 3月刊 『日本西洋古典学会』54号(岩波書店) 所収、書評 Colin Austin & S. Douglas Olson, eds., Aristophanes, Thesmophoriazousae (Oxford, 2005) (121~124頁)</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>2010年7・8月: 日本西洋古典学会が刊行予定(2012年)の欧文雑誌創刊号に投稿されたメナンドロス</p>

実績研究	喜劇に関する論文の査読を大阪大学教授とともに担当した。	
競争的資金採択課題	2008年 4月～2011年3月 科研費基盤研究(B) 「リベラルアーツ教育における文学教育の歴史と可能性」(主宰:ICU大西直樹教授) 研究分担員	
学会等発表・役員参加	<p>専門の学術研究は、様々な事由で数年来開店休業の様相を呈しているため、テクニカルな論文の発表は、下記のみである。</p> <p>2003年 6月 日本西洋古典学会で、「『蛙』の蛙についての一考察—「アゴーン」場面でのディオニュソスとの関連で—</p> <p>学会役員等は、特になし。</p>	
共同研究の実績・受託	特になし	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	<p>西洋古典学会から、アリストパネス喜劇の学術書書評の依頼を受けたり、メナンドロス喜劇に関する論文の査読の依頼を受けたり、あるいは、岩波版喜劇全集の翻訳を依頼されたりするので、一応は喜劇研究者の末席を汚していると(誤って)看做されている。</p> <p>しかし、自分が「生半可以下」のスカラーであることは自分でよく分かっているつもりである。</p> <p>内容のない自己卑下は私の趣味ではないので、「生半可以下」は正確な評価である。</p> <p>まだスカラーであることを諦めてはいないので、これからも研鑽をつみたいと思っている。</p>	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2012年 2月～ 副学長(学生サービス担当)、FD・SD推進委員会座長 2011年 4月～ 図書館長、学生委員会、エクステンション委員会 2010年 4月～ 入試部長 司書・学芸員過程委員会など 2009年 4月～ 入試部長 司書・学芸員過程委員会など 2008年 4月～ 入試実務委員長 司書・学芸員過程委員会など 2007年 4月～ エクステンションセンター長など 2006年 4月～ エクステンションセンター長など
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし

社会 貢 献 活 動	(1)講演会 特になし
	(2)出前講座 特になし
	(3)公開講座 山梨英和大学エクステンションセンター(メイプルカレッジ)企画講座「片言隻語の西洋古典」(前期6回)
	(4)学外審議会・委員会等 特になし
	(5)その他 山梨英和学院理事・評議員(2012年4月～)

成果と目標

専門的成果	<p>①アリストパネス『テモポリア祭を祝う女たち』の翻訳・脚注・解説、またメナンドロスの断片の翻訳(出来栄に難がなくもないが)一応の専門的成果と言えるかもしれない。</p> <p>②現行カリキュラムでは、古代ギリシアの演劇を扱うレクチャは開講していないため、直接講義に反映させられないが、比較文化・思想論の枠組みで、モリエールやシェイクスピアの喜劇との対比をテーマにするなら教育にも活かせるのではないと思われる(狂言との対比でも可能だろう)。</p> <p>③古代ギリシア文化には現代にも示唆を与えうる多くの点をもつので、単発の講演などをすれば学生に資する面もあるかも知れない(例えば進路支援活動での古代ギリシアの「労働観」の紹介など)。</p>
専門的目標	<p>①アリストパネス研究を確実に進捗させ、コンパクトな博士論文に結実させる。</p> <p>②アリストパネスの古喜劇、メナンドロスの新喜劇、(ルキアノスの喜劇的散文)、そしてプラウトウスの破天荒なき喜歌劇、テレンティウスの家庭的喜劇などを、「家」(オイコス、ファミリア)を軸に総合的に考察したモノグラフを仕上げる。</p> <p>③以上の論考を踏まえて、Popularizerとしてギリシア文化・ローマ文明の喜劇的側面を前景化した著作をつくりたい。ある文化が何を笑いの対象とするのかは、その文化が何を真剣に考えるかに劣らず重要であると考えからである。可能ならば、その成果を講義に反映させる方途も模索したい。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ヤマグチ カツヒロ 山口 勝弘	男	1941年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(文学)	専門分野	臨床心理学・教育心理学・特別支援教育	
学歴	1960年 3月 東京都 私立 早稲田高等学校 卒業 1960年 4月 日本大学文理学部 心理学科 入学 1964年 3月 日本大学文理学部 心理学科 卒業 1964年 4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 入学 1966年 3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 修了(文学) 1966年 4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 入学 1969年 3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程単位取得満期退学			
実務経歴	1969年 4月 埼玉県立精神衛生センター嘱託(1970年3月まで) 1970年 4月 山梨大学 教育学部 助手(1972年3月まで) 1972年 4月 山梨大学 保健管理センター 講師(1978年4月まで) 1978年 5月 山梨大学 保健管理センター 助教授(1979年4月まで) 1979年 5月 山梨大学 教育学部 助教授(1987年4月まで) 1987年 5月 山梨大学 教育学部 教授(1998年3月まで) 1994年 4月 山梨大学 学生部長併任(1996年3月まで) 1995年 4月 山梨大学大学院 教育学研究科 教授(2007年3月まで) (1994年8月大学院設置審査会で○合適格判定) 1998年 4月 山梨大学 教育人間科学部 教授(2007年3月まで) 1998年 4月 山梨大学 教育人間科学部 評議員(2002年3月まで) 2004年 4月 山梨大学 保健管理センター長(併任)(2007年3月まで) 2007年 4月 山梨大学 名誉教授 2007年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科兼同大学院人間文化研究科 教授 現在に至る			
受賞歴	2011年 10月 厚生労働大臣表彰(第59回精神保健福祉全国大会) 年 月			
所属学会	1965年 4月 日本心理学会会員(1985~1987年および1989~2009年)(現在に至る) 1965年 4月 日本心理学会会員(専門別議員:1985~1987年および1989~2009年) (現在に至る) 1967年 4月 日本児童精神医学会(現日本児童青年精神医学会)会員(2009年3月まで) 1968年 4月 日本アルコール医学会(評議員:1978年4月~1992年3月まで)会員 (1992年3月まで) 1970年 4月 日本特殊教育学会会員(現在に至る) 1984年 4月 日本電子情報通信学会会員(2009年3月まで) 1990年 4月 日本心理臨床学会会員(現在に至る) 2001年 4月 日本音楽療法学会会員(現在に至る)			
特免資 許許格 等・・・	1990年 1月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 登録番号第02019) 年 月 年 月			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>いつの時代にも変わらぬ大学教育の使命がある。それは専門性の探求と、人としての深い教養の修学である。適応的なライフサイクルを実現していくためには、これらの課題をそれ相応に両立させて行くことが肝要である。</p> <p>このような基本的な考えのもと、バランスの取れた人材育成を目指す教育活動を実践する。そのためには、2つの学習方法、即ち、知的学習と体験学習の組み合わせで構成される学習環境の整備や指導法の工夫が重要となる。単なる知的学習に留まらずに、そこで得た事象を表現する力(実践力)にまで発展させるために、2つの形態の学習を自己の中で咀嚼していける授業展開を目指したい。その結果、青年期に生きる学生の自分探し(アイデンティティ)、人間関係の営み技術(コミュニケーション)そして学習への主体的取り組み姿勢の構築に役立つことを伝えたい。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.山梨英和大学大学院カリキュラムの中で担当している、“障害者(児)臨床心理学特論”で精神遅滞、学習障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害等の行動理解、発達支援、指導構造及び指導法、親の障害受容について、自ら担当した治療教育相談実践例を通して分析、解説、2004年度－2010年度。</p> <p>b.放送大学山梨学習センター、面接授業”障害児の発達支援”で、障害児の実態把握のための教育診断法、発達過程、問題行動のとらえ方、治療教育の方法論等について、視聴覚教材や体験学習のためのエクササイズ(ロールプレイ・コミュニケーション技法)を導入して概説、2008年度－2010年度。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a.山口勝弘他編著、“子どもの発達支援”－障害児教育のフィールドワーカー、pp48－58、84－96 啓明出版、ISBN:4－87448－030－6、2002。</p> <p>b.山口勝弘、“療法的手法による音楽指導”、“音楽の生涯教育－理論と実際－、高萩保治・中嶋恒雄編著、pp92－99、玉川大学出版部、ISBN:4－472－40232－7</p> <p>c.山口勝弘・大島貞夫著、“心理学要説”、pp3－19、21－50、51－64、81－94、117－140、165－167、194－204、相川書房、ISBN:4－7501－0261－X、1999。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a.山口勝弘、“音楽療法士に求められること”、pp1－36、(岐阜県音楽療法士協会 設立記念講演発表資料)、2002. 10</p> <p>b.山口勝弘、“障害児教育臨床に携わる者に求められること－子ども理解のために－、山梨障害児教育学研究紀要Vol.1、pp1－14、山口勝弘退官記念講演、2007. 7</p> <p>c.山口勝弘、“脳血管障害の対象者に対する音楽療法－障害受容の視点から”、(発表者:井上幸一)、井上氏の論文へのコメント、音楽療法 Vol.17、2007</p> <p>d.山口勝弘、“音楽療法にまつわる介護現場でのコミュニケーションに関する一考察－介護福祉士から見た音楽療法－、(発表者:宮澤 崇)、宮澤氏の論文へのコメント、音楽療法、Vol.18、2008</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2013年度： 基礎ゼミ1、地域支援の心理学、教育心理学、専門ゼミ、卒業研究、発達障害者・児の心理・生理、カウンセリング演習、教職実践演習(以上学部)。障害者・児臨床心理学特論、臨床心理事例研究、臨床心理実習(以上大学院)。</p>
<p>代表的シラバス</p>	<p>基礎ゼミ・専門ゼミでは演習の形態を取るため、受け身・待ちではなく、自主的・積極的な授業参加ができるような授業構造を設定している。具体的な問題設定から始まって、文献講読、資料分析、プレゼンまでの作業過程を体験学習できるように配慮している。</p> <p>講義では最新情報の提供と併せて、単に知識・情報を機械記憶するだけでなく、話された講義内容に対応する具体的な例を自己の生活に求め、自らを関与させながら反すうするという学習態度の習得を可能にするように構成している。</p>

教育改善活動	<p>a.文献検索の具体的手法及び資料収集についての講義を特科して設置。</p> <p>b.講義における視覚情報教材の大幅な導入。</p> <p>c.教員からの一方的な話しではなく、相互コミュニケーションを体現するための教授法の工夫を常時検討。</p> <p>d.集団討議・エクササイズ・ロールプレイ等の体験学習形態を導入</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価(アンケートより)</p> <p>全体的評価:わかりやすい、おもしろい等の感想が寄せられ、受講生の適応水準を考慮した授業が展開されたと認識している。大人数の、しかも出席を原則として取らない授業で、ほとんど欠席が見られなかった。演習形式の授業では、最初の頃受け身的姿勢が通らないことに戸惑い、ストレスを感じていたが、支持的指導を受けて適応してくれた。</p> <p>良い点・改善してほしい点(自由記述欄より):日常生活での自己体験に対応して理解を深めることを求められるので、抽象的な概念も理解しやすかった。反面、授業で適度な緊張感を持続していないとついていけない旨の感想も寄せられた。また、自我関与することができにくい学生の場合、知的学習のみに集中すべく、毎講義の逐語録を毎回配布してほしい旨の要望も出された。</p> <p>改善に向けた今後の方針:学生の個人差を受容できる学習の場づくりをこれからも多面的に改善していくが、今日、従来の個人差の概念では理解しがたい差異が観察され、それに対応する教育環境の整備が求められる。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>基礎ゼミ等では、一部担当教員間でフィードバックを行って来てはいるが、同僚教員等による講義評価は定例的には行っていない。今後の課題になる。2012～2013年度、FD活動の更なる活性化が進行している。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>1971年から今日まで、“治療的小集団研究”に取り組む。発達教育や心理的適応を目指す治療的小集団の形成過程や集団力動の機能等について、実践的研究を行ってきている。このグループ過程の行動学的研究の成果を学生相談におけるグループ・アプローチ、治療教育における指導法そして集団療法の技法検討に活用している。小集団研究で得られた知見は、治療的小集団のみならず、家族、学校、職場、地域社会等における個と集団の関係を理解する際にも活用できる普遍性を所持していることが実証されつつある。大学はじめ、各地域の研究者との共同作業や情報交換を通して、研究を推進している。</p> <p>1984年から1991年にかけて、障害児教育における言語指導のためのマイクロコンピュータによるバイオフィードバックシステムの開発に着手し、音声認識装置の開発とソフトプログラムの実証的研究に従事。併せて、1999年からはPCに換えて、音・音楽活動を媒介にした指導法の実践的研究に着手。現在、これら障害児・者の治療教育、集団力動に関する研究を統合整理。</p>
研究経歴	<p>1971年 山梨大学教育学部助手・同保健管理センター講師・助教授、山梨大学教授、山梨英和大学教授 エンカウンターグループを主催 大学生の精神健康増進のための体験学習による指導法の実証的研究に従事(現在まで)</p> <p>1984年 山梨大学教育学部助教授・教授 障害児の言語指導のための教材開発(1991年3月まで)</p> <p>1999年 山梨大学教授、山梨英和大学教授 発達障害、精神障害における音楽療法の効用と限界に関する基礎調査に従事(現在まで)</p> <p>2007年 犯罪被害者支援活動ネットワーク(山梨)の創生に参加(2012年度まで)</p> <p>2011年～2013年 公益財団法人 被害者支援やまなしの設立に向けてのコミュニティ活動の実践研究に従事</p>

研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.山口勝弘・大島貞夫著、心理学要説、pp3-94、117-140、165-167、194-204、相川書房、ISBN:4-7501-0261-X、1999.</p> <p>b.山口勝弘・古屋義博編著、子どもの発達支援—障害児教育のフィールドワーク—、pp48-58&84-96、啓明出版、ISBN:4-87448-030-6、1997.</p> <p>c.山口勝弘・山下滋夫著、障害を持つ子ども達の理解とその教育、pp1-96、啓明出版、ISBN:4-87448-027-6、1994</p> <p>など。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.山口勝弘、“私の精神保健—障害児・者との関わりを通して学んだこと—”、山梨英和大学心理臨床センター紀要第8号、2013. 5</p> <p>b.山口勝弘・長田由布紀著、“就学期を迎えた障害児の母親に対する心理的支援について”、山梨障害児教育学研究紀要第5号、pp35-46、2011. 2</p> <p>c.山口勝弘著、“日本における音楽療法の導入とその変遷”、音楽療法第19号、pp35-57、2010. 7</p> <p>d.山口勝弘・加藤千晴著、“障害児の親の障害否認・受容に関する一研究”、山梨障害児教育学研究紀要第3号、pp111-122、2009. 2</p> <p>e.山口勝弘著、“音楽による療法的手法”、山梨大学教育人間科学部紀要8巻、pp241-254、2007. 3</p> <p>f.山口勝弘著、“障害児教育臨床に携わる者に求められること”、山梨障害児教育学研究紀要創刊号、pp1-14、2007. 2</p> <p>など。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.学術雑誌”音楽療法”(日本臨床心理研究所)Vol. 1~19(1991~ 2010年)への投稿論文査読審査および編集の任に当たる。</p>
競争的資金採択課題	<p>a.平成2・3年度(1988年4月~1991年3月)科学研究費(重点領域研究)「コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究」—障害児のためのCAIシステムの開発(平成2年度)・重度・重複障害児へのフィードバック機能を持つCAIシステムの活用(平成3年度)—研究分担者</p> <p>b.2001年4月~2002年3月 厚生科学研究費(障害保健福祉総合研究事業)「音楽療法の臨床的意義とその効用に関する研究」研究分担者</p> <p>c.1977年度~2006年度 学生相談研究会議(国立大学保健管理センター及び学生相談室で構成され、文部省科研費—厚生補導特別経費—で運営してきた組織)の会員として、「大学生の精神健康増進のためのグループアプローチ」研究分担者</p>
学会等発表・役員参加	<p>2011年 11月 山梨県PTA協議会母親研修会、指導助言者(甲斐市)</p> <p>2011年 10月 第36回関東甲信越地区特別支援知的障害教育校長会、指導助言者(甲府)</p> <p>2010年 8月 教科指導(音楽・図工・美術)”、第44回全日本特別支援教育研究協議会関東甲信越地区特別支援教育研究集会、指導助言者、都留文科大学、pp37-38</p> <p>2008年 7月 ”音楽療法”Vol.17・18(2009年)投稿論文におけるコメンテーター、pp70、pp54.</p> <p>2007年 11月 山口勝弘他、座談会”音楽療法の未来に向かって—地域とともにほぐむ音楽療法へ”、第6回日本音楽療法学会関東支部地方大会、パネリスト</p> <p>1998年 4月 日本心理学会専門別議員(1985年~1987年、1989年~2009年まで)</p>
受託共同研究の実績	特になし

<p>大学院生指導</p>	<p>大学院生（主）指導 教員(山梨英和大学大学院人間文化研究科 臨床心理学専攻)</p> <p>2012年度 ※不登校理解に関する一考察:中学校担任教師とスクールカウンセラーによる視点の相違から</p> <p>※仕事役割と親役割間の葛藤と心理的Well-beingに関する一考察</p> <p>2011年度 * 中年期危機への対処行動に関する一考察</p> <p>2010年度 * 障害児・者を育てる親の障害受容過程に関する研究－夫婦の会話に焦点を当てて－</p> <p>* メンタルフレンド活動における青少年への関わり方に関する一考察－実践者への面接を通して－</p> <p>2009年度 * ジェンダー・タイプと主観的幸福感・自尊感情の関係について</p> <p>2008年度 * 就学期を迎えた障害時の母親に対する心理的支援について－継続的な面接調査を通して－</p> <p>* 子どものストレス対処－ストレスマネジメントプログラムの実践から－</p> <p>2007年度 * 障害児の親の障害否認・受容に関する一研究</p> <p>2007・2008年度の論文は、山梨障害児教育学研究紀要(山梨大学教育人間科学部)に投稿、査読審査の結果、受理された。</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>1977年から取り組んできたグループアプローチの実践研究は、キャンパスにおける大学生のメンタルヘルスへの対処に関する厚生補導の指針として文部省と共同開発。国公私立大における保健管理に己貢献。特に個人カウンセリングと集団療法の併用、精神健康増進について具体的方法論の開発に貢献。障害児・者への治療教育に関するプログラム開発・効果の査定等に関する研究の中で、①言語発達を促進するための音声認識装置を利用したバイオフィードバックシステムの開発は、障害児教育における科研費重点領域課題として位置付けられ、その成果は日経をはじめとする業界紙に紹介された。開発されたハード・ソフトは教育現場、特に重度重複障害児の指導に導入された。また、②音・音楽活動を媒介にした治療教育の基礎・実践研究では、児童・生徒及び成人の音楽療法の研究成果や文部省海外短期出張研修での資料等が、日本ではじめての県立音楽療法研究所の開設に利用された。また日本音楽療法学会の設立や音楽療法士の国家資格制度実現のための施策の中で利用されている。</p>

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2007年 4月 共通科目委員会、教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、</p> <p>2008年 4月 教職課程運営委員会、日本語教員養成課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、</p> <p>2009年 4月 教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、進路支援委員会、</p> <p>2010年 4月 ハラスメント防止委員会、紀要委員会、進路支援委員会、自己点検・評価委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、大学運営委員会、入試委員会、教職課程存廃検討委員会、</p> <p>2011年 4月 ハラスメント防止委員会、学生委員会、進路支援委員会、大学院臨床実習運営委員会、国際交流委員会、大学運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、自己点検・評価委員会、</p>
<p>学生会・学内委員会等活動実績</p>	<p>2012年 4月 大学院専攻主任、心理臨床センター管理運営委員会、教職課程運営会議、入学者選抜会議(学部・大学院)、個人情報保護委員会、大学運営評議会</p> <p>2013年 4月 大学院専攻主任、心理臨床センター管理運営委員会、教職課程運営会議、入学者選抜会議(学部・大学院)、個人情報保護委員会、大学運営評議会</p>

学生会 動実績 部会・内 等作委 活業員	大学院FD委員会	
アドバイザー活動実績	2007年度～2010年度は各年度10～15名(留学生を含む)を担当し、原則として毎週水曜日1限あるいは2限を指定して、アドバイザー活動を実践した。1～2回の来室で問題解決する場合や、定期的に相談に来られる場合もあったが、全く接触がない場合で後日不適応状態になった事案に遭遇した。2011年度に向けて、指導のあり方について要検討。2012年度は20名の学生のアドバイザーを担当する。	
後進育成活動実績	1. エンカウンターグループを中心としたグループワークの主催(1981年～2009年)を通して集団力動を体験学習した医療従事者・教諭・心理カウンセラー等の養成に従事。延べ81回のグループダイナミクスセミナーを開催。参加者は延べ約800名。 2. 音楽療法士養成。精神医学、教諭(小・中・養護学校)・OT・PT・看護・音楽等の背景をもつ対象への音楽療法士養成プログラム及び共同研究の場づくりに従事。音楽療法セミナー 計34回主催 1977年～2011年。 3. 被害者支援電話相談ボランティア養成(毎年10～15名、学生・社会人)のためのプログラム編成や実践指導に継続的に従事(2007～2013年度)。現在70余名を育成。	
社会 貢献 活動	(1)講演会 2008年 2月 静岡県知的障害児・者音楽療法講演会:磐田市 2008年 7月 第2回地域療育等支援事業講演会「暮らしの中で考える障害を持つ人たちの性」講師 2010年 9月 山梨県視覚障害者講演会「音楽と心のやすらぎ」:山梨県ボランティアセンター講師 2010年 12月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:義務教育・教育相談担当者)講師 2011年 3月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:県下全小・中学校PTA地域指導者)講師 2012年 2月 山梨県若者サポートステーション家族支援セミナー講師 2013年 5月 山梨音楽療法研究会総会講演「ウイーンの音楽療法事情」講師 (2)出前講座 2007年 1・2月 被害者支援センターやまなし主催 ボランティア養成講座講師(2012年度まで) 2007年 4・11月 山梨県立就業支援センター主催 訪問介護員1級養成研修会(1班・2班)講師(2012年度まで) 2007年 6月 山梨県教育委員会主催スクールカウンセラー派遣事業要請訪問カウンセラー(2013年度まで) 2007年 7月 山梨県教育委員会主催 校長会研修(学校における精神保健)講師 2008年 5月 放送大学面接授業(障害児の発達支援)・山梨学習センター講師(2010年度まで) 2009年 10月 山梨県臨床心理士会・山梨県弁護士会共催 「子ども何でも相談」相談員(2013年度まで) 2010年 12月 山梨労働局第1回メンタルヘルス研修会講師(第2・3回研修会は、2011年1月) 2013年 5月 県立北杜高等学校「介護職員初任者研修課程」講師 (3)公開講座 2007年 10月 山梨県精神保健協会主催セミナー 「認知症とは」(対象:児童・生徒・父兄)企画・運営(2013年度まで—2009年度を除く—) (4)学外審議会・委員会等 2007年 4月 山梨県障害児適性就学推進委員会会長(2014年3月まで) 2007年 4月 山梨県精神保健協会理事(2014年3月まで) 2007年 4月 甲府家庭裁判所外部委員会委員(2009年7月まで) 2007年 4月 山梨県社会福祉協議会委員(2014年3月まで)	

社会 貢献 活動	2007年	4月 (社)被害者支援センターやまなし副理事長兼センター長(2014年3月まで)
	2007年	5月 山梨県臨床心理士会会長(2014年3月まで)
	2009年	4月 山梨県高次脳機能障害支援体制検討会議委員(2014年3月まで)
	2009年	4月 山梨県発達障害者支援企画・推進委員会委員(2014年3月まで)
	2011年	4月 山梨県特別支援教育体制事業広域特別支援連携協議会委員長(2012年3月まで)
	2012年	4月 (公社)被害者支援センター副理事長(2014年3月まで)
	2013年	4月 甲府保護司選考会委員(2014年3月まで)

成果と目標

専門的成果	<p>①音楽療法の基礎的・実践的研究の成果は、科学としての音楽療法の構築に向けて参考とされ、治療教育、高齢者リハビリテーション及び精神医療における治療論や職業としての専門性の確立に利用されている。</p> <p>②重複障害児の言語指導に導入した機器の開発は、その後のPCの進化に伴って、学校現場で利用しやすいように改善。障害児教育現場へのバイオフィードバックシステムの導入に道筋をつけた。</p> <p>③グループダイナミクスに関する研究成果は、集団研究(小集団の構造論や集団力動等)の先駆的役割に貢献。論文、専門書として発信。多くの人との間で、共有されてきている。</p>
専門的目標	<p>①音楽療法関係については、診断と査定技法の一層の検討を踏まえて、信頼性・妥当性のある教育指導法・治療技法の実現が急がれる。そのために、各領域における事例研究の更なる蓄積をしていく。</p> <p>②障害児の言語指導に関しては、バイオフィードバックシステムを遊戯療法その他の指導法とどのように組み合わせしていくか、対象事例の属性を念頭に入れた実践研究を関係者間の協力で取り組んでいく。</p> <p>③集団研究の成果は、家族、学校のクラス等々、種々の集団に共通して見られる集団形成過程の原型を抽出すべく、実践研究の基礎資料を基にした概念化作業に着手していく。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
フカツ 深津 ヨシノブ 容伸	男	1947年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	Th.M(神学修士)	専門分野	聖書学・キリスト教学	
学 歴	1966年	4月	青山学院大学文学部神学科入学	
	1970年	3月	青山学院大学文学部神学科卒業(神学士)	
	1970年	4月	青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程入学	
	1972年	3月	青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程修了(文学修士)	
	1972年	4月	青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程入学	
	1975年	3月	青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程単位取得退学	
	1975年	9月	プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程入学	
	1977年	7月	プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程修了(Th.M)	
実 務 経 験	1974年	2月	日本基督教団新泉教会伝道師	
	1981年	7月	日本基督教団新泉教会主任担任教師(1988年3月まで)	
	1984年	4月	明治学院大学非常勤講師(2005年3月まで)	
	1988年	4月	日本基督教団百人町教会担任教師(2005年3月まで)	
	1991年	4月	ウェスレアン・ホーリネス神学院講師(現在に至る)	
	1992年	4月	日本聖書神学校講師(2005年3月まで)	
	1995年	4月	青山学院大学非常勤講師(2007年3月まで)	
	2005年	4月	山梨英和大学宗教主任・教授(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1970年	4月	青山学院大学同窓会基督教学会会員(現在、委員、同学会誌『基督教論集』編集委員)	
	1972年	6月	日本聖書学研究所会員	
	1974年	10月	日本旧約学会会員	
	1983年	7月	日本基督教学会会員	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1972年	3月	高等学校教諭宗教科第一種免許状取得	
	1972年	3月	中学校教諭宗教科第一種免許状取得	
	1997年	1月	日本基督教団正教師	
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>本学はミッションスクールとして、キリスト教の信仰に基づく人間形成としての学校教育を建学の理念に掲げている。従って、キリスト教科目のうち、『キリスト教と文化』、『キリスト教と山梨英和』が必修として設置されているのであるが、学生の多くがキリスト教に初めて触れる者である故に、大学教育の水準を保ちつつも、できる限り分かり易い内容となるよう工夫する必要がある。また、縁遠さを感じている学生を配慮し、身近な内容をも心がけるべきものとなっている。そのために取られるべき方法としては、さまざまな教材、特に、現代の学生には身近なものとなっている視覚教材の活用があげられる。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 視覚映像の取り入れ;多くの学生にとってなじみの薄いキリスト教について、より身近でリアルなものとしていくため、映像を多く取り入れるよう努める。「偉大なる生涯の物語」「天地創造」「プリンス オブ エジプト」「ブラザーサン、シスタームーン」「フォレスト・ガンブ」等。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 共著『聖書謎百科』(荒地出版社、2006年);表記の中の「ヤコブとヨセフの信仰は報われたのか?」の項をもとにして講義</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 2007年1月21日、講演「青年と教会」日本基督教団山梨分区社会部講演会;表記講演会にて、青年の指導のあり方をめぐって講演</p>
担当授業科目	<p>2013年度 『キリスト教と山梨英和A』『キリスト教と山梨英和B』『キリスト教と文化A』『キリスト教と文化B』『聖書の世界』</p>
代表的シラバス	<p>『キリスト教と文化』では、ともすれば堅苦しく、難解と思われがちな聖書を、身近に興味を抱くよう努め、初めに『創世記』の有名な物語「アブラハム」「イサク」「ヤコブ」「ヨセフ」等を取り上げ、そこに隠されている人間のあり方への洞察に努める。また、イエス・キリストの言葉と活動を通して、隣人愛とは具体的にどのようなあり方と意味で表現されているのかを見る。さらにパウロが示すキリスト教の考え方を探る。また、人間の生き方や日本人にとってのキリスト教の意味をともに考える。さらに、解りやすくするとともに、理解を深めるための教材として、ビデオの活用を心がける。以上のように、聖書を通し、自分の生き方、あり方を顧みられるよう努める。</p>
教育改善活動	<p>本学のFD推進委員会に委員として所属し、2010年11月9日に風間重雄学長、木田献一山梨英和学院長を講師として、「人間文化学部人間文化学科設立への思い」(木田院長)、「人間文化学部人間文化学科としてのディプロマポリシー」(風間学長)の講演題でのFD研究会を企画した。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 『キリスト教と文化』では、大部分の学生にとってはキリスト教に初めて触れることもあって、理解が難しいものとなっている。しかし、ビデオ教材利用への評価は高く、補助教材の役割を十分に果たしているといえる。私語厳禁状態への評価も高く、この点での学生のニーズは大きく、教員の責任も重いことがうかがえる。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 特になし</p>

研究業績

研究の特徴	<p>海には様々な海流という流れがあって、それらが気温や気象、さらには農業や経済にまで作用していくように、歴史にも、傾向という様々な流れが存在している。それらは、神観や神学、倫理観や人間観あるいは派閥の継承に見られるような傾向の流れであったりする。歴史の出来事はこうした傾向の表面化とも言えるのであって、歴史理解</p>
-------	--

研究の特徴	<p>にとっては、このような諸傾向の抽出と把握が重要なものとなる。以上のような傾向の流れは聖書の内容にも影響してきた。聖書からそうした傾向を抽出する。また、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の源流である旧約聖書がそれらの諸宗教に対してどのような影響を与えてきたか、またどのように解釈されてきたか、そして現代のキリスト教や現代社会にどのような意味を持つかをも探る。</p>
研究経歴	<p>1996年 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員(1998年まで) 年 年 年</p>
研究実績	<p>(1) 著書 翻訳『ダ=エル書・ホセア書・アモス書』ケンブリッジ旧約聖書注解19,1981年,新教出版社 共著『古代イスラエル預言者の思想的世界』『預言者エレミヤの傾向史的研究』新教出版社,1997年 共著『新版 総説 旧約聖書』『エレミヤ書』日本キリスト教団出版局、2008年 共著『聖書学用語辞典』日本キリスト教団出版局、2008年 翻訳『エレミヤ書』現代聖書注解スタディ版,日本キリスト教団出版局、2010年</p> <p>(2) 学術論文 「ホセア書1章一3章の考察」『基督教論集』18号、青山学院大学基督教学会、1973年 「ホセアの予言とその時代」『基督教論集』23号、青山学院大学基督教学会、1979年 「ヤハウィストの編集」『基督教論集』30号、青山学院大学基督教学会、1987年 「聖書に見る法の精神」『婦人新報』1052号、日本基督教婦人矯風会、1988年 「旧約聖書の人道主義的傾向」『基督教論集』33号、青山学院大学基督教学会、1990年 「ヤコブとヨセフ」「ヨシュアと士師」『歴史読本ワールド』新人物往来社、1990年、『別冊歴史読本』新人物往来社、1995年 「ゼカリヤ書4章1-14節」『説教者のための聖書講解』75、日本基督教団出版局、『12小預言書』日本基督教団出版局、2000年 「サムエル」『のら』創刊号、雑誌「のら」発行所、1991年 「イスラエルの王国観一申命記を中心として」『基督教論集』36号青山学院大学同窓会基督教学会、1992年 「旧約聖書学の課題と展望」『新教コイノー=ア』12号、新教出版社、1993年 「サムエル一国家と宗教」『のら』7号、雑誌「のら」発行所、1993年 「ダニエル書7章15-28節」『アレテア』4号、日本基督教団出版局、1994年、『アレテア一釈義と黙想』日本基督教団出版局、2003年 「詩編8編」『アレテア』9号、日本基督教団出版局、1995年 「マタイによる福音書27章27-44節」『アレテア』22号、日本基督教団出版局、1998年、『マタイによる福音書』日本基督教団出版局、2001年 「エロヒストの編集一その人道主義的傾向一」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年 「平和への希求一紀元前八世紀の世界的視座一」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年 「バビロニア捕囚とモーセ五書」『基督教論集』44号、青山学院大学同窓会基督教学会、2001年 「詩編45編」『アレテア』33号、日本基督教団出版局、2001年 「一神教をめぐって」『基督教論集』46号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年 「悔い改めをめぐって」『基督教論集』47号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年 「自意識の変遷史」『聖書と神学』16号、日本聖書神学校キリスト教研究会、2004年 「偶像礼拝(異教礼拝)をめぐって」『基督教論集』49号、青山学院大学同窓会基督教学会、2005年 「日本人とキリスト教」『山梨英和大学紀要』5号、山梨英和大学、2006年</p>

研究実績	<p>「青年とキリスト教」『山梨英和大学紀要』6号、山梨英和大学、2008年</p> <p>「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号、山梨英和大学、2009年</p> <p>「聖書学と日本」『基督教論集』52号、青山学院大学同窓会基督教学会、2009年</p> <p>「日本人とキリスト教—山梨の場合—」『山梨英和大学紀要』8号、山梨英和大学、2010年</p> <p>「日本人とキリスト教—山梨英和学院の場合—」『山梨英和大学紀要』9号、山梨英和大学、2011年</p> <p>「日本人とキリスト教—キリシタン伝道の場合—」『山梨英和大学紀要』10号、山梨英和大学、2012年</p> <p>「聖書における女性表現をめぐって」『山梨英和大学紀要』11号、山梨英和大学、2013年</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>青山学院大学同窓会基督教学会学会誌『基督教論集』編集委員(1998年～現在まで)</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>1978年 2月 青山学院大学基督教学会委員</p> <p>1978年 10月 青山学院大学基督教学会研究発表「ホセアの予言とその時代」</p> <p>1986年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「ヤハウィストの編集」</p> <p>1988年 11月 明治学院大学キリスト教研究所研究発表「旧約聖書におけるヒューマニズム」</p> <p>1991年 6月 日本聖書学研究所研究発表「イスラエルの王国観—申命記を中心として—」</p> <p>1994年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「預言者エレミヤの傾向と生涯」</p> <p>2002年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「一神教をめぐって」</p> <p>2008年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「聖書学と日本」</p> <p>年 月</p>
共同研究の実績・受託	<p>1996年 4月 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員として「平和と人権プロジェクト」に旧約聖書学専門の立場で参画し共同研究を行った</p> <p>年 月 (1998年まで)。</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>19世紀末以来、旧約聖書学は急速に、発達をしてきたが、それは、聖書の各文書がいかに編集されてきたかを分析することに力点が置かれた。そして各文書の中で、編集者(学問的には主として申命記学派と呼ばれているが)の言葉を見出ししていくことに努力が払われてきた。結果として、各文書における本来の言葉、著者、語り手の言葉が削除されていくこととなり、これは本来の著者の実像が薄れていき、消えていくという副産物をもたらした。ここ20年来にわたって提唱してきた傾向史的研究は、編集者の傾向(例えば人間観)と著者の傾向を抽出して文献に当てはめていくことにより、失われ、ぼやけてしまった著者の実像を浮き立たせていこうとする試みである。これは現在、エレミヤ書に適用されているが、今後他の諸文書にも試みられていかねばならない。また、この傾向史は歴史の根底に流れる海流のようなものとして位置づけられ、この流れの上に各文書が出現しているものと受けとられる必要がある。この観点から、各文書の神観、思想、伝統への向き合い方を抽出する試み(例えば「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号)もなされつつある。そしてさらには、キリスト教の傾向と日本人(民族)の傾向を抽出し、キリスト教宣教はいかになされ、今後いかにあるべきかという実践面にも関心を広げている。今後以上のような諸方面への研究が充実にいくことにより、「傾向史的研究」の有効性が確かめられるものと考えている。</p>

サービス活動業績

学部内委員会等生活・活動実績	<p>2005年 4月 宗教主任(現在まで)</p> <p>2005年 4月 宗教委員会委員長(現在まで)</p> <p>2005年 4月 学生委員会委員(2007年3月まで)</p> <p>2005年 4月 大学運営協議会委員(2008年まで)</p>
----------------	---

学内委員会・活動実績	2005年	4月	大学運営委員会委員(2012年3月まで)
	2007年	4月	司書・学芸員課程運営委員会委員(2012年3月まで)
	2009年	4月	学部FD推進委員会(2012年3月まで)
	2010年	4月	進路支援委員会(2011年3月まで)
	2011年	4月	総合人間文化コースコーディネータ(2012年3月まで)
	2012年	4月	大学運営評議会委員(現在まで)
アドバイザー活動実績	2005年4月より現在まで担当(教養演習、専門演習、卒業研究、基礎ゼミナール)		
後進育成活動実績	特になし		
社会貢献活動	(1)講演会 特になし		
	(2)出前講座		
	2008年	11月	山梨英和高等学校(高大連携授業として担当)
	2009年	3月	山梨英和高等学校(高大連携授業として担当)
	(3)公開講座		
2006年	7月	山梨英和大学公開講座「日本人とキリスト教」を担当	
(4)学外審議会・委員会等			
	年	月	特になし
(5)その他			
	年	月	特になし

成果と目標

専門的成果	①	「預言者エレミヤの傾向史的研究」(『古代イスラエル預言者の思想的世界』, 新教出版社)はエレミヤ書に傾向史を適用し、編集者の人間観と預言者エレミヤの人間観を対照することによって、エレミヤの実像を浮き彫りにした。
	②	上記方法論は、旧約聖書を貫く神観や思想に対しても、その源流から後世への流れを明らかにしえると考えられる。この観点から、これまで人道主義的傾向、国家観、平和観、一神教、悔い改めといった重要事項について考察を進めてきた。
	③	近年では、日本人の傾向とキリスト教の傾向を対照させ、日本におけるキリスト教宣教のあり方という実践面にも関心を広げている。
専門的目標	①	今後、傾向史的研究を聖書文献にさらに適用していくことにより、聖書内容がより実体的、立体的に浮かび上がることを目指していく。
	②	傾向史的研究の実践的応用として、日本人としての聖書の見方はどうあるべきか、日本人にとってのキリスト教はどうあるべきかを探究していく。

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
フタナベ キュウジ 渡邊 久壽	男	1948年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	人文学・文学・日本文学	
学歴	1971年 3月 明治大学文学部文学科日本文学専攻卒業 1974年 3月 明治大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了 1977年 3月 明治大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学			
実務経験	1977年 4月 山梨英和短期大学国文学科専任講師 1981年 4月 山梨英和短期大学国文学科助教授 1987年 4月 山梨英和短期大学国文学科教授 1990年 4月 明治大学文学部兼任講師(2008年3月まで) 1997年 4月 山梨英和短期大学国文学科長 1999年 4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学科長(2004年3月まで) 1999年 4月 学習院大学文学部非常勤講師(2002年3月まで) 2002年 4月 山梨英和大学人間文化学部教授			
受賞歴	年 月 年 月 特になし 年 月			
所属学会	1972年 4月 明治大学日本文学研究会会員(2005年3月まで) 1972年 5月 中古文学会会員(現在に至る) 1974年 4月 全国大学国語国文学会会員(現在に至る) 1977年 4月 山梨英和短期大学日本文学会会員(1999年3月まで) 1977年 4月 日本文学協会会員(現在に至る) 1984年 8月 日記文学懇話会会員(1995年12月まで) 1985年 4月 平安文学研究会会員(2003年5月まで) 1995年 12月 日記文学1研究会会員(2009年12月まで) 1999年 4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学会会員(2004年3月まで) 2003年 5月 平安文学の会会員(現在に至る) 2009年 12月 日記文学会会員(現在に至る)			
特免資格等	1974年 3月 高等学校教諭 国語 第一種免許状取得 1974年 3月 中学校教諭 国語 第一種免許状取得 年 月 年 月			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	基本的に、深く豊かな人間理解力を身につけて社会に出て行くことができるように学生を指導したいと考えており、そのために自分は何をしてやれるのかを、常に意識化している。文学作品をもとにして指導する時も、外在的研究方法はもとより、内在的に人間存在にアプローチする方法を学生に伝えたいと考えている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 「基礎ゼミ」を初年次教育の最重要科目と位置づけ、高校から大学の学びへ架橋するため、あらゆるジャンルを素材に、問題意識の持ち方、掘り下げ方を全員参加型で指導、毎時間レポートにまとめる事を通して表現力も養成した。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 これまでも演習関連科目で独自の教材を工夫してきたが、今年度は「基礎ゼミⅡ」で実践的表現能力の養成を目指して独自教材を作成、他の教員の利用にも提供した。また「日本語文化特論」では、変体仮名を集中的にトレーニングして、ほとんどの受講生が写本をスムーズに解読できるようになった。これも独自の教材の成果と考えられる。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	2013年度 日本の文学、言語文化創造Ⅱ、卒業研究、日本語文化特論、専門ゼミナール、基礎ゼミナール、中古文学講読
代表的シラバス	<p><中古文学講読>の概要 『蜻蛉日記』は、源氏物語が出現するに不可欠な、平安時代を代表する女流日記。作者道綱母は当代有数の女流歌人。権勢家藤原兼家と結婚、その苦悩に満ちた内実を、21年間にわたる魂の記録、いや魂の記憶としてまとめてきた。初めは気散じ、やがて懊悩に耐えきれなくなるごと物詣でに出かけた彼女は、旅中の我が姿を通じ、辿り来た苦渋の人生の真実を『蜻蛉日記』に形象する。<王朝女性の物詣で>というテーマのもと、<物詣で>を手がかりに、本日記の言語文化としての創造性を考えていく。</p>
教育改善活動	<p>1.「基礎ゼミナール」用に、教科書以外に独自演習資料を作成、それを活用しながら表現能力・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力・思考能力の向上をはかり、予想以上の成果をあげることができた。</p> <p>2.「専門ゼミナール」では、4泊5日のゼミ研修旅行を実施、京都を中心に、旧内裏跡など詳細な文学遺跡実地踏査を行うことにより、ゼミ生の勉学意欲・問題意識が格段に深化、また、ゼミ生相互のコミュニケーションも飛躍的に親密化した。</p> <p>3.「日本語文化特論」では、写本解読のための全員参加型の指導方法を確立、学生の高評価を得た。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 学生の授業評価アンケートより:学んでいくうちに発見があり面白い。深い授業だ。時に深く時に楽しく学べて大変満足。母国の古典にも興味を持たなかった自分がこんなに楽しく古典を学べるとは思わなかった。先生の熱意をすごく感じ、古典文学に興味湧いてきて授業が楽しくなった。丁寧に教えてくれて貴重な知識を学んだ。実践的に学べて良かった。解説が丁寧にわかり易く充実していた。難しかったけど内容は面白かった。きめ細かい指導を受けられスキルアップできた。考えを深めることができた。自分達で考えられる授業で役に立つ。真剣に「考える力」を養うことができた。毎回全員参加は特によかった。 改善して欲しい点は、留学生の自分には早い、説明をもう少しゆっくり、板書が多くて速い、など寄せられた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 特になし</p>

研究業績

研究の特徴	もとより、外在的研究方法が作品理解に深く寄与することは言うまでもないが、文学作品を内在的方法で解明し、深く豊かに理解することを通して作品や作家を人間の遺産として真に価値付けることができると考えている。	
研究経歴	1977年	山梨英和短期大学で日記文学を研究の中心に据えて平安文学を研究。
	2002年	山梨英和大学で、日記文学を中心に、中古の物語・和歌・随筆文学を研究。
	2010年	日記文学会などを通して、幅広く研究者と交流、研究に従事しつつ、後進を指導。
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>『古典文学への誘い100選Ⅱ』共著、東京書籍、「第八章 日記と紀行文 蜻蛉日記」担当、2007年3月。</p> <p>『王朝文学と仏教・神道・陰陽道』共著、竹林舎、「日記文学と仏教について—『抗い』というテーマ性をめぐって」、2007年5月。</p> <p>『紫式部日記の新研究』共著、新典社、「『紫式部日記』の私性—『こまのおもとの恥』の表象性を手がかりに」、2008年5月。</p> <p>『集英社国語辞典 第3版』日本古典文学関係項目執筆、2012年12月。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>「児を亡くした親の『こころ』—『土佐日記』」、『解釈と鑑賞』第73巻3号、至文堂、2008年3月。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>学術書『日記文学研究』ならびに学術雑誌『日記文学研究誌』の各号刊行にあたり、編集委員、編集委員長を務め、投稿論文の査読を行ってきている。2012年は『日記文学研究誌14号』編集・査読、指導・助言。</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	1997年	4月 山梨英和短期大学日本文学会会長(1999年3月まで)
	1999年	4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学会会長(2004年3月まで)
	2002年	4月 日記文学研究会運営委員・編集委員(2004年3月まで)
	2004年	4月 日記文学研究会運営委員・編集委員長(2006年3月まで)
	2006年	4月 日記文学研究会運営委員(2009年12月まで)
	2007年	4月 日記文学研究会、論集『日記文学研究第三集』編集委員
	2009年	12月 日記文学会運営委員・編集委員(現在に至る)
受託共同研究の実績	1995年	4月 「源氏物語の梗概書類の研究」、国文学研究資料館 共同研究(1996年3月31日まで)、研究代表者
	1996年	4月 「『源氏大鏡』一類本本文の比較と研究」、国文学研究資料館 共同研究(1997年3月31日まで)、共同研究者
大学院生指導	日記文学会などを通して、研究発表をした他大学の大学院生達に、具体的なアドバイスをしたり、まとめられた論稿に対して指導や意見を求められた場合に、懇切な助言を行っている。	
研究能力に対する評価	日記文学の作品研究において、内在的性格を論じ、考察する際に特に『蜻蛉日記』を扱う場合には、参照されたり、引用されたりして、論述が進められることが多い。作品の内なる論理の考察について評価されると考えられる。また、若手の研究者で、作品論へのアプローチが十分でないと自覚する人々から、積極的な助言や指導が求められ、わかり易く手ほどきしてやることに対して、研究上の悩みや壁や問題点が氷解したと感謝されることが多々ある。論文を書くためにあながちに論を立てるのではなく、作品に謙虚に耳を傾け、作品の語るところを汲み取るような自然な読みが大切であることを伝えて、大いなる共感を得ている。	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2007年 4月 大学運営協議会、入試委員会、広報委員会、自己点検・評価委員会 教育課程検討委員会</p> <p>2008年 4月 大学運営委員会、大学運営協議会、入試委員会、自己点検・評価委員会 教学協議会、学生支援推進会議、学食売店検討委員会</p> <p>2009年 4月 大学運営委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会、紀要委員会、教学協議会、 学食売店検討委員会、ハラスメント防止委員会、ハラスメント調査委員会</p> <p>2010年 4月 大学運営委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会、紀要委員会 教学協議会大学部会</p> <p>2011年 4月 大学運営委員会、進路支援委員会、エクステンション委員会</p>
アドバイザー活動実績	ゼミの留学生の指導に力を入れた。特に、非漢字文化圏であるインドネシアからの留学生に時間をとって、学生生活をはじめ様々な相談にのった。様々なトラブルを抱えて研究室に飛び込んでくるゼミ生に対して、懇切に対応、助言、指導を行った。
後進育成活動実績	日記文学会での活動を通して、他大学院の院生や若手研究者の研究指導にあたり、時には、研究誌に掲載予定論文の修正について、執筆者に直接会い、数時間かけて具体的アドバイスを行い、単なる査読にとどまらない後進育成活動を行っている。
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2009年 5月 山梨文芸協会 総会記念講演「王朝日記文学の鼓動」 山梨文芸協会主催、於：山梨県立文学館</p> <p>2010年 5月 大東文化大学日本文学会講演会「『蜻蛉日記』への招待―連なる魂のことば」 大東文化大学日本文学会主催、於：大東文化大学東松山校舎</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2009年 12月 静岡聖光学院 中・高等学校 出張講座</p> <p>2012年 10月 山梨英和高等学校 出張講座</p> <p>(3)公開講座</p> <p>2003年 5月 山梨英和市民教養講座「『源氏物語』を読む」、山梨英和大学エクステンションセンター 主催、山梨英和メイプルカレッジ(現在に至る)、「桐壺」巻より読み始めて、2013年 5月現在、「葵」巻末まで読了。年間8回開催)</p> <p>2008年 10月 甲斐市立竜王図書館文学講座「『源氏物語』のビタミン」 甲斐市立竜王図書館主催、全3 於：甲斐市立竜王図書館</p> <p>2008年 10月～ 県民コミュニティーカレッジ講座「『紫式部日記』の世界―『源氏物語』創造の源泉を 12月 たどる―」(大学コンソーシアムやまなし主催、全5回、於：山梨英和大学)</p> <p>2011年 6月 甲斐市立双葉図書館古典文学講座「『源氏物語』と日記文学」 甲斐市立双葉図書館主催、全3回 於：甲斐市ふれあい文化館</p> <p>2012年 9月 甲斐市立双葉図書館古典文学講座「恋歌―和泉式部日記の世界をたどって」 甲斐市立双葉図書館主催、全4回、於：甲斐市双葉ふれあい文化館</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>2006年 12月 大学コンソーシアムやまなし 企業・高大連携部会委員(2008年3月まで)</p> <p>2011年 9月 山梨県文学館協議会委員(山梨県教育委)現在に至る)</p> <p>(5)その他</p> <p>年 月 特になし</p>

成果と目標

専門的成果	<p>中古日記文学の史的意義づけについて、『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』の各作品を通して、内在的方法により研究、時代を超える価値とそれの発現する所以を解明してきた。</p> <p>① その内質を原郷喪失の文学として表現論的にとらえた『土佐日記』に関する一連の研究。 ② 表現論・形象論的に、作品に内在する論理と文学的特質を考察した『蜻蛉日記』関係の論。 ③ 人称構造など、表現論的視点から考察を深めた『和泉式部日記』関係の論。</p>
専門的目標	<p>① 『蜻蛉日記』の主題といわれる「はかなき身の上」の、「はかなさ」の実質を、従来指摘されてきた「諦念」的なものでは説明できないことを指摘し、具体的に解明する。</p> <p>② 『蜻蛉日記』下巻について、現在盛んに行われている外在的アプローチでなく、内在的に特質を解明することを通して、意義付けていく。</p> <p>③ 史的事実の解明に回帰しがちな日記文学の研究はそれとして、それらの研 生かして日記文学の文学性そのものの価値をより豊かに的確に見出していく。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カワシマ ヒデカズ 川島 秀一	男	1949年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	人文学・文学・日本文学	
学 歴	1967年	3月	奈良県立畝傍高等学校 卒業	
	1967年	4月	関西学院大学文学部日本文学科 入学	
	1971年	3月	関西学院大学文学部日本文学科 卒業	
	1971年	4月	関西学院大学大学院修士課程文学研究科日本文学専攻 入学	
	1973年	3月	関西学院大学大学院修士課程文学研究科日本文学専攻 修了	
	1973年	4月	関西学院大学大学院博士課程文学研究科日本文学専攻 入学	
	1976年	3月	関西学院大学大学院博士課程文学研究科日本文学専攻 満期退学	
実 務 経 験	1976年	4月	神戸学院女子短期大学専任講師(1982年3月まで)	
	1982年	4月	山梨英和短期大学助教授(1988年3月まで)	
	1988年	4月	山梨英和短期大学教授(2002年3月まで)	
	2002年	4月	山梨英和大学教授(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1971年	4月	日本文芸学会	
	1971年	9月	日本近代文学会	
	1971年	9月	島崎藤村学会	
	1973年	4月	日本キリスト教文学会	
	1973年	4月	全国大学国語国文学会	
	2006年	9月	遠藤周作学会	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1973年	3月	高等学校教諭 国語 第一種免許状 取得	
	1973年	3月	中学校教諭 国語 第一種免許状 取得	
	年	月		
e-mail	h.kawashima[at]yamanashi-eiwa.ac.jp			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>広く日本文化や文学を学ぶ体験を通じて、日本文化全体への豊かな感受性と想像力を育み、現代社会を生き抜くための新たな文化創造への実践的で総合的な人間力の育成をめざす。〈文学〉とは、高度な日本語の運用・働きを、その想像行為を通して深く学ぶための創造的なツールであり、そこに体験される自己表現能力の習得は、現代社会に最も必要とされる実践的なコミュニケーション能力の育成にとって必須の要件である。</p> <p>〈文学〉というテキストは、単なる知識的媒体として存在するのではなく、深く文化的価値創造にかかわるものであり、具体的な文学テキストが、〈現在〉に問いかけ、私たちの生き方そのものを批判的に問うものであることを、具体的な授業実践において体験する。授業では、近代文化や文学についてその基本的知識を学ぶとともに、具体的で実践的な作品読解を通じて、その作品構造、思想構造、さらには作品(作家)がもつ歴史的な意義(意味)を解明する。単なる知識を超えた、より実践的・創造的な授業実践の場で〈文学〉をとらえていく。あわせて、文学を文化的地平において、より有効あらしめるために、広く心理的、社会的領分へもその視点、方法を開いていく。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例 a 留学生に対する日本文学の教授法 一般的な文学的知識や文学史的知識の不十分さを踏まえつつ、計画的なテキストの選択、徹底した読解、さらには、個人指導などを通して高い教育的効果を生み出し、毎年大学院への進学も可能となった。 b 文学教育と創作教育の融合 「表現と創作」の科目において、「想像力のレッスン」とでも言うべき実践的授業によって、新たな文学教育の実践を試みている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 a 山田有策編『近代文学1』p81－p88、学術図書出版、1990 b 玉置邦雄編『近代の文芸』p61－p73、和泉書院、1990</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 a 高校における文章表現の方法と実践 2006年9月(於 山梨県立身延高等学校) 大学における文章教育との関連を踏まえて、高校における文章教育のあり方について講演した。</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>日本近代文学の歴史 表現と創作 子どもと文化 近現代文学講読 専門ゼミナール卒業研究。他に、1年次の導入科目として「アカデミックリテラシー」などを担当。</p>
<p>代表的シラバス</p>	<p>近現代文学講読:遠藤周作の文学の全容を解明します。遠藤が逝去して16年が経とうとしています。その間、世界の歴史的状況を踏まえて、そのグローバルな視点から、遠藤文学の評価は一層の高まりを見せています。講義では、『海と毒薬』から『沈黙』『侍』を経て『深い河』(ディープリバー)に至る遠藤文学の全貌を現代的状況に重ねながらその意味を解明しようと思います。</p> <p>到達目標: ①日本の近代におけるキリスト教の意味を解明する。②遠藤文学のグローバル性、普遍性について理解する。③日本の精神風土の特質を理解する。</p>
<p>教育改善活動</p>	<p>(1)新カリキュラム検討委員(2007年度) 全学的な新カリキュラムの作成の実務委員として参加。日本語・日本文化コースの具体的なカリキュラムを作成。傍ら、国語教職課程と日本語教員養成課程を導入するため、カリキュラムの構築などの具体的作業(文部科学省との関係を含めて)を担当。</p>
<p>対教する能力価に</p>	<p>(1)学生による授業評価(講義アンケートより) 演習・講義の全体評価:全体的に良好である。授業の方針としては、単に一方的な知識の集積を求めるのではなく、学生自らが問題を問い返し、自分の課題として問題が捉えられるような授業の形式、内容を考えたが、評価から見て概ね成功したと思われる。特に演習・ゼミナールにおいては人数も少数であり、</p>

教育能力に対する評価	<p>学生個々人が問題を主体的に問い直し、それぞれの発表を通して具体的に問題を解決しながら、〈卒業研究〉などにおいても大きな成果を生んでいる。その意味からもこれら授業の評価は高い。</p> <p>良い点・改善してほしい点:〈新しい見方が身についた〉とか〈文学のおもしろさがよくわかった〉などの評価は、講義の意図が十分に成果をもたらしたものである。しかし一方では、〈少し難しい〉という評価もあり、学生の理解度にばらつきがあるのも事実である。特に留学生からは、少し難しいとの意見提示されている。ただ、ゼミ等の小人数の講義では評価が高く、日々の実践において十分な学成果を生み出しており、結果は大学院進学という形にも表われている。また、授業への熱意については、特に評価が高い。〈改善してほしい〉という意見の多くは、講義が早口であることや板書の方法という講義技術にかかわるものである。しかし、最近では、板書についてわかりやすいとの評価も多くあり、評価できる。</p> <p>改善に向けた今後の方針:シラバスを通じて、さらに授業の目的・内容を明確にすることや、事前指導や事後指導などを十分に行う。授業における問題設定についてもいっそうの工夫をしてみたい。予習や復習に向けて、課題設定についても工夫したい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による授業評価は行っていない。今後の課題である。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>研究テーマの中心は、日本の近代文化における風土論的特質を背景に、その中で生きた作家たち、あるいはその文学表現における倫理性や思想性の構造を理解することにある。具体的には、島崎藤村における自然主義的風土やその思想的、倫理的問題を探求し、遠藤文学の研究では、キリスト教と日本の近代文化との関連を構造化することで、宗教と文学の関係を含めて、遠藤の現代社会における文学的意味をめぐる研究を進めている。ともに、その成果については一部をそれぞれの著書として世に問うている。特に遠藤のそれについては、評価は高い。最近では、宮澤賢治の研究を進めており、〈子ども〉という社会的問題への関心も含めて、表現論的問題の分析を通して、広く日本の近代文化や社会の特質、構造への批判的研究を進めている。今はまだその途上にあるが、早くその成果をまとめ世に発表することが期待されている。</p>
研究経歴	<p>1976年 神戸学院女子短期大学専任講師、島崎藤村を中心に自然主義文学の研究に従事。研究の集大成として、1987年に『島崎藤村論考』を出版。(1982年まで)</p> <p>1982年 山梨英和大学助教授、それまでの藤村研究の傍ら、遠藤周作の研究に従事。先の『島崎藤村論考』に続いて、1993年にそれまでの研究をまとめて『愛の同伴者・遠藤周作』を出版。1988年、山梨英和短期大学教授。引き続き、遠藤周作の研究を継続、2000年には『遠藤周作・〈和解〉の物語』を刊行。遠藤研究のさらなる発展を図る。</p> <p>2002年 山梨英和大学教授、研究のテーマを夏目漱石や宮澤賢治に広げる。2004年には、それら研究の一部を含めて、それまでの研究の集大成として、『表現の身体』を出版。</p> <p>2008年 本格的に宮澤賢治の研究に着手。以後現在まで、遠藤周作と宮澤賢治を中心に、広く近現代小説の研究に従事。宮澤賢治の集大成を目指す。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>1.『島崎藤村論考』 単著 1987年9月 おうふう 全239頁</p> <p>2.『遠藤周作—愛の同伴者』 単著 1993年6月 和泉書院 全236頁</p> <p>3.『遠藤周作—〈和解〉の物語』 単著 2000年9月 和泉書院 全275頁</p> <p>4.『表現の身体—藤村・白鳥・漱石・賢治』 単著 2004年11月 双文社出版 全308頁</p> <p>5.『『哀歌』論』 『遠藤周作—その文学世界』(山形和美編)1997年12月 国研出版 p93—109</p> <p>6.『おバカさん—〈自分のキリスト〉をめぐる』 『作品論 遠藤周作』(笠井秋生・玉置邦雄編) 2000年1月 p93—p109</p> <p>7.『『死海のほとり—沸騰する文体』 『遠藤周作—挑発する作家』(柘植光彦編) 2008年10月 至文堂 p245—p254</p>

研究実績	<p>8.『拒まれし(私)の物語 くもう一つの富士遠望』 『太宰治研究 18』(山内祥史編) 2010年5月 和泉書院 pp148-p160</p> <p>9.「自意識の被膜-「富士に就いて」の私」 『太宰治研究 19』p129-136、和泉書院、2011年6月 (2) 学術論文(最近6年のものから記載)</p> <p>1.『侍』瞥見-ある躊躇と疑念」 単著 「キリスト教文学研究 第24号」 2007年6月 p28-p34</p> <p>2.「鹿踊りのはじまり」という物語-く歩きつづける男の話」 単著 「山梨英和大学紀要」第6号 2008年2月 p1-p15</p> <p>3.「想像力の始原-『わたしが・棄てた・女』の定位をめぐって」 単著 「遠藤周作研究」創刊号 2008年9月 p15-p34</p> <p>4.「く文学と死」をめぐる問い-遠藤周作『深い河』瞥見」 単著 「キリスト教文学研究」第26号 2009年5月 p49-p58</p> <p>5.「不在のテキスト、あるいは幻視される物語-『ポラーノの広場』の語りをめぐって」 単著 「山梨英和大学紀要」第8号 2010年2月 p1-p19</p> <p>6.〈意味〉に憑かれた人間の物語-「どんぐりと山猫」からの出発 単著 「山梨英和大学紀要」第10号、2012年3月 p33-p48</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 「キリスト教文学研究」の編集及び査読(2008年4月から現在)、学術雑誌「遠藤周作研究」の編集及び査読(2008年4月から現在。2011年からは編集責任者)</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2003年 9月 藤村の『春』をめぐって 発表及びコーディネーター 島崎藤村学会全国大会	2006年 12月 遠藤周作『侍』シンポジウムパネラー キリスト教文学会 12月例会
	2008年 6月 テーマ〈文学と死〉シンポジウムパネラー キリスト教文学会全国大会	1996年 4月 島崎藤村学会理事(現在に至る)
	2007年 4月 日本キリスト教文学会役員(研究誌編集)(現在に至る)	2006年 9月 遠藤周作学会役員(2011年度から研究誌編集責任)
	年 月	2012年度からは、副会長に就任。
共同研究の実績・受託研	年 月	年 月 特になし
	年 月	年 月
	年 月	年 月
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	<p>今までに上梓した『島崎藤村論考』や『表現の身体』についても一定の評価を受けているが、『愛の同伴者 遠藤周作』や『遠藤周作-く和解の物語』においては、遠藤周作研究における主要な研究者としての評価を受けており、今後の研究においても中心的役割を持つ研究者として評価されている。特に後者は、遠藤周作の全生涯における作品を研究した業績としては、研究史上最初の著書、成果である。これら研究成果は若手研究者にも多数引用され、今後の遠藤周作研究における必読文献としても高い評価を得ている。また2010年度からは遠藤周作の研究誌「遠藤周作研究」の編集責任者であり、学会の運営においても今後中心的役割を期待されている。特に2012年度からは副会長に就任。学会の運営に一層の責任を負っている。今後は国際的学会交流も期待されている。</p>	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 4月 図書館長(2009年3月まで) 紀要委員会 2007年 4月 新カリキュラム検討委員会(2008年3月) 2008年 4月 日本語教員養成課程運営委員長(2011年3月まで) 2009年 4月 進路支援室長(2011年3月まで) 広報委員会 2011年 4月 基礎科目コーディネータ(2012年3月まで) 2011年 4月 宗教委員会(現在に至る)
アドバイザー活動実績	基礎ゼミナール、専門ゼミナール、卒業研究の担当者として、合わせてアドバイザーの責任を負っている。相談内容の多くは、退学、休学にかかわる基本的な学生身分にかかわる問題、履修にかかわる問題をはじめとして、大学生活における人間関係の悩み、家族関係のトラブルなどその問題は多岐にわたる。最近は特に就職にかかわる相談も多く、進路室と連携しながら問題の解決に向けて適宜指導した。また大学院進学相談も多くあり、その方法についても適切に指導し、ほぼ全員の進学が可能になっている。2013年度も日本人、留学生2人が大学院を希望。
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 2010年 10月 「文学における生きがい」 〈山梨県いのちの電話主催〉の講演を行った。 (2)出前講座 2011年 1月 「日本の近代社会と漱石」と題して、長野県立田川高等学校において出前授業を行った。 (3)公開講座 2007年 6月 「『家』とその根源への遡行」 藤村小諸記念館「藤村文学講座(於 小諸市立図書館)」を担当。 2009年 9月 コンソーシアム山梨・コミュニティカレッジ(広域ベース) テーマ〈日本人と宗教〉において、遠藤周作の文学と日本の近代文化との関係について講座を担当した。 2010年 5月 山梨英和大学メイプルカレッジ講座(8回)において、「『こころ』に至る道・『彼岸過迄』、『行人』を読む」と題して講座を担当した。 (4)学外審議会・委員会等 2010年 9月 新卒者就職対策会議委員(2011年3月まで) (5)その他 年 月 特になし

成果と目標

専門的成果	①現代社会における遠藤周作の文学的意義 遠藤周作の文学については、その成果として『愛の同伴者 遠藤周作』(1993)、『遠藤周作〈和解〉の物語』(2000)2冊として既に世に問うた。特に後者は遠藤の生涯にわたる作品の研究としては研究史上最初のものである。そこでは、生涯にわたるテーマの全容を明らかにし、遠藤の文学テーマが私たち現代社会にどのような意義をもつかを明らかにした。あわせて、そこに表現される〈イエス像〉なる存在が、キリスト教の受容という風土的、倫理的問いを含めて、その現代社会における有効性と限界についても考察を試みた。 ②賢治童話における〈子ども〉と身体 宮澤賢治については、その一部を『表現の身体』(2004)において世に問うている。ここにお
-------	---

<p>専門的成果</p>	<p>ける研究テーマも日本の近代文化に対する批判の根源性と普遍性において、①の問題に連なるものである。研究の中心的関心は、賢治文学における人間と自然の関係をめぐっての、賢治文学がめざす生命観の構造と意味を明らかにすることにある。</p> <p>③島崎藤村を中心とした自然主義文学の研究</p> <p>日本の近代文化を形成する自然主義的風土、特に〈家〉をめぐる問題の検討を通して藤村という作家の自然観と倫理観、あるいは生命観を考察解明した。成果としては、既に『島崎藤村論考』として世に問うている。</p>
<p>専門的目標</p>	<p>①遠藤文学の発展的研究</p> <p>上記の成果を踏まえて、残された作品、特に初期作品の解明を加えて、遠藤文学のさらなる内在化、体系化をめざす。あわせて、正宗白鳥などの研究を加えて、日本の倫理的、宗教的風土から問題を相対化することで、遠藤の文学的テーマを日本の宗教的風土の根源へと発展させてみたい。そのことを通じて、日本の近代文化を批判的にとらえる根源的な視座を獲得できると思われる。今後とも、遠藤文学のさらなる批判的再評価を行いたい。</p> <p>②賢治文学の集大成</p> <p>賢治については、さらなる作品の具体的分析を通して、文学的全体像を明らかにすることをめざす。人間と自然の関係をめぐる賢治文学の根源性と批判性は、日本の近代文化への最も有効な批判的視座となるものである。ここ2、3年をめどに、一冊の著書として上梓したい。</p> <p>③漱石研究の発展</p> <p>著書『身体表現』において、漱石文学の初期から中期への展開についてはその研究成果の一部を世に問うているが、今後は中期から後期の作品群についてもその考察を展開する。</p>

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
セキノ ヨウイチ 関野 陽一	男	1952年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	学士	専門分野	図書館情報学・記録管理	
学 歴	1971年	3月	私立開成高等学校卒業	
	1972年	4月	慶應義塾大学文学部入学	
	1976年	3月	慶應義塾大学文学部図書館・情報学科卒業	
	年	月		
年	月			
実 務 経 験	1976年	4月	社団法人経済団体連合会事務局入局 図書館部において図書館運営・データベース構築、広報部において報道対応、 総務部においてシステム管理・文書管理、社会本部において機関誌編集等の 業務を担当。	
	2006年	3月	社団法人日本経済団体連合会事務局自己都合退職	
	2006年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科教授 現在に至る	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1976年	4月	三田図書館・情報学会(現在に至る)	
	1991年	4月	記録管理学会(現在に至る)	
	2006年	4月	日本図書館情報学会(現在に至る)	
	2006年	4月	アートドキュメンテーション学会(現在に至る)	
特 免 資 格 等 ・ ・	1976年	3月	司書	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>社会生活を送るうえで必要な基礎学力とともに、社会人として求められるコミュニケーション力や協調性が学生時代に養えるよう留意したい。そのためには、演習系の授業では自発的に学習し、その成果を積極的に発表することを奨励するとともに、グループ作業を活発に行うことで人間関係を構築するノウハウが身に着くようにしたい。</p> <p>卒業後の進路を意識した学生生活を送ることが重要だと考える。とくに、仕事や職業が各人にとってどのような意義をもつかを学生に考えさせたい。各自の目標を明確にするとともに、実現するために必要な力をつけさせたい。</p> <p>留学生が多く学ぶ本学の特色を生かして、日本人学生と留学生との交流を促進したい。ゼミナール等では留学生が多く履修するので、日本人学生と切磋琢磨しながらお互いに様々な面で高めることができるような雰囲気をつくりあげてゆきたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.就職に必要なコミュニケーション力を身につけることを目標とする「キャリアデザイン2」において、聞く、話す、書くといった要素を、社会人を含む複数の講師が担当して参加型の授業を展開した。学生に他では体験しにくい、良い意味でのショックを与えながら、社会で必要とされるコミュニケーション能力がなんであるかを理解させるようにした。</p> <p>b.2012年7月にビジネス・コミュニケーションコースの学生を対象としてビジネス現場体験プログラムを企画した。その際、日本を代表するビッグビジネスの生産現場や企業のダイナミックな技術開発の動きが理解できるよう、トヨタ自動車元町工場と中部電力新名古屋発電所を見学先として選択したが、学生の反応をみると新鮮な体験をしたことが理解でき、企業活動の先端的なものに触れる重要性を再認識したので、継続したい。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>司書関係やシステム関係の授業では実際の現場がどうなっているのかを学生に見せて理解させる必要があるが、実際に体験することは困難を伴う。そこで、パワーポイントを用いてネット上の情報を容易に活用することができるよう工夫したスライドを作成して、授業で活用した。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度： 図書館情報論、ビジネスファイリング、情報と職業、キャリアデザイン2、情報サービス論 情報サービス演習、図書館情報技術論、基礎ゼミナール1、専門ゼミナール、卒業研究等</p>
代表的シラバス	<p>授業全体の目標を明らかにするとともに、毎回の授業でもその日の内容が明確になるよう心がけている。</p>
教育改善活動	<p>担当科目である「ビジネス・ファイリング」はファイリングデザイナー検定2級合格を目標としている。2009年度は合格者が1名しかおらず、十分な成果を出すことができなかった。この反省から、2010年度以降目標を明確にして学生に伝えるとともに、授業内容も検定受験を意識したものに改善した。その結果、近年合格者が増加しており、一定の成果を上げたものとする。2012年度は32名が受験し2級合格者は7名、3級合格者は25名であった。</p> <p>今年度は、この資格の取得が学生の就職意識に対してどのような影響を与えたか、追跡調査を行いたい。</p>
教育能力評価に対する	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>2年次の演習の授業では、グループ学習を多く取り入れたことにより、クラスのメンバーとより親密になることができたと評価された。後期は学生が不安を感じている就職活動の導入となるよう、新聞を教材とした授業を実施したが、もっとやってほしかったとの指摘を受けた。単に就活を目的としたのではない、社会の動きを理解するとともに、それに対する自分の意見を形成できるような授業の在り方を模索したい。</p>

教育能力評価に対する	<p>また、担当する司書課程科目では、図書館の現場での実態を学生に理解させることを目指し、web上の映像等の情報源の積極的な活用により効果を上げることができ、分かりやすいと評価された。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価実施していない。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>情報や記録の管理を主な研究対象としている。とくに、図書館、文書館などの専門機関における情報、記録の収集、整理、蓄積、利用のプロセス全般に対して、デジタル化がどのような影響を与えているか明らかにしたい。さらに、それに携わる専門職が求められる能力や育成のあり方についても考察している。</p> <p>また、企業などのビジネスの現場で、情報や記録がどのように取り扱われているか、調査するとともに、とくに近年注目されている企業アーカイブズの実態を明らかにしたい。</p>
研究経歴	<p>1983年 経済文献研究会調査研究委員として「経営情報データベース化のための計量的分析に関する調査研究に従事。1985年まで。</p> <p>年</p> <p>年</p>
研究実績	<p>(1)著書 関野陽一. "経済・企業ビジネス情報 人物情報". 専門資料論. 新訂, 東京書籍, 2004, p.188-199. 関野陽一. "専門図書館の国際交流". 白書・日本の専門図書館1992. 専門図書館協議会. 1992, p.239-252</p> <p>(2)学術論文 関野陽一. 米国の専門図書館における電子ライブラリーへのアプローチ. 電子ライブラリー. 1997, p.28-31. 関野陽一. 専門図書館の課題. 図書館界. 1993, p.43-47.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 記録管理学会誌「レコード・マネジメント」の編集委員長(2009年5月より2011年5月まで) Japanese Industrial Information on the Web.米国専門図書館協会第88回年次大会(1997年9月)</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>2005年 5月 記録管理学会理事(2011年5月まで)</p> <p>1996年 10月 専門図書館協議会幹事(1999年3月まで)</p> <p>1989年 5月 専門図書館協議会関東地区協議会幹事(1993月まで)</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
共同研究の実績・受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし

研究能力に 対する 評価	司書やアーキビスト等の情報や記録の管理にかかわる専門職の養成については、実学的な要素が強い部分があるので、専門図書館での勤務経験等現場で獲得した知識を活かしたい。また、地域の図書館の活性化のために、これまでの経験を活用したい。
--------------------	---

サービス活動業績

学内委員会・ 部会等活動実績	2012年 11月 学長特別補佐(入試担当)(現在まで) 2011年 4月 入試部長(2012年1月まで) 2009年 4月 司書課程、学芸員課程運営委員長(現在まで) 2008年 4月 進路支援室長(2009年3月まで) 2007年 4月 図書館長(2008年3月まで) 年 月
アドバイザー活動実績	2010年度以降の3年次ゼミナールにおいては、履修学生の進路目標を明確にし、それを実現するための方策を学生とともに考えることを重視した。授業外で、進路に関する長めの個人面談を実施し、就職意識の確立や進学準備の促進について指導した。 2012年度専門ゼミナール、卒業研究においても前年度に引き続き学生の卒業後の進路指導を重視した。その結果、卒業研究履修日本人学生全員が進路を確定した。一方、留学生については早期に進路を明確化した学生は希望を実現した者が多かったが、遅れた学生については決定できないケースが目立った。専門ゼミナール、卒業研究を履修する留学生を多く抱えていることから、進路指導の成果を如何に向上させるかが課題となっている。
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 2009年 1月 2008年度生涯学習フォーラム(山梨県社会教育振興会、山梨学院大学生涯学習センター共催)で基調講演「魅力と実力を備えた図書館とは」を担当。 (2)出前講座 年 月 特になし (3)公開講座 2009年 11月 第24回山梨県図書館大会第1分科会「すべての人に読書の楽しみを一図書館に何ができるか」においてコーディネーターを担当。 (4)学外審議会・委員会等 2010年 10月 山梨県図書館協議会委員(副会長)に就任。現在に至る。 2011年 6月 山梨市図書館基本計画策定委員会(委員長)就任(任期:2012年3月まで) (5)その他 1995年 7月 外国人研修生・技能実習生日本語作文コンクール審査委員(国際研修協力機構主催)に就任。現在に至る。

成果と目標

専門的成果	①専門分野と関連する図書館の運営に関連して、山梨県立図書館より山梨県図書館協議会委員への就任要請を受け、新図書館のサービス運営等の改善に関わる審議に加わっている。 ②学生の進路選択をより確実なものにするための方策を引き続き実施して、成果に結びつける。具体的には、ゼミナール等の授業において社会で必要とされる各種の力が養えるようにする。
-------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①ゼミナールの授業において、日本人学生と留学生との交流を活発化させる。これを効果的に実施することで、今後のグローバルな社会への対応に必要な力を獲得させる。</p> <p>②資格取得と学業成績や進路選択活動の成果との関連を明らかにし、その有効性を確認する。これにより、本学にふさわしい資格等を拡充する。</p> <p>③司書、アーキビスト等の情報や記録の管理に関わる専門職養成の課題を検討し、今後の本学の司書課程、学芸員課程のあり方を改善する。</p>
--------------	--

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
サイノウ シンペイ 齋藤 信平	男	1955年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	英文学、英国文化	
学歴	1974年 3月 福島県立安達高等学校卒業 1976年 4月 専修大学文学部英米文学科入学 1981年 3月 専修大学文学部英米文学科卒業 1982年 4月 専修大学大学院文学研究科修士課程入学 1986年 3月 専修大学大学院文学研究科修士課程修了 1988年 4月 成城大学大学院文学研究科博士後期課程入学 1990年 3月 成城大学大学院文学研究科博士後期課程中退			
実務経歴	1984年 12月 専修大学松戸高校非常勤講師(1985年2月まで) 1985年 4月 専修大学付属高校非常勤講師(1990年3月まで) 1990年 4月 山梨英和短期大学専任講師 1990年 4月 山梨大学非常勤講師(2010年3月まで) 1996年 4月 山梨英和短期大学助教授 2003年 4月 山梨英和大学教授(現在にいたる) 2010年 4月 山梨英和大学副学長(2012年7月まで) 2011年 4月 山梨英和学院理事(2012年3月まで) 2012年 4月 山梨英和学院評議員(現在にいたる)			
受賞歴	年 月 年 月 特になし 年 月			
所属学会	1990年 月 日本英文学会(現在にいたる) 1994年 月 日本サミュエル・ベケット研究会(現在にいたる) 2006年 月 日本ジョンソン・クラブ(現在にいたる) 年 月			
特免資格等	1984年 11月 高等学校教諭二級普通免許状 外国語(英語) 1986年 3月 高等学校教諭一級普通免許状 外国語(英語) 年 月 年 月			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>二十一世紀は「知識基盤社会」の時代であり、精神的文化的側面と物質的経済的側面の調和のとれた社会を作り出し、他者の文化を理解・尊重して他者とコミュニケーションをとることのできる個人を育てていくことが高等教育に求められていることは、周知のとおりである。しかし、特に、近年のITC技術の大きな進歩により、むしろ精神面の深さや文化面の知識や理解をさらに積極的に学生に教育をしていくことが急務となってきたと考える。これは、昨今表層的できわめて浅薄な情報のやり取りがなされ、その裏にある本質の問題までさかのぼろうとしない、現代日本の文化的風潮にも共通して言えることである。ここでの問題は、本質的な議論や教育・研究を本分とする大学の存在と、一般市民が日常的に情報を得ている場の乖離であるとも言える。その意味では、大学教育では専門的な知識を幅広く学生に教育し、浅薄な情報だけを頼りに浅薄な物事の判断をしないように徹底した知的訓練をし、いわゆる「質の保証」をする必要があると考える。具体的方法としては、講義であっても単に学生が聞きっぱなしという授業ではなく、さまざまな問いをこちらから発し、現代との関連において過去の文化的事象がどのような関連を持っているのかを絶えず意識させ続けるようにしなければならないと考える。また、きちんと文献を読んで知識を蓄える習慣をつけるためにも、たえず関連の図書を紹介していかなければならない。</p>																		
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 「英米の文化」や「英米の思想」においては、毎回授業の最後に単なる感想ではなく、特に印象に残った事象や、質問事項を記述してもらい、それをもとに次の会に、補足説明や質問に対する回答をしている。また、講義では、各学生が現在持っている知識を過去から現代にきちんと結びつけて考えられるように、さまざまな問をしながら、双方向の授業の展開を心がけている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 a. 「英米の文化」の教材、全51ページ。 b. 「英米の思想」の教材、全47ページ。 c. 「Tourism English」の教材、全12ページ。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>																		
担当授業科目	<p>2013年度 英米の文化、英米の文学、英米の思想、山梨学、English Reading IIA・IIB、Tourism English、専門ゼミ、卒業研究、基礎ゼミ1</p>																		
代表的シラバス	<p>英米の文化 概要 本講義では、英国の王政復古以後ロックやニュートンらの果たした役割から講義をはじめ、十八世紀英国の文化の展開を建築や造園、絵画からたどり、さらにはロンドンの都市開発の経緯を概観し、十九世紀のロンドンの庶民の実情までを見ていくことにより、英国の文化と近代性の関連、さらには現代とのつながりを捉えていきます。</p> <p>到達目標 ・英国の文化の諸相に触れる ・英国文化の流れを概観する ・英国の時代背景と文化の関係を理解する</p> <p>授業計画</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">1、英国文化について</td> <td>授業の概説</td> </tr> <tr> <td>2、王政復古期の思潮</td> <td>「科学」の成立</td> </tr> <tr> <td>3、十八世紀英国概観</td> <td>コーヒーハウスの出現</td> </tr> <tr> <td>4、十八世紀英国建築</td> <td>バロック建築からパッラーディオ主義へ</td> </tr> <tr> <td>5、英国風景庭園</td> <td>成立過程とその意味</td> </tr> <tr> <td>6、ロンドンの都市開発（1）</td> <td>スクエアの成立</td> </tr> <tr> <td>7、十八世紀の出版事情</td> <td>サミュエル・ジョンソンを中心に</td> </tr> <tr> <td>8、英国絵画（1）</td> <td>ホガースとレノルズ</td> </tr> <tr> <td>9、ロンドンの給水事情</td> <td>ロンドンっ子の飲み水</td> </tr> </table>	1、英国文化について	授業の概説	2、王政復古期の思潮	「科学」の成立	3、十八世紀英国概観	コーヒーハウスの出現	4、十八世紀英国建築	バロック建築からパッラーディオ主義へ	5、英国風景庭園	成立過程とその意味	6、ロンドンの都市開発（1）	スクエアの成立	7、十八世紀の出版事情	サミュエル・ジョンソンを中心に	8、英国絵画（1）	ホガースとレノルズ	9、ロンドンの給水事情	ロンドンっ子の飲み水
1、英国文化について	授業の概説																		
2、王政復古期の思潮	「科学」の成立																		
3、十八世紀英国概観	コーヒーハウスの出現																		
4、十八世紀英国建築	バロック建築からパッラーディオ主義へ																		
5、英国風景庭園	成立過程とその意味																		
6、ロンドンの都市開発（1）	スクエアの成立																		
7、十八世紀の出版事情	サミュエル・ジョンソンを中心に																		
8、英国絵画（1）	ホガースとレノルズ																		
9、ロンドンの給水事情	ロンドンっ子の飲み水																		

代表的シラバス	<p>10、大英博物館の成立過程 英国人氣質の一面をみる</p> <p>11、ロンドンの都市開発（2） ウェストエンド開発史</p> <p>12、英国絵画（2） ターナーとコンスタブル</p> <p>13、十九世紀ロンドンの光と陰 大英博覧会を中心に</p> <p>14、まとめ：定期試験について</p> <p>15、定期試験</p>
教育改善活動	<p>学内のFD活動に参加し、自分の授業の展開について、さまざまな角度からチェックをしようとしている。また、同僚の授業の展開などについても参考にしようと考えている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価 授業改善のためのアンケート：「英米の文化」、「英米の思想」については、内容が難しかったという回答が散見される。欧米の文化的な事象は、世界史の予備知識が要求されるが、講義内容については、きちんと吟味し、できるだけ単純に説明しようと考えている。しかし、予備知識が無いからといって文化や思想をあまり単純に図式化するのは危険性が伴うので、講義内容の吟味は今後も続く課題である。</p> <p>改善に向けた今後の方針：文化的な事象は、やはり映像を交えて講義するほうが学生にとって理解しやすいので、今後、映像を的確に導入しながら講義を展開するようにしたい。ただ、学生が映像を見ればなしでノートをとらないという問題があるので、きちんと学生に知識が定着するように工夫していきたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>十八世紀英国における美意識の変化を主要な研究テーマとしている。従来、十八世紀英国文化はおおよそ古典主義の系譜の中で語られることが多かった。たとえば、十八世紀初頭に美意識を展開したシャフツベリーなどは、まさしく、古典にその源を求め、ネオプラトニズムを展開しながら、秩序による審美観を展開した。しかし、英国はなんといっても、経験論の国であり、その精神の根底には、むしろ古典主義に代表されるものとは対極にあるものが流れている。これを包括的ゴシック性と捉え、十八世紀の英国の審美観をゴシック的な側面からとらえ直そうとしている。</p>
研究経歴	<p>1990年～ サミュエル・ベケットを中心にした20世紀英国小説の研究をおこなった。</p> <p>1993年～ ナラトロジーの研究を行い、作品の分析に応用した。</p> <p>1997年～ 英国風景庭園の成立を中心とした十八世紀英国文化の研究をおこなった。</p> <p>2001年～ ネオプラトニズムを中心とした十八世紀英国文化の研究をおこなった。</p> <p>2008年～ ゴシック的審美観を中心とした英国文化の研究をおこなっている。</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 斎藤信平、「ジョンソンとサー・ジョシュア・レノルズ」、『英国文化の巨人 サミュエル・ジョンソン』、江藤秀一、柴垣茂、諏訪部仁編著、pp.138-147、港の人、2009。</p> <p>b. 斎藤信平、「終わり」、「追い出された男」、「鎮痛剤」、『ベケット大全』、高橋康也監修、p.231、p.232、p.237、白水社、1999。</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから記載)</p> <p>a. 斎藤信平、「レノルズの審美眼と女性像に関する試論」、SEIJO ENGLISH MONOGRAPHS No.43、pp.139-152、2012年3月。</p> <p>b. Shimpei Saito, "The Transition of English Aesthetic Sense in the Eighteenth Century(1): To Anthony Ashley Cooper, the Third Earl of Shaftesbury", 山梨英和大学紀要第4号、pp.75-87、2005。</p>

研究実績	<p>c. 斎藤信平、「18世紀初頭英国における空間認識と庭園—英国風景庭園と理想的風景画の接点」、山梨英和短期大学紀要第35号、pp.80-68、2001。</p> <p>d. 斎藤信平、「『ワット』試論—サムのワット経験」、山梨英和短期大学紀要第30号、pp.272-261、1996。</p> <p>e. 斎藤信平、「殺し屋」における〈物語言説〉—〈焦点化〉と〈語り手〉」、山梨英和短期大学紀要第29号、pp.128-115、1995。</p> <p>f. 斎藤信平、「『焦点化』理論について—シュタンツェル、ジュネット、バル」、山梨英和短期大学紀要第27号、pp.136-128、1993。</p> <p>g. 斎藤信平、「物語論の実践と比較—シュタンツェルからジュネットへ」、山梨英和短期大学英文学論集、pp.3-12、1993。</p> <p>h. 斎藤信平、「ベケットの四十六年の短編小説」、山梨英和短期大学紀要第26号、pp.59-68、1992。</p> <p>(3) 研究ノート 斎藤信平、「コヴェント・ガーデン・ピアッツァからブルームズベリー・スクエアへ—都市開発と「芝」の接点」、山梨英和短期大学紀要第32号、pp.70-60、1998。</p> <p>(4) 翻訳 b. レディングス、ビル『廃墟の中の大学』、青木健、斎藤信平訳、法政大学出版局、2000。</p>	
	競争的資金採択課題	<p>・科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)研究分担者 研究課題名「18世紀英文学ハイパー事/辞典構築の試み」(研究期間:平成23年度~25年度)</p>
学会等発表・役員参加	<p>2007年 5月 斎藤信平、「シャフツベリーの審美観とジョンソンの倫理観」、日本ジョンソン・クラブ。</p> <p>2003年 12月 斎藤信平、「自然・絵画・ベケット」、第22回ベケット研究会。</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
共同研究の実績・受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	特になし	

サービス活動業績

学生会等活動実績	2002年	4月 教務部長(2004年3月まで)
	2004年	4月 共通科目委員長(2008年3月まで)
	2006年	4月 国際交流委員会委員長(2010年3月まで)

学生会 動実績 等活業員	2009年	4月	英語・英語圏文化コースコーディネータ(2010年3月まで)
	2010年	4月	副学長(2012年7月まで)
	2013年	4月	英語・英語圏文化コースコーディネーター
アドバイザー活動実績	特になし		
後進育成活動実績	特になし		
社会 貢献 活動	(1)講演会 年 月 特になし		
	(2)出前講座 甲府市生涯学習課知識交流講座で、「絵画を読む:イコノロジー入門」と題		
	2008年	10月	して4回にわたって講座を行った。
	甲府市生涯学習課知識交流講座で、「絵画を読むⅡ—西洋美術の二大潮流(ゴシックと古典主義)」と題して4回にわたって講座を行った。		
	2009年	7月	
	(3)公開講座		
	2007年	7月	「風景画を読む」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	2008年	9月	「絵画を読む」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	2009年	6月	「絵画を読む—美の変遷—」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	(4)学外審議会・委員会等		
2011年	4月	大学コンソーシアムやまなし事務局長会議企画・運営委員	
(5)その他 年 月 特になし			

成果と目標

専門的成果	<p>①ナラトロジーの研究においては、「焦点化」理論をシュタンツェルやジュネット、バルなどを比較し、その理論の進展を整理して、「殺し屋」などの作品分析により、「語り」と「視点」の関係性を明らかにした。</p> <p>②英国風景庭園の成立を中心とした英国文化の研究においては、造園の発想そのものが当時の世界観と密接に関係しており、当時の人間の空間認識や自然観と関係していることを明らかにした。特に、当時の英国貴族のような経緯から庭園の塀を飛び出し自然と一体になるという認識の中で、理想的風景画の美意識を造園における美意識へと転換し利用するに至ったかについて、十八世紀初頭を一つの転換点として捉えなおした。</p> <p>③十八世紀の美意識の変遷の研究では、当時の英国貴族が自認していたイタリアルネサンスの後継者としての立場から、古典主義的芸術論を上位に置く従来の見方ではなく、英国独特の経験論的精神風土や、ゴシック的審美観から美意識を研究することで、これまでどちらかという古典主義的美意識に重きが置かれて前面には出てこなかったゴシック的美意識の系譜こそが英国独特の審美観であることを確認しつつある。</p>
専門的目標	<p>①十八世紀英国文化の底流に流れるゴシック性の確認:従来、十八世紀の英国文化は、当然のごとくにイタリア・ルネサンスの系譜の中で論じられてきた。18世紀英国文壇を代表するサミュエル・ジョンソンや、同じく同世紀を代表する肖像画家ジョシュア・レノルズの作品と芸術理論は、古典主義を継承発展させているものされてきた。文学と絵画の関連性に関する研究は古くからあるが、伝記という文学に描かれる個人像と肖像画という絵画に描かれる個人像に関する経験論的、あるいは写実主義的、さらにはゴシック性の観点からの十八世紀英国文化における文学と絵画の英国文化における関連性の研究は皆無である。ここに新たに18世紀における英国のゴシック性を前面に出し、そこに英国人独特の気質を見い出そうとしている。</p>

<p>専門的目標</p>	<p>②サー・ジョシュア・レノルズの芸術理論と肖像画に置ける審美観の関連:ジョシュア・レノルズの「講演」は、ジョンソンやエドモンド・バークらをも巻き込んだ、いわば十八世紀英国の文化の中心にいる人々の審美観の表現とすることもできる。しかし、一方でレノルズ自身は紛れもない肖像画家であり、言われ続けてきたのは、理論と実践の違いである。しかし、この古典主義芸術理論とその肖像画の間にも、英国人独特の現実感覚や経験論的な思考が流れている。いわば、十八世紀英国の美意識と英国経験論の関係を解き明かすことも、重要な研究テーマである。</p> <p>③英国のゴシックの系譜は、いわゆる「ゴシック・リバイバル」として研究されてきた。その中心にいるのがジョン・ラスキンである。このリバイバルが起こった理由を再確認し、現代においてゴシック的な審美観を、秩序を基盤にした美意識として確認する。またこの過程で、真にゴシック的な人体表現の系譜にもふれ、ギリシア・ローマの古典主義の人体表現に対峙するゴシック的人体表現のルーツと系譜も探っていく。いわば、西洋文化のゴシック的審美観の流れを明確にすることも研究のテーマである。</p>
--------------	--

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
タシロ ジュン 田代 順	男	1956年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	教育学修士	専門分野	臨床心理学	
学 歴	1975年	3月	東京都立千歳高等学校 卒業	
	1977年	4月	早稲田大学社会科学部社会科学科 入学	
	1978年	4月	明治大学文学部文学科演劇専修 入学	
	1979年	4月	和光大学人文学部人間関係学科2年次編 入学	
	1983年	3月	同上大学 卒業(文学士)	
	1984年	4月	国際基督教大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士前期課程 入学	
	1986年	6月	同上大学院修了(教育学修士)	
	1988年	4月	成城大学大学院文学研究科コミュニケーション専攻博士後期課程 入学	
	1992年	5月	同上大学院所定単位取得後 退学	
実 務 経 験	1990年	4月	北沢保健福祉センター・精神障害者デイケア・グループワーカー(2004年3月まで)	
	1993年	4月	お茶の水医療秘書専門学校非常勤講師(精神保健等担当)(1995年3月まで)	
	1993年	4月	ISCカウンセリング研究所非常勤講師(カウンセリング)(2001年3月まで)	
	1993年	4月	神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師(医療と倫理担当)(2001年3月まで)	
	1995年	4月	文教大学女子短期大学部専任講師(人間関係論等担当)(1999年3月まで)	
	2001年	4月	府中看護高等専修学校非常勤講師((医療心理学担当)(2004年3月まで)	
	2002年	4月	横浜市教育委員会スクールカウンセラー(中学校派遣)(2005年3月まで)	
	2003年	4月	神奈川県藤野町教育委員会スクールカウンセラー(小中派遣)(2004年3月まで)	
	2005年	4月	神奈川県教育委員会スクールカウンセラー(県立高校派遣)(2007年3月まで)	
	2004年	4月	浜松学院大学現代コミュニケーション学部准教授(2009年3月まで)	
	2009年	4月	岩手大学教育学部・大学院准教授(2011年3月まで)	
	2011年	4月	山梨英和大学人間文化学部教授(大学院兼任)(現在まで)	
	所 属 学 会	1990年	1月	日本集団精神療法学会会員(現在に至る)
1990年		3月	日本心理臨床学会会員(現在に至る)	
1995年		3月	日本ブリーフサイコセラピー学会会員(現在に至る)	
1995年		4月	日本臨床死生学会会員(評議員)(現在に至る)	
1995年		4月	日本保健医療社会学会会員(現在に至る)	
2001年		9月	日本多文化間精神医学会会員(現在に至る)	
2001年		9月	日本家族研究・家族療法学会会員(現在に至る)	
2002年		4月	日本精神保健福祉学会会員(現在に至る)	
2004年		10月	日本質的心理学会会員(編集委員)(現在に至る)	
2007年		10月	日本コミュニティ心理学会会員(現在に至る)	
2010年	4月	日本人間性心理学会会員(現在に至る)		
受賞歴	年	月	特になし	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	2000年	4月	臨床心理士資格取得(登録番号07853)	
	2000年	4月	精神保健福祉士資格取得(登録番号05828)	
年	月			
e-mail	j.tashiro[at]yamanashi-eiwa.ac.jp			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>これまでの大学教育で行われてきたような、教員から学生への一方的な教授ではなく、大教室においても双方向で互いに「やり取り」できる授業を構成することを、自分の大学教育における理念、方針、方法としている。授業の流れの中で、学生同士に話し合ったい／考え合ったいテーマが出てきたら、積極的に受講生同士(そばに座っている人同士)で、2人1組やグループになり、話し合いをすることを学生に求める。その話し合いの結果を、指名された学生が教員にフィードバックし、それに教員がコメントを加えて返す。あるいは、話し合っているうちに出てきた質問でも可とし、それに教員が回答するという形を基本として授業をすすめていく。このようにして、学生参加型の対話型授業を行い、学生自らも授業を構成し創っているという積極的・能動的な参加意識を培うことが、授業という教育実践に取って重要だと考えている。なぜなら、先述した他者との「やり取り」とおして、コミュニケーションの稽古のみならず、(学生という、どちらかといえば一方的に)教育される側の受動性を低めて、このような対話型参加型の授業は、逆に学ぶ側の主体性・能動性を積極的に引き出すからである。</p> <p>このことの教育効果は、単に知識の(対話的)拡大のみならず、他者とのやり取り(対話)を通して、他者と関わり合うことで「生きること」全般についての能動性・積極性を引き出すと思われる。これは同時に、体感的、実感的にコミュニケーション能力を学生同士が相互にボトムアップすることにもつながると思われる。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a、積極的な双方向・参加型授業の試み 上記においても記述したが、ゼミなど少人数の授業はもとより、大教室の多人数の授業においても、教員と受講生が活発に「やりとり」できるコミュニケーション型授業構成を目指しており、それへの試行を(臨床面接のコミュニケーション技法を応用して)授業実践として展開している。</p> <p>b、コメント力／質問力＝コミュニケーション力を鍛える授業実践 前回の授業のノートやテキストを見直させ、それを2人1組あるいはグループでの話し合いを通して対話型で「復習」させつつ、話し合いの結果を指名した学生にフィードバックしてもらう。話し合いの流れで出てきた質問でも感想・コメントでも可としている。学生自身が他学生と対話することを通して、いわば他者の見方も含んだ「対話的知」と言うべきものが生成してきて「新たな知」が析出してくる。同時に日常会話では(ほとんど)話題にならないような「知的素材」が話し合われることによって、学生同士の(知的な)「考え」が双方に伝わるという利点もある。指名されてコメントあるいは質問をすることにより、コミュニケーションを支えるそれらの力が身につくという点も(授業を通しての)学生のコミュニケーション能力の育成につながる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a、田代順、西田恵子、岡本多喜子、大島道子他「社会福祉要説」所収 第6章社会福祉の方法・援助技術の中の次の項目4節ケースワーク、5節グループワーク、8節その他の方法・援助技術の中の次の項目 5)心理療法／カウンセリング、6)家族への心理的援助、7)コンサルテーション、8)ネットワークング、9)心理教育、10)セルフヘルプグループ、11)スーパービジョン(228p 担当部分88p～100p)</p> <p>b、田代順 千原美重子、津田尚子、田島佐登史他「発達のための臨床心理学」以下の担当部分 6章 発達のための心理臨床的な支援-7節 家族療法による支援 12章 精神障害と心理臨床-トピックス12「(境界性)人格障害」(210p 担当部分105-107p、189p)</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a、リフレクティング・プロセスを事例検討／ミーティングに応用する;岩手県臨床心理士会スクールカウンセラー研修</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2013年度;学部(コミュニティワーク、ココロの科学Ⅱ、卒業研究、基礎ゼミⅠ、卒業研究、生と死の臨床教育、専門ゼミナール)</p> <p>大学院(生と死の臨床特論、臨床心理事例研究、臨床心理学特論Ⅱ、修士論文)</p>

代表的シラバス	<p>演習・講義の方針としては、徹底的に双方向・参加型のコミュニケーション型な授業をめざしている。授業はどれも冒頭、必ず、前回の授業の「見返し」を入れ、それについて学生同士が対話をするように求める。</p> <p>授業への頭の切り替えと動機付け／準備状態(レディネス)を高めていく。授業に入ると知識の(教員からの)一方的な教授ではなく、(授業の)流れの中で出てきたテーマについては、学生同士対話しながら考え合う方式で授業を構成している。つまり、こうして、他者とのコミュニケーション能力を磨きつつ、(教員が話し合いの結果を返すよう求めるので)コメント力、質問力も同時に鍛えられる授業構成となっている。</p>
教育改善活動	<p>家族療法の話し方をグループワークに応用した授業実践</p> <p>「双方向授業にむけて」ということで授業のあり方の工夫をした。知識の一方的伝授ではない、教員と学生、学生同士の「やり取り」を活性化してのコミュニケーション型な授業展開を可能にするものとして、家族療法由来の「話し合い方」を応用してのグループワークの仕方を授業に取り入れ、授業の双方向性と活性化を図った。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>演習・講義へのアンケート評価;対話型・参加型の授業実践に関し、学生の授業評価アンケートの自由記述において、下記のような評価をもらった。</p> <p>※新しいスタイルの授業形態だった。疑問・質問などフィードバックする形はとてもいいと思う。</p> <p>※興味が湧くよう話し合いの時間を設けていて良かった。</p> <p>※意見の交換が面白かった。聴く、話すのメリハリがあって、しっかりとした授業だった。</p> <p>※話し合いを大切にしている授業で、自分以外の人の意見も聞いてとても良かった。</p> <p>※参加型の講義でみんなの意見が述べられるという点がとても良かった。</p> <p>※対話形式が新鮮だった。</p> <p>このような授業形式を取る場合、仕方がないことだが、「指名されるのが怖くて緊張した」「みんなの前で発表するのがいやだ」との回答も(少数だが)見受けられた。コミュニケーション能力と発表力を高めるためにもぜひ、乗り越えてもらいたいところだ。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>前々任校の浜松学院大学において、専門に近い教員同士がそれぞれの授業に見学して、コメントしあうという試みをした。私の授業を参観した教員からは「徹底した双方向授業の展開で、学生がどんどん真剣に取り組んでいくのが手に取るようにわかった」と肯定的な評価をもらった。</p> <p>現任校においては、個人的に同僚教員の授業を見学にいき、その教員のわかりやすい説明や話し方は、自分の授業の(学生への)「わかりやすさ」を促進する上で大変参考になった。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>近年は主として「リフレクティング・プロセス」という家族療法由来の、「話し合い」について「話し合う」という構造を持つ、集団コミュニケーションについての応用実践研究を行っている。リフレクティング・プロセスを、事例検討におけるグループスーパーヴィジョンの仕方、一般企業や専門職研修におけるミーティング(話し合い)の仕方、集団心理療法におけるナラティブなアプローチ等への応用として実践し、それへの検討を行っている。</p>
研究経歴	<p>1993年 東京大学医学部保健学科保健社会学教室 研究生 「死と死に逝くこと」および「子どもの死」についてのフィールドワーク調査と研究に従事(1995年3月まで)</p> <p>1995年 文教大学女子短期大学部家政科 専任講師 「地域精神保健」および「ブリーフサイコセラピー」の臨床実践と研究に従事(1999年3月まで)</p> <p>2004年 浜松学院大学現代コミュニケーション学部 准教授 「精神障害者の社会復帰グループ」への臨床実践と研究、「死と死に逝くこと」および「トラウマ体験」へのインタビュー研究／臨床社会学的研究に従事(2009年3月まで)</p> <p>2009年 岩手大学教育学部 准教授 「学校現場におけるトラウマ」研究、「臨床実践およびコミュニケーションの仕方」としての家族療法技法・リフレクティング・プロセスの応用研究に従事(2011年3月)</p>

研究 経 歴	<p>まで)</p> <p>2011年 山梨英和大学 教授 「死と死に逝くこと」、「トラウマ」、「セクシュアリティ」についてのナラティブなアプローチによる臨床社会学的研究(サイコグラフィ作成=精神誌的研究)</p> <p>2012年 同上 教授 前年度に引き続き、「死と死に逝くこと」「トラウマ」「セクシュアリティ」についてのナラティブなアプローチによる臨床研究(インタビューによる精神誌研究)</p>
研究 実 績	<p>(1)著書</p> <p>1;別冊宝島279「わかりたいあなたのための心理学入門」所収 道又爾(編)田代順「すべての男性は「女性」である」(他者という問題群②の章)」、95-98p 宝島社 1996年</p> <p>2;「社会福祉要説」所収 今泉礼右(編)田代順「第6章社会福祉の方法・援助技術の中の以下の項目担当 4節ケースワーク、5節グループワーク、8節その他の方法・援助技術の中の次の項目;5)心理療法/カウンセリング、6)家族への心理的援助、7)コンサルテーション、8)ネットワーキング、9)心理教育、10)セルフヘルプグループ、11)スーパービジョン」、88-100p 同文書院 2000年</p> <p>3;「小児がん病棟の子どもたち」、田代順 1-200p 青弓社 2003年</p> <p>4;「ナラティブからコミュニケーションへ-リフレクティング・プロセスの実践-」所収 田代順 矢原隆行編、以下の項目担当</p> <p>第2部;リフレクティング・プロセスの実践</p> <p>第5章;学校コミュニティへのアプローチ</p> <p>第6章;精神障害者家族グループへの応用実践</p> <p>第9章;各実践へのリフレクションと振り返り</p> <p>あとがき、85~126p、173~178p、185~187p 弘文堂 2008年</p> <p>5;「発達のための臨床心理学」以下の項目担当</p> <p>6章 発達のための心理臨床的な支援-7節 家族療法による支援</p> <p>12章 精神障害と心理臨床-トピックス12「(境界性)人格障害」</p> <p>105-107p、189p 保育出版社 2010年</p> <p>(2)学術論文(2005年以降のものを提示)</p> <p>1、がんの子どもへの母親支援-ナラティブなグループ・アプローチとコミュニティ心理学的視点を通して-「臨床心理学」第8巻6号(823p-828p)金剛出版2008年</p> <p>2、デイケアグループにおける「雑談」の治療的意義と効果-「物語ること」を通して「現実」へ-「精神療法」第36巻2号(84p-91p)金剛出版 2010年</p> <p>3、いじめ魔王の冒険-スクールカウンセリングにおけるいじめの「外在化」と「心理教育」-「精神療法」金剛出版 (査読中)2012年</p> <p>4、ナラティブなグループアプローチを体験する「集団精神療法」第26巻2号(146p-150p)日本集団精神療法学会2010年</p> <p>5、ナラティブなグループアプローチを体験する(その2)-リフレクティング・プロセスを応用したグループはいかに震災に向き合ったか-「集団精神療法」第27巻2号(150p-154p)日本集団精神療法学会2011年</p> <p>6、ナラティブなグループアプローチを体験する(その3)-リフレクティング・プロセスを応用した事例検討とグループスーパービジョン-</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(2005年以降のものを提示)</p> <p>1、不妊症セルフヘルプグループにおける語りのポエティクス-病気/障害とグループ体験への語りとその変容を巡って 立教大学・ライフストーリー研究会(代表;桜井厚・立教大学教授・社会学)2007年</p> <p>2、私が、他者を通して、私に語り継ぐということ-「いじめ」というトラウマタイズされた体験とその語りを巡って- 立教大学・ライフストーリー研究会2007年</p> <p>3、ナラティブからコミュニケーションへ-リフレクティング・プロセスの実践- 日本心理学会ワークショップ企画(田代順-浜松学院大学 花田里欧子-京都教育大学 三澤文紀-茨城キリスト教大学 矢原隆行-広島国際大学)2008年</p> <p>4、質的研究のリフレクティング・プロセス、リフレクティング・プロセスの質的研究-その試論に向けて-日本質的心理学会・自主シンポジウム企画での報告(田代順-岩手大学 三澤文紀-茨城キリスト教大学 矢原隆</p>

研究実績	<p>行-広島国際大学)2009年</p> <p>5、グループの〈会話のしくみ〉を変える、臨床の場が変わる—ケース検討やグループ・ワークにおけるリフレクティング・プロセスの展開— 日本心理臨床学会自主シンポジウム報告2010年</p> <p>6、ナラティブなグループアプローチを体験する(その3)—リフレクティング・プロセスを応用した体験グループと事例研究—日本集団精神療法学会ワークショップ企画2012年</p> <p>7、日本保健医療社会学会 査読委員 2012年～</p> <p>8、日本質的心理学会 編集委員(査読担当)2012年～</p>
競争的資金採択課題	<p>1、個人;科研費(リフレクティングプロセスについての共同研究)にほぼ毎年申し込んでいるが、最終採択候補まで残るのだが、残念ながら採択に至ったことはない。今後も積極的に外部資金獲得につとめるつもりである。</p> <p>2、学内共同;心理コースの教員との共同研究が科研費に採択されている。(中断事例の研究;研究代表黒田教授)研究分担者</p> <p>3、科学研究費補助金-2012年度採択(分担研究者)</p> <p>共同研究;代表者 森岡正芳(神戸大)</p> <p>基盤研究A「ナラティブアプローチによる生活史の構築」の研究分担者</p> <p>臨床実践知の構成的枠組み</p> <p>生活史の構成は物語を生み出すという人間の基本的な特徴が基盤である。研究の枠組みとして Anderson,H.(Houston Galveston Institute)の協働アプローチ(collaborative Approach)を敷衍して研究を行う。研究グループのこれまでの交流で、Andersonとは、直接研究協力を依頼し、共同研究を進められる環境である。Andersonは臨床実践の知は関係のなかで、当事者とともに作っていくものとする。関係性、コミュニティのなかで生まれた知こそ人を実際に活かし、支え、また人に変化を起こさせるものである。セラピーの場は「クライアントから情報をもらってそれをセラピストの地図で整理するのではない。」クライアントは不確かであるが、何かを見せようとしている。それまでの知識や情報による地図が面接者の頭のなかにあるとこの何かが見えなくなってしまう。セラピストは無知(Not-Knowing)の姿勢で積極的な会話の参加者となる。この姿勢は、さまざまな実践場面で活用され、ナラティブアプローチの主軸の一つとなっている。</p>
学会等発表・役員参加	<p>2005年以降を記述</p> <p>2005年 3月 1、小児がん病棟における母親のナラティブグループ-リフレクティング・プロセスを応用したナラティブプラクティスによる病棟「生活力」の回復- 日本ブリーフサイコセラピー学会 2005年</p> <p>2006年 5月 2、病棟での入院生活を支える-小児がん病棟における入院児の母親へのグループワークを通して- 日本保健医療社会学会</p> <p>2008年 9月 3、「いじめ体験」への語り 日本心理臨床学会</p> <p>2009年 9月 4、学校コミュニティへのナラティブ・アプローチ-「いじめ」に対するコミュニティへの予防的介入をめぐる 日本コミュニティ心理学会</p> <p>役員参加;日本臨床死生学会(評議員として毎年参加)</p>
共同研究実績・受託研究の	<p>2005年以降を記載</p> <p>2006年 リフレクティング・プロセス研究会(代表;田代順、矢原隆行;広島国際大学);元々は家族療法技法であるこのアプローチ法を研修や事例検討、グループワーク等へ応用実践するための研究会。関連学会でのシンポジウム等主催。(継続中)</p> <p>2012年 毎月 科研費共同研究分担研究者として、研究代表者 森岡正芳氏が所属する神戸大学の共同研究報告会・討議会に参加(継続中)</p>
大学院生指導	<p>2011年～(現在)</p> <p>①臨床心理事例研究における事例指導</p> <p>②ケース・スーパービジョン</p> <p>③大学院ゼミにおける「死と喪失」に関わるテキストの講読授業を通しての指導</p>

大学院生指導	④修士論文指導(トラウマからの回復過程、リストカットからの回復過程とその要因) ⑤臨床心理士の職域についての指導
研究能力に対する評価	①臨床実践・研究に関わる評価;リフレクティング・プロセスの「話し方」をベースにしたグループワーク、セラピスト、クライアント、コ・セラピスト(的な対話者)の3人でやる面接法を応用実践して、臨床コミュニケーションの深化とケアの進展など臨床的な効果をあげている。 ②臨床社会学領域;臨床関連の事象(身内の死や喪失を経験した当事者、トラウマからのサバイバーが持つ「回復力」)に関わるインタビューを精力的に行っている。カウンセリングに技法(傾聴と共感等)を活用してのインタビューには定評があり、「ものの見事に本質を語らせる」(共同研究者の社会学者からの評価)と過大な評価をいただいた。その結果を人々の「精神誌(サイコグラフィ)」という形でまとめており、研究会での報告では「生き生きとした臨場感」あふれる報告との(ドキュメンタリストとしての)評価もあり、インタビューサイコグラフィという領域での(今後の)業績進展が期待されている。この流れ/評価から2つの学会からの「査読委員」の依頼がきて、主にナラティブなアプローチの論文審査に携わっている。

サービス活動業績

学内委員会等活動実績	2009年 4月 岩手大学教育学部;広報委員、学生委員(2010年3月まで) 2010年 4月 国際交流委員、情報処理セキュリティ委員(2011年3月まで) 2011年 4月 学生委員、進路支援委員(2012年2月まで) 2012年 4月 大学院入学者選抜会議委員、大学院入試問題作成委員、心理コース出前講義担当コーディネーター 2012年 8月 大学院オープンキャンパス・コーディネーター
アドバイザー活動実績	①担当の基礎ゼミナールの学生と茶話会を開催して、親睦に努めた。 ②メンタルな問題のある基礎ゼミ学生に対して、相談室と連携しての対応。 ③成績不振で欠席の多い留学生に対する面接指導
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 以下2005年以降のものを掲載 2005年 6月 神奈川県立高校;スクールカウンセラーとして勤務する高校において、教員を対象に高校生の精神保健の問題についての講演 2005年 7月 神奈川県立高校→スクールカウンセラーとして勤務する高校において、生徒を対象にした、思春期、青年期に好発しやすい問題行動、精神疾患(摂食障害、リストカット、不登校、いじめなど)についての講演をグループワーク方式・体験学習講演を行った。 2006年 5月 神奈川県立高校 →高校教員を対象とした、生徒の精神保健に関わる教育講演。思春期～青年期に好発しやすい統合失調症の兆候と病態を解説した。 2006年 6月 神奈川県立高校→高校教員を対象とした、「不登校」をめぐる講演。 2007年 10月 神奈川県公立中学教師対象→スクールカウンセラー先の中学教師を対象とした「不登校とイジメ」を巡る講演。 2008年 11月 グリーフカウンセリングセンター→当該センターにおける秋期講座でのワークショップ型講義=リフレクティング・プロセスのスタイルでグループワークをしながらの体験学習講演である。 2009年 6月 岩手県公立中学校→子どもとの対話や指導におけるコミュニケーションの取り方について、臨床的なコミュニケーションの技法を応用しての「やり方」について述べた。

社会 貢 献 活 動	2010年 7月 岩手県臨床心理士会→スクールカウンセラー研修の講師として、学校コミュニティへのアプローチについての具体的実践とやり方についてのワークショップを行った。
	2011年 9月 グリーフカウンセリングセンター→死別経験者に対するグループワーク的講演
	(2)出前講座
	2006年 6月 静岡県立静岡東高校→カウンセリング入門の授業を高校3年生を対象に行った。
	2011年 10月 山梨県立甲府南高校→心理学入門の授業を高校2年生を対象に行った。
	2012年 5月 山梨英和学院高校→心理学についての初歩的授業を高校3年生を対象に行った。
	(3)公開講座
	年 月
	(4)学外審議会・委員会等
	2005年 月 日本臨床死生学会評議員(現在に至る)
(5)その他	
年 月	

成果と目標

専門的 成果	<p>①リフレクティング・プロセスの応用実践研究;臨床実践のみならず、コミュニケーション法として有効なナラティブアプローチのひとつ「リフレクティング・プロセス」を応用してのグループワーク/集団心理療法、心理療法面接や研修・ミーティング、事例検討等に実践して多大な成果を挙げている。また、このアプローチに特化した「学際的」研究会を社会学者や臨床心理学者、社会福祉学者らと立ち上げ、様々な学会において、積極的にシンポジウム等を行って、このスタイルのコミュニケーションのあり方、様々な現場における応用実践の試み等について発表・討議して、研究と臨床実践を深めている。</p> <p>②精神誌研究;臨床の基礎研究につながると思われる「当事者研究(あるいは当事者との共同研究)」を積極的に行っている。それら、当事者の対象は、「小児がんの子供と家族」であったり、「いじめの被害のサバイバー」「長期にわたって看取りをおこなった家族メンバー」「脳梗塞後の片麻痺当事者」などであり、参与観察をメインとする現場へのフィールドワークや彼らへのインタビューを通して、「病棟」や「病気」の「社会的構成」、また、トラウマや「障害」とともに「生き延びること」の意味、関係者や社会との連関、トラウマや「障害」への思いの質的全体性を明らかにしてきた。</p> <p>③研究成果の発信等;学会報告や研究会活動ほか、実際の臨床場面や事例検討会等において、上記①の成果を応用実践している。②については、その記録と検討・考察を学術誌に掲載したり、また本として出版して社会に広く還元している。</p>
専門的 目標	<p>①リフレクティング・プロセスの応用実践研究;立ち上げた研究会(リフレクティング・プロセス研究会)をベースに、関連(かつ学際的)諸学会(質的心理学会、心理臨床学会、保健医療社会学会等)で積極的に(この応用実践の)シンポジウム等を開催して、その応用実践をより理論的、技法的に「洗練」させていくのを目標としている。また、リフレクティング・プロセスというコミュニケーション技法をベースにした一般向けの新書を書いて、この技法のミーティングや研修等への応用実践が社会的に広がるようにして行く。</p> <p>②精神誌研究;心理臨床や社会福祉分野においては、「当事者(との共同)研究」がますます盛んになる傾向にある。また、当事者との「協働」というのが重要なキーワードとなりつつある。その状況を踏まえながら、インタビューを通し、(福祉分野も含む)当事者からの「病い/障害/トラウマ」についての語りを精神誌としてまとめる作業を今後も展開して、当事者自身のそれらへの「意味づけ/思い」を引き出しつつ、同時にそれらがどのように「社会的」にも構成されているのかを見ていく。以上を通して、臨床をする側の視座のみならず、「当事者」自</p>

専門的目標	身の視座も含みこんだ複眼的視座で(臨床実践の基礎的研究ともなり得る)臨床の精神誌をつくっていく。
-------	--

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
コサゲケンイチ 小菅 健一	男	1959年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	日本近現代文学・表現論・表象文化	
学歴	1984年 3月 早稲田大学第一文学部 日本文学専攻 卒業 1987年 3月 早稲田大学大学院文学研究科(博士前期課程) 日本文学専攻 修了 1991年 3月 早稲田大学大学院文学研究科(博士後期課程) 日本文学専攻 単位取得満期退学 年 月 年 月			
実務経験	年 月 年 月 特になし 年 月			
受賞歴	年 月 年 月 特になし 年 月			
所属学会	1981年4月～現在 早稲田大学国文学会 1988年4月～現在 日本近代文学会 1989年4月～現在 早稲田大学国語教育学会 1991年4月～現在 昭和文学会			
特免資格 免許等	1984年 3月 中学校教諭一級普通免許状(国語) 1984年 3月 高等学校教諭二級普通免許状(国語) 1987年 3月 高等学校教諭一級普通免許状(国語) 1993年 5月 普通自動車運転免許			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>担当する学生の問題意識とニーズの多様性に対して、十分に応えられるように、内容やレベルの幅が広く、情報量が多い講義を行い、一人一人が自分に見合った成果や満足が得られる教育を目指している。学生には参加意識を持って、自発的・積極的に臨めるようなインタラクティブな講義になるように授業を進めている。そのために、学生が興味・関心の持てるものということで、様々な表現ジャンルから教材化出来るものを探し、授業で取り上げるので、受講生の学習意欲が喚起されるので、良い評価をもらっています。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 安定教材や定番教材よりも、現代文化(サブカルチャー)の様々なジャンルのものを教材化して、学生が驚くようなものから授業が展開していくような方法を実践している。視聴覚教材として使うDVDやビデオ、CDの内容選択に工夫を凝らしている。そして、授業によっては、様々なタイプのワークショップ的な実践作業を多く取り入れている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 町田守弘 編「新しい表現指導のストラテジー」(東京法令出版 平成12年5月)に論文「切り結ぶ映像と〈ことば〉—イメージ喚起力活性化の試み」を寄稿。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 第38回中部地区私学教育研修会(2000年10月)において、「〈ことば〉を生かす一國語教育の意義と可能性—」という基調講演と研究発表会のコメンテーターをする。</p> <p>2007年1月山梨県立甲府城西高校の教職員を対象に、「日本語表現力を向上させるための指導方法」というテーマで講演をする。</p> <p>2011年5月山梨県立富士北稜高校での県内の国語教員の研修会において、「言語活動の充実—ことば・表現・ものの見方や考え方」という講演をする。</p>
担当授業科目	<p>2013年度 基礎ゼミナール、専門ゼミナール、卒業研究、現代文化入門、マンガ文化研究、メディアの編集工学、言語文化創造Ⅲ、セルフプロデュースの技法</p>
代表的シラバス	<p>言語文化創造Ⅲ 日本近代文学史の上で、代表的な作家や作品を、作家論や作品論はもちろんのこと創造(制作)の現場である作品成立の時代背景、そして、同時代的な文化事象、文学研究史的な視点、さらに、作家の生い立ちや個人的な事情などといった、様々な角度からの読解・分析を加えていくことで、その作品の内容や作品世界、ストーリーなどを鑑賞したり、テーマを考察したりといった検討を行って、作家や作品を立体的に捉えていく講義である。今年度は、芥川龍之介の初期のパラエティーに富んだ王朝物の作品群を取り上げて、芸術至上主義に基づいて、〈ことば〉や表現、作品世界にこだわって創り上げられた独自の芥川文学に触れてみたい。この講義を通して、芥川龍之介の創作活動に反映された精神構造や芸術意識にまで迫っていきたいと思う。</p>
教育改善活動	<p>FD研究会には時間が許す限り参加して、自分の講義や演習に生かせるものは取り入れています。「授業改善のためのアンケート」の改善して欲しい点に挙げられたことに関しては、自分で注意するとともに、そういった傾向(話すスピードが早くなる)が出た時には、指摘するように授業の初回において必ず話しています。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 「授業改善のためのアンケート」によれば、講義において使用する視聴覚教材、プリント、テキストが授業の内容理解に非常に役立つとともに、興味・関心を呼び、面白くて勉強になったという好意的評価を多く頂いています。ただし、盛り沢山の内容をこなしていく時に、時々、早口になってしまうので、もう少しゆっくり話して下さいという要望をもらうことがあります。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 本学においては、教員が他の教員の授業に参加して、相互に評価するという制度はまだ取り入れていないので、ありません。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>〈ことば〉の持っている映像(イメージ)喚起力を言語映像論と措定して、その対義概念である映像言語論と合わせて、表現論ということで学部時代から一貫して研究している。作品論や読者論的なアプローチも組み込みながら、文学研究の狭い枠組みに留まらないで、影響関係にある映画やアニメ、演劇、マンガ、音楽といった文化事象にも範囲を広げながら、作品創作や表現活動としての国語教育にまで手を伸ばして、表現論を駆使した総合的な文化論の研究を幅広く繰り広げていくことを考えている。</p>
研究経歴	<p>1987年～1994年立正大学教養学部 非常勤講師 1994年 山梨英和短期大学国文学科 専任講師 1998年 助教授 2002年 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科へ改組 2002年～2013年愛知淑徳大学文化創造学部 非常勤講師 2004年～現在 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授 2006年～2008年和洋女子大学</p>
研究実績	<p>(1) 著書 『時は過ぎゆく』論—時間論再考の視点から—(共著)(『論考 田山花袋』桜楓社 1985年2月) 『『父母への手紙』論—私—という表現装置』(共著)(『日本文芸の系譜』笠間書院 1996年10月) 「古賀春江の表現原理—同心円としての絵画と詩—」(共著)(『日本文芸の表現史』おうふう 2001年10月) 専攻としている川端康成と表現論をめぐって書いた、それぞれの時点の代表的な論文。</p> <p>(2) 学術論文 『『浅草紅団』論—空像としての都市〈浅草〉—』(『国文学研究』第96集 1988年10月) 「川端康成における大正十二年の意義—“作家”以前の問題をめぐって—」(『日本文藝論集』第27号 1994年9月) 『『美しい日本の私—その序説』論—小説論としての読みをめぐって—』(『山梨英和短期大学紀要』第28号 1995年12月) 『『美の存在と発見』論—小説論としての可能性と限界』(『山梨英和短期大学』第29号 1996年12月9月) 「川端康成の表現意識の確立—文学と美術の結節点から—」(『国文学』2001年4月) 川端康成をめぐる研究論文の主要なもの。「『当選の日』—生活者と作家の相克』(『太宰治研究』第十九輯 2011年6月)。</p> <p>「〈考現学〉の方法—“事実”の“再現”としての修辞学—」(『国文学 解釈と鑑賞』1991年1月) 「コミックメディア論試稿—“言語芸術”と“映像芸術”の融合—」(『山梨英和短期大学紀要』第32号 1998年12月) 「広告表現における音・映像・ことば—佐藤雅彦の“ルール”の教材化をめぐって—」(『月刊 国語教育研究』No.332 1999年2月) 『『ロバート・メイプルソープ』の写真行為論序説—く見えているものをく見ることをめぐって—』(『国文学』1999年8月) 『『言語映像』と『映像言語』による表現論の結節点—押井守論の前提として—』(『山梨英和短期大学紀要』第5号 2006年12月) 「押井守論(1)—表現原理の基底にあるもの』(『山梨英和短期大学紀要』第11号 2013年2月) 表現論によって展開した代表的な文化論。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>1982年 10月 『『眠れる美女』論』(第49回 川端文学研究会) 1983年 8月 『『東京の人』論』(第52回 川端文学研究会) 1984年 8月 「川端康成における言語映像試論」(第56回 川端文学研究会) 川端文学専門家の前で卒業論文の成果を発表したもの。 1988年 11月 「習作期における川端康成の〈表現〉意識」(昭和63年度 早稲田大学国文学会 大会) 修士論文に取りあげた問題との関連性から、新たな課題として取り組んだテーマだった。</p>

学会等 役員等 参加表 ・	1995年 12月「表現装置としての〈私〉—「父母への手紙」論—(第101回 川端文学研究)
	2011年 現在 早稲田大学国語教育学会 委員
受託共同 研究の 実績 ・	年 月 年 月 年 月 特になし 年 月 年 月
大学院生指導	特になし
研究能 力に 対す る 評 価	自己の研究能力に対して、同じ学問領域の学内外の専門家から、評価に関するヒアリングなどを本学はまだ行っていませんので、ありません。

サービス活動業績

学内 委員会 等 活動 実績 ・ 作 業 部 会	2009年4月～2012年3月 エクステンション委員会 委員長 2010年4月～2012年3月 学生部委員会委員 2011年4月～2012年3月 国際交流委員会 委員 2012年4月～ 日本語・日本文化コース コースコーディネーター 2008年 新カリキュラム検討作業部会 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	担当している基礎ゼミナール(1, 2年生)、専門ゼミナール(3年生)、卒業研究(4年生)を受講する学生たちの、履修・生活・部活・進路などの相談をうけて、アドバイスを 行っていくという一般的な活動を、オフィスアワーに限らず昼休みや空き時間に行っ ている。
後進育成活動実績	大学院での講義や演習を担当したことがないため、具体的な形での後進育成活動の 実績はありません。
社会 貢 献 活 動	(1) 講演会 1995年 6月 山梨県立文学館で行われた井伏鱒二展の関連講演として、「井伏鱒二の戦 後作品を読む—『遥拝隊長』論—」を行う。 (2) 出前講座 2004年 3月 山梨県韮崎市市民教養講座「日本語の豊かさ・おもしろさ・むずかしさ—丸 い卵も切りよで四角—」を、中央公民館の市民教養講座の講義として行う。 2012年6月 甲府城西高校・山梨英和大学連携授業 小論文演習授業 講師 (3) 公開講座

社会 貢 献 活 動	2009年5月～現在	山梨県立文学館 年間文学講座 講師（2009年度川端康成、2010年度芥川龍之介、2011年度太宰治、2012年度夏目漱石、2013年度村上春樹）
		(4)学外審議会・委員会等
	2008年12月3月	大学コンソーシアムやまなし 委員
		(5)その他
	2010年4月～2012年3月	キャンパスネットやまなし企画運営委員会 委員
	2011年12月	「おもてなし条例」制定に伴う県民向け啓発のための山梨県制作のCMの審査
	2012年6月	富士山の世界文化遺産登録実現に向けての山梨県制作のCMの審査
	2012年10月	第28回国民文化祭・やまなし2013PRのための山梨県制作のCMの審査

成果と目標

専門的 成 果	① 文学作品や文化事象の読解・分析の作業に生かしていた表現論の様々な技法を、作品の創作や制作の理論に応用することによって、自己表現に興味や関心のあ る多くの学生の指導に一定の成果を上げることが出来た。
	② 〈ことば〉や表現ということを目にした、文学作品はもちろんのこと、様々な文化 事象の教材化の作業も一段落つき、個々の教材の吟味・内容精査によって、読む・聞 く・考える・書く・話すという、人間の表現活動の流れに基づいた体系的な学習活動の 枠組みが出来上がった。
	③ 本来、専門にしている文学における作家や作品の研究と、サブカルチャーと呼ば れる様々な文化事象の研究が、表現論という視点と読者論(享受者論)という視座に よって、二本立てで行ってきたことが相乗作用して、それぞれの研究活動を効果的に 進めていくことが出来た。
専門的 目 標	① 文章表現や絵画表現、映像表現による創作や制作を希望する学生の能力の開 花、開発、発展に寄与する指導を行うことで、より高い完成度を目指させて、表現欲求 を持つ学生に対して、自己表現の奥深さに気付かせて、卒業後も表現活動を継続し てもらう。
	② 人間文化の基本になっている〈ことば〉、そして、その〈ことば〉を駆使すること によって成立する表現、さらに、自分たちを取り巻いている文化事象を意識させて、自覚 的なコミュニケーション活動の実践によって、日常生活をより豊かなものにしていく指 針となるような授業展開を行う。
	③ 卒業論文のテーマとした、言語映像論と映像言語論の相関性と原理論を、文学作 品や文化事象、マンガやアニメーション、日本語表現の問題の読解・分析、理論化・教 材化の作業を通して、いっそう進化・深化させていく。

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
クダ ヒロシ 黒田 浩司	男	1960年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	社会学修士	専門分野	臨床心理学	
学 歴	1979年	3月 岐阜県立大垣東高等学校卒業		
	1979年	4月 千葉大学人文学部人文学科心理学専攻入学		
	1983年	3月 千葉大学人文学部人文学科心理学専攻卒業		
	1983年	4月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程入学		
	1985年	3月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程修了		
	1985年	4月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻博士課程入学		
	1989年	3月 慶応義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位修得退学		
実 務 経 験	1984年	4月 千葉県柏児童相談所嘱託判定員(1988年3月まで)		
	1988年	4月 青山学院大学生相談センターカウンセラー(1994年3月まで)		
	1988年	5月 国立千葉病院精神神経科嘱託臨床心理士(1994年3月まで)		
	1989年	4月 産能短期大学通信教育部非常勤講師(2005年3月まで)		
	1994年	4月 茨城大学人文学部専任講師(1997年3月まで)		
	1996年	4月 茨城県スクールカウンセラー(1999年3月まで)		
	1997年	4月 茨城大学人文学部助教授(2004年9月まで)		
	1998年	4月 みとカウンセリングルームどんぐりカウンセラー(2009年3月まで)		
	2004年	4月 放送大学茨城学習センター兼任講師(2009年3月まで)		
	2004年	4月 茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻兼任(2009年3月)		
	2004年	4月 常磐大学大学院人間科学研究科非常勤講師(心理療法特論2009年3月まで)		
	2004年	10月 茨城大学人文学部教授(2009年3月まで)		
	2005年	2月 英国Tavistock Clinic 思春期部門留学(文部科学省平成16年度海外先進教育実践による派遣 2006年2月まで)		
	2009年	4月 茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻非常勤講師		
	2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部教授		
受 賞 歴	2007年	3月 茨城大学2006年度推奨授業受賞 教養科目「こころの科学」		
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	1986年	4月 日本心理臨床学会(現在にいたる)		
	1996年	4月 日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)		
	2000年	4月 包括システムによる日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)		
	2001年	4月 日本精神分析学会(現在にいたる)		
特 免 資 格 等 ・ ・ ・	1995年	4月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 No04221)		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>大学教育において学問の基本を学ぶことは、その学問の理念や緒理論を理解するだけでなく、対象を多様な観点から考察しうる学問的態度を見につけることが肝要と考えられる。この学問的態度には批判的な観点も同時に持ちつつ、机上の論理にならないように現実の事象や実際の場面とかがかわることが含まれ、これが実践的な学問的能力となり、知識および良識ある社会人の育成につながるものとする。</p> <p>教養科目、専門科目、大学院科目のすべての領域において、この基本的な理念や諸理論と実際的な問題をつなぎ、授業の中で主体的考える機会を多く取り入れておく。教養科目においては心理学の基本的な実験や、心理テスト、カウンセリングの実習を取り入れ、なおかつ精神障害者に対する偏見については課題を出し、実践を通して考察をすることを求めている。受講生が心理学や精神病の現実を知り、社会の様々な事象を心理学的に考察することの面白さを体験できるように心がけている。</p>
教育能力	<p>(1) 教育方法実践例</p> <p>a. 大学における精神障害に関する心理教育の試み 大学の教養科目において、偏見の少ない精神障害に対する正しい知識を習得してもらうために、受講生自身が心理教育を受けるだけでなく、最低3名の周囲の人(家族、友人など)に心理教育をおこなう実践を求め、その成果をレポート課題として提出を求めた。教室で受身的に聞くだけでなく、自らが心理教育活動に参加することによりこの問題に対する積極的な態度がより培われた。 また、学部専門科目においてはその授業の中で、精神病院デイケアとの交流会や作業所ボランティアなどに学生に積極的に関与させ、精神障害を抱えている人との実際のかかわりを通して、この問題を深く考察されている。</p> <p>(2) 作成した教科書、教材等</p> <p>a. 黒田浩司「臨床心理アセスメント(2) 知能検査と質問紙法」『臨床心理アセスメント(3) 投映法』『コミュニティ援助(1) 危機介入とコンサルテーション』『臨床心理学概説』馬場禮子(編著) p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</p> <p>(3) 教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>黒田浩司 茨城大学2006年度表彰授業報告</p>
担当授業科目	<p>2012年度</p> <p>アドバンスド心理学研究演習、心理検査演習、ココロの科学 I、専門ゼミナール、卒業研究(以上学部)</p> <p>投映法特論、臨床心理査定演習、臨床心理事例研究、臨床心理地域援助特論(以上大学院)</p>
代表的シラ	<p>授業の方針としてはそれが講義であっても、演習であっても、授業の中に実習をできるだけ取り入れ、学生自身が深く問題に関与し、積極的に取り組むように努力している。そのためにかなりボリュームのある資料を用意し、受講生の提出したデータを授業の中でもちいるようにしている。卒業論文研究につながるようにレポートとして提出するように求めている。</p>
教育改善活動	<p>a. 教養教育科目人文分野専門部会長(2006年～2008年度、茨城大学) 茨城大学全学の人文分野の教養教育科目の専門部会長として授業の質をよくするために授業アンケートやFD研修会、シンポジウム、シラバス改善のための点検評価、などをおこなった。</p> <p>b. 山梨英和大学FD推進委員(2009年～現在) FD推進委員として、研究会の講師を務め、FD研修会の企画、開催、記録・報告などをおこなった。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>授業への全体的評価(授業アンケートより): 興味深く役に立つ資料が多く配布され、心理臨床や社会の現場の問題が授業の中でプレゼンテーションされることに対して学生は高く評価していた。精神障害の心理教育に関する課題が授業の中で課せられることについては負担が大きいと記述する学生も見られたが、自らが参加することでこのような問題の核心に触れたように感じる受講生も少なくなく、受講生の積極的にものごとに参加する姿勢や自己評価が高まった印象を受けている。</p> <p>改善してほしい点: 受講生の多くが提出したレポートについてフィードバックを欲しいと希望していたが、すべてにコメントをつけて返却することができず、今後改善が必要であると思われる。現在は授業の最後の時間にいくつかのレポートについてコメントし、代表的な質問に対してコメントを返しているのみとなっている。また、試験をおこなう科目についてはいくつかの科目で試験後の授業の中で問題の意図と解答例を解説しているが、受講生からは「どのように解答すれば良いかの参考になり、とても勉強になった」との評価が得られており、今後はなるべくすべての科目で実践してゆきたいと考えている。</p>

に教育 評価 する力	(2)同僚教員等による授業評価 現在同僚による授業評価はおこなっていない、今後の課題である。
------------------	---

研究業績

研究の特徴	心理臨床におけるアセスメントと臨床心理学的地域援助が主な研究テーマになっている。アセスメントに関しては投映法のロールシャッハテスト、およびSCTをもちいての、クライアントの内面を精神力動的にアセスメントする技法について研究を継続しており、境界性人格、非行少年、発達障害者に関して多数の学会発表がある。臨床心理学的地域援助に関しては、精神障害に関する心理教育、思春期・青年期の臨床心理的問題の地域援助、地域がんセンターにおける他職種と心理臨床家の協働に関する研究を継続している。思春期・青年期の臨床心理学的問題の地域援助については、このテーマに関して1年間英国Tavistock Clinic思春期部門への留学経験があり、その後も毎年Tavistock Clinicを訪問して、英国の研究者との交流を続け、ロンドンでのアウトリーチ実践について日本での応用の可能性を探っている
研究経歴	<p>2010年 山梨英和大学にて臨床心理士の効果的な教育訓練システムについて従事(現在まで)</p> <p>2005年 茨城大学にて授業を通じての精神障害や発達障害に関する心理教育の実践とその効果の測定の研究に従事(現在まで)</p> <p>2004年 地域がんセンターにおける臨床心理と他職種の効果的なコラボレーションに関する研究(現在まで)</p> <p>2004年 思春期・青年期の心理的問題に対する効果的な地域支援に関する研究(現在まで)</p> <p>1999年 投映法心理検査による心理臨床アセスメントに関する研究(現在まで)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.黒田浩司“SCT”「投映法研究の基礎講座」津川律子(編著)p139-152.遠見書房、2012</p> <p>b.黒田浩司“現代の精神分析1-自我心理学の立場による精神分析的療法”「やさしく学べる心理療法の実践」窪内節子(編著)p1-22.培風館、2012</p> <p>c.黒田浩司“はじめての人のための「学びのガイドライン”、“大学院修了後のスーパーヴィジョンの体験から”「臨床心理士の基礎研修」日本臨床心理士会(編)p5-17、p188-191.創元社、2009</p> <p>d.黒田浩司“コンサルテーションに役立った例(妄想反応)”、“ひきこもり青年の内面理解(分裂的性格)”、“SCT(文章完成法)”、“WAI(Who am I)”、“Barrier and Penetration Scales”、“クーパーの防衛尺”「心理査定実践ハンドブック」氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子(編)p34-37、p38-41、p231-235、p364-368、p379-382、p388-392.創元社、2006</p> <p>e.黒田浩司“臨床心理アセスメント(2)知能検査と質問紙法”“臨床心理アセスメント(3)投映法”“コミュニティ援助(1)危機介入とコンサルテーション”「臨床心理学概説」馬場禮子(編著)p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</p> <p>f.黒田浩司・馬場禮子“ロールシャッハテスト”「臨床心理学大系第6巻人格の理解②」安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄(編)、p25-51、金子書房、1992.</p> <p>g.黒田浩司・山本和郎“コンサルテーション”「メンタルヘルスハンドブック」上里一郎・飯田眞・内山喜久雄・小林重雄・筒井末春(監修)56-6、同朋舎、1989</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.黒田浩司：“境界パーソナリティのロールシャッハ反応：過剰病理化か、深い解釈か”『ロールシャッハ法研究』,第15巻,p.26-29,2012.</p> <p>b.黒田浩司：“医療スタッフ・職員に癒しが生じるとき”『癒しの環境』(癒しの環境研究会), Vol.17,p.78-80,2012.</p> <p>c.黒田浩司：“境界性人格のロールシャッハ反応：過剰病理化か、深い解釈か”『山梨英和大学心理臨床センター紀要』,Vol.7,p.6-11,2011.</p>

研究実績	<p>d.黒田浩司“看護師の自己評価とプロ意識——臨床心理士からみた看護師のストレスと悩み——”『看護管理』、第18巻、第1号、p20-24.2008.</p> <p>e.黒田浩司“大学生における精神障害に関する心理教育の試み”茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』、第2号、p49-68.2007</p> <p>f.黒田浩司“コミュニティベースの臨床心理学的援助の新しい可能性”茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』、第1号、p23-39.2006</p> <p>e.黒田浩司“ロールシャッハテストにおける力動的理解の現在”『臨床心理学』、第5巻第29号、P621-627.2005.</p> <p>g.黒田浩司“コミュニティ援助の理論と実践”茨城大学人文学部紀要『人文科学論集』39号、P13-29.2003.</p> <p>h.黒田浩司“最近の不登校とその教育相談的対応”月刊学校教育相談1月増刊、p30-35、2002.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.Hiroshi Kuroda The Rorschach response of Borderline Personalities. Symposium:An Effect of Psychopathological Assessment in the Rorschach. The 20th Coference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo,Japan,2011.</p> <p>b.Chair Person for the Lecture:Suicide Prevention by Dr. Thomas Shaffer. The 20th Conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo,Japan,2011.</p> <p>c.Hiroshi Kuroda “W Face Response on the Rorschach Test. Tthe 19th conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques.in Lueven,Belgium 2008.</p> <p>d.学術雑誌「ロールシャッハ法研究」編集協力委員(2011年度)</p> <p>e.学術雑誌「心理臨床学研究」編集協力委員(2012年度、2011年度、2010年度、および2009年度)</p> <p>f.学術雑誌「包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌」編集委員(2006年度より)</p> <p>g.学術雑誌「Rorschachiana」Editial Borad. (2006年より)</p>
競争的資金採択課題	<p>2005年2月～2006年 文部科学省平成16年海外先進教育研究実践プログラム</p> <p>2011年10月～2012年9月 平成23年度日本臨床心理士資格認定協会研究助成</p> <p>『初学者のケース担当における体験をコンテインする教育・訓練システムの研究』代表</p>
学会等発表・役員参加	<p>2012年 9月 黒田浩司・森稚葉・奥村弥生 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(8)ー初学者の体験をコンテインする教育・訓練システムの研究” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学</p> <p>2012年 9月 森稚葉・黒田浩司・奥村弥生 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9)ー初学者の体験をコンテインするためのスーパービジョンの検討” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学</p> <p>2012年 9月 高橋理恵・黒田浩司 “児童養護施設における施設心理士導入の実際Ⅲ” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学</p> <p>2012年 9月 小宮山志保・黒田浩司 “自死に関する臨床心理士の研修と自死のとらえ方の実態” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学</p> <p>2011年 9月 黒田浩司・森稚葉・小野綾子・篠原恵美 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(4)ーケースカンファレンスを学びの多いものにするためのアクションリサーチの試みー” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)</p> <p>2011年 9月 高橋理恵・黒田浩司 “児童養護施設における施設心理士導入の実際Ⅱ” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)</p> <p>2011年 9月 深澤圭樹・小林あずさ・手川真由美・黒田浩司 “SCTから見る対象関係一発達障害者・境界例者に特徴的な反応に着目してー” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)</p>

学会等発表・役員参加	2011年	7月	Hiroshi Kuroda W Face Response of Borderline personalities on the Rorschach Test. The 20th Conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo, Japan.
	2011年	7月	飯島文子・黒田浩司 “臨床の場で『人を育てる』ということ—プリセプターの新人看護師指導プロセス分析” 日本コミュニティ心理学会第14回大会上智大学
	2011年	7月	国際ロールシャッハおよび投射法学会第20回東京大会組織委員
	2010年	10月	黒田浩司”精神病的な不安を抱える青年期事例”日本ロールシャッハ学会第14回大会、帝塚山大学
	2010年	9月	黒田浩司・森稚葉・小野綾子・田中健夫・馬場禮子”効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(3)”日本心理臨床学会第29回大会、東北大学
	2010年	7月	黒田浩司”地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション”日本コミュニティ心理学会第13回大会 立教大学
	2009年	10月	黒田浩司”境界性人格のSCTにみられる対象関係”日本ロールシャッハ学会第13回大会、大妻女子大学
	2009年	9月	黒田浩司”変化することへの強い抵抗を示すクライアントの心理療法”日本心理臨床学会第28回大会、東京国際フォーラム
	2009年	7月	黒田浩司”医療現場におけるコミュニティ支援プログラムの展開の試み:地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション”日本コミュニティ心理学会第12回大会、東北大学
2008年	10月	黒田浩司”自己臭恐怖を訴える青年期事例”日本ロールシャッハ学会第12回大会、新潟青陵大学	
共同研究の実績・受託	年	月	
	年	月	
	年	月	特になし
	年	月	
	年	月	
大学院生指導	大学院指導教員(山梨英和大学大学院) 2112年度 1.「看護師のやりがい」に関する臨床心理学的研究 2.痴呆性高齢者に対するコラーゲ療法の導入が与える効果 3.うつ病を中心とした気分障害患者のリワークプログラムにおける心理的变化 2011年度 1.自死に関する臨床心理職の研修とスティグマの実態 2010年度 1.児童養護施設における心理的援助と他職種との連携:施設心理士の発展を目指して 2.臨床の場で『人を育てる』ということ:プリセプターの新人看護師指導プロセス分析 大学院指導教員(茨城大学大学院) 2006年度 1. 育児ストレスとその対処に関する研究		
研究能力に対する評価	投射法心理検査によるアセスメントについては学界において中心的役割を果たすと期待されており、国際学会の組織員や国際学会誌の編集委員、ワークショップや基礎講座の講師の依頼を多く受けている。 臨床心理的地域援助においてもこの領域の第一人者と評価されており、他大学や家庭裁判所調査官の研修などにおいて講演や研究報告の依頼を何度か受けている。		

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2012年	4月	学長特別補佐(学生サポート担当)、FD・SD推進委員会委員
	2012年	4月	学長特別補佐(学生サポート・学生会館建設担当)、FD・SD推進委員会委員
	2011年	4月	心理臨床センター長、学生部長、広報委員会、進路支援委員会
	2010年	4月	心理臨床センター長、入試委員会、FD推進委員会
	2009年	4月	学生委員会、国際交流委員会、FD推進委員会
	2008年	4月	茨城大学大学院人文科学研究科文化構造専攻専攻長
	2006年	4月	茨城大学教養教育科目専門部会長(2009年3月まで)
	アドバイザー活動実績		特になし
後進育成活動実績		特になし	
社会貢献活動	(1) 講演会		
	2012年	10月	黒田浩司「現代社会の家族・若者の心理と諸問題～カウンセリングの現場から」調停制度90周年記念講演 甲府家庭裁判所
	2012年	2月	黒田浩司「英国心理臨床の最新事情」 岐阜大学総合メディアセンター
	2012年	1月	黒田浩司「テストバッテリー」家庭裁判所調査官養成課程第7期 後期合同研修 裁判所職員総合研修所(埼玉県和光市)
	2011年	4月	黒田浩司「被災者支援の基礎知識」 山梨英和大学心理臨床センター 東日本大震災支援プログラム準備のための研修会
	2011年	2月	黒田浩司「テストバッテリー」家庭裁判所調査官補研修、裁判所研修委員研修所
	2010年	12月	黒田浩司「自殺企図の高いクライアントのリスクアセスメントとかかわり」山梨英和大学心理臨床センター地域貢献セミナー、山梨英和大学
	2010年	9月	黒田浩司「リーダーシップ能力と対人関係能力の育成」群馬県小児医療センター看護部リーダーシップ研修
	(2) 出前講座		
	2012年	8月	黒田浩司「精神分析の世界」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業
	2012年	9月	黒田浩司「入門心理学ー心理学とは？」 山梨県立甲府第一高校
	2012年	9月	黒田浩司「心理検査の世界」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業
	2011年	10月	黒田浩司「入門心理学ー心理学とは？」 山梨県立日川高等学校
	2011年	10月	黒田浩司「入門心理学ー心理学とは？」 山梨県立甲府昭和高等学校
	2011年	7月	黒田浩司「こころの諸問題とその支援方法」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業
	2010年	6月	黒田浩司「こころの諸問題とその支援方法」長野県立諏訪高等学校
	2010年	8月	黒田浩司「こころの諸問題とその支援方法」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業
	(3) 公開講座		
	2011年	10月	黒田浩司「現代のコミュニケーションの問題を臨床心理学的に考える」山梨英和大学メイプルカレッジプログラム
	2011年	10月	黒田浩司「震災時にはどのようなことが起きるのか？」 大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ「こころのケア」ー臨床心理士にできること
	2010年	10月	黒田浩司「現代のコミュニケーションの問題を臨床心理学的に考える」山梨英和大学メイプルカレッジプログラム
	2009年	2月	黒田浩司「こころの病と不適應について学ぶ」放送大学茨城学習センター公開講座
	(4) 学外審議会・委員会等		
	2009年	4月	日本心理臨床学会選挙管理委員(2010年3月まで)

社会 貢 献 活 動	2009年	4月	国際ロールシャッハ及び投射法学会第20回日本大会組織員(財務担当 現在まで)
	2007年	4月	日本臨床心理士会研修委員(2009年3月まで)
	2004年	4月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会編集委員(現在まで)
	(5)その他		
	2012年	6月	平成24年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)
	2012年	10月	平成24年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)
	2011年	10月	平成23年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)
2011年	6月	平成23年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	

成果と目標

専門的 成 果	<p>テストバッテリーにおける文章完成法(SCT)の活用に関する研究: 投射法心理検査の中では、比較的多く利用されるが、その解釈手続きや信頼性・妥当性が十分に検討されていなかった文章完成法(SCT)に関して、境界性人格、精神病者、非行少年、発達障害者のデータを収集し、数量的文責と質的分析をおこない、そのアセスメントの有効性について実証的に考察をおこなった。また、ロールシャッハテストや描画法と組み合わせることによって多面的にクライアントを理解する手法についても検討し、より有効なテストバッテリーの活用について考察をおこなっている。</p> <p>臨床心理学的地域支援については地域における実践をいくつか継続しており、心理臨床家が関連する他職種をサポートすることにより、より効果的な地域援助が実践できる可能性を見出している。</p> <p>研究成果に関しては学会発表などを通じて発信しており、その結果、研究成果にもとづく専門家や関連する領域(例えば看護職、福祉職など)からの研修・講演いらいなど幅広く発信している。</p>
専門的 目 標	<p>投射法によるアセスメントも臨床心理学的地域援助に関しても、研究成果の発表は国内にとどまっており、今後は国際学会での発表や国際的な学会誌への論文投稿を目標としている。今後は、この領域における国際学会にも深く関与してゆきたいと考えている。</p> <p>また、臨床心理学的地域援助や心理教育に関しては山梨の地を拠点とした活動をおこなってゆきたいと考えている。一つのテーマとして「自死問題」をとりあげ、この問題については「自死問題研究会」として、人間文化講演会を申請するなどして、どのような地域支援ができる可能性があるかについて検討している。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イシダ 千尋 石田 千尋	女	非公表	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(文学)	専門分野	日本古典文学・上代文学・歌謡論・和歌・神話	
学 歴	1981年	3月 徳島市立高等学校 卒業		
	1981年	4月 徳島大学 教育学部 小学校教員養成課程 入学		
	1985年	3月 徳島大学 教育学部 小学校教員養成課程 卒業		
	1988年	4月 東京大学大学院 人文科学研究科 修士課程 国語国文学専攻 入学		
	1991年	3月 東京大学大学院 人文科学研究科 修士課程 国語国文学専攻 修了		
	1991年	4月 東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程 国語国文学専攻 入学		
	1995年	3月 東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程 国語国文学専攻 修了		
実 務 経 験	1986年	4月 東京大学 文学部 中国文学科 研究室事務(1988年3月まで)		
	1995年	4月 山梨英和短期大学 国文学科 専任講師(1999年7月まで)		
	1999年	4月 山梨英和短期大学 日本文化コミュニケーション学科(学科名変更)助教授(2001年3月まで)		
	1999年	5月 青山学院大学 文学部 日本文学科 非常勤講師(1999年7月まで)		
	2000年	4月 放送大学教養学部(埼玉学習センター・東京世田谷学習センター)非常勤講師(2002年3月まで)		
	2001年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科(改組転換)助教授(2005年3月まで)		
	2004年	4月 青山学院大学 文学部 日本文学科 非常勤講師(2008年3月まで)		
	2004年	4月 聖心女子大学 文学部 日本語・日本文学科非常勤講師(2008年3月まで)		
	2005年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授(現在に至る)		
	2005年	4月 放送大学 教養学部(東京多摩学習センター) 非常勤講師(2007年7月まで)		
2010年	4月 山梨大学 教育人間科学部 非常勤講師(2012年3月まで)			
受 賞 歴	1984年	1月 三木康楽賞(財団法人康楽会) 徳島大学における学士取得論文「『古事記』上巻のテキスト分析—世界創世神話から大蛇退治神話まで—」により受賞		
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	1988年	4月 国語国文学会(現在に至る)		
	1991年	4月 日本歌謡学会(1996年まで)		
	1991年	4月 上代文学会(現在に至る)		
	1991年	4月 萬葉学会(現在に至る)		
	1995年	4月 古事記学会(現在に至る)		
特 免 資 格 等 ・ ・	1985年	3月 小学校教諭 1級免許 取得		
	1985年	3月 中学校教諭 国語 2級免許 取得		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生が知的な発見と納得を体験し、自らの思考と感性の新たな局面を切り開くことのできる授業・指導を実現すること、それが教育理念である。講義科目においては、日本古典文学の読解と成立事情についての丁寧な解説とあわせ、思想的な潮流や文化的な背景などについても解き明かすことで、人間と文化に対する多面的かつ深い理解に導くことをめざす。演習科目においては、おもに研究発表・ディスカッションとそのための指導を行なうことで、学生に”気づく喜びと学ぶ楽しみ”を実感させ、自ら学ぶ力を養うことをめざす。また、課外活動の企画実施やサークル活動への支援などを通して、学生間のコミュニケーションを促進し、個々人の創造性を引き出す指導を通して、総合的な人間力の向上のためにも尽力したいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>カードレポートの実施→大人数での講義科目において、毎回の授業後のカードレポートの実施した。その目的は、受講生の毎回の学びへの理解を確かなものとし、学んだ内容をフィードバックすることで、自らが気づきや疑問を自覚できるようにするため、及び、教員が学生の理解度を把握しその後の授業の内容や方法に反省的に反映させて改善させていくためである。方法としては、毎回の授業の最後に、教員が課題を1問提示し、それに対する回答とその回の授業内容に対する質問・感想を受講生が情報カード(B6版)に書いて提出、教員がそれを添削・採点しコメントを記して次回授業時に返却するというかたちで実施した。受講生からは、毎回のレポート執筆は負担ではあったが、授業内容への理解がひじょうに深まった、あるいはカードを書くことを意識することで毎回の授業に集中できた、教員からのコメントが励みになりやる気が出たなどの感想が大半であった。結果として、受講生の学習に対するモチベーション向上と、教員と受講生の意思疎通の確保、学生の表現力向上などさまざまな教育的効果が得られた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a 2008年 11月 『王朝文化辞典 万葉から江戸まで』山口秋穂・鈴木日出男編、朝倉書店、8項目記名執筆</p> <p>b 2001年 10月 『万葉ことば辞典』青木生子・橋本達雄編、大和書房、8項目記名執筆</p> <p>c 1999年 5月 『歌ことば歌枕大辞典』久保田淳・馬場あき子編、角川書店、13項目記名執筆</p> <p>他に、3冊の事典・辞典類の項目執筆を担当</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度：上代文学講読、言語文化創造 I (歴史・うた)、日本古典文学の歴史、日本文化入門、卒業研究、専門ゼミナールNO4、基礎ゼミナール1I、</p>
代表的シラバス	<p>約1,300年前に成立した現存最古の書『古事記』。そこには、古代国家が成立して間もない時代の支配者層が立ち立ようとした世界観・歴史観が壮大な物語として描き出されています。本科目ではとくに、歌謡を取り込んで語られるドラマティックなエピソードの数々を取り上げ、歌の解釈を中心に、作品としての『古事記』のテーマとその魅力に迫っていきます。(上代文学講読)／和歌という文学様式は、1300年余り前、日本の伝統的なうたと中国から受容した漢詩に触発されて成立しました。飛鳥時代・奈良時代と呼ばれるその時代は、政治的にも文化的にも日本が大きな転換をとげた時期でもありました。この講義では、和歌の黎明期に編纂された歌集『万葉集』の中から、さまざまな人物たちが詠んだ歌を味わいながら、彼らの内面世界と当時の時代状況について掘り下げていきます。(言語文化創造(歴史・うた))【2012年度シラバスより抄出】</p>
教育改善活動	<p>出席カードのリアクションカードとしての活用→大人数での講義において、出席カードをリアクションペーパーとして活用する方式を実施した。その目的は、受講生の授業時の緊張感を保つことが難しい大人数での講義において、学生個々の参加意識と緊張感を確保するため、また教員が受講生の理解度を把握し後の授業の内容や方法に反省的に反映させる参考とするためである。方法としては、毎回配布する出席カードに、その回の授業内容に対する質問・感想を書かせて授業終了時に回収し、教員はそれによって出席票を付けるとともに、的確な質問や独創的な感想をチェックして次回授業時にそれに応えるという方式で行なった。受講生からは、教員が毎回質問にきちんと答えてくれることで学習に対する意欲が高まった、他の受講生の意見や感想を聞いて自分もがんばろうと励みになった、などの評価があった。結果的に、受講生との意思疎通がはかりにくい大人数での講義において、カードを通じて学生個々とのコミュニケーションがある程度確保できたこと、学生たちが何に関心を持ち、どのような点に理解が届きにくいかを把握できたこと、教員の授業内容や方法を即時的に改善するための参考になったこと、などの成果が得られた。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>良い点としては、ことばの意味や時代背景についての丁寧でわかりやすい説明が良かった、板書に工夫があり授業内容が理解しやすかった、カラープリントなど資料が充実して後々とても役に立つ、などの評価があった。改善してほしい点としては、リアクションペーパーを書く時間を、授業時間後にもう少し長く確保してほしいという意見があった。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による授業評価は行っていない。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>奈良時代に成立し、日本における現存最古の書である『古事記』には、百十首あまりの歌謡（唱謡される歌の歌詞）が収載されている。それらの詞句表現の意味内容にはなお不明なものも少なくなく、また、歌と物語（譚）との有機的な関連もまだ十全に解明されているとは言えない状況にある。そうした『古事記』の歌謡（古事記の歌）の解釈の見直しと、それが本文の散文表現とどのように連繋しながら物語（譚）をかたちづくっているかについて考究することが、主たる研究テーマである。こうしたことがらを明らかにすることは、和歌を含む歌の歴史全体の中で、古事記歌謡はどのように生み出されたのか、またそこに求められていたのはどのような機能であったのかという論点とも不可分であり、文学の草創期における歌への意識と方法という、より大きな射程の問題ともリンクすると考えられる。</p> <p>一方、日本の文化芸術のあらゆるジャンルにおける主要なモチーフのひとつであり続けてきた富士山について、古典文学（古代から中世までの和歌・歌謡・漢詩・史書・物語・説話・随筆・日記・紀行などの作品）、における記述の用例を拾い出し、そのイメージと表現の特徴を分析することを通して富士山が文学作品において担ってきた表象性を検証する研究にも、継続的に取り組んでいる。</p>
研究経歴	<p>2010年 古事記歌謡（古事記の歌）を含む物語（譚）の表現と主題を作品論的観点から再解釈する研究に従事（現在に至る）。</p> <p>2009年 古事記歌謡（古事記の歌）が作品全体の主題と文脈においてどのような位置づけを与えられているかを検証する研究に従事（現在に至る）。</p> <p>2008年 山梨県教育委員会の委託を受け、日本の古典文学（韻文・散文）のうち、とくに上代から中世に成立した文学作品における富士山像を解明する研究に従事（現在に至る）。</p> <p>2005年 古事記における歌謡（古事記の歌）をめぐる研究史について、とく明治時代以降の展開と主要な論点を整理・展望する研究に従事。</p> <p>2003年 山梨英和大学共同研究として、若林一美教授（社会教育学専攻）とともに、近親者を亡くした者にとって〈書く〉という行為が悲嘆とともに生きていくことにおいてどのような意味を持つかについて究明する研究に従事（2005年2月まで）。</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>2012年 3月 共著『山梨県富士山総合学術研究調査報告書』山梨県教育委員会編、全109頁のうち8頁（口絵解説および87～93頁）／同報告書資料篇IV文学資料、全437頁のうち36頁（215～250頁）</p> <p>2005年 11月 共著『セミナー万葉の歌人と作品 第十二巻 万葉秀歌抄』神野志隆光・坂本信行編、和泉書院、全383頁のうち2頁（258～259頁）</p> <p>2001年 10月 共著『日本文芸の表現史 山梨英和短期大学創立三十五周年記念』「古事記歌謡と万葉歌の類句―記二四歌をめぐる―」、おうふう、全398頁のうち19頁（1～19頁）</p> <p>1999年 11月 共著『声と文字 上代文学へのアプローチ』「古事記における助動詞と時間」、塙書房、全375頁のうち16頁（67～82頁）</p> <p>1999年 3月 共著『ことばが拓く古代文学史』鈴木日出男編「古事記歌謡の〈抒情〉」、笠間書院、全618頁のうち14頁（120～133頁）</p> <p>1996年 10月 共著『日本文芸の系譜 山梨英和短期大学創立三十周年記念』「清寧記ヲケ物語の歌壇をめぐる―」、笠間書院、全280頁のうち18頁、1～18頁</p>

研究実績	(2) 学術論文	
	2013年	4月 単著「古事記の歌の方法—短歌形態二首組歌と譚—」『国語と国文学』第90巻第5号、全14頁
	2012年	2月 単著「富士山像の形成と展開—上代から中世までの文学作品を通して—」『山梨英和大学紀要』第10号、全32頁
	2011年	2月 単著「古事記の歌の構成—仁徳と石之日売の歌をめぐる—」『山梨英和大学紀要』第9号、全16頁
	2010年	2月 単著「『古事記』木梨之輕太子の譚」『山梨英和大学紀要』第7号、全26頁
	2003年	2月 単著「柿本人麻呂歌集歌の〈見立て〉—『万葉集』3129番歌をめぐる(一)—」『山梨英和大学紀要』創刊号、全14頁
	1999年	11月 単著「『古事記』における助動詞の表記と歌謡」『萬葉集研究』第23集、全15頁
	1993年 他11編	4月 単著「天神御子と〈久米歌〉」『国語と国文学』第70巻第4号、全13頁
	(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)・創作	
	評論	
2012年	2月 「古典文学における富士山像の変遷」『別冊BIO CITY』創刊号、全3頁	
2011年	12月 「富士山の和歌—上代・中古・中世—」『富士』(富士短歌会)創刊五周年記念号、全10頁	
2009年	3月 「古代の旅～万葉の旅の歌を読む～」『文協やまなし』(山梨県文化協会連合会)48号、全3頁	
1993年	7月 「浅草に瀬川映画を観に行こう」『』(旧姓楠木千尋名義で執筆)『CINETIC』創刊号(洋々社)、全2頁	
創作		
歌謡研究の応用展開的な実践として歌謡の作詞を行なった。瀬川昌治作・演出、舟木和夫・久野綾希子主演、(株)アイエス制作、ミュージカル「アイ・ラブ・ニューヨーク」劇中歌9曲作詞、2000年2～3月上演(新宿シアターアップル・神戸オリエンタル劇場)／他多数		
競争的資金採択課題 特になし		
学会等発表・役員参加	2013年	5月 上代文学会 理事(平成二十六年大会担当)
	2005年	10月 「歌がつたえること・歌でつたえること—古事記の歌の記定をめぐる—」、萬葉学会全国大会、同志社女子大学
	2003年	7月 「文学の始まりと〈恋〉の発見—日本上代文学研究の立場から」、日本人間性心理学会シンポジウム、山梨英和大学
	1999年	9月 「『古事記』における助動詞の表記と歌謡」、上代文学会、早稲田大学
	1994年	9月 「讚美の方法—『古事記』『枯野』の歌謡物語をめぐる—」、上代文学会例会、成蹊大学
	1992年	5月 「カムヤマトイハレビコと〈久米歌〉」、日本歌謡学会、帝京大学
共同研究の実績・受託研	2008年	9月 山梨県教育委員会からの委託により、富士山の文化的価値を検証するため古典文学作品における富士山に関する記述の用例の拾い出しとファイリング作業を計画し指揮する役を果たすとともに、一覧の作成、またそれらの表現分析および総括等を行なっている。
	2003年	5月 山梨英和大学共同研究(2005年3月まで)、共同研究者:若林和美教授(社会教育学専攻)、研究課題:〈書くこと〉の根源—DEATH STUDYと日本上代文学の双方向的視点から—、研究成果:「悲歎の形象—『万葉集』における死別を嘆く歌—」(『山梨英和大学紀要』2004年3月)
大学院生指導 特になし		

研究能力 価に 対 す る 評	『古事記』の歌謡(古事記の歌)は、従来、個々の文脈から切り離し、『万葉集』以前の歌の姿を留めるものと見る視点から解釈されることが多かった。いわゆる「独立歌謡」という用語はそうした古事記の歌の扱い方を端的に表す語だが、筆者の立場は、古事記の歌を、散文とともに記され歴史の叙述に関わるものとして記定されているという前提に立ち、個々の歌と譚の解釈を探ることにある。そうした観点を徹底させての論考には今なお多くの余地があり、筆者の研究はそうした研究史上の課題を切り拓こうとするものである。また、富士山の文学についての研究は、古来から甲斐の国(山梨県)に生きる人々の誇りであり貴重な自然遺産・文化遺産である富士山をめぐる文化的価値の実証に資するものであり、その成果は山梨県民のみならず富士山の世界文化遺産認定にも大きく関わるものとして期待されている。
--------------------------------	--

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2013年 4月 教職課程委員会委員、図書館司書・学芸員課程委員会委員</p> <p>2012年 4月 教職課程委員会委員、図書館司書・学芸員課程委員会委員</p> <p>2011年 4月 日本語・日本文化コースコーディネータ、国際交流委員会委員、教職課程委員会委員、図書館司書・学芸員課程委員会委員</p> <p>2010年 4月 日本語・日本文化コースコーディネータ(現在に至る)、教員の採用・承認に関する規定検討委員会、教職課程存廃に関する委員会</p> <p>2009年 4月 教務委員会、教職課程委員会、日本語教員養成課程委員会、司書学芸員課程委員会、留学生教育問題等検討委員会</p> <p>2008年 4月 学生委員会、教職課程委員会、日本語教員養成課程委員会、司書学芸員課程委員会、留学生教育問題等検討委員会</p> <p>2002年 4月 エクステンション委員会(エクステンションセンター長)2007年3月まで、大学運営協議会</p> <p>1999年 4月 入試委員会(2008年3月まで)、入試実務委員会</p>
アドバイザー活動実績	<p>1年次・2年次生については、オフィスアワーを活用し主として勉学・履修に関する相談や生活面におけるアドバイスを行なっている。また、学期ごとにクラス親睦を深めコミュニケーションを促進するためのスポーツイベントや食事会を企画・実施している。</p> <p>3年次・4年次生については、主としてオフィスアワーを活用し、研究発表や論文執筆に関する個別指導をグループごとないし個人ごとに行なっている。また、おもに専門科目としてゼミナールないし卒業研究を受講している3年次・4年次生を対象に、受講生が専門的な知識と見聞を実地体験を通して広げられるよう、県内外の遺跡・博物館などを見学・研修する歴史・文化探訪を企画・実施している。</p>
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1) 講演会</p> <p>2012年 3月 「中世の文学と富士山信仰」、富士の里市民大学講座講演、富士吉田市教育委員会主催講演会、富士吉田市民会館</p> <p>2011年 3月 「日本人は富士山になにを思い描いてきたか—古典文学の富士山を読み解く—」、山梨県教育委員会主催・忍野村教育委員会共催講演会、岡田紅陽写真美術館・小池邦夫絵手紙美術館</p> <p>2010年 5月 「古典文学の富士山」、山梨文芸協会主催、山梨県立文学館</p> <p>2008年 7月 「古代の旅—万葉の旅の歌を読む—」、山梨県文化学習協会主催講演会、山梨県立文学館</p> <p>2006年 11月 「富士山の文化的価値とは—古典文学の立場から」、山梨県企画部世界遺産推進課主催富士山文化遺産登録推進山梨県シンポジウム、山梨県立大学</p> <p>2005年 3月 「万葉集 声のうたの世界—初期万葉の歌々をよむ—」、韮崎市中央公民館主催講演会、韮崎市民会館</p> <p>2004年 7月 「生涯学習を通してアジアの連合を考える—日本・韓国・中国等の人や歴史・文化をつなぐ—」、山梨県生涯学習推進センター主催シンポジウムパネラー、山梨県民ホール</p>

社会貢献活動	2004年	5月	「万葉集第一期の歌を読む」、朝日カルチャーセンター主催講演会、朝日カルチャー藤沢校	
	2002年	8月	「人はなぜうたうのか」、木鶏会主催、甲府市北公民館	
	(2) 出前講座			
	2012年	10月	「山梨と文学」、甲府城西高等学校出張講義	
	2008年	9月	「うたとこころ—万葉のうた世界—」、山梨英和高等学校高大連携講座	
	2006年	3月	「古典って、おもしろい！—和歌を読む楽しみ—」、山梨県立石和高等学校ミニ大学	
	2003年	9月	「なぜひとはうたうのか？—古代の恋歌を読む—」、静岡県立北高等学校出張講義	
	他多数			
	(3) 公開講座			
	2013年	3月	「富士山の文学」、山梨県世界遺産推進課主催、富士山世界遺産ガイド研修講座、山梨県立富士山ビジターセンター	
	2013年	1月	「中世の旅人が見た富士山—古典文学における富士山像をさぐる—」、大学コンソーシアムやまなし主催2012県民コミュニティカレッジ広域ベース講座、甲府県立図書館	
	2012年	8月	奈良女子大学古代学学術センター 第8回若手研究者支援プログラム「古代日本語と『古事記』」研究発表者に対する公開指導、奈良女子大学主催、奈良女子大学	
	2012年	2月・3月	「百人一首をあじわう」、甲斐市教育委員会主催双葉公民館ふれあい講座、双葉公民館(全2回)	
	2011年	11月	「富士山の古典文学」、山梨学院生涯学習センター主催山梨学研究2011講座、山梨学院大学	
	2006年	7月	「こころのかたち—万葉歌に見る情と景—」、山梨英和大学エクステンションセンター・山梨県生涯学習文化課共催公開講座、山梨英和大学	
	2003年	9月	「うたわれた歌と書かれた歌」、山梨英和大学エクステンションセンター・山梨県生涯学習文化課共催公開講座、山梨英和大学	
	2002年	5月	「古事記を読む」、山梨英和大学エクステンションセンター主催メイプルカレッジ講座、山梨英和大学(2005年3月まで全40回)	
	2000年	6月	山梨県立文学館主宰文学講座(古典)「万葉集を訪ねて—『万葉集』初期の作品世界—」、山梨県立文学館(2001年1月まで全8回)	
	1999年	5月	山梨県立文学館主宰文学講座(古典)「日本神話のヒーロー・ヒロインたち—『古事記』『日本書紀』の世界—」、山梨県立文学館(1999年12月まで全8回)	
	(4) 学外審議会・委員会等			
	2013年	5月	YBS山梨放送番組審議委員会委員(2013年5月まで)	
	2009年	10月	山梨県立文学館評議員(2011年9月まで)	
	2008年	9月	山梨県富士山総合学術調査委員会委員(現在に至る)	
	2007年	4月	やまなし文化学習協会理事(2011年3月まで)	
	2005年	4月	山梨県キャンパスネット委員会委員(2010年3月まで)	
	2005年	4月	山梨県富士山世界文化遺産登録推進委員会委員(現在に至る)	
	2004年	4月	山梨県生涯学習審議会委員(2006年3月まで)	
(5) その他				
2003年	5月	メイプルカレッジ講座「古事記を読む」の受講生(一般社会人)約20名を対象として、古代の歴史と文学を実地に探訪する旅行を企画し(2泊3日)、現地の遺跡や博物館等の案内や解説を行うとともに、宿泊所にて『古事記』における「刀剣」と題するレクチャーを行なった。以後、同様の探訪・研修旅行を、2004年9月(伊勢)、2005年5月(熊野・飛鳥)、2006年3月(高千穂・日向)に企画し開催した。		

成果と目標

専門的成果	<p>①『古事記』の歌謡(古事記の歌)を含む譚の解釈と作品論的理解について、収載歌数が相対的に多い下巻の譚(多数の歌を収載している譚)をとりあげ、『古事記』における歌の構成方法や歌が散文表現と有機的に連繋しつつ文脈や人物造形と密接に関わっていることなどを明らかにした。</p> <p>②『古事記』の歌謡(古事記の歌)を譚の文脈と語義に沿って再解釈する研究を進めていく中で、古事記の歌は古来からの伝誦歌謡をそのまま利用したといったものとは考えにくいこと、その表現の質に第二期の万葉歌との相関性が多く認められること、すなわち古事記の歌は文字に記されることで初めて成り立ちえた歌々であるという新たな知見を、今後継続して検証すべき論点として提示した。</p> <p>③富士山の文化的価値を検証することを目的とし、2008年度より古典文学作品における富士山に関する記述の用例の拾い出しとリストの作成作業を続けてきたが、その成果を『』にまとめ、論考を論文および評論に発表した。今年度は、その増補のための作業を行なうとともに、用例の通史的な表現分析をさらに進める。</p>
専門的目標	<p>①『古事記』のうた(歌謡)を含む譚の解釈と作品論的理解を、研究史を検証しながらさらに掘り下げ、『古事記』の歴史叙述における歌と散文の構成と相関性および歌を記定するにあたっての『古事記』の方法を明らかにする。</p> <p>②『古事記』の歌謡(古事記の歌)を単に『万葉集』以前の歌とみなすのではなく、歌を〈書く〉試行の中で獲得された方法という点で、むしろ万葉歌と多くの同時代性をもつということを重視するという観点に立ち、それぞれの歌相互の表現の相関性、またその根底にある発想の共通性を追究していきたい。</p> <p>③古典文学作品において富士山という地名や存在がどのような意味・想念を担ってきたかを追求し、その成果を講演・講座また論文執筆などを通して発表し地域社会に還元するのみならず学会にも問いたい。</p>

最新データ入力日

2013年5月1日

専任教員職務業績集

山梨英和大学

氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
田中 健夫	男	1965年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	臨床心理学・青年心理学・精神分析学	
学歴	1984年	3月 長野県 上田高等学校 卒業		
	1984年	4月 東北大学文学部 入学		
	1988年	3月 東北大学文学部社会学科心理学専攻 卒業 学士(文学)		
	1993年	4月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士前期課程 入学		
	1995年	3月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士前期課程 修了		
	1995年	4月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士後期課程 入学		
	1997年	3月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士後期課程 中退		
	1999年	9月 英国エセックス大学精神分析研究センター客員研究員(2000年7月まで)		
	2008年	3月 京都大学大学院教育学研究科 論文博士(教育学)		
実務経験	1988年	4月 京都家庭裁判所 家庭裁判所調査官補		
	1990年	3月 京都家庭裁判所 家庭裁判所調査官(1992年3月まで)		
	1997年	4月 九州大学健康科学センター 講師		
	1999年	8月 九州大学大学教育研究センター 助教授(2008年3月まで)		
	2008年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授		
	2011年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授(現在に至る)		
受賞歴	2008年	11月 日本青年心理学会第4回学会賞		
	2009年	5月 日本学生相談学会研究奨励賞		
所属学会	1993年	7月 日本心理臨床学会 会員(現在に至る)		
	1993年	7月 日本教育心理学会 会員(現在に至る)		
	1995年	7月 日本学生相談学会 会員 2010年6月～2013年5月編集委員		
	2001年	4月 日本精神分析学会 会員(現在に至る)		
	2001年	4月 日本青年心理学会 会員 2006年2月～2009年1月研究委員 2010年4月より編集委員(現在に至る)		
特免資格等	1993年	3月 臨床心理士(No.3783)		
	2004年	11月 認定心理療法士(日本精神分析学会)		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	心理臨床学は実践の学である。理論の学習とともに、臨床実践を通して得た実感と照合しながら、知らないことや曖昧さにもちこたえつつ学ぶという過程は不可欠である。そのために、学部の授業では具体例の紹介や小実習による体験と、ディスカッションなどによる他者(対教員/学生)との対話の機会を、大学院の授業ではそれぞれの臨床の経験をふまえた学びを大切にしたいと考えている。
教 育 能 力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. フィードバック・テキストの配布による双方向授業の工夫： 九州大学共通教育「心理学」において、受講学生による毎回の授業のコメント(一部)をフィードバック・テキストとしてまとめ、翌週の授業で配布し、それへのコメントをもとに授業を展開させるようにした。山梨英和大学の学部講義においても、15回の授業のうち4回程度は、そうしたコメント・質問を出発点に授業を進めている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. 田中健夫 1998 「私」というもの—知っている私と知らない私— 氏原寛・杉原保史共編 『臨床心理学入門—理解と関わり方の心理学—』 培風館 37-54.</p> <p>b. 田中健夫 2004 勉強につまづいたら—学習、生活相談— 『AERA Mook 98 勉強のやり方がわかる。』 朝日新聞社 172-175.</p> <p>c. 田中健夫 2005 パラサイトシングルの臨床 『迷走する若者のアイデンティティ』 白井利明編 ゆまに書房 152-177.</p> <p>d. 田中健夫 2012 現代の精神分析Ⅱ 対象関係論の展開：ポスト・クライン派 『やさしく学べる心理療法の実践』 窪内節子編 培風館 23-38.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a. 第13回大学教育研究フォーラム(於 京都大学) 小講演：生徒から学生への移行過程：学生相談からみえる課題 2007.3.</p> <p>b. 青年心理学会第17回大会 研究委員会企画シンポジウム「学生の成長をどのようにとらえ、どのように支えていくのか」シンポジスト 2009.11.</p>
担当授業科目	2013年度(学部) 心理療法論、臨床心理学、心理検査演習、基礎ゼミナールⅡ、 専門ゼミナール、卒業研究 (大学院) 心理療法特論Ⅰ、臨床心理基礎実習、臨床心理事例研究、修士論文
代表的シラバス	「心理療法論」では、治療の機序とその背景にある理論について、各学派がもつ人間観をふまえた理解を深めていくことを目的としている。小実習やロールプレイなどの体験を振り返り、自身の感じたことや考えたことを参照しながら学び進めていけるように構成している。「心理検査演習」では、心理臨床の各場面で用いられる代表的な心理検査の考え方と実施方法について、ペアまたは個人による実習を通して学ぶ。検査者と被検査者双方の体験を実際に行うことによって、各検査の実施上の留意点について実践的に習得するとともに、心理検査の有効性と限界、倫理的問題、所見のまとめ方について理解を深めていくことを目的とする。
教育改善活動	山梨英和大学FD委員会委員(学部 2009～11年度、大学院 2010～12年度)： 学部では、外部講師を招聘してのFD研究会を計画・実施し、大学院ではシラバスの教員間での共有・改善などに取り組んだ。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>演習・講義の評価(講義アンケートより)：授業の展開や教材、具体例を入れた説明などについては概ね良好な評価であったが、学生自身の授業への積極的な取り組みを促す工夫が必要だという記述もみられた。演習科目は、受講生のニーズをある程度ふまえた授業展開と、質問への回答がなされているとの評価がなされていた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>2011年度に同僚教員による授業評価(参観)を実施した。</p>

研究業績

研究の特徴	精神分析的な心理療法の実践をふまえた研究を中心に、質問紙や面接法を組み合わせさせておこなってきた。個別の事例から普遍的な知見を導きだすにあたっての課題についても検討を続けている。また、他者から押しつけられたアイデンティティ、大学生にとっての修学の行き詰まりの意味、心的外傷の長期的影響などの実践的問題を扱ってきた。	
研究経歴	1998年 1999年9月 2008年4月	九州大学総合臨床心理センター 研究員（現在に至る） 英国エセックス大学精神分析研究センター客員研究員（2000年7月まで） 山梨英和大学 人間文化学部（大学院兼任） 精神分析的な心理療法、青年心理学、心的外傷についての研究に従事（現在まで）
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 田中健夫 2013 大学生の発達支援 『発達心理学事典』 日本発達心理学会編 丸善出版 334-335.</p> <p>b. カウンセリング研究会(著)、藤原勝紀(監修)、田中さえ子・田中健夫(編) 2012 『心をつめる養護教諭たち: 学校臨床15の扉』 ミネルヴァ書房</p> <p>c. 田中健夫 2011 思春期危機 『心理臨床学事典』 日本心理臨床学会編 丸善出版 274-275.</p> <p>d. 田中健夫 2010 第6話 迷惑がられるのはイヤなんです 『12人のカウンセラーが語る12の物語』 杉原保史・高石恭子編 ミネルヴァ書房 119-139.</p> <p>e. 田中健夫 2009 発達障害の学生との心理療法の課題 『「発達障害」と心理療法』 伊藤良子・角野義宏・大山泰宏編 創元社 59-67.</p> <p>f. 田中健夫 2005 パラサイトシングルの臨床 『迷走する若者のアイデンティティ』 白井利明編 ゆまに書房 152-177.</p> <p>g. 田中健夫 2005 修学上の移行の契機となる行き詰まりの性質 『心理学者、大学教育への挑戦』 溝上慎一・藤田哲也編 ナカニシヤ出版 159-188.</p> <p>(2) 学術論文(査読あり)</p> <p>a. 田中健夫 2011 心理臨床からみた未来を創る主体としての学生との関わり 心理科学, 32(1), 30-37.</p> <p>b. 田中健夫 2009 「知ることの制止」と消化過程 精神分析研究, 53, 12-21.</p> <p>c. 田中健夫 2009 白井論文「青年心理学研究方法論としての変容確認法の発展—発達主体として青年を捉えるアプローチ—」へのコメント 青年心理学研究, 21, 126-130.</p> <p>d. 田中健夫 2008 「大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相」への杉村・山本氏のコメントに対するリプライ 青年心理学研究, 20, 150-154.</p> <p>e. 田中健夫 2007 大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相 青年心理学研究, 19, 33-50.</p> <p>f. 吉良安之・田中健夫・福留留美 2007 学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題 学生相談研究, 28-1, 1-13.</p> <p>g. 田中健夫 2002 学生相談における“学ぶことの困難”の情緒体験と面接での関わり 心理臨床学研究, 20(2), 122-132.</p> <p>h. Takeo Tanaka 2001 The Identity Formation of the Victim of 'Shunning'. School Psychology International, 22(4), 463-476.</p> <p>i. 田中健夫 2001 入学期における喪失と獲得体験の意味 学生相談研究, 22(1), 35-43. (査読なし 山梨英和大学赴任後)</p> <p>a. 田中健夫 2013 いじめ加害体験の影響についての探索的研究 山梨英和大学紀要, 11, 8-17.</p> <p>b. 田中健夫 2010 学生相談の視点からみた「予防」 山梨英和大学紀要, 8, 19-30.</p> <p>c. 田中健夫 2010 特集—心理臨床現場での転移/逆転移「学生相談室」臨床心理学, 10(2), 187-192.</p> <p>d. 篠原恵美・田中健夫・保坂美里・貴家さやか・手川真由美 2011 心理面接の中断・早期終結についての文献展望—研修生に特有の課題を明らかにする— 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 6, 11-23.</p> <p>(3) その他</p> <p>a. 田中健夫 結びつける無意識の強さ 学術通信(岩崎学術出版社)9-11</p> <p>b. 松木邦裕監訳 田中健夫・梅本園乃訳 2011 【翻訳】トラウマを理解する—対象関係論に基づく臨床的アプローチ 岩崎学術出版社</p> <p>c. こころの臨床a-la-carte 29(4) 2010「うつ病からの回復とリハビリテーション」Q&A p.27, 50, 51, 57.</p> <p>d. 田中健夫 2007 【書評】「精神分析入門講座—英国学派を中心に—」 精神分析研究, 51(3), 88-89.</p> <p>e. 田中健夫 2005 【翻訳】英国学生相談学会による大学とカレッジのカウンセリング・サービスに対するガイドライン 学生相談研究, 25(3), 237-258.</p>	

競争的資金採択課題	<p>a. 2001～2002年度 科学研究費補助金 奨励研究(A)、若手研究(B) いじめられ体験をもつ被害者のアイデンティティ.[研究代表者]</p> <p>b. 2004～2006年度 科学研究費補助金 萌芽研究 セラピストフォーカシング法の開発に関する研究.[研究分担者]</p> <p>c. 2011～2013年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) いじめ加害者の自己形成に関する臨床心理学的研究[研究代表者]</p>	
学会等発表・役員参加	<p>2012年 11月 日本教育心理学会第54回総会 発表</p> <p>2011年 11月 日本精神分析学会第57回大会 自然災害と精神分析 パネリスト</p> <p>2011年 9月 日本心理学会第75回大会ワークショップ 青年期における自己とキャリアの相互形成過程 話題提供</p> <p>2011年 5月 日本学生相談学会第29回大会ワークショップ「実践から研究へ」講師</p> <p>2010年 5月 第3回精神分析的な心理療法フォーラム 学生相談における精神分析的な心理療法の方法とその可能性(第4分科会) 話題提供</p> <p>2010年 3月 小野綾子・森稚葉・黒田浩司・田中健夫・馬場禮子 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(1)(2)(3) 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集,540-543.</p> <p>2009年 11月 青年心理学会第17回大会 研究委員会企画シンポジウム「学生の成長をどのようにとらえ、どのように支えていくのか」シンポジスト</p>	
共同研究の実績	<p>「効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する探索的研究」(2010年度山梨英和大学共同研究助成)</p> <p>(財)日本臨床心理士資格認定協会第4回一般研究助成(課題:初学者の体験をコンテインする教育・訓練システムの研究、代表者:黒田浩司)の共同研究者である。</p>	
大学院生指導	<p>山梨英和大学人間文化研究科臨床心理学専攻(担当教員) 2008年度 修士学生2名、2009年度3名 2010年度2名、2011年度1名、2012年度2名</p>	
研究能力に対する評価	<p>学生相談実践をふまえての、“知ろうとすること”の制止の研究は、授業実践を通して継続している。精神分析(対象関係論)の視点をもとに実践を振り返り、心理臨床の立場からの知見を組み立てることとともに、大学教育や青年心理学の研究者との交流を深めることを大切にしている。また、大学院共同研究として、「効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究」を、特に研修生による心理臨床センターでの面接担当の困難と課題について文献研究、面接調査をおこなっており、その知見は今後の臨床心理士養成において重要な視点を提供すると考えている。科研費による調査研究は3年目を迎え、学会以外の他大学の研究会等でも発表の場を設けている。大学生・教師・児童自立支援施設専門員それぞれへの面接調査は終盤にさしかかっており、そのまとめとともに理論的な検討を進めている。</p>	

サービスクิจกรรม業績

学内委員会等活動実績	<p>2008年 4月 大学院教務委員、心理臨床センター紀要編集委員(現在に至る)</p> <p>2009年 4月 入試委員会、図書館運営委員会、宗教委員会、FD推進委員会 委員</p> <p>2010年 4月 学生委員会、国際交流委員会、FD推進委員会 委員</p> <p>2011年 4月 心理臨床コースコーディネータ</p> <p>教務委員会、入試委員会、広報委員会、FD推進委員会 委員</p> <p>2012年 4月 基礎科目コーディネータ、社会連携センター運営会議委員</p>
アドバイザー活動実績	<p>2010年度 基礎ゼミナールⅡ、専門ゼミナール、卒業研究 履修学生アドバイザー</p> <p>2011年度 専門ゼミナール、卒業研究 履修学生アドバイザー</p> <p>2012年度 基礎ゼミナールⅡ、専門ゼミナール、卒業研究 履修学生アドバイザー</p>
後進育成活動実績	<p>赤坂アイ心理臨床センターにて、グループ・スーパービジョンを担当(2009年度～)</p> <p>山梨英和大学大学院同窓会準備会主催事例検討会 コメンテーター(2009年度)</p>

社会貢献活動	(1)講演会	
	2009年	6月 不登校児童生徒担任・担当とこすもす教室指導員合同学習会「中学生が抱える不安からみた不登校」
	2010年	11月 大月こすもす教室事例検討会(助言者)
	2011年	8月 大月こすもす教室事例検討会(助言者)
	2011年	11月 山梨英和中学校・高等学校PTA教育講演会「子どもとの心の距離を考える」
	2012年	6月 韮崎こすもす教室事例検討会(助言者)
	2012年	6月 羽村市教育委員会研修会(講師)
	2013年	2月 被害者支援やまなしセンターボランティア養成講座(講師)
	(2)出前講座	
	2010年	10月 韮崎高校「個性を育てる学習サポート:臨床心理学入門」ほか
	(3)公開講座	
	2009年	11月 山梨英和大学主催 メイプルカレッジ「コミュニケーションに活かす心理学」
	2011年	11月 山梨英和大学主催 メイプルカレッジ「コミュニケーションに活かす心理学」
	2011年	11月 大学コンソーシアムやまなし「心のケアの相互性」(県民コミュニティーカレッジ『心のケアー臨床心理士としてできることー』第4回)
	(4)学外審議会・委員会等	
2005年	11月 日本学生支援機構「大学における学生相談体制の整備に資する調査研究会」委員(～2007年3月まで)	
(5)その他	特になし	

成果と目標

専門的成果	<p>① 学生相談臨床における研究:修学の取り組みとその行き詰まりのなかに、“学生生活サイクル”の各時期に心理・社会的アイデンティティの形成の契機が内在していることを相談事例の検討により明らかにした。知ろうとすること(knowing)の制約が関係のなかで生起する不安という文脈で起こることについて、時期ごとの課題との関連で考察した。</p> <p>② 青年期、主に大学生を対象とした心理臨床の特徴を、転移・逆転移という観点から記述し、学生相談領域への精神分析的な心理療法の適用の意義とその限界について考察した。</p> <p>③ 実証的研究と対象関係論にもとづく理解をふまえて、加害-被害の関係についていくつかの角度から研究を進めた。いじめの加害をめぐる一連の体験が自己形成に及ぼす影響、教師による介入の可能性、加害者の“同一化”過程に焦点をあてた研究の意義について明らかにした。</p>
専門的目標	<p>① 学生相談と大学教育研究による知見の交流のなかから、キャリア形成についての意義ある共同成果をみだし、発信していく。</p> <p>② 心的外傷という文脈から、加害-被害関係の固定化・スティグマ化がそれぞれのアイデンティティ形成に及ぼす影響について、臨床心理学的研究を通して明らかにしていく。</p> <p>③ 個人/グループへのスーパービジョンと、自身の精神分析的な心理療法家としての訓練を通して、心理臨床にかかわる態度、技法の向上に努めていきたい。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
オノバ 難波 道弘	男	1974年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(工学)	専門分野	情報工学(知能情報学・教育工学)	
学 歴	1997年	3月 岡山県立大学情報工学部情報通信工学科卒業		
	1997年	4月 岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)入学		
	1999年	3月 岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)修了		
	1999年	4月 岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)入学		
	2002年	3月 岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)修了		
実 務 経 験	2002年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助手		
	2004年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科専任講師		
	2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授		
	2009年	9月 埼玉学園大学経営学部会計学科非常勤講師(～2011年3月)		
	2011年	4月 帝京科学大学生命科学部生命科学科非常勤講師(現在に至る)		
	2012年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科教授		
受 賞 歴	2002年	3月 仁科顕彰会仁科賞(岡山県) (学術論文「不定セル探索アルゴリズムを用いた連想記憶セルラニューラルネットワーク」に対する受賞)		
	年	月		
所 属 学 会	1998年	5月 電子情報通信学会会員(現在に至る)		
	2001年	5月 情報処理学会会員(現在に至る)		
	2002年	5月 日本教育工学会(現在に至る)		
	2005年	6月 教育システム情報学会会員(現在に至る)		
	2006年	7月 日本感性工学会会員(現在に至る)		
	2007年	7月 人工知能学会会員(現在に至る)		
特 免 資 格 等 ・ ・	2009年	12月 情報処理技術者試験応用情報技術者 取得		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>近年、ICTはすべての職業人に求められる必須能力であるが、ICTの専門能力だけでは実際の職務を遂行することはできない。とりわけ近年の学生に欠如しているといわれる次の能力を習得させるための教育・研究指導を行いたいと考えている。</p> <p>1) 論理的思考力 2) 分析力 3) プレゼンテーション力 4) ディベート力 5) 主体性</p> <p>ICTを敬遠する学生の多くは、「コンピュータは難しそう」や「数学は苦手だから」などが多い。そのような学生たちには考えることの楽しさを伝え、課題を解決したときの達成感を実感できるような授業を、そしてこれまでの教育スタイルであった受動型から能動型に転換し、学生が主役となるような授業展開を推進したいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1) 教育方法実践例</p> <p>1. 教育におけるE-mail/Web利用 学生のITリテラシー向上の一環として、課題提出をすべてE-mailで行わせ、マナーなどを含めた指導により、知識と技術の向上に寄与した。また講義では課題をWeb配信することにより欠席した場合などでも自宅から入手できると好評である。</p> <p>2. 研究室Webサイトによる研究室内での情報交換と共有 研究室の活性化とIT活用機会の増加などを目的としており、実際に研究室内での活性化に寄与している。</p> <p>(2) 作成した教科書、教材等 「情報システム実験演習II-オブジェクト指向入門」のテキストを作成。以前の担当科目において多数。</p> <p>(3) 教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>1. 難波道弘、`自己組織化マップを用いた学生による授業評価の一分析`、教育システム情報学会、2005 2. 難波道弘、`演習型WBTシステムの開発と評価`、教育システム情報学会、2006</p>
担当授業科目	<p>2013年度 基礎ゼミナール2、コンピューター科学入門、情報ネットワーク、データベース、システム開発の方法、オペレーションズリサーチ、情報システム実験演習II、専門ゼミナール、卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>講義においては、ほぼ毎回課題を課し、次回の授業で提出させ、添削・フィードバックしている。理解の一助となっており、受講生にはおおむね好評である。授業内でもインタラクティブ性を重視し、問題を解かせ、できた学生に板書させるなど参加型授業の展開に努めている。</p> <p>少人数講義科目においては輪講制を採用し、学生自らが交替で教師役を務めることで、主体的な参加を促すことにつなげた。</p>
教育改善活動	<p>FD推進会議への出席と参加報告：2009年に私大連主催の標記会議に大学代表として出席。その後学内の研修会においてその内容を報告。自己点検・評価活動の一助となった。</p> <p>FD・SD推進委員長としての企画立案：2013年に委員長就任後、これまでの学内のFD活動で見られなかった教員による授業実践の報告、職員による研修参加報告などを積極的に企画、実行している。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価 授業評価アンケートの平均得点においては概ね高い得点である。講義ではほぼ毎回課題を与え、添削・フィードバック・解説のプロセスによって学生の内容理解の一助となっていることが要因として考えられる。ただし、学生が分からないところをそのままにして結局、試験ができずに単位を落としているケースが散見される。そのような学生へのフォローアップが今後の課題である。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 これまでのところ特に行っていないので、今後の課題としたい。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>人工知能とその応用に関する研究を行っている。特に連想記憶セルラニューラルネットワークを用いており、これまでに文字認識、肝臓病診断、故障診断、点字画像認識へ応用した研究成果を公表している。</p> <p>近年では、連想記憶CNNをe-learningシステムに組み込んだシステムを設計・構築しており、国内外の学会でその成果を公表している。</p>
研究経歴	<p>2002年 山梨英和大学人間文化学部で人工知能、主に連想記憶CNNとその応用に関する研究に従事。(現在に至る)</p> <p>2006年 山梨英和大学人間文化学部でe-learningシステムの開発・評価に関する研究に従事。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>1. E-Learning-Organizational Infrastructure and Tools for Specific Areas (Chapter8: Intelligent Tutoring System with Associative Cellular Neural Network)、共著、2012年1月、Intech, ISBN 978-953-51-0053-9、Elvis Pontes et al.(Eds.)、pp.123-136</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから)</p> <p>1. T.Akiduki, Z.Zhang, T.Imamura, T.Miyake, H.Takahashi and M.Namba, `` Toward Symbolization of Human Motion Data Space Statistical Analysis in Symbol Space- ``ICIC Express Letters, in press.</p> <p>2. ``3値出力CNNを用いた理解度診断システムの評価``, 日本教育工学会論文誌, Vol.35, Suppl., pp.133-136, 2011</p> <p>3. M.Namba, `` Design of Tri-Valued Output Cellular Neural Network for Associative Memory for Self-Directed E-learning``, ICIC Express Letters, Vol.2, No.3(B), pp.552-558, 2010.</p> <p>4. S.Yancong, M.Namba and H.Murao, ``Solving a Timetabling Problem Using Distributed Genetic Algorithm``, ICIC Express Letters, Vol.3, No.4(A), pp.1055-1060, 2009.</p> <p>5. 難波 道弘, ``連想記憶セルラニューラルネットワークによる学習者の理解度推定``, 日本教育工学会論文誌, Vol.32, Suppl., pp.97-100, 2008.</p> <p>6. 難波 道弘, 澤田 隆幸, ``演習問題を重視したWBTシステムの開発と試行``, 日本教育工学会論文誌, Vol.30, Suppl., pp.17--20, 2006.</p> <p>など。詳細はhttp://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/を参照。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(最新のものから)</p> <p>1. M.Namba, ``Diagnosis of Understanding Level by Self Organization Map in Self-learning``, Proc.of the 15th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education(CATE), Naples, Italy, pp.79-82, 2012.</p> <p>2. M.Namba, ``Associative Cellular Neural Network and Its Application to Intelligent Tutoring System``, Proc.of the 14th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education(CATE), Cambridge, UK, No.734-016, 2011.</p> <p>3. M.Namba, ``Tri-Valued Output Cellular Neural Networks for Associative Memory to Estimate Understanding Level``, Proc. of the 13th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE), Maui(Hawaii), USA, pp.88-93, 2010.</p> <p>4. M.Namba, ``Estimating Learner's Comprehension with Cellular Neural Networks for Associative Memory``, Proc. of the 11th International Conference on Cellular Neural Networks and their Applications (CNNA), Santiago de Compostela, Spain, pp.150-153, 2008.</p> <p>など。詳細はhttp://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/を参照。</p>
競争的資金採択課題	<p>2009年6月～2012年3月 : 科学研究費補助金若手研究(B)、連想記憶CNNの理解度推定を用いたE-learningシステム、研究代表者</p>

学会等発表・役員参加	2011年 3月 篠原大地、難波道弘、`3値出力連想記憶CNNを用いた理解度推定に関する研究`、教育システム情報学会学生研究発表会 2009年 12月 難波道弘、`理解度推定のための3値出力連想記憶セルラニューラルネットワークの設計`、電子情報通信学会教育工学研究会 2008年 11月 笠井かおり、難波道弘、`ITSのための連想記憶セルラニューラルネットワークの設計と評価`、教育システム情報学会研究会 など。詳細は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/ を参照。
共同研究の実績・受託	年 月 特になし 年 月 年 月 年 月 年 月
大学院生指導	特になし
研究能力評価に対する	主研究テーマである「連想記憶CNNを用いた学習者の理解度推定に関する研究」はその研究成果が学術論文や国際会議プロシーディングスなどにも掲載されている。その後その実績が評価され、学術振興会科学研究補助金に採択されている。このテーマは人工知能技術をe-learningに適用したシステムであり、その有用性が認められれば、汎用性が高いため、今後は広範囲にわたる実用化が期待される。

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2013年 4月 学長特別補佐(教学支援・広報担当)、FD・SD推進委員長、情報システム運用全学実施責任者 2012年 4月 学長特別補佐(カリキュラム改革・ICT担当)、大学運営評議会構成員 2011年 10月 教育用PC検討会座長 2011年 4月 教務部長、IT委員長、大学運営委員会委員 2010年 10月 事務システム検討会座長 2009年 4月 情報システムコースコーディネータ 年 月 その他、これまでに入試委員、広報委員、教職課程運営委員などを歴任。
アドバイザー活動実績	基礎ゼミナール1において、学生間のコミュニケーションを図るための企画を推進した。 2012年度以降、ポータルサイトを活用したアドバイザー学生全員との個人面談を半期に1度以上のペースで実施している。
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 年 月 特になし (2)出前講座 年 月 特になし (3)公開講座 年 月 特になし (4)学外審議会・委員会等 年 月 特になし (5)その他 2006年 4～6月 山梨英和高等学校での高大連携授業「インターネットの光と影」など。

成果と目標

専門的成果	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 1988年に考案されたセルラニューラルネットワーク(CNN)は画像処理や迷路探索など多くの応用事例が報告されている。その後CNNが連想記憶に有効であることが提案された。これまでに文字認識、肝臓病診断、自動車異常音診断、点字画像認識などへの応用例を提案・報告している。それと並行して連想記憶CNNの効率化設計についても研究し、いくつかの観点から設計法を提案した。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 主として、ITS(連想記憶CNNを融合させたシステム)を研究開発している。教師不在型e-learningシステムにおけるこのモデルの可能性については学術論文や国際会議などで公表しているが、今後の実用化に向け、その基盤が整備されつつある。</p>
専門的目標	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 これまでの応用事例における精度の向上と新たな応用事例の開拓をめざす。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 これまでの研究成果を踏まえ、実用化に向けた研究開発を推進したい。特に本研究はその成果が認められ、競争的外部資金の獲得に至っている。研究の質を高めるために積極的な教育研究活動を行いたい。</p>

最新データ入力日	2013年	5月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カワグチ キヨキス 川口 清泰	男	1948年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(英文学)	専門分野	英文学、英国演劇、シェイクスピア	
学 歴	1964年	3月	東京都 私立 明治学院高等学校	卒業
	1967年	4月	明治学院大学 文学部 英文学科	入学
	1971年	3月	明治学院大学 文学部 英文学科	入学 卒業
	1972年	2月	米国 カリフォルニア州立大学 文学部 比較文学科	入学
	1974年	6月	米国 カリフォルニア州立大学 文学部 比較文学科 学科	卒業
	1976年	4月	明治学院大学 文学部英文学専攻	博士課程前期 入学
	1978年	3月	明治学院大学 文学部英文学専攻	博士課程前期 修了
実務 経 験	1974年	7月	東京都 学校法人 神田外語学院	英会話講師(1975年3月まで)
	1975年	4月	東京都 学校法人 ECC東京外語学院	英会話講師(1978年3月まで)
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1978年	4月	日本シェイクスピア学会会員	
	1978年	4月	日本英文学会会員	
	年	月		
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	どのクラスにおいても、学生参加を大事にする。英語の授業では、各学生が理解しているかをつねに意識しながら教育している。各個人への気配りを最大の目標としている。演劇関係の授業では学生とともに芝居をしながら、クラス全体の士気を高めている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 英米の演劇では、毎週、シェイクスピアの名場面を披露している。そのために周到な練習時間を取っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 英会話の教科書を同僚と作成して、授業に生かした。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 地域の演劇鑑賞会において十数回、シェイクスピア劇を原語で実演してきた。</p>
担当授業科目	2013年度 英語コミュニケーション、英米の演劇、日英の表現比較、翻訳のしかた、英米の舞台芸術、English Recitation、専門ゼミナール、卒業研究
代表的シラバス	英国の劇作家ウィリアム・シェイクスピアの悲劇作品『ハムレット』を多角的に学びます。様々な日本語訳を比較したり、日英の実際の舞台(のDVD)を鑑賞します。また経験豊かな演劇関係者、卒業生、学生有志による実演もあります。学生は希望すれば、役者や裏方などに加わったりできます。もちろん、観客としてのみ参加しても結構です。シェイクスピアのすごさを、ぜひ味わってください。またシェイクスピアとの比較のために、現代劇の解説や、実演もします。
教育改善活動	特になし
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 本格的な劇を教室という制約の中で行ったことに対する、驚きと感謝が評価に現われている。また、多くの卒業生や演劇関係者を招待したことに対する評価も高い。ただ、演劇の激しさに、違和感を感じる学生もたまにいますので、その対応はこれからの課題である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 ダニー・ブラウン専任講師の基礎ゼミナールは、すべて私が日本語に訳してきた。また、彼の教会の通訳も、隔週で担当している。彼から評価を聞いてもらえれば、英和大学の英語教育及び教会活動に対する態度は理解してもらえると信じる。</p>

研究業績

研究の特徴	主にシェイクスピアの喜劇と悲劇が研究対象。難解とされていたシェイクスピア研究書を翻訳出版した。論文は喜劇作品の研究が多い。主に作品の構成、舞台反応の研究に従事してきた。また、喜劇の構造の研究との関連から、喜劇の創作にも関心を払ってきた。
研究経歴	<p>1976年 明治学院大学大学院英文学において、エリザベス朝演劇の研究に従事した。</p> <p>1978年 山梨英和短期大学において、シェイクスピアの研究に従事。</p> <p>2002年 山梨英和大学において、シェイクスピアの研究に従事。現在に至る。</p> <p>年</p> <p>年</p>

研究実績	(1)著書	特になし
	(2)学術論文	1979年、山梨英和短期大学紀要第12号に、「QurlousとWinwife』『「バーソロミューの祭り』におけるメイン・プロットの考察)以後、主に大学の紀要を中心に、学術論文を十数本発表してきた。
	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	特になし
競争的資金採択課題		特になし
学会等発表・役員参加	年	月
	年	月
	年	月
	年	月 特になし
	年	月
	年	月
	年	月
共同研究の実績・受託	年	月
	年	月
	年	月 特になし
	年	月
	年	月
大学院生指導		特になし
対研究する能力に	特になし	

サービス活動業績

学内委員会等活動実績	2009年	4月	宗教委員会、進路支援委員会委員
	2010年	4月	図書館運営委員会委員
	2011年	4月	図書館運営委員会、入試委員会委員
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		特になし	
献社会貢献	(1)講演会		
	1999年	6月	演劇団体舞芸センター主催の講演会で「十二夜」の講演 以後十数回にわたり同センターで講演会を行う。最近は2008年11月「シェイクスピアの悲劇の謎」を講演。

社会 貢 献 活 動	(2)出前講座 1983年 7月 山梨県立南高校の課外集中講義で、英語を3日間教える。以後ほぼ毎年高校で出前授業を行ってきた。
	(3)公開講座 2002年 10月 山梨英和大学メイプルカレッジにおいて「シェイクスピアの悲劇」の講義を一般人に行った。以後、ほぼ毎年、シェイクスピア関係の講義をメイプルカレッジで実践した。
	(4)学外審議会・委員会等 年 月 特になし
	(5)その他 2001年 8月 山梨県立白根高校の文化祭で、英米人の英語教師(ALT)と英和の学生を動員して、悲劇「マクベス」を英語で上演した。主役マクベスを演じただけでなく、演出なども行い、地域の英語教育及び演劇振興に貢献した。以後も、英和大学の学生を様々な演劇にかかわらせ、芸術ホールなどの舞台に立たせてきた。
	2007年 10月 県立文学館における演劇公演『翔べない二人』に役者として出演。
	2009年 3月 桜座における演劇公演『基板』に役者として出演。
	2010年 8月 県立文化ホールにおける演劇公演に役者として登場。『さまよえる子羊たち』に役者として出演。

成果と目標

専門的評価	①シェイクスピアの専門書の翻訳を通して、日本のシェイクスピア研究者に刺激を与えた。翻訳不可能とされていたニーヴォーの研究書の翻訳は白水社『新劇』のなかの、その年(1985年)の演劇界の貢献として、賞賛された。また、1990年出版の『シェイクスピアの七つの悲劇』は、観客反応という現代的テーマを扱った研究書の本格的翻訳として、注目を集めた。さらに、1995年出版の『シェイクスピアの愛の喜劇』は、シェイクスピア喜劇の喜劇研究のもっとも名高い書物の翻訳として演劇界に歓迎された。各種の事典への項目執筆での貢献も評価されてきた。最近では、2007年7月、ミネルヴァ書房出版『英悟文学辞典』に演劇関係の項目を多数執筆。
専門的目標	①これからも、主に翻訳を通して、シェイクスピアの研究書を日本の演劇人に提供していきたい。2009年度に学内紀要に発表したような、19世紀から20世紀初頭の研究書に注目して、現代の研究法の相違などに留意しながら、翻訳を進めたい。

最新データ入力日

2013年5月1日

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イサキ 井草 清志	男	1950年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	経済学修士	専門分野	理論経済、計量経済、日本経済、開発経済	
学 歴	1971年	4月 国際基督教大学教養学部入学		
	1975年	3月 国際基督教大学教養学部卒業		
	1975年	4月 国際基督教大学大学院行政学研究科行政学専攻入学		
	1977年	3月 国際基督教大学大学院行政学研究科行政学専攻終了(行政学修士)		
	1977年	9月 ニューヨーク州立大学大学院経済学研究科入学		
	1982年 年	5月 ニューヨーク州立大学大学院経済学研究科博士課程終了 月		
実 務 経 験	1976年	4月 国際基督教大学非常勤助手(1977年6月まで)		
	1977年	9月 ニューヨーク州立大学非常勤助手(1982年5月まで)		
	1982年	9月 国際基督教大学非常勤助手(1983年3月まで)		
	1983年	4月 山梨英和短期大学専任講師(1987年3月まで)		
	1987年	4月 山梨英和短期大学助教授(1994年3月まで)		
	1994年	4月 山梨英和短期大学教授(2002年3月まで)		
	2002年 年	4月 山梨英和大学准教授(現在に至る) 月		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1982年	月 理論・計量経済学会会員		
	1983年	月 国際経済学会会員		
	1986年 年	月 統計研究会会員 月		
特 免 資 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>未来を担う若者に自信とビジネスマインドを持たせ、経済、社会の復活と再生を託しうる人材育成を目指す。長期に及ぶデフレ体質、少子高齢化、巨額の財政赤字と前途は暗く、閉塞感が漂っている上に大震災である。まさに未曾有の危機であるが、これは新しい経済社会を再構築するチャンスとも考えられる。「創造的破壊」をなすのは過去のしがらみにとらわれない若者しかいない。</p> <p>現実の経済問題を中心に、1) 基本情報の提供、2) 思考力の要請、3) 問題解決能力の育成、4) 発表能力の涵養を目指している。</p>
教育能力	<p>(1) 教育方法実践例 バナナプランテーションの教材を使って、1) バナナ生産の現状、貧困、経済格差、日本とフィリピンの経済関係等の基礎情報を提供したうえで、2) これらの経済問題の原因を考えさせる。3) 次に、問題解決のために自分は関係するのかわからないのか、するとすれば具体的にどう関わるのかを考えさせたうえで、4) レポートにまとめたり、プレゼンテーションさせる。</p> <p>(2) 作成した教科書、教材等 井草清志他共著、「暮らしの中の経済学」、pp163-210、八千代出版</p> <p>(3) 教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>経済入門、日本の経済、マクロ経済、専門ゼミナール、卒業研究、基礎ゼミ1、開発経済、文系のための数学</p>
代表的シラバス	<p>本学は大別すればいわゆる文系の大学に分類され、それが故か数学嫌いの学生が多い。しかし、今日数学は経済学は無論、人文、社会科学の様々な分野で幅広く活用されている。そこで、「文系のための数学」では数式を使わずに、集合論、線形代数、解析学の基礎的概念を理解させたうえで、数学的思考方法を身につけることを目指している。</p>
教育改善活動	<p>講義科目においては、毎回授業内容についての感想を書かせている。こうすることで、学んだことが整理されるだけでなく、文章化することで疑問点も明確になる。授業を聞いてただノートを取るだけだと受け身の授業になりがちだが、こうすることで授業に主体的に取り組むようになる。しかも、無記名で書かせるので成績評価に関係しないために様々な意見が出るが、その中で常識的には「不適切」な意見、例えば「お金で幸せは買える。」といった意見も紹介することでさらに議論や思考が深まる。さらに、そうした「非常識」な意見を書いても否定されないということをととても新鮮に感じているようである。学ぶとは覚えることではなく、知ることの楽しさをおして学ぶとは思考することであることを体験させている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価 演習・講義の全体評価(講義アンケートより): 演習・講義の方針としては、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように配慮をした。講義では毎回授業の感想を書かせることで、主体的に授業に取り組むようになり興味、理解が進んだ。演習では課題に取り組むことで応用力を高めたり、研究発表を課すことによって自主的に学ぶ楽しさを体験できるよう心がけた。こうした努力は一定の成果をあげたようで、学生の授業に対する満足度は平均を上回っている。</p> <p>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より): 経済学は難しそうと思ったが興味がわいた、自由に自分の意見が言えて新鮮だった、学ぶとは覚えるのではなく知ること、考えることだと分かった等肯定的な意見が多かったが、シラバスどおりに授業をして欲しいとの注文もあった。</p> <p>改善に向けた今後の方針: 学生の授業に対する理解や興味を確認しながら進めるので、往々にして授業がシラバス通りに進められない。確かに15週の授業計画通りにするのが原則であるが十分な内容理解と学生の主体性を引き出すことも重要で、この2点を両立させるよう一層の努力</p>

教育能力 評価 に対する	<p>が必要である。特に、入門や概論の授業では経済専攻学生は少数派なので、経済学にさして興味のない学生に経済学の面白さを実感させつつ授業計画に沿った授業展開を心がけなければならない。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行なっていない。</p>
--------------------	--

研究業績

研究の特徴	計量経済学をメインとした定量分析手法をもちいて現実の経済問題を分析し、また予測している。マクロ経済分野の計量分析、特に為替変動、金融政策に関する実証分析をおこなってきたが、最近はODAとNGOの関係など開発援助問題にも取り組んでいる。
研究経歴	<p>1976年 国際基督教大学非常勤助手(1977年6月まで)</p> <p>1977年 ニューヨーク州立大学非常勤助手(1982年6月まで)</p> <p>1982年 国際基督教大学非常勤助手(1983年3月まで)</p> <p>1983年 山梨英和短期大学専任講師(2002年3月まで)</p> <p>2002年 山梨英和大学准教授</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>井草清志他共著、「暮らしの中の経済学」、pp163-210、八千代出版</p> <p>井草清志他共訳、「ジャパングライシス―“準大国”日本への警告」、有斐閣出版</p> <p>(2)学術論文</p> <p>井草清志、種本広之「水問題に関する一考察―水道料金問題を中心として」、山梨英和大学紀要第9号、pp137-163、2010.</p> <p>井草清志、「日本の開発援助政策に関する一考察」、山梨英和短期大学紀要第34号、pp1-17、2000.</p> <p>井草清志、「金融政策と地価抑制―バブル期の金融政策の実証分析」、山梨英和短期大学紀要第30号、pp147-162、1996.</p> <p>井草清志、「Purchasing Power Parityによる1980年代の為替変動の実証分析」、山梨英和短期大学紀要第25号、pp149-166、1991.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>なし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
共同研究の実績・受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし

研究 する 能力 価に	マナーサプライ等現実の経済データにもとづく計量経済学的手法によりバブル期における日銀の誤った金融政策がバブルの発生とその後の長期経済不況を引き起こしたことを実証する(「金融政策と地価抑制」という一定の研究成果をあげた。こうした実証分析の手法によって財政や金融問題などの様々な現実の経済問題を分析し、解決策を提言する意義は大きいといえよう。
----------------------	---

サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	2011年 4月 グループA主任 2011年 4月 ビジネス・コミュニケーションコース コーディネーター(現在に至る) 2011年 4月 学生委員会委員 2011年 4月 教務委員会委員 2011年 4月 進路支援委員会委員 2011年 4月 宗教委員会委員(現在に至る) 2011年 4月 大学運営委員会委員 2011年 4月 国際交流委員会委員 2011年 9月 学校法人山梨英和学院理事・評議員(現在に至る)
アドバイザー活動実績	毎学期最低1回はアドバイザーと面談することで、学生の近況を把握するよう努めている。こうすることで2010年は当初退学を考えていた学生2名が退学ではなく、休学の道を選んだ。またアドバイザーであるなしにかかわらず、悩んでいる学生の話をよく聞くことで問題解消できるよう努めている。
後進育成活動実績	特になし
社会 貢 献 活 動	(1)講演会 年 月 特になし (2)出前講座 2010年 7月 高大連携、諏訪双葉高校で日本とアジアの経済関係の講義をした。 (3)公開講座 年 月 特になし (4)学外審議会・委員会等 1996年 4月 甲府市消費者問題環境部会長(1997年3月まで) 1997年 4月 山梨県大規模店舗審議会委員(2001年3月まで) 1998年 4月 市民フォーラム2001MDB問題担当委員(2004年3月まで) 1998年 10月 NGO・大蔵省(現財務省)定期協議会委員(2005年3月まで) 2000年 11月 NPO法人富士山クラブ会員(2002年3月まで) 2010年 7月 スペシャルオリンピック山梨(知的障害児のスポーツ振興団体)役員 (5)その他 1998年 3月 甲府市消費者問題環境部会長として甲府市一般廃棄物に関する報告書を作成した。 2010年 スペシャルオリンピック山梨の役員として県内の各種活動を推進した。特に2010年は4年に1度の全国大会が大阪で開催されたので、その準備等に積極的にかかわった。 2011年 5月 東日本大震災被災地(宮城県岩沼市)ボランティア活動 2012年 2月 大学主催震災ボランティア活動参加 2013年 6月 山梨英和大学人間文化事業企画・実行

成果と目標

専門的成果	<p>①計量経済学的手法によって、為替変動や地価動向とマネーサプライに関して実証的に一定の研究成果が得られた。</p> <p>②日本のODAは大きな成果をあげる一方課題も大きい。それは、援助がODAによるインフラ整備に偏重しているためにいわゆる「フィズカルドラッグ」になり、必ずしも自律的な経済発展をもたらしていないということである。自律的発展のためには公共事業投資よりはむしろ人材育成のための教育投資の方が長期的には望ましいのである。</p> <p>③日本は低成長、人口減少によってすでに水は余っているのだから高度経済成長期の水源開発はもはや無用である。税金の無駄遣いとどまらず、無駄な公共事業は財政赤字の元凶である。新規の水源開発は不要だが既存の給水インフラの維持補修には多額の資金を要するがその対策を講じている自治体はほとんどないのが現状である。</p>
専門的目標	<p>①日本経済は低成長、人口減少、巨額の財政赤字、更に今回の大震災と問題山積である。経済危機の真ただちにある我が国の諸問題解決のために計量経済学的定量分析によって実証的に解決策を探ることは意義深いので、色々な経済問題の計量分析を試みたい。</p> <p>②2000年にODAは1兆円に達したが、その後急落した。低成長や財政問題を考えれば今後急増することないだろう。それならばこそ、資金を有効に使って感謝される援助政策を実行することが求められるの、更なる研究を進めたい。</p> <p>③近年「水ビジネス」が注目されているが、現実には厳しい。それは、日本では水道事業は地方自治体が事業主体、つまりビジネスとして水道事業経営のノウハウはゼロだからである。昨年日本の水道事業と世界の水需給についてサーベイしたが、今年はそれをさらに発展させ、「水ビジネス」をまさにビジネスとして、つまり魅力ある産業とするにはどうすればよいか研究した。この分野を中心に科研費等競争的資金の獲得に向け積極的に応募していきたい。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績書

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
石橋 泰	男	1960年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(教育学)	専門分野	臨床心理学	
学 歴	1979年	3月 東京都 私立 開成高等学校 卒業		
	1980年	4月 東京大学 文科Ⅲ類 入学		
	1984年	3月 東京大学 教育学部 教育心理学科 卒業		
	1984年	4月 東京大学 教育学部 研究生		
	1985年	4月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 修士課程 入学		
	1988年	3月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 修士課程 修了		
	1988年	4月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 博士課程 入学		
	1991年	3月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 博士課程 単位取得退学		
実 務 経 験	1987年	4月 市川市教育センター非常勤教育相談員(1991年3月まで)		
	1991年	4月 東京大学 学生相談所(本郷) 助手(2002年3月まで)		
	1994年	4月 関谷クリニック(東京都渋谷区)非常勤カウンセラー(1998年4月まで)		
	2002年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 専任講師		
	2005年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 助教授		
	2005年	4月 山梨大学非常勤講師(「現代青年の思想と文化」担当)		
	2005年	8月 山梨大学保健管理センター非常勤講師(2010年9月まで)		
	2007年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 准教授(～現在)		
	2008年	5月 放送大学大学院客員准教授(臨床心理学)(2010年3月まで)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1989年	月 日本心理臨床学会正会員		
	1996年	月 日本学生相談学会正会員		
	2000年	月 日本箱庭療法学会正会員		
	2003年	月 日本人間性心理学会正会員		
特 免 資 格 等 ・ ・	1996年	4月 日本臨床心理士資格認定協会 臨床心理士資格取得(登録番号4385)		
	2002年	9月 一般社団法人日本MBTI協会 MBTI認定ユーザー資格取得		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	現代は情報化が進んでいる。すべてよきものには影の面もあり、学生の中には他者との比較の中で自信を失い、自分の感じることや考えを信じられなくなっている人もいる。自分の感じていることを踏まえつつ、それを対象化し、広げていくために役立つ心理学的知識、技能を獲得し、自ら探求を進めていけることを教育理念としている。そのために、①自分や他者に関心を向けること、②自分の感じや考えを意識化すること、③②を言語化すること、④自分の考えをより広いコンテキストに置いて対象化できること、を目標としている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.箱庭療法、絵画療法等の体験的理解を含んだ授業実践</p> <p>少人数の演習科目において、学生の理解を増すために、箱庭療法、絵画療法等の体験的授業を積極的に行っている。授業の中で個人の心の秘密があらわにならないよう配慮しつつ、感じがつかめるように体験を持ってもらい、その体験を言語化させる。その後、上記を踏まえて、論文やビデオ等を通して理解を深めるという形で、授業を展開している。心理療法は学生の日常生活とのギャップがあるが、それを埋めることを目的としている。</p> <p>b.現代のアニメーションなどを題材として授業の展開</p> <p>現代人の深層心理の様相は、臨床例から伺える。しかし、臨床例は個性が高く、また守秘性の問題からも扱うことが難しい。一方、すぐれた表現者の表現には、現代人の心理的課題とその解決の試みが示唆されている場合があり、題材を適切に選ぶなら臨床例以上により教材になりうる。こうした考えにもとづき、素材として、現代のアニメーションなどの作品を「深層心理学」「人格心理学」などの講義において積極的に取り上げている。刺激を受けて参考文献の紹介を求めて来る学生が増えた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>テキストを補う補助資料をプリントとして配付・活用してきているが、特にまとめてはいない。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	2013年度（学部）人格心理学、深層心理学、アドバンスト心理学研究演習、専門演習、卒業研究（大学院）臨床心理面接特論、人格心理学特論、臨床心理実習、臨床心理事例研究、修士論文
代表的シラバス	「深層心理学」をあげる。「深層心理」と聞くと、心の奥底に潜んでいるものと考えがちだが、メディアやネット上のイメージもそうしたものの現れであることをのべ、学生の注意を喚起している。その上でそれらをただ消費するのではなく、心の成長につなげるために必要な知識、技術を伝えることを目的とする講義であることを記述している。
教育改善活動	教務委員（2003年～2008年）、心理臨床コース・コーディネーター（2009年～2010年）として、日常的な教育環境の改善につとめた。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>学生による授業評価によれば、平均を満たす水準は維持できているが、授業評価から学生の勉強時間が少ないことが伺えた。改善方策としてテキストを指定し予習・復習について具体的に指示することをつとめるとともに、参考文献の提示を積極的に行い、学生の自主的学習を促している。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>同僚教員等による授業評価は実施されていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>①心理臨床の実践に役立つよう体験的基盤をエビデンスとして重視している</p> <p>②体験的データを考察する客観的な基盤として、現代における統計的基準に加えて、人類の精神史を参照枠としている</p> <p>③②で述べた方法の特質と限界を明らかにするため、ユング心理学、レヴィナス哲学を参照し、同時にユング心理学、レヴィナス哲学の特質を明らかにしようとしている</p>	
研究経歴	1987年	市川市教育センター(千葉県)において教育相談・相談体制について実践と研究に従事(1991年まで)
	1991年	東京大学学生相談所(本郷)において、学生相談活動の運営、個人心理療法、グループ療法の実践と研究に従事(2002年まで)
	2002年	山梨英和大学人間文化学部および同心理臨床センター(2003年から)において心理療法、ユング心理学の実践と研究に従事(現在にいたる)
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.“「他者」のために”,「こころの発達援助ー学生相談の事例からー」, 鳴澤實(編), pp.298-302, ほんの森出版, 1998:レヴィナス哲学と現代人の問題を結びつけて論じた。</p> <p>b.“遊戯療法”,「臨床心理リーディングガイド」, 松井豊, 林もも子, 井上果子, 沢崎達夫, 増茂尚志, 賀陽濟(編), pp.137-140, サイエンス社, 1991:遊戯療法は心理療法の中でも筆者の専門分野の一つである。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.“ユング心理学的視点から見た文化と自然の境界の一研究”, 山梨英和大学心理臨床センター紀要, vol.3, pp.12-21(2007):意識のあり方が日本人と西欧人の間では違うことが論じられてきているが、現代日本人の意識の変化についての父性の影響に焦点をあてて分析した。</p> <p>b.“理性の運命あるいはアニムスについて”, 東京大学学生相談所紀要, vol.11, pp.25-38(2000):近代の理性的自我のインフレーションを乗り越える動きが19世紀から始まっていると考えられることをカントール、ゲーデル等の仕事を例に考察した。</p> <p>c.“世界と人間と<神>とーレヴィナスとユングⅡー”, 東京大学学生相談所紀要, vol.10, pp.51-67(1998):ユングの自己とレヴィナス哲学を比較研究し、自己象徴に焦点をあてて分析をした。</p> <p>d.“レヴィナスとユングーひとつの問題提起ー”東京大学学生相談所紀要, vol.7, pp.40-54(1992):レヴィナス哲学を臨床心理学に生かす本邦で初の試みであると思われる。</p> <p>e.“乱暴な小5男子とのプレイセラピー”, 東京大学心理教育相談室紀要, vol.10, pp.51-68(1989):発達障害と情緒障害が重なっているが改善した事例について多面的に分析を加えている。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.学術誌『学生相談研究』査読(2005年～)</p> <p>b.他大学院生の事例研究論文へのコメント執筆:岐阜大学心理教育相談研究,vol6,宮崎論文,2007</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2007年	9月 石橋泰, 清水隆善(企画者)“自主シンポジウム 不登校臨床の諸相と新たな視点”日本心理臨床学会第26回大会(於東京国際フォーラム)
	2000年	1月 “自分をアナクロニック(反時代的)だと語った男子学生の事例”第33回全国学生相談研究会議名古屋シンポジウム
	1999年	1月 石橋泰, 大山泰宏, 齋藤憲司, 成田諭“シンポジウム こころの時代の大学教育を考える”第32回学生相談研究会議東京シンポジウム
	1998年	1月 “アイデンティティを求めて”第31回全国学生相談研究会議宮崎シンポジウム
	年	月
	年	月

共同研究の実績・受託研	1997年 12月	『大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究』平成9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 吉良安之)研究協力者
	1991年 4月	『学生、院生、留学生の健康・体力の保持・増進に関する総合的研究』平成3年度文部省特定研究(研究代表者 宮下充正)研究分担者
大学院生指導	年 月 年 月	<p>大学院生研究指導担当教員(山梨英和大学大学院)</p> <p>2012年度 1.青年期の箱庭表現についての基礎的研究</p> <p>2010年度 1.怒りのコントロールに対する筆記の効果についての一研究 2.スクールカウンセラーの専門性に関する一研究 3. 地域子育て支援における臨床心理士の役割と機能に関する一研究</p> <p>2009年度 1.中学校教師の不登校生徒への対応およびスクールカウンセラーとの連携についての一研究</p> <p>2008年度 1.現代大学生における依存構造の臨床心理学的一研究 2.母親の非受容感を高める父親の受容行動</p> <p>など。毎年1~3名の指導を担当してきている。</p>
研究能力に対する評価		<p>専門は、心理療法、特にユング派的なアプローチを専門としている。臨床の実際や事例研究においては、仲間からの評価などから専門的な水準を満たしていると評価できる。</p> <p>また日本では河合隼雄が道を開いた神話・昔話・物語などの臨床心理学的研究を個人的にも学生とともにも行い、成果は紀要等に発表してきている。</p> <p>より専門性の高い領域として、ユングが「全体性」の名付けた元型を日本の現実を踏まえて実現できるかをテーマとしている。日本人にとっては全体性の元型の実現のためにユダヤ・キリスト教に実現されてきた心性の理解が不可欠である。同時に日本の現実を踏まえると葛藤が生じる領域がある。これは臨床例にみられることもあるが、心理臨床家自身が主体的にとりくみ解決すべき問題であると考え、取り組んできているが、明確な結果が出せていない。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年 4月 図書館運営委員会委員(2011年度中)
	2009年 4月 心理臨床コースコーディネーター(2011年3月まで)
	2007年 4月 学生委員会委員(2012年まで)
	2005年 4月 入試委員会委員(2012年1月まで)
	2005年 4月 新カリキュラム検討委員会
	2003年 4月 教務委員(2009年3月まで)
アドバイザー活動実績	2010年度43名のアドバイザーを担当。例年30~40名を担当している。 2012年度は10名を担当。
後進育成活動実績	日常的にはできることはしてきているが、組織的には特にない。
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2009年 9月 「日本人の心理と宗教性—法然・明恵—」山梨県県民コミュニティカレッジ(於山梨英和大学)</p> <p>2005年 7月 『『無意識の発見』と歴史』山梨英和大学公開講座 など</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2012年 9月 山梨県立韮崎高校</p>

社会 貢 献 活 動	2012年	7月	北杜市立甲稜高校
	2010年	11月	山梨県立白根高等学校
	2010年	6月	駿台甲府高等学校など など年2～3回県内の高校を中心に出張講義を行っている。
	(4)学外審議会・委員会等		
	2006年	4月	山梨県問題を抱える子ども等の自立支援事業運営協議会委員(2010年3月まで。2008年から2010年は委員長)
	2003年	4月	山梨県臨床心理士会学校臨床心理士委員会委員(～現在)
	(5)その他		
	2012年	6月	石和こすもす教室事例検討会講師
	2011年	9月	山梨県総合教育センター「教育相談における実践力を養う研修会」講師
	2011年	6月	石和こすもす教室事例検討会講師
	2010年	6月	石和こすもす教室事例検討会講師
	2010年	12月	山梨県総合教育センター学校教育相談実践研修会講師
	2009年	6月	山梨県不登校児童生徒担任・担当こすもす教室指導員合同学習会講師 など

成果と目標

専門的成果	<p>①物語などのユング心理学的研究:臨床例に加えて、すぐれた表現者の作品を心理学的に分析することで現代人の心の課題と解決の方向を明らかにすることが研究テーマの一つであり、村上春樹、金原ひとみ、いしいしんじ等の作品を分析した。</p> <p>②③の全体性の元型の意識化の前提として父性元型と取り組むことは不可欠である。その一助として、筆者は、近代をくぐりつつユダヤ・キリスト教の息吹を伝えるものとしてレヴィナス哲学に注目し、臨床心理学、特にユング心理学とリンクさせることにとりこんできた。レヴィナス哲学を心理学に生かす動きは、西欧世界にみられる。自身の論文の発表とともに、代表的な論文(英語圏に限られるが)を翻訳し、わが国の研究の土台の一つとしたいと考えているが、紹介ができていない状態である。</p> <p>③グローバリズムが浸透しつつある現代人にとって、ユングがいう自己の元型の実現は、未来に向けて不可欠であると考えられる。自己の意識化のためには、広範な心理学的体験を必要とし、青年よりも中年、相談者よりも心理臨床家が自ら成し遂げるのがふさわしい課題である考え取り組んでいる。</p>
専門的目標	<p>①目標としては、上記③で述べた自己の元型の意識化の達成を目指している。これがアルファであり、オメガである。</p> <p>②①で述べた「自己」の元型の実現のためには、ユングの心理学を研究するだけでは不十分である。ユダヤ教は神のイメージに関して徹底して形象化を排除するのに対して、キリスト教は、媒介者の像を持っており、ユダヤ教と「異教」の中間にある。キリスト教とユングのいう「自己」の意識化可能性との関連を明らかにすることが日本での自己実現に関係することを実践的に明らかにすることを目標としている。</p> <p>③物語の心理学的分析は個別の事例はいくつか積み上げてきているが、方法的な整備が不十分である。方法論とその意味について整理し、専門家の間での議論にのせられるようにすることが目標である。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
韓 暁 宏	男	1968年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(学術)	専門分野	経営学、中国経済	
学歴	1987年	7月	中国遼寧省凌源市第一高等学校卒	
	1987年	9月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科入学	
	1991年	7月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科卒業 文学学士	
	1994年	9月	中国国家外国専門家局に派遣され、早稲田大学にて日本語研修	
	1995年	4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程入学	
	1997年	3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程修了 国際学修士	
	1997年	4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程入学	
	2000年	3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程修了 満期退学	
	2001年	8月	桜美林大学大学院学術博士学位取得 学術博士	
実務経験	1991年	8月	中国東北電力大学にて勤務、専任講師	
	2001年	9月	中茂国際株式会社(商社)にて勤務、営業本部長	
	2007年	10月	山梨英和大学国際交流センター顧問	
	2008年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授(現在に至る)	
受賞歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所属学会	2001年	4月	国際総合研究学会	
	2000年	5月	アジア経営学会	
	2000年	4月	経営行動学会	
特免資格等	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>グローバル化が進んだ現今、大学教育は国・地域を問わず、国際社会に対応する、国際感覚を持っている人材を育成していくのが教育機関としての大学の使命ではないかと考えている。このような理念のもとで、人へ、地域へ、そして世界へ貢献できる学生を育むことが心掛けていている。</p> <p>グローバルな社会で、ビジネスパーソンになるためには、ビジネスに関する専門知識、コミュニケーション能力が求められている。このことを自分の専門分野の範囲で、講義・演習を通じて少しでも学生の一助けになりたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.双方向授業の実践 学生の顔を見て話をする直接的なコミュニケーション及びアンケートにより、勉学への意識や理解度をリアルタイムに把握している。また、授業計画や準備の段階で学生の意見等を多角的に聞き取り、指導案を作成する。こうした双方向授業に学生は素直に反応し動機づけにと繋がることで、講義が活性化していく。</p> <p>b.総合的なコミュニケーション能力の向上へ コミュニケーション能力を高めていくのに、言葉自体の勉強だけは不十分である。その言葉に関わる文化などの理解も必要である。「生活の中の中国語」と「ビジネス中国語」の授業においては、実際のシーンを設け、言葉の応用を身につけると同時に、言葉及び場面に関わる中国文化、伝統、習慣、歴史等も触れる。最終的に総合的なコミュニケーション能力が高められる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	中国現代事情、体験としての異文化理解、国際貿易、経営入門、ビジネス中国語、生活の中の中国語、ビジネス日本語、卒業研究、専門ゼミナール、基礎ゼミナール
代表的シラバス	<p>a.講義としては、「中国現代事情」である。 中国は1978年改革・開放以来30年以上経っている。それによる急成長を成し遂げている中国は、今世界から多大な関心が寄せられている。本講義は、現代の中国を政治、経済、外交、文化、教育など様々な分野からクローズアップして紹介し、中国全般を理解し、リアルタイムで激動する現代中国をキャッチしていく。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p> <p>b.演習としては、「卒業研究」である。 卒業研究は、大学で学んできたことを総仕上げ、一本の論文に理論的かつ体系的に纏める。受講生は、3年次までの学習から形成されてきた関心領域に対して、文献収集と精読を通じて、問題意識を明確化し、研究テーマを決定する。各自の研究テーマに基づき、経営学の視点から、研究計画を立て、理論的に分析し、その内容を纏め、卒業論文を完成する。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p>
教育改善活動	<p>a. 新教育課程検討会への参加 2009年度開設予定の新たなカリキュラムを検討するうえで、従来なかったビジネス関連のコース設置に向けて各種提案を行った。</p> <p>b. 留学生教育体制点検委員会への参加 2009年11月に留学生教育体制点検委員会で、留学生教育に関する多様な提案を行った。</p>
に教育評価する力	<p>(1)学生による授業評価 講義・演習の全体評価(講義アンケートより):講義・演習については、シラバスの通り、分かりやすく授業を進めたとのことである。講義は学生たちの意見・レベル等を考慮して、学生の勉強意欲を最大限</p>

に教育 評価 する 力	に引き出すことに配慮した。授業中に内容を理解するため、映像などを通じて、関連する知識も触れた。 演習は、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように心掛けている。学生たちの一人一人の特徴、関心を持っている分
教育 能力 に 対 する 評 価	野に合わせ、研究のスタンス、課題への解決に力を入れた。 良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より):全体的には授業内容よりも、授業の方式(例えば、板書や字の大きさ等)に指摘された意見が多かった。また、科目の人数の関係で、学生たちに質問を与えるチャンスが少なかったという意見もあった。 改善に向けた今後の方針:学期末の学生からの授業評価を真摯に受け止め、改善してほしい点を克服しながら、よい点を次年度に生かしていきたい。 (2)同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員などによる講義評価は行っていない。

研究業績

研究の特徴	主に中国の国有企業の改革について、“現代的”企業の育成の視点から、企業のガバナンス及び経営メカニズムを研究している。計画経済から市場経済へ移行している中国に、企業の改革は外国(先進国)の公企業の改革が参考となるが、その経済システムや経営環境が異なっている。そこに、如何にマッチして、中国の国有企業を効率的に改革していくかは研究の中心所在である。
研究 経 歴	2000年 中国国有企業の民営化に関する研究に従事 2001年 中国国有企業の改革の実態に関する現地調査(凌源鋼鉄集团公司を中心に) 2002年 中国の私営企業の経営メカニズムに関する研究 2011年 中国企業の現代的企業への育成における経営者市場の育成に関する研究 2013年 日本企業の海外への進出に関する研究(進行中)
研究 実 績	(1)著書 特になし (2)学術論文 1.「中国の経済発展と外国直接投資」『山梨英和大学紀要』第10号 2011年 2.「中国の企業改革の実例研究—福建実達コンピュータ株式会社を中心に—」『山梨英和大学紀要』第9号 2010年 3.「中国の国有企業改革について—凌源鋼鉄集团公司の実例研究—」『山梨英和大学紀要』第8号 2009年 4.「中国国有企業の改革の研究—“現代的”企業の育成を目指して—」博士学位論文 2001年7月 5.「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス—経営者インセンティブの視点からのアプローチ」『アジア経営研究』アジア経営学会 2001年6月第7号 pp37~42 6. “The Foundation of Corporate Governance in Chinese Enterprises During the Transitional Period” China Newsletter 2001 Vol.1 No.150 pp2~14(翻訳版) 7.「移行期における中国企業のコーポレート・ガバナンス」『中国経済』日本貿易振興会 2000年11月 pp34~54 8.「中国企業の経営者の実像と課題—中国企業家調査から—」『日中経協ジャーナル』No.72 日中経済協会 1999年12月号 pp6~15 9.「中国国有企業の株式制改革とイタリアの国家持株機関」『日中経協ジャーナル』No.65 日中経済協会 1999年4月号 pp79~88 10.「中国企業の経営者に関する—考察」『桜美林国際学論集』No.4 桜美林大学大学院国際学研究所 1999年12月 pp47~62 11.「中国国有企業の株式制改革について」『桜美林国際学論集』No.3 桜美林大学大学院国際学研究所 1998年12月 pp99~112

研究実績	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 第5回 中・日・韓日本語文化研究国際フォーラムにて、「文化から見た日本的経営」を発表する予定中国大連大学に於いて 2013年9月
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表	2000年 10月 「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス」 アジア経営学会第7回全国大会 創価大学において 1999年 3月 「中国国有企業の株式制度とイタリア混合経済との比較研究」 日本国際開発学会 専修大学において
共同研究の実績・受託	特になし
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>計画経済の体制のもとで運営されてきていた中国の国有企業は、市場経済への移行にあたって、色々な課題が直面している。それを克服しながら、“現代的”企業を目指して改革していくには、“漸進的”な改革が必要である。また、経済環境・経営環境の変化につれ、最終的に国有企業の“民営化”以外にはほかの道はない。国有企業の“民営化”への改革は、業種によって、漸進的民営化と完全民営化に分けるべきである。国有企業の漸進的民営化は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。先進国の公企業と中国の国有企業の状況を分析し、効率的に改革していく方法の模索が期待されている。“混合経済の企業改革モデル”はその改革の一つの方法である。“混合経済の企業改革モデル”はすでに、学術論文を通じて発表されている。</p> <p>また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには経営者市場、資本市場の育成が不可欠である。この点は今後の中国の国有企業の改革に示唆を与えていることが期待されている。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 10月 国際交流センター顧問(2008年3月まで) 2007年 10月 海外の教育機関との交流を促進し、大学の国際化に取り組む(現在に至る) 2008年 4月 国際交流委員会委員(2012年2月まで) 2009年 11月 留学生教育体制等点検委員会委員(2010年3月まで) 2009年 4月 教務委員会委員(2011年3月まで) 2009年 4月 ビジネス・コミュニケーションコースコーディネータ(2011年3月まで) 2011年 4月 入試委員会委員(2012年2月まで) 2011年 4月 進路支援委員会委員(2012年2月まで) 2011年 4月 図書館運営委員会委員(2012年2月まで) 2012年 2月 広報戦略部運営会委員(現在に至る) 2012年 2月 学長特別補佐(国際交流中国担当)(2014年3月まで)
アドバイザー活動実績	2008年 1年次の学生の教養演習を担当した(2009年3月まで) 2009年 3年次の学生の専門ゼミナールを担当する(現在に至る) 2010年 4年次の学生の卒業研究を担当する(現在に至る)

アドバイザー活動実績	2010年 1年次・2年次の学生の基礎ゼミナールを担当する(現在に至る) 2008年 1年次から4年時までの留学生(中国)の世話役(現在に至る)
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1)学外審議会・委員会等</p> <p>2011年 4月 山梨県総合計画審議会委員(任期2年、2013年3月まで)</p> <p>2011年 4月 公益財団法人 山梨総合研究所アジアフォーラム21研究会会員(現在に至る)</p> <p>2013年 4月 桜美林大学産業研究所客員研究員(現在に至る)</p> <p>(2)講演会 特になし</p> <p>(3)その他</p> <p>2010年 12月 山梨県にある地元中小企業(株式会社ニスカ)の海外赴任人員の語学研修の企画・実践</p> <p>2012年 10月 やまなし産業支援機構と協力し、産学連携企業支援講演会の企画に参加</p> <p>2012年 12月 やまなし産業支援機構中国研究会の企業メンバーと留学生との交流に積極的に取り組んでいる</p> <p>2012年 9月 山梨県知事の中国へのトップセールスのため、仲介役として活動していた</p>
成果と目標	
専門的成果	<p>計画経済から市場経済への移行にあたって、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革は、業種によって、漸進的民営化と完全的民営化が必要である。その漸進的民営化の手法は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。外国(先進国)の公企業の改革について、日本の国鉄とイタリアの公企業の改革を参考にして、“混合経済の企業改革モデル”を構築した。この研究について、学術論文を通じて、発表されている。</p> <p>また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには、経営者市場、資本市場の育成が至急な課題になっている。中国の国有企業の改革に、あまり触れていない経営者市場の育成について、学術論文を通じて、発表されている。特に経営者のインセンティブ付与について、主張し続けているストックオプション制度を導入する点が最近盛んに議論されている。</p>
専門的目標	<p>中国の国有企業の改革において、業種によって、移行経済に適用する漸進的民営化モデルと完全的民営化モデルを更に具現化しなければならない。また、“現代的”企業を目指している国有企業の経営者市場の育成について、中国にある他業種の企業の実態調査を通じて、今までの改革案を更に検証する必要がある。</p> <p>以上の点を踏まえ、最終は中国の国有企業の改革における現実に近い改革モデルを構築していきたい。</p>

最新データ入力日	2013 年 5月 1日
----------	--------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イ サンジ 李 尚珍	女	非公表	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(人文科学)	専門分野	日韓文化交流史(近代)、近代思想史	
学 歴	1995年	4月	宇都宮大学国際学部国際文化学科入学	
	1999年	3月	宇都宮大学国際学部国際文化学科卒業(国際学学士)	
	1999年	4月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程入学	
	2001年	3月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程修了(国際学修士)	
	2001年	4月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程入学	
	2008年	3月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了(人文科学博士)	
実 務 経 験	2005年	10月	宇都宮大学国際学部非常勤講師(2011年3月まで)	
	2008年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助教	
	2012年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	2001年	4月	日本朝鮮学会会員(現在に至る)	
	2002年	4月	日本韓国・朝鮮文化研究会会員(現在に至る)	
	2002年	10月	日本朝鮮史研究会会員(現在に至る)	
	2011年	4月	日本比較文化学会会員(現在に至る)	
	2011年	4月	韓国東アジア日本学会会員(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
e-mail	esangjin[at]yamanashi-eiwa.ac.jp			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>教育理念は創造力・豊かなコミュニケーション力・グローバルな視野を持つ人間性豊かな人材を育成することである。具体的な方針・方法として2つの分野にわけて考えている。</p> <p>(1)まず、文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに受講生が「文化」と「歴史」の概念を理解したうえで、日本と韓国における思想の特殊性と相関性、過去と現状を正確に認識し、一方的ではなくて複眼的・多角的な見方ができるように指導する。</p> <p>(2)次に、韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習の他、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から作文などの表現力・応用力を身につけるように指導し、さらに韓国語の誕生と使用の背景を含む韓国の歴史や社会、文化などの学習内容を取り入れて、専門分野の研究に取り組めるアカデミックな環境の整備・充実に取り組む。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.山梨英和大学の担当科目の授業において、①身近にある映画やドキュメンタリー、新聞記事、書籍などを通して、日韓の文化・歴史・思想がテーマとなる具体的な事案を学生たちと一緒に考えながら、学生自らが自分の興味を持つことを見つけて、積極的に研究できるような環境を提供している。また、②資料収集、文献調査・分析、レジュメ作成、発表、討論、レポート作成などによって、各自の問題意識を明確にし、その疑問を解明していく姿勢を身につけるようにしている。</p> <p>b.海外短期研修(体験としての異文化理解・韓国)においては、本学の参加学生たちと協定校の忠南大学校在生学生たち(日本語学習者)との積極的な交流(マンツーマンサポート)を行い、勉学意欲を高めている。そして、異文化間のコミュニケーション方法として語学学習の重要性を認識し、全体的な学習意欲につながっていくように指導している。なお、2010年度の参加学生のうち、1名の1年生が2011年度3月より、2011年度の参加学生のうち、1名の3年生が2013年度3月よりプログラム実施校の韓国の国立忠南大学校人文大学日本語学科に1年間の交換留学生として派遣されていて、短期プログラムから両校の学生たちの学術的・国際的交流につながっている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a.「国際交流とは何かを考える」栃木県立栃木南高等学校教育講演会(2005年6月)</p> <p>b.「人権教育とは何か」栃木県立高根沢商業高等学校教育講演会(2005年9月)</p> <p>c.「平和をどう考えるか」茨城県立八千代高等学校総合的学習の時間の講演(2005年12月) ⇒これら3つの講演会では、大学進学や就職を希望する高校生が、どのように「国際理解や国際交流を深める」べきか、あるいは「外国人から見た人権教育とは何か」、「平和とは何か」という問題について、私自身の体験をもとに講演した。また、高校生や大学生が、身近にいる留学生との交流を通して「平和」と「共存」について理解し、自らできることは何か、を考え、見つけ、行動することが「国際理解」の出発点であることについて質疑応答などをまじえて議論した。</p> <p>d.「朝鮮を愛した甲州人・浅川巧ーその心の軌跡ー」山梨県立農林高等学校PTA・教職員研修会(2010年7月)⇒2009年6月15日に山梨県立農林高校の全校生向けに卒業生浅川巧と韓国について話したが、保護者と教職員が生徒たちと共有できるような話題が提供できるように話した。</p> <p>e.「朝鮮の土となった日本人・浅川巧が現代の私たちに問いかけるもの」未来をひらく歴史～東アジア3国の近現代史第16回学習会(2010年7月)⇒主に中学校高校の教員たちが参加し、歴史教育に関する話や浅川巧のような明るいテーマが及ぼす教育上の影響について話し合った。</p>
担当授業科目	<p>2013年度: 日韓文化交流史、韓国現代事情、体験としての異文化理解(韓国)</p> <p>生活の中の韓国語、ビジネス韓国語、基礎ゼミナール2、専門ゼミナール、卒業研究</p>
シラ代表的	<p>科目: 日韓文化交流史</p> <p>・概要: なぜ、日韓両国の間に「歴史認識」や「歴史教科書」等が繰り返し問題とされるのでしょうか。</p> <p>両国の文化交流に長い歴史があるとは言え、過去の一時期における植民地統治の出来事が、それぞれの</p>

代表的シラバス	<p>国民に否定的なイメージや先入観を与えてきたからではないでしょうか。韓国の高校の歴史教科書に「肯定的」で紹介された日本人もいます。韓国が日本の植民地であった時代に韓国の陶磁器や民芸品の美術的価値を見出して世に知らしめた柳宗悦や浅川伯教・巧兄弟(山梨県出身)です。この授業では、現代から近世へと時代を遡りながら、日韓文化交流における「明るいテーマ」を見つけていきます。</p> <p>・授業展開方法:①毎回グループワークを行い、各自の意見や疑問点等をまとめて発表してもらう。 ②受講生が自主的に興味のあるテーマについて調査・発表する時間を設ける。そして、その内容について意見交換をし、討論する。資料収集・発表方法についてはサポートする。</p> <p>・到達目標:①これまでの日韓関係について理解することができる。②日韓交流における明るいテーマに関心を持ち、今後のあり方について認識することができる。③国際的な視野を広げ、異文化理解とその方法について関心を持つことができる。</p>
教育改善活動	<p>2009年度、2010年度には教育改善(FD)委員会の委員として学内におけるFD活動に携わった。</p> <p>具体的には授業評価アンケートの結果を分析し、全体の問題改善に取り掛かり、評価の高かった授業を公開してもらい、参考とした。そして、アンケート実施方法の改善を図り、客観性の確保と効果的なフィードバック方法を確立した。さらに、外部の専門家を招いてFD講演会・研修会を開き、全教職員が共有できるモデルを作った。その活動は現在も続いている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>a.授業全体の評価(授業評価アンケートより):</p> <p>担当する全科目において5点満点のうち、平均4.5点以上の評価が得られて、受講生の満足度が高かったと考えられる。</p> <p>①「先生の熱意が伝わった」、 ②「1週間で一番楽しみな授業だった」、 ③「授業を受ける人全員の感想を発表させたのがよかった」、 ④「外国人の眼で見た韓国についての話を聞いてよかった」、 ⑤「視聴覚教材が多くてわかりやすくよかった」などのような評価の意見が多くあった。</p> <p>b.良い点・改善してほしい点(授業評価アンケートより):</p> <p>受講の前に予備知識を持てるように課題を出し、自由調査をしてもらったり、各自の考えをまとめるレポートを作成してもらったりして、授業内容の理解度を高めた。簡単なまとめの形式であったので、受講生の負担も少なく授業にも興味を持ってもらうことができた。今後も続けていきたい。</p> <p>なお、「いろんなことをいろんな形で知れた」という意見に注目し、視聴覚教材やグループワークの進行に工夫しながら、興味を持って参加できる授業にしていきたい。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在行われていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>a.在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟に関する研究を続けている。この研究は、浅川兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質を分析し、そこから異文化としての朝鮮理解の方法の今日的意義を検証するものである。その具体的内容は、兄弟の朝鮮移住の動機、在朝鮮日本人としての当時の植民統治期の特殊な時代状況の認識、さらに兄弟の伝統工芸研究を通しての朝鮮理解の方法とその背景を探究するものである。また、明治から昭和の激動する社会的背景の中での兄弟の思想的基盤の歴史的特質についても研究を進めている。本研究の重要な方法論的特徴として、兄弟のフィールドワーク研究の方法(Field-oriented Approach)及びその特質を検証することによって、彼らの朝鮮伝統工芸研究の朝鮮理解における位置づけについての研究成果をあげることにある。</p> <p>b.植民地期以後の日本と朝鮮半島の諸問題に関心を持ち、帰国問題の始まりについて1955年後の日朝関係を再検討することで、北朝鮮が帰国事業を始めた主な理由が、これまで言われていたような労働力の移入ではなく、対日国交正常化のためのパイプ作りにあったこと等を明らかにし、日朝協会や韓国マスコミなど、これまで正面から取り組まれたことのないテーマについて研究している。</p>
-------	---

研究経歴	<p>1999年 宇都宮大学大学院国際学研究所博士課程前期の在学中より現在まで在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟)研究に取り組んでいる。</p> <p>2005年『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』(共著、平凡社、2005年5月)の執筆より現在まで在日韓国人に関する研究に取り組んでいる。</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.共著『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』平凡社、高崎宗司・朴正鎮編著、2005年5月 pp.235-267、pp.325-339。</p> <p>b.共編『回想の浅川兄弟』草風館、高崎宗司編、2005年9月、pp.296-305。</p> <p>c.共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅰ—韓国とはどういう国か』平凡社、2003年12月 pp.252-292。</p> <p>d.共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅱ—負の歴史から何を学ぶのか』平凡社、2005年7月、pp.286-318。</p> <p>e.共編『韓国民芸の旅』草風館、2005年12月。</p> <p>f.共著「浅川兄弟、その魂の源流を訪ねて」『浅川伯教の眼+浅川巧の心』里文出版、2011年7月、pp.63-89。</p> <p>g.共著(韓国語)「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解」『柳宗悦と韓国』ソミョン出版、2012年12月、pp.91-125。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.「浅川巧の朝鮮観—植民地時代におけるその業績を中心に—」『人間文化論叢』第4巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2002年3月、pp.289-299。</p> <p>b.「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義—」『人間文化論叢』第5巻(お茶の水女子大学 大学院、外部審査有)2003年3月、pp.243-252。</p> <p>c.「キリスト者浅川巧の苦悩—その宗教観を中心に—」『人間文化論叢』第6巻(お茶の水女子大学 大学院、外部審査有)2004年3月、pp.177-186。</p> <p>d.「浅川伯教と朝鮮—植民地期の朝鮮陶磁研究を中心に—」『人間文化論叢』第7巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2005年3月、pp.315-324。</p> <p>e.「浅川伯教の朝鮮工芸論」『人間文化論叢』第8巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2006年3月、pp.249-258。</p> <p>f.「在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解—植民地期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を中心に—」『朝鮮学報』第205輯(朝鮮学会)、2007年10月、pp.137-170。</p> <p>g.「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解の意義」『人間文化論叢』第10巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2008年3月、pp.1-10。</p> <p>h.「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として—」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文科学博士学位論文、2008年3月、pp.1-200。</p> <p>i.「柳宗悦の朝鮮伝統芸術研究—浅川伯教・巧兄弟との繋がりをを中心に—」『山梨英和大学紀要』第8号(山梨英和大学)2010年2月、pp.51-64。</p> <p>j.「浅川巧の異文化理解モデルに関する一試論」『山梨英和大学紀要』第9号、2011年2月、pp.53-68。</p> <p>k.「朝鮮美術展覧会の実相に関する一考察」『(韓国)東アジア日本学会』2011年10月、pp.431-453。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.「日韓文化交流のモデルとなる日本人・浅川巧」富士ゼロックス小林節太郎記念基金2004年研究調査報告書</p> <p>b.「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」お茶の水女子大学大学院「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・プログラム調査報告書</p> <p>c.宇都宮大学国際学部国際シンポジウム<多文化公共圏を考える—国際学の構築に向けて> パネルディスカッション「多文化公共圏における異文化理解モデルとしての浅川巧」2009年11月</p>
競争的資金採択課題	<p>a.2004年7月～2005年6月富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究題目「日韓文化交流のモデルとなる日本人浅川巧」100万円</p> <p>b.2005年7月～2006年6月富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究題目「日韓文化交流のモデルとなる日本人 浅川伯教・巧兄弟」100万円</p> <p>c.2005年12月～2006年3月お茶の水女子大学大学院<魅力ある大学院イニシアティブ: <対話と深化>の次世代女性リーダーの育成プログラム>研究題目「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」30万円</p>

学会等発表・役員参加	2001年 10月「浅川巧の民芸観—植民地期の朝鮮におけるその業績を中心に—」 第52回朝鮮学会全国大会 2002年 2月「浅川巧の朝鮮観」第30回インター・ユニ哲学研究会 2002年 10月「浅川巧と日韓文化交流」第3回韓国・朝鮮研究会 2002年 10月「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義」第53回朝鮮学会全国大会 2010年 10月「浅川伯教と朝鮮美術展覧会」第61回朝鮮学会全国大会
共同研究の実績・受託	年 月 年 月 年 月 特になし 年 月 年 月
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	特になし

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2008年 4月 入試委員会、入試実務委員会、国際交流委員会の委員(2011年3月まで)主に外国人留学生の入試と韓国の協定校の現地入試に関わってきたが、入試に限らず、入学後の両国の学生たちの積極的な国際交流にも繋がっていき、交換留学・短期研修などの学術交流にも発展していけるように努めた。 2009年 4月 FD委員会の委員(2010年3月まで) 授業アンケートの有効的な活用とFD研修会の効率化のために努めた。 2011年 4月 図書館運営委員会、紀要委員会の委員(2012年3月まで) 2011年 4月 宗教委員会の委員(2013年3月まで)、広報戦略部の委員(現在に到る)
アドバイザー活動実績	外国人留学生たちのアドバイザー(2008年4月～現在)、国際交流サークルの顧問(2012年3月～現在)、1年次・2年次の日本人学生と外国人留学生のアドバイザー(2012年4月～現在)として学習や進路に関する指導を行っている。オフィスアワーの設定、メールによる学生の申し入れ(日程や相談内容など)によって、一人一人の時間の都合や面談内容に対応できるように努めている。
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 韓国の日本大衆文化開放や日本の韓流ブームが始まり、各界の活発な交流が行なわれているが、こういう時にこそ両国のしっかりした歴史学習が必要である。両国民の歴史認識には曖昧かつ偏見的なものがいまだ残っていることが否定できないからである。ここで、韓国の文化と人々を愛し、韓国の人々に愛され、さらにいま日韓両国の多くの人々に敬愛されている日本人浅川伯教・巧兄弟の行跡を通して、当時の時代背景を再認識した。なお、当時、兄弟と付き合った韓国人の子孫たちがソウル市にある巧の墓を管理していることから、代々に受け継がれている歴史の明るい一面を共有し、歴史の学問領域に対する関心を高めるとともに、私自身の研

- 研究成果の公開の場となった。
- 2004年 2月「浅川巧—その人と業績—」日本コリア協会・大阪第46回総会記念講演
 - 2005年 7月「浅川巧—韓国教科書に載った日韓相互交流のパイオニア」
宇都宮大学教科書問題を考える講演会
 - 2006年 6月「回想の浅川巧」平成18年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話
 - 2008年 6月「浅川兄弟の異文化理解」平成20年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話
 - 2009年 5月 大阪市立東洋陶磁美術館テーマ展「浅川伯教が愛した韓国のやきもの」
記念講演会
 - 2009年 6月「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー—浅川巧の生涯」
浅川巧・山梨県立農林高等学校卒業100周年記念事業講演会
 - 2009年 11月「宇都宮大学ブランドを考える—宇都宮大学のさらなる発展と創造へ向けて—」
宇都宮大学創立60周年記念シンポジウム
 - 2010年 2月「浅川巧の眼と心」山梨県立美術館日韓交流エコアート特別シンポジウム講演
 - 2010年 6月「浅川兄弟研究の歩み」山梨平和ミュージアム山梨平和を願う戦争展記念講演
 - 2010年 9月「柳宗悦と浅川兄弟」我孫子市制40周年記念・雑誌「白樺」創刊百周年記念講演
 - 2012年 2月「浅川伯教・巧兄弟と朝鮮・韓国—ひと・自然との出会いから工芸研究まで—」
栃木県立美術館浅川巧生誕120周年記念展覧会記念講演

(2) 出前講座

人権と日韓交流をテーマとする講座で、外国人としての私の日本生活・体験と研究テーマの浅川兄弟にみる異文化＝韓国理解について話し、「共に生きる」ことについて参加者たちと議論した。

- 2006年 2月「開かれた韓国・朝鮮の今」東大和市長歴史講座5回
- 2008年 10月「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー」韮崎高等学校「個性を育てる
学習サポート」
- 2009年 9月「私の自分史を語る」東大和市長職員組合主催「人権&国際交流講座」
- 2011年 11月「神を信じ、平和を作り出した人々に学ぶ—浅川巧」山梨英和中学校
- 2012年 10月「韓流ブームっていつから？日韓関係を遡って見れてくるものは？」山梨県立甲府東高校

(3) 公開講座

この6つの講座では、博士論文『浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として—』において解明した兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質とその展開過程、そこから異文化としての朝鮮理解の方法論について話し、高校生から社会人までの講座参加者たちと、今後の日韓相互理解について議論し、歴史認識を高める内容とした。

- 2005年 2月「朝鮮の風土を愛し、朝鮮の土となった日本人～浅川巧」東京東大和市長公民館歴史講座：
人物史から見た韓国・朝鮮と日本の友好
- 2006年 10月「浅川巧の朝鮮観」浅川伯教・巧兄弟記念講座（浅川伯教・巧兄弟資料館）
- 2009年 1月「浅川兄弟にみる異文化理解」浅川伯教・巧兄弟記念講座（浅川伯教・巧兄弟資料館）
- 2011年 2月「浅川伯教・巧兄弟にみる異文化理解」NPO法人高麗博物館文化講座
- 2011年 8月「浅川巧と兄伯教—日本と韓国のマウメダリ(心の架け橋)」高麗美術館研究講座
- 2012年 10月「浅川伯教・巧兄弟について」公益社団法人甲賀・湘南人権センター
＜人権・平和・環境を考える講座＞

(4) 学外審議会・委員会等

- 2006年 4月 宇都宮大学大学院国際学研究所外部評価委員(2007年3月まで)

(5) その他

- 2005年 3月 書評「安達義弘—民芸運動による日韓共生の実現を求めて」『民藝』第627号、pp.58-59。
- 2005年 5月 書評「金希貞—朝鮮における柳宗悦の受容」『民藝』第629号、pp.56-57。
書評「金容菊—柳宗悦と朝鮮芸術論」『民藝』第629号、pp.57-59。
- 2005年 6月 書評「丁貴連—もう一つの旅行記—柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる」『民藝』第630号、
pp.57-58。

社会貢献活動	2005年	7月	書評「加藤利枝ー3・1独立運動後の朝鮮芸術観と柳宗悦」『民藝』第631号、pp.64-65。
	2005年	8月	書評「朴桂利ー柳宗悦と朝鮮民族美術館」『民藝』第632号、pp.47-48。
	2005年	9月	書評「李秉鎮ー光化門と柳宗悦」『民藝』第633号、pp.55-56。
	2005年	10月	書評「李秉鎮ー『白樺派』における他者としての<朝鮮>ー柳宗悦と浅川巧の場合」『民藝』第634号、pp.61-63。
	2006年	6月	随筆「浅川伯教・巧兄弟、柳宗悦の足跡を訪ねる韓国の旅を終えて」『民藝』第642号、pp.57-59。
	2006年	8月	随筆「松本民藝館ー日本の中の朝鮮美術・工芸品(15)」『民藝』第644号、pp.52-53。
	2006年	12月	書評「朴裕河著・佐藤久訳『和解のためにー教科書・慰安婦・靖国・独島』」平凡社、『南日本新聞』『信濃毎日新聞』など数紙(共同通信配信)
	2010年	8月	コラム「日韓理解の礎・浅川巧に学ぶ」『山梨日日新聞』
	2011年	4月	コラム「異文化理解モデルー日韓交流に橋を懸けた浅川兄弟」『聖教新聞』
	2011年	11月	テレビ山梨「ウツティ発！かけはし 浅川兄弟からのメッセージ」収録
	2012年	6月	テレビ山梨「ウツティ発！山梨も韓国が熱いセヨ！」収録
	2012年	9月	「浅川巧と兄伯教ー日本と韓国のマウメダリ(心の架け橋)」高麗美術館館報第93号(2011年8月研究講座抄録)
	2013年	1月	富士ゼロックス小林節太郎記念基金助成対象者OB・OG寄稿 「共に生きるー浅川伯教・巧兄弟に見る日韓両国の歩み、そして私の歩み」

成果と目標

専門的成果	<p>①これまでの異文化理解・グローバル化に関する問題点としては、①「歴史」認識と国民レベルの文化交流の具体的な提案がないことと、②学術的な位置づけが行われていないことが挙げられる。私の研究は浅川兄弟と柳宗悦が示した異文化理解の方法に含まれている科学・哲学・宗教・芸術的要素について、未発掘の資料を掘り起こして、理論的・学術的な検証を行った。この検証は、これまでの日韓関係のみならず、グローバル化における異文化理解・文化交流論に関する問題点の改善方法と将来への提案を含んでいることにおいても重要な意義がある。</p> <p>②私が実施してきた日韓両国におけるフィールドワークはこれまでの歴史研究の文献研究にみられる限界を克服する有意義かつ効果的な手法である。このような特色を有する私の研究は様々な認識の相違点を内包している日韓近代史研究の中にあつて、際立って日韓文化交流の「特殊性」「相互関係性」「積極性と実践性」を明示し、さらに単に日韓関係に限らず、人間と歴史の「連続性」「普遍性」にも視角を拡大させる可能性を持っている。</p> <p>③私の研究成果として提示できた浅川兄弟にみる新時代の「異文化理解モデル」は、日韓歴史教育における新たな視点を提供できるとともに両国の若い世代の交流に具体的なモデルを示すことができる。そして、本学が求めている「国際的な視点でものを考え」、「自らの立脚点をしっかりと見据えて地域社会と密接に連携しつつ」、「世界の平和と安定のために活躍する」人材の育成のための教育指導にも活かしていけることと確信している。</p>
専門的目標	<p>①これまで一貫して研究してきた浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の韓国＝異文化理解の方法は、今後の研究計画においても「多文化共生」「異文化理解」にとって実践的に生成・発展させていく可能性を持っている。また、今後の研究から予想される成果は、「浅川モデル」を東アジアから世界へ提唱できる「グローバルな文化交流モデル」として構築することである。これらは歴史研究及び人物研究、日韓の伝統文化研究分野における新たな視点を提供することができる。さらに、日韓近代史研究分野の活発な議論を促し、学会発表やシンポジウム、講演会、公開講座などにおける研究成果発信を積極的に行う。なお、科学研究費等の競争的資金・外部研究費の獲得のために、研究内容の独自性を図り、質の向上に努めていく。</p> <p>②文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに国際的な人材育成・教育指導を目指し、歴史的な背景から現在に至るまでの文化交流の現状を認識し、複眼的・</p>

<p>専門的目標</p>	<p>相対的探究ができるように指導していく。各科目に対応できる効率的な教材制作に取り組んでいく。</p> <p>③韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習のほか、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から手紙や作文作成などの表現力・応用力・コミュニケーション力を身につけて、グローバルな人材として育成することを目指す。</p> <p>さらに、協定校への短期研修・交換留学にもつながるようにレベルアップのための教授法を工夫し、教材制作にも力をいれていく。</p>
--------------	--

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
サヤナギ ノブオ 佐柳 信男	男	1970年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	社会心理学・教育心理学・発達心理学	
学歴	1989年	3月	埼玉県立松山高等学校 卒業	
	1989年	4月	国際基督教大学教養学部理学科 入学	
	1991年	4月	国際基督教大学教養学部教育学科へ転科	
	1993年	3月	国際基督教大学教養学部教育学科 卒業	
	1993年	4月	国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 入学	
	1995年	3月	国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 修了	
	2000年	4月	国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 入学	
	2007年	3月	国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 修了	
実務経歴	2002年	4月	NTT東日本関東病院附属高等看護学院 非常勤講師(至 2007年3月)	
	2006年	4月	国際基督教大学 COEリサーチ・アシスタント(至 2007年3月)	
	2007年	4月	国際基督教大学 COEリサーチ・フェロー(至 2009年3月)	
	2007年	4月	国際基督教大学教育研究所 研究員(現在に至る)	
	2007年	9月	実践女子大学教職課程 非常勤講師(至 2011年3月)	
	2008年	4月	明星大学人文学部 非常勤講師(至 2011年3月)	
	2008年	4月	明星大学通信教育部 非常勤講師(至 2011年3月)	
	2008年	4月	国際基督教大学社会科学研究所 研究所助手(至 2011年3月)	
	2009年	4月	山梨英和大学人間文化学部 非常勤講師(至 2011年3月)	
	2012年	4月	山梨英和大学人間文化学部 准教授(現在に至る)	
2012年	4月	山梨英和大学大学院人間文化研究科 准教授(兼任)(現在に至る)		
受賞歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所属学会	2001年	1月	アメリカ心理学会 Student Affiliate -2008, International Affiliate 2009-	
	2002年	4月	日本教育心理学会 会員(現在に至る)	
	2003年	4月	日本心理学会 会員(現在に至る)	
	2004年	4月	日本発達心理学会 会員(現在に至る)	
			同 ニュースレター委員会 委員(2008年1月~2009年12月)	
			同 ニュースレター委員会 副委員長(2009年1月~2009年12月)	
			同 国際研究交流委員会 委員(2011年1月~2012年12月)	
			同 ソーシャル・モチベーション研究分科会 理事(2011年4月~現在に至る)	
2009年	4月	日本子育て学会(現在に至る)		
		同 広報委員会 委員(2010年4月~現在に至る)		
2011年	4月	日本社会心理学会(現在に至る)		
2013年	4月	日本パーソナリティ心理学会(現在に至る)		
特免資格等	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生の自律性を育てることを目指して指導に取り組んでいる。「自律性」とは、自分にとって意義のある目標・目的を設定し、それを達成するために必要な手段を検討して実行することだと考える。日頃の教育でいえば、授業内容は学生に手段を伝達することに該当し、学生の理解度を確認しながら理解のしやすさと挑戦のバランスを図っている。目標・目的の設定についても、学生のニーズを確認しながら、教育内容としても十分のものになるよう心がけている。また、大学においては課外活動も自律性の育成に重要な役割を果たすと考えており、部活動やサークル活動の顧問を引き受け、活動を通して学生が有意義な教育的体験を得られるよう支援しているつもりである。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>「異文化交流の心理学」の受講生は毎年100名を越えるが、このような大人数の講義において受講生との双方向性を確保するために、独自のコメントシートを作成して使用している。受講生のコメントを熟読し、次回の授業で理解不足の点を補足し、理解の広がりにつながるような質問や疑問にも答えることで学生の興味・関心を把握し、さらにそれに基づいて授業計画へ適宜修正を加えている。この他、インターネット上で公開されている授業内容と関連するビデオを適宜紹介することで授業内容への興味を喚起するとともに理解を補足し、興味を持った学生がさらに深く学べるよう授業内容と関連する書籍も多く紹介している。受講生による授業評価も高く、出席率も最後まで9割前後を維持していることから、狙いはある程度成功していると思われる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>多くの授業において市販されている教科書も利用しているが、独自の補助教材も作成している。講義においてはパワーポイントを利用し、文字情報だけでなく、オーディオ、画像、ビデオなどのマルチメディアを活用している。また、その日のレジュメには授業内容の他に、授業内容と関連した発展学習のための書籍やホームページを紹介し、受講生が理解度を確認するために利用できる練習問題も掲載している。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度:</p> <p>【学部】基礎ゼミナールⅠ, 心理学実験演習, 社会心理学, 異文化交流の心理学, 専門ゼミナール, 卒業研究</p> <p>【大学院】心理学研究法特論, 心理統計法特論, 社会心理学特論, 修士論文</p>
代表的シラバス	<p>異文化交流の心理学</p> <p>【概要】「異文化」と聞いたとき、多くの人は“外国”を思い浮かべることでしょ。しかし、“異文化”の本質はどういうことでしょうか。たしかに、生まれ育った国が違う者どうしは、感じ方や価値観が異なる“異文化”のことが多いでしょう。しかし、近所で育った者どうしでも感じ方や価値観が違う場合もあります。これも“異文化”と呼べるでしょう。逆に異国人どうしでも同じ文化を共有していることがあります。そう考えると“文化”は、必ずしも国や地域に縛られるものではなく、どんな集団でも持っているものだとして理解した方が自然です。いずれにしても、“文化”の異なる者どうしは交流する際に誤解が生じやすく、そのために様々なトラブルが起きることもあります。講師は日本と海外で育ったバイリンガルかつバイカルチュラルで、プロの翻訳や通訳の経験も長く、個人的な経験も交えて講義する予定です。</p> <p>【到達目標】この授業では、次の4点を到達目標とします。①心理学において“文化”が意味することが何かを理解し、授業の外でも人に説明できるようになる。②特に、“文化差”と呼ばれるものの本質について考えられるようになり、人の様々な振る舞いのどこまでが“文化”によるもので、どこからがそれ以外の要因によるものなのか、冷静に説明できるようになる。③差別、偏見、カルチャーショックなど、異文化の接点で生じる問題に関する心理学的な考え方を理解し、これらの問題に自分としてどのように行動できるかを討論できるようになる。④これらの知識を踏まえ、“よりよい異文化交流”のための条件についての自らの考えを形成し、行動に移せるようになる。</p> <p>心理学では、異文化交流の諸問題について研究が必ずしも十分に進んでいるとは言えません。異なる文化の者どうしが相互理解に基づいて交流するために必要な条件について一緒に考えま</p> <p>【授業計画】(概略)</p> <p>“人間らしさ”および“文化”を形成する要因とは？: 環境と遺伝</p> <p>心理学における“文化”の考え方</p> <p>人間の発達における普遍性と文化差</p> <p>道徳性発達の異文化交流へのヒント</p> <p>ステレオタイプと偏見</p> <p>偏見を生じさせ、維持する要因</p> <p>差別: 差別意識, ヘイトクライム, 潜在的差別</p> <p>偏見・差別を受ける側の心理</p>

シラ 代 表 的 バ ス	カルチャーショックと適応 より良い異文化交流のために
教 育 改 善 活 動	毎回の授業において独自に作成したコメントシートを配布している。質問では、①当日の授業内容の確認、②当日の授業内容についてわかりにくかった箇所、および③授業内容と関連して現在興味を持っているトピックを尋ねている。 ①と②については、授業内容の教授方法が適切だったかどうかを確認する役割を果たす。伝わり方が不十分だった場合や受講生の誤解が多い場合は、次回の授業において補足をするるとともに、次年度以降の授業内容にも修正を加える。 ③については、受講生の興味・関心を確認する役割を果たす。受講生から見てより関心の持てるトピックやエピソードの発掘や、より受講生が興味を持てる伝え方の考案に役立っている。
教 育 能 力 に 対 す る 評 価	(1) 学生による授業評価 授業評価アンケートでは、どの授業のほぼすべての評価項目において高い評価を得てきた。自由記述の内容も概ね好評である。 (2) 同僚教員等による授業評価 これまで同僚教員による評価を受けたことはなく、今後の課題である。

研究業績

研究の特徴	自律的な動機づけを促進する要因について研究している。これまでは特に小中学校および学習塾における目標構造が学習動機づけに与える影響を中心に取り組んできた。現在は、引き続き学習塾の学習動機づけへの影響についての共同研究に参加しているほか、学業に対する自律的動機づけの観点から留学生の適応についての個人研究や、発展途上国での開発援助事業における被援助者の行動変容についての研究に取り組んでいる。
研究経歴	2004年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2004年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(50千円) 2005年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2005年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(300千円) 2006年 国際基督教大学COEリサーチ・アシスタント 小学生の学習における自律的動機づけを促進する要因としてのコンピテンスと自律性支援に関する研究に従事(至 2007年) 2007年 国際基督教大学COEリサーチ・フェロー 小・中学生の学習塾通いが学習動機づけにおよぼす影響に関する研究に従事(至 2009年) 2007年 国際基督教大学教育研究所研究員 大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究に従事(現在に至る) 2008年 研究課題『塾へ通うことの個人的・社会的効用』で2008年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠:150千円) 2009年 研究課題『学校教師および塾講師の比較研究:サービス受給者と経営者の視点を通して』で2009年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠:150千円) 2012年 山梨英和大学人間文化学部准教授 学習塾の学習動機づけへの影響に関する研究、大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究、留学生の異文化適応に関する研究についての研究に従事(現在に至る) 2013年 国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究:中南米における事例を中心に」において研究分担者(現在に至る)
研究実績	(1) 著書(いずれも分担執筆) a. 佐柳信男.(2008). 第2章 エフェクタンスと自律性. 小谷英文(編)『ニューサイコセラピーグローバル社会における安全空間の創成(ICU COEシリーズ第3巻)』. 東京:風行社, 29-46. b. 佐柳信男.(2013予定). 第3章 Whiteの視点:コンピテンスとエフェクタンス動機づけ. 宮本美沙子・山内弘継(監), 寺澤美彦・田中あゆみ・黒石憲洋(編)『ヒューマン・モチベーション(理論編)』. 京都:ナカニシヤ出版.(印刷中) (2) 学術論文(単著もしくは第一著者であるもののみ) a. 佐柳信男・市川健.(2012). 学習動機づけと学習行動との関係を調整する要因としてのマインドフルネス. ソーシャル・モチベーション研究6, 28-39. b. 佐柳信男.(2009). 学習塾通いが小学生の勉強に対する動機づけにおよぼす影響. 国際基督教大学学報 I-A教育研究51, 55-63.

研究実績	<p>c. 佐柳信男. (2007). 日本の小学生の勉強における認知された因果性の所在を測定する質問紙尺度の作成. ソーシャル・モチベーション研究4, 63-82.</p> <p>d. 佐柳信男. (2007). 自律性を促進・調整するコンピテンスの役割: 小学生の勉強行動と動機づけに着目した実証的検討. 国際基督教大学教育学研究科提出博士論文.</p> <p>e. 佐柳信男・小谷英文・川村良枝. (2005). 児童の日常課題に対する認知された因果律の所在及び児童-教師関係. 国際基督教大学学報 I-A教育研究47, 67-86.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>【報告書】</p> <p>a. 石川与志也・中村有希・佐柳信男・高田毅・花井俊紀. (2011). 第10章心的安全空間測定法. COEモノグラフ, 86-97.</p> <p>b. 佐柳信男. (2008). 小学生の勉強における自律性を高める教師の働きかけ(第30回ICU教育セミナー研究報告). ICU教育セミナー30周年記念誌, 107-110.</p> <p>c. 高崎文子・佐柳信男・綾千晶. (2007). 「努力」の記述から読み取る日中の動機づけ比較. 【学術誌編集】</p> <p>a. 『社会科学ジャーナルCOE特別号』(国際基督教大学社会科学研究所発行)編集助手: 2006年4月~2008年3月</p> <p>b. 『国際基督教大学21世紀COEプログラム 最終報告書』編集助手: 2007年4月~2008年3月</p> <p>c. 『ソーシャル・モチベーション研究』(日本発達心理学会 Social Motivation研究分科会発行)編集委員(2008年4月~現在に至る), 編集委員長(2012年4月~現在に至る)</p> <p>【学術的な通訳】</p> <p>a. 早稲田大学公開講演. (2008年10月, 早稲田大学). アンドリュー・エリオット(Andrew Elliot)ロチェスター大学教授講演「Achievement Goals: Competence and Valence(達成目標: 有能感と誘発性)」の通訳.</p> <p>b. 日本臨床心理士会主催『心理専門職の国資格に関するシンポジウム』. (2006年10月, 東京大学). ①国外招待講演者の講演の通訳, ②日本人講演者の講演内容を招待講演者のために英訳, ③シンポジウムの成果を評価する「評価会議」における討議の通訳, ④通訳チームの指揮・指導.</p> <p>c. 第17回日本集団精神療法学会. (2000年3月, 安田生命アカデミア). 特別ワークショップ「システム・センタード・グループセラピー」, エリック・シュナイダー(Eric Schneider)によるスーパービジョンの通訳を担当.</p> <p>d. International Association of Group Psychotherapy 4th Pacific Rim Regional Conference. (1999年9月, 安田生命アカデミア). 国際集団精神療法学会サバー・ラストムジー(Sabar Rustomjee)会長の招待講演およびワークショップの通訳を担当.</p> <p>e. 日本発達心理学会2013年度国際ワークショップ「言語と心の理論のインターフェイス」(2013年8月, 東京学芸大学)の通訳</p> <p>【学術的な翻訳】</p> <p>a. Pepperberg, I. M. (2008). <i>Alex and Me: How a Scientist and a Parrot Uncovered a Hidden World of Animal Intelligence - and Formed a Deep Bond in the Process</i>. New York: Harper Collins. (ペパーバーグ, I. M. 佐柳信男(訳). (2010). アレックスと私. 幻冬舎.)</p> <p>b. Atalay, B. (2004). <i>Math and the Mona Lisa: The Art and Science of Leonardo da Vinci</i>. Washington D. C.; Smithsonian Books. (アータレイB. 高木隆二・佐柳信男(訳). (2006). モナ・リザと数学-ダヴィンチの芸術と科学. 京都: 化学同人.)</p>
	競争的資金採択課題
学会等発表・役員参加	<p>【学会発表】(最近3年間の単独発表もしくは第一発表者の業績のみ)</p> <p>2013年 8月 佐柳信男. アジア人留学生の大学への適応(1): 認知された教員からの支援および学習動機づけとの関連についての予備的検討. 日本教育心理学会第55回総会ポスター発表.</p> <p>2012年 11月 佐柳信男・野崎秀正・黒石憲洋. 大学生における通塾経験と学習動機づけの関連. 日本教育心理学会第54回総会ポスター発表.</p> <p>2012年 3月 佐柳信男. 日常的な文脈間移動と動機づけ: 家庭・教室・学習塾における目標構造の影響とその限界. 日本発達心理学会第23回大会ラウンドテーブル「移行・越境する学習を「動機づけ」はいかに説明するのか」話題提供</p> <p>2011年 10月 佐柳信男・黒石憲洋. 家庭における目標構造と学習塾・稽古事通いの関連. 日本子育て学会第3回大会ポスター発表.</p>

学会等発表・役員参加	2011年	9月	佐柳信男. 学習塾, 家庭, 教室での目標構造の影響の比較. 日本感情心理学会第19回・日本パーソナリティ心理学会第20回合同大会 パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会主催シンポジウム「授業場面以外の文脈から捉えた学習意欲・学習行動」話題提供.
	2011年	7月	佐柳信男. 自己決定理論における動機づけ概念は行動を予測するのか? (1): 大学生を対象とした2時点縦断的調査による検討. 日本教育心理学会第53回総会ポスター発表.
	2011年	3月	佐柳信男・黒石憲洋. 動機づけの発達に関する縦断的検討: 小中学生における家庭, 教室, および塾の影響. 第22回日本発達心理学会大会ポスター発表.
	2010年	10月	佐柳信男・黒石憲洋. 学習塾と稽古事の学習動機づけへの影響(1): 稽古事と学習塾の掛け持ちによる影響の検討. 日本子育て学会第2回大会ポスター発表.
	2010年	9月	佐柳信男・黒石憲洋. 学習塾における達成目標構造の学習動機づけへの影響: 小・中学生における縦断的検討. 日本心理学会第74回大会ポスター発表.
	2010年	8月	佐柳信男・黒石憲洋. 小・中学生における学習塾通いと動機づけの関係(1): 通塾の動機づけへの影響に関する縦断的検討. 日本教育心理学会第52回総会口頭発表.
	2010年	3月	佐柳信男・黒石憲洋. 通塾経験が学習動機づけにおよぼす影響(2): 小・中学生における影響の違いの検討. 第21回日本発達心理学会大会ポスター発表.
共同研究の実績・受託	2005年	4月	「行為の記述・推測・判断における文化的要因: 国際比較と国内変動の総合的研究」平成17~18年度文部科学省科学研究補助金(基盤B, 研究代表者: 東洋)における研究協力者(至 2007年3月)
	2013年	4月	国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究: 中南米における事例を中心に」における研究分担者(現在に至る)
大学院生指導	山梨英和大学大学院人間文化研究家臨床心理学専攻 修士論文担当教員(2012年度~現在に至る) 2012年度提出指導論文題目『心配の個人差と精神的健康の関係: 心配の内容と時間の検討を通して』		
研究能力に対する評価	これまでの小中学生における学習動機づけの研究では, 信頼性の高い質問紙尺度を開発し, それを用いて自律的動機づけの促進要因を明らかにする研究で一定の成果を上げたと考えている。また, その成果を応用して実施してきた大学生を対象とした学習動機づけの研究でも一定の成果が上がっている。一方, これらの成果はまだ主要な学会誌に採択されておらず, 外部の競争的研究費にも応募はしているものの未採択であることから, 今後はこれらの成果がより広く評価を受けるためにより質の高いデータを得ることが課題である。 国際協力機構JICA研究所の研究プロジェクトへの参加は, 研究が一定の評価を得たためだと考えている。新たなフィールドで実績をあげていくことが今後の課題である。		

サービス活動業績

学内委員会等活動実績	2012年	4月	山梨英和大学人間文化学部 心理社会コースコーディネーター (現在に至る)
	2013年	3月	山梨英和大学セキュリティ・ポリシー ワーキング・グループ(現在に至る)
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績	着任した2012年度は卒業研究で2名を指導し, 以下題目の卒業論文が提出された。『血液型ステレオタイプにおける外集団均質化効果について』『青年期におけるSNS利用状況とアイデンティティの関連性: 全般的な傾向と性差と文化差の検討』 2013年度は基礎ゼミナール I で1年生を20名, 専門ゼミナールで3年生を6名, 卒業研究で4年生を2名指導している。		

後進育成活動実績	日本発達心理学会ソーシャル・モチベーション研究分科会理事として、若手研究者の発表・育成の場として月例の研究会および運営委員会に参加(2012年4月～現在に至る)
社会貢献活動	<p>(1)講演会 2013年 6月 山梨県私立中学高等学校PTA連合会 平成25年度PTA研修会において講演 「自発的なモチベーションを引き出すには」</p> <p>(2)出前講座 2012年 6月 山梨英和高等学校にて大学模擬授業『道徳ってどういうこと? -心理学の考え方-』</p> <p>(3)公開講座 2013年 5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『心理学入門講座』</p> <p>(4)学外審議会・委員会等 年 月</p> <p>(5)その他 2007年 4月 ICU教育セミナー世話人会 世話人(現在に至る) 2010年 4月 国際基督教大学同窓会 評議員(現在に至る) 2010年 8月 国際基督教大学第二男子寮OB会 会長(現在に至る) 2013年 7月 YBSテレビ『子育て日記』MC(現在に至る)</p>

成果と目標

専門的成果	<p>① 従来、学業においては自律性支援的な働きかけが一様に自律的動機づけを促進するとされてきたが、コンピテンス(習熟度)の低い者には自律性支援は効果が薄く、むしろコンピテンスを高める支援が必要であることを示唆する実証的資料を得た。</p> <p>② 学習塾の動機づけへの影響についてはこれまでに実証的な研究は行われていなかったが、学習塾通いが動機づけに大きな影響を与えておらず、むしろ家庭の影響が大きいとの実証的資料を得た。</p> <p>③ 小学生における内発的動機づけの発達過程についての実証的資料を得た。</p>
専門的目標	<p>① 教育およびその他の文脈における自律的動機づけの促進要因をさらに明らかにすること。特に、コンピテンス(習熟度)の低い対象における自律的動機づけの促進要因の究明が大きな課題である。</p> <p>② 自律的動機づけの促進に関連する心的メカニズムの究明。</p> <p>③ 実践的な志向を持つ研究者の育成。</p> <p>④ 開発援助事業に資する動機づけ仮説の提出および検証。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
タカハシ ヒロコ 高橋 寛子	女	1961年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	文学修士	専門分野	臨床心理学、教育臨床(学生相談)	
学歴	1979年 3月 神奈川県立川和高等学校 卒業 1980年 4月 武蔵大学人文学部社会学科 入学 1984年 3月 武蔵大学人文学部社会学科 卒業 1987年 4月 上智大学カウンセリング研究所 専門カウンセラー養成課程 入学 1989年 3月 上智大学カウンセリング研究所 専門カウンセラー養成課程 修了 2000年 4月 大正大学大学院文学研究科臨床心理学専攻修士課程入学 2002年 3月 大正大学大学院文学研究科臨床心理学専攻修士課程修了 修士(文学) 2010年 4月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程入学 2013年 3月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程単位取得退学			
実務経験	1984年 3月 株式会社 キッツ 入社 1987年 2月 株式会社 キッツ 退社 1987年 4月 東京家政大学 学生相談室 専任カウンセラー (2010年3月まで) (2005年4月～2010年3月 保健センター学生相談室 主任カウンセラー) 2000年 4月 東京家政大学臨床相談センター 相談員 (兼務、2002年3月まで) 2006年 4月 日本精神技術研究所 フォーカシング個別指導担当 (現在に至る) 2009年 6月 ほづみ教育心理研究所 池袋カウンセリングセンター カウンセラー (現在に至る) 2010年 4月 法政大学 学生相談室 心理カウンセラー (2013年3月まで) 2010年 4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科兼任講師「臨床心理実習Ⅰ」「臨床心理実習Ⅱ」(2013年3月まで) 2010年 4月 京都大学大学院教育学研究科ティーチングアシスタント「心理テスト実習」(2013年3月まで) 2011年 7月 最高裁判所 司法研修所 カウンセラー (2013年3月まで) 2012年 4月 高千穂大学 人文科学部 児童教育学科 兼任講師 「カウンセリング論Ⅰ」「カウンセリング論Ⅱ」(2013年3月まで) 2013年 4月 山梨英和大学人間文化学部 准教授 (現在に至る) 2013年 4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科 准教授 (兼任) (現在に至る)			
受賞歴	2006年 5月 日本学生相談学会 奨励賞 (実践活動奨励賞) 年 月 年 月			
所属学会	1987年 4月 日本カウンセリング学会 正会員(2012年まで) 1987年 4月 日本人間性心理学会 正会員(現在に至る) 1988年 4月 日本学生相談学会 正会員(現在に至る) 1992年 4月 日本心理臨床学会 正会員(現在に至る) 1993年 4月 日本臨床心理士会会員(現在に至る) 1998年 4月 日本フォーカシング協会 会員(現在に至る) 2000年 4月 (米) The Focusing Institute 会員(現在に至る)			
特免資格等	1984年 3月 中学校教諭1級・高等学校2級教諭普通免許状(社会科) 1993年 3月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会/第3754号) 1996年 3月 認定カウンセラー(日本カウンセリング学会/第0166号) 2000年 2月 フォーカシング・トレーナー ((米)The Focusing Institute) 2003年 6月 大学カウンセラー(日本学生相談学会/第040070号)			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生の主体性・自律性を育て育む教育を試みている。それは、自身の長年の心理臨床実践に基盤を置く人間理解ともつながるものである。殊に、青年期という過渡期にある学生たちの知ること・学ぶこと・理解することへの導入は、体験に根ざし実感の伴うものでなければならぬと考えている。したがって、学部生の導入期の学びも研究を深める上でも、かれらの体験過程を重視した授業を展開していく。実感からの自己理解や、自己表現を深めることにより、学生たちが真の自信を得て他者や社会とつながることができるよう学びの機会を提供したい。さらに大学院生に対しては、臨床実践を生かした授業展開や研究指導を試みながら、他者の痛みに深く共感することができ、さらに社会にあって他者とつながり協働していくことのできる高度な専門家の育成を目指している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 ①学部1年生の導入のための基礎ゼミナールでは、実践的グループワークをふんだんに取り入れることで、体験を通しての授業に取り組んでいる。そこから身体的実感の賦活、他者とのコミュニケーション、自己表現能力の向上を図るとともに、情報教育とも連動しながら、将来社会に出ていくために必要とされる多面的なコミュニケーション能力の育成を行なっている。また、毎回授業後に受講生自身の気づきや感動したことへの記述を促すことによって、生きた体験を重視し、各自が自信を得られるよう配慮や工夫を行なっている。 ②講義科目においては、心理臨床実践に基づく自身の体験も織り込みながら、映像や図などを用い視覚的にもわかりやすい授業を行なっている。毎回授業後にはリアクションペーパーを用い、双方向のコミュニケーションを図りながら学生からの質疑にも対応している。 ③大学院の授業では、特に実践を重んじるとともに、将来臨床心理士として必要な人間的基盤づくりを図るための体験学習を積極的に取り入れている。個別のテーマや疑問を把握するために、授業後毎回レポートの提出を課すとともに、心理臨床的個別指導の場であるスーパーヴィジョンにおいても、知的側面のみならず情緒的側面での配慮もきめ細かく行いながら、指導にあたっている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高橋寛子. 2012. セラピストTAEによる実践から研究への推進過程 —グループセラピストTAEを巡って— 第1回TAE質的研究国際シンポジウム口頭発表. ・高橋寛子. 2011. 「セラピストTAEの心理臨床実践研究への適用とその意義」. 日本ジェンドリン学会第1回大会ラウンドテーブル口頭発表. ・高橋寛子・得丸さと子. (2011). セラピストの「実践知」を言葉に開く —「象徴的定向」(Symbolic-Orientation)が創出されるまで—. 日本人間性心理学会第30回大会口頭発表. <p>大学院における事例研究法などに応用できるあ新たな質的研究法としてTAE(Thinking At the Edge)に関する研究を行い、学会において発表した。</p>
担当授業科目	<p>2013年度 基礎ゼミナールⅠ、専門ゼミナール、宗教とカウンセリング、ヒューマンケア、人間関係論、卒業研究 (以上、学部)臨床心理基礎実習、臨床心理事例研究、修士論文(以上、大学院)</p>
代表的シラバス	<p>今年度初めて開講された「宗教とカウンセリング」は、山梨英和大学の建学の精神に基づいた科目として、他大学には見られない独自の科目として位置づけられている。「ヒューマンケア」などの他の関連科目とも連動させながら、人間理解を深めるために基本的な概念や知識とともに、カウンセリングの実践とも連動させ履修計画が立てられている。当該科目においては、キリスト教とカウンセリングの歴史を辿ることからカウンセリングと宗教との関係について学び、カウンセリングの諸相について実際の心理臨床事例にも触れながら理解を深めていく。それらによって、① 宗教とカウンセリングの歴史を知り、②人と宗教性との関わりについて理解を深め、③信仰やパーソナリティの成熟について、自分自身のテーマと関連づけて考えを述べるができる、などの到達課題を設定している。講義では、宗教心理学の知識を深めつつ、実際のカウンセリング事例も踏まえながら、スピリチュアリティや喪失のテーマについて検討し深めていく。無意識レベルにおいて人がいかに「宗教性」との関わりの中で生きているのかについて捉え、日常の学校生活や現代社会の諸問題とも関連づけながら、受講生自らが体験と連動させ、実感をもって考えを深めていくことができるよう履修計画が立案されている。</p>
教育改善活動	<ul style="list-style-type: none"> ・FD研修への参加: 2013年8月、平成25年度のFD推進会議(新任専任教員向け)に参加を予定している。模擬授業や、講義科目のシラバス作成・立案、授業到達目標の設定の仕方や授業への工夫などについて体系的に学ぶ機会を積極的に捉えつつ活かしていくこと、さらに、学内において年間を通して定期的に開催されるFD研修会へも積極的に参加し、日常の授業へ還元させていこうと努めている。 ・基礎ゼミナールにおける様々な情報共有や授業への工夫の共有: 学部1・2年生の基礎的スタディスキルやコミュニケーション能力、さらには表現力を高めるために、様々なグループワークへの工夫や、国語能力の育成、またIT/情報教育との連動などについて、他の教員と連動し協力しながら情報共有をはかり、教員としてのスキルアップを共に担っている。 ・大学院の事例検討の持ち方、スーパーヴィジョンのあり方などについて、他大学の実践例や効果的授業形態などについての情報を入手し、他の教員と協働しながら、教育改善にあたっている。

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度着任したばかりであり、授業評価は現時点では明らかではないが、FDにおける授業アンケートを参照しながら学生の期待に応え得る授業づくりを目指していきたい。なお、これまでの他大学における授業評価は学部授業 ・大学院演習授業において概ね高い評価を得ている。 <p>今年度より、教育実践を開始したことから、現時点ではまだその評価を得ることができていない。今後に向けて努力を重ねたい。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>心理臨床において生じるプロセスについて、とくに体験過程理論(Gendlin.E.T.)からの考察を試みる実践的研究を行っている。また具体的技法としての「フォーカシング」を軸として、暗在性(the implicit)へのかかわりから、心理臨床事例研究、心理臨床の基礎教育、体験の言語化や研究法における応用について検討するとともに、自ら心理臨床実践に励んでいる。長年携わってきた教育臨床現場での心理臨床実践を捉えつつ、それらの知見をどのように大学教育へ還元していくか、大学教育に向けての提言や提供できる方策についても研究を深めている。殊に、臨床心理実践を大学教育や実践的研究と連動させ、知的理解にとどまらない豊かな人間性・主体的自己感・身体的実感を備えた心理臨床実践者の育成のために必要とされるシステムづくり、さらにセラピスト・フォーカシングを用いた対人援助職(教員、保育士、福祉職、看護職)への支援活動についても実践と共に研究を行っている。</p>
研究経歴	<p>1987年～2010年 ・大学学生相談専任カウンセラーとして、主に青年期の教育臨床における心理臨床実践と事例研究を行ってきた。また、個別支援にとどまらず、学内教職員にむけての啓蒙教育活動や、精神的健康における予防活動、学生支援システムの構築に向けて、さまざまな実践と研究とを積み重ねてきた。さらに、他職種(看護職、福祉職、教員)との連携システムづくりにおいて、特にキャンパス全体を視野に入れた実践活動を行い、それらについて研究発表や論文執筆を行ってきた。</p> <p>2010年～2012年 ・京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 臨床実践指導学講座 に在籍し、長年の心理臨床実践を基軸としながら、臨床心理士養成に関わる諸問題について、特にスーパーヴィジョン・事例検討について研究を行ってきた。また、心理臨床事例の研究法に関する研究として、新たな質的研究としてのTAE(Thinking At the Edge)の適用について、実践研究を進め、論文として公刊することに努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学学生相談室心理カウンセラーとして、学生相談のシステムづくり、他職種との協働、発達障害に関する学生支援、学内啓蒙活動などに関与し、学生の主体的自己感を育て、身体的実感を賦活させるための数々の試みを推し進めてきた。これら実践的研究は、学生相談を体系づけ、現場からの理論化を図る基盤となり、論文や著書において長年の研究成果を発表するとともに、博士論文に向けての骨子を明確にし、体形的研究の基盤づくりが行われた。 <p>2013年～ ・山梨英和大学専任教員として、これまでの教育臨床での実践と研究とをさらに推し進め、学部教育や大学院の心理臨床実践教育へと連動し発展させていくための研究活動を展開している。</p>
研究実績	<p>(1) 著書(いずれも分担執筆)</p> <ol style="list-style-type: none"> 高橋寛子(2012) 第6章 学外実習・留学・インターンシップー教育機関としての責任と個人の学ぶ権利ー 『学生相談と発達障害』 高石恭子・岩田淳子編著 学苑社115-135. 高橋寛子(2010) 第5話 傷みの通過点 『12人のカウンセラーが語る12の物語』 杉原保史・高石恭子編 ミネルヴァ書房 95-117. 高橋寛子(2009) 風景構成法の事例研究第1節「ある摂食障害女性の心理療法過程」 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』 皆藤章編 ぎょうせい 155-181. 皆藤章・高橋寛子・川崎克哲(2009) 風景構成法の事例研究 第2節 ケースカンファレンス 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』 皆藤章編 ぎょうせい 182-202. 高橋寛子(2004) 『カウンセリング大事典』 小林司編 新曜社 「イラショナル・ビリーフ」「内潜的条件づけ」「キャリアガイダンス」「結婚」の項目を担当 <p>(2) 学術論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 高橋寛子(2013) 学生相談における喪失との関わりー親との死別体験を扱った複数事例からの実践的考察ー 京都大学大学院教育学研究科紀要第59号 457-469. (査読あり)

研究実績	<p>b. 高橋寛子 (2013)「見えるもの」への関わりと「見えないもの」への関わり —学生相談カウンセラーの「身体的実感」を手がかりとして— 法政大学学生相談室年報第44号 38-46.</p> <p>c. 高橋寛子 (2012) 心理臨床における曖昧さとそこにとどまる能力— ‘Negative Capability’ と ‘暗在性’ (The Implicit)からの考察— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第16号 65-76.</p> <p>d. 高橋寛子 (2012) 身体的実感と自律性とを育む学生相談 —自己臭を訴える女子学生の喪失へのかかわりから— 学生相談研究第33巻1号 1-12.(査読あり・原著)</p> <p>e. 高橋寛子 (2011)セラピストの「実践知」を言葉へと開く試み —「TAE」(Thinking At the Edge)の心理臨床実践研究への適用— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 15号 69-82.</p> <p>f. 高橋寛子 (2007)私の学生相談—21年間の歩みを振り返って— 学生相談研究 第28巻2号 143-156.</p> <p>g. 上野容子・山本洋子・高橋寛子 (2005) 学生相談の歩みと今後の展望 東京家政大学研究紀要第45集(1)人文社会科学 高橋寛子執筆分 192-196.</p> <p>h. 高橋寛子 (2003)学生相談における“つなぐ場”としての役割 —対人関係に障害をもつ学生とのかかわりから— 学生相談研究 第23巻31号 253-263. (査読あり)</p> <p>i. 高橋寛子 (2003) 現実的な問題と並行して内的課題に取り組んだ女子学生の事例 —さまざまな“支え”を通して— 大正大学臨床心理学専攻紀要 第6号 35-55.</p> <p>j. 高橋寛子 (1992) 女子学生におけるSelf-Imageと進路成熟との関連に関する一研究 上智大学カウンセリング研究所紀要第14号 8-21.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>【報告書】</p> <p>2012年 3月 『事例から学ぶ技法と理論』. 第49回全国学生相談研修会報告書</p> <p>2011年 3月 『コミュニケーション能力を高める心理教育』. 第48回全国学生相談研修会報告書. 28-29.</p> <p>2010年 3月 『フォーカシングの基礎と応用』. 第47回全国学生相談研修会報告書. 34-35.</p> <p>2010年 12月 「社会人大学院生から」. 京都大学大学院教育学研究科ニュースレター.</p> <p>2009年 3月 『certification weeklong に参加して』. 日本フォーカシング協会ニュースレター.</p> <p>2009年 3月 『北里大学薬学部学生相談室開室20周年に寄せて』. 北里大学薬学部学生相談室活動報告書20周年記念号. pp. 13.</p> <p>2009年 3月 『事例から学ぶ技法と理論』. 第46回全国学生相談研修会報告書. 48-49.</p> <p>2009年 3月 教員と学生相談室との連携事例について. 東京家政大学保健センター報告書第2号. 9-12.</p> <p>2008年 3月 『インテーク』. 第45回全国学生相談研修会報告書. 28-29.</p> <p>2008年 3月 高橋寛子・青井純子・鈴木陽子. 面接・受付・コミュニティルームの連動と協働. 東京家政大学保健センター報告書第1号. 47-50.</p> <p>2008年 3月 学生支援における学内連携と協働に向けて. 東京家政大学保健センター報告書第1号. 9-17.</p> <p>2003年 3月 学生相談室と教職員との連携について—狭山キャンパスにおける事例と教員へのアンケート調査から—. 東京家政大学保健センター学生相談室報告書第2号. 20-28.</p> <p>【国際会議発表、学術論文査読】</p> <p>2013年度 『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会誌) 事例研究論文1論文の査読担当。</p> <p>2010年度 『学生相談研究』(日本学生相談学会誌) 事例研究論文、1論文の査読担当。</p> <p>2008年度 『学生相談研究』(日本学生相談学会誌) 事例研究論文、2論文の査読担当。</p>
	競争的資金採択課題

学 会 等 発 表 ・ 役 員 参 加	【学会発表】	
	2013年 3月	木下直紀・天下谷恭一・堀川聡司・河野一紀・日下紀子・水野綾香・中藤信哉・坂井新・○高橋寛子・田中久美子・山口昂一。(2013). 精神分析的心理療法の効果研究についての展望. 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム ポスター発表.
	2012年 12月	高橋寛子.(2012).セラピストTAEによる実践から研究への推進過程 ―グループセラピストTAEを巡って―. 第1回TAE質的研究国際シンポジウム口頭発表.
	2012年 9月	坂井新・○高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑.(2012). “生きた体験”に基づく現場実習指導の在り方 ～心理臨床実践指導者へのインタビュー調査から考える～.日本心理臨床学会第31回大会口頭発表.
	2011年 12月	高橋寛子.「セラピストTAEの心理臨床実践研究への適用とその意義」.日本ジェンドリン学会第1回大会ラウンドテーブル口頭発表.
	2011年 10月	高橋寛子・得丸さと子.(2011). セラピストの「実践知」を言葉に開く ―「象徴的定位置」(Symbolic-Orientation)が創出されるまで―. 日本人間性心理学会第30回大会口頭発表.
	2011年 5月	高橋寛子.(2011). 多彩な身体症状を訴える女子学生との面接過程 ―母との一体感からの解放―. 日本学生相談学会第29回大会ワークショップ ―実践から研究へ―事例口頭発表.
	2009年 5月	高橋寛子.(2009)コミュニティルームを拠点とした学生支援活動の変遷と意義. 日本学生相談学会第27回大会ワークショップ事例発表
	2008年 1月	高橋寛子.(2008). 様々な身体症状を訴える女子学生の事例. 第41回全国学生相談研究会議 事例発表
	2007年 10月	高橋寛子・山本洋子・青井純子.(2007). 新入生に対するメンタルヘルスチェックリストの結果分析～女子学生の19年間の変化について～. 第45回全国大学保健管理研究集会ポスター発表.
	2007年 5月	高橋寛子.(2007). さまざまな自傷行為をくり返しながら成長を遂げた女子学生の事例. 日本学生相談学会第25回大会ワークショップ事例発表
	2006年 11月	高橋寛子.(2006). 気持ちとからだだが切れていると訴える摂食障害の女子学生の事例 第44回全国学生相談研修会事例発表
	2002年 5月	高橋寛子.(2002). 学生相談における“つなぎの場”としての役割. 日本学生相談学会第20回大会口頭発表
	2000年 5月	高橋寛子.(2000)復学学生を中心としたサポートネットワークへの試み. 日本学生相談学会第18回大会口頭発表
	1996年 5月	高橋寛子・橋口英俊.(1996). REBTの効果に関する研究 I ―対人恐怖症の女子学生の事例―(その1)(その2). 日本カウンセリング学会第29回大会口頭発表
	1992年 5月	橋口英俊・山本洋子・高橋寛子.(1992). メンタル・ヘルス・インベントリーに関する研究 (その1)(その2). 日本カウンセリング学会第25回大会口頭発表.
	【学会等の役員参加】	
	2010年 5月	日本学生相談学会第28回大会 研究発表座長
	2009年 5月	第28回日本心理臨床学会春季大会 ワークショップ講師 『セラピストのためのフォーカシング』
	2009年 5月	日本学生相談学会第27回大会 事例研究発表座長
2008年 5月	日本学生相談学会第26回大会 研究発表座長	

共同研究・受託研究の実績	<p>2012年 坂井新・○高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑。(2012). 共同研究。“生きた体験”に基づく現場実習指導の在り方についての研究を行い、心理臨床実践指導者へのインタビュー調査と質的分析とを行った。その成果について、日本心理臨床学会第31回大会(2012)において、共同発表を行った。</p> <p>2012年 高橋寛子・田中久美子(2012)共同研究:セラピストTAEによる実践から研究への推進過程について共同研究を行い、「グループセラピストTAE」によって生じた様々なプロセスや相互作用について検討した。その成果を第1回TAE質的研究国際シンポジウム(2012)で発表した。</p> <p>2011年 高橋寛子・得丸さと子。(2011). 共同研究:セラピストの「実践知」を言語化する試みを行い、共同研究としてセラピストTAE(Thinking At the Edge)を実施し、「象徴的定位置」(Symbolic-Orientation)を中核とした独自の言語の創出と概念とが抽出された。その経過と新たな質的研究法についての考察を、日本人間性心理学会第30回大会において発表した。</p> <p>2007年 高橋寛子・山本洋子・青井純子。(2007). 共同研究:大学新入生に対するメンタルヘルスチェックリストの結果分析に関する共同研究を行った。女子学生の19年間の変化について統計的に分析し、その成果について、第45回全国大学保健管理研究集会(2007)においてポスター発表を行った。</p>
大学院生指導	<p>①山梨英和大学大学院において、訓練中の大学院生および研修生に向けてスーパーヴァイザーとして面接一回ごとのケーススーパーヴィジョンを担当し、毎週4～6セッションのスーパーヴィジョン面接によって臨床指導を行っている(2013年度～)</p> <p>②2013年度は、修士課程1年生2名の指導教員として、ゼミにおいて各自の研究テーマを深めるための指導を行い、修士論文への研究指導を担当している。</p> <p>③山梨英和大学大学院において、「臨床心理基礎実習」の授業を担当し、臨床心理士としての基礎的知識、面接導入指導、倫理、精神科医療機関・教育機関での外部実習を丁寧に行っている。加えて、カウンセラーに必要とされる傾聴訓練や面接技法に関する実習を行い、臨床心理士としての基礎的能力の向上と対人援助職に必要とされる基礎的人間力の育成を行っている。(2013年度～)</p> <p>④神奈川大学大学院においてクリニカルスタッフとして臨床心理専攻の大学院生の臨床実践指導を3年間にわたって行った。「臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ」の授業を担当し、毎回の面接に対する臨床指導に加えて、インテーク面接の陪席指導、ケースカンファレンス指導など実践指導によって臨床心理士としての基礎的能力の土台を築くための個別指導を行った。また、「臨床面接技法」に関する実践的教育を担当し、特に臨床心理士の受容力、傾聴力、自己理解のために「フォーカシング」「描画法」を用いた実践的な個別セッションによる指導を行った。</p>
研究能力に対する評価	<p>長年の、学生相談における心理臨床実践において、特に大学コミュニティにおけるシステムづくりや連携への貢献に高い評価を得て、2006年に日本学生相談学会から奨励賞(実践活動奨励賞)を授与された。それと並行し、前勤務校である東京家政大学においては、保健センター学生相談室 専任カウンセラーとしての長年の実践と業績に対する評価を得て、組織内で初の主任カウンセラーを命じられ、2010年の退職まで学内組織の責任と中核的業務を担い、他職種との協働を担い、多くの非常勤カウンセラーのまとめ役として機能した。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2013年度 宗教委員会委員、大学院FD推進委員会委員</p>
-----------------	------------------------------------

アドバイザー活動実績	2013年度 基礎ゼミナール I によって、学部1年生(20名)のアドバイザーを担当 2013年度 大学院修士課程1年生2名の修士論文指導およびアドバイザーを担当
後進育成活動実績	①神奈川大学大学院において、臨床心理士を目指す大学院生のスーパーヴィジョンを担い、臨床家としての基盤づくりに関与した。(2010年～2013年) ②日本精神技術研究所において、フォーカシング個別指導、セラピストフォーカシングセッション、フォーカシングワークショップ(ベーシックコース、アドバンスコースによって、臨床心理士を目指す大学院生や現役臨床心理士の育成やスーパーヴィジョンに携わってきた。(2002年度～現在) ③池袋カウンセリングセンターにおいて、臨床心理士へのスーパーヴィジョンやセラピストフォーカシングによるケース検討を行い、若手～中堅臨床心理士の育成に関与している。(2010年～現在)
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2011年 6月 高橋寛子。(2011). 埼玉県臨床心理士会 東日本大震災支援特別プロジェクト研修会講師『震災支援者のためのセラピスト・フォーカシング』</p> <p>2010年 12月 高橋寛子。(2010). 埼玉県学校臨床心理士研究会 東部地区研修会講師『スクールカウンセラーのためのセラピスト・フォーカシング』</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2011年 11月 第49回全国学生相談研修会講師 『事例から学ぶ理論と技法』</p> <p>2010年 10月 第48回全国学生相談研修会講師 『コミュニケーション能力を高める心理教育』</p> <p>2009年 11月 第47回全国学生相談研修会講師 『フォーカシングの基礎と応用』</p> <p>2008年 11月 大正大学文学部臨床心理学科「臨床心理学技法演習」「技法テーマ研究B」ゲスト講師として、学部3年生のフォーカシング実習指導を行った。</p> <p>2008年 11月 第46回全国学生相談研修会講師 『事例から学ぶ理論と技法』</p> <p>2007年 11月 第45回全国学生相談研修会講師 『インテーク』</p> <p>2005年～2003年 埼玉県入間市健康福祉センター精神保健技術者研修会講師として、年間を通じて初回面接、電話相談、ロールプレイ、リスニング訓練、家族面接、事例検討などの指導を精神保健福祉士・看護師・保健師らに向けて行った。</p> <p>2003年 8月 日本聖書神学校において神学生に向けて「臨床牧会訓練」において「フォーカシング」に関する集中講義を行った。</p> <p>(3)公開講座 なし</p> <p>(4)学外審議会・委員会等 なし</p> <p>(5)その他</p> <p>2012年 1月 「対人援助職のためのセラピストフォーカシング ワークショップ」講師(主催:フォーカシングトレーナーズ)</p> <p>2011年 3月 東日本大震災緊急支援電話相談ボランティア相談員として活動。日本臨床心理士会・東京臨床心理士会・日本精神衛生学会共催</p> <p>2011年 5月 京都大学大学院教育学研究科「こころの支援室」東日本大震災震災支援者のための電話相談相談員として活動</p> <p>2010年 5月 「対人援助職のためのセラピストフォーカシング ワークショップ」講師(主催:フォーカシングトレーナーズ)</p> <p>2003年～現在 日本精神技術研究所フォーカシングセミナー(ベーシックコース・アドバンスコース)講師</p>

成果と目標

専門的成果	① これまでの学生相談における心理臨床実践において、その立ち上げから組織づくりを担い、他職種との協働・連携システム・予防的活動・事例研究の蓄積などを行うことを通じて、組織に生きる臨床心理士としての実践的活動と理解とを深めてきた。それはまた、個別的支援にとどまらず地域への支援や組織の活性化にもつながる知見へと発展し、体系だった実践研究の蓄積として論文や執筆によって公刊され広く共有つつある。
-------	---

<p>専門的成果</p>	<p>② 上記実践から得られた研究成果を大学教育全体を視野に入れ、大学教育に還元していくための授業づくりと人間教育への展開を模索している。今年度着任した山梨英和大学の学部・大学院教育において、これらの成果は、特に身体的実感を伴った学生・院生の主体性を伸ばす教育活動の実践や研修システムとして成果が見込まれる。</p> <p>③ 教育臨床のみならず、司法・医療・福祉関連など多くの現場での実践や臨床心理士への教育、他職種との連携の蓄積は、心理臨床センターでの臨床実践、大学院生や研修生への教育、実習指導、センターの組織運営の実際に関与する際に、十分活かされている。さらに、「臨床実践指導学」という日本で唯一の博士後期課程講座での学びや研究の蓄積は、大学院教育のシステムづくりに関与する基盤として活かされている。</p>
<p>専門的目標</p>	<p>① 学力、コミュニケーション力の低下という重い課題を抱える学部教育においては、「基礎ゼミナール」「専門ゼミナール」においてどのような展開が必要とされるのか、これまでの臨床実践での知見をさらに活かしつつ、知識のみならず全人的に「育て、育む」大学教育への模索を試みつつ、他の教員との情報共有や共同研究に積極的に関与し、さらなる発信に努める。</p> <p>② 臨床心理士養成に関わる諸問題(事例検討の方法、スーパーヴィジョンシステム、実習指導、体験を含んだ教育、臨床家としての人間的基盤づくりなど)に対して、個別のきめ細やかな指導とともに、大学院カリキュラム全体を視野に入れつつ、改善点を挙げ、効果的教育システムづくりに寄与する。</p> <p>③ 自身の研究テーマである、「暗在性」(the implicit)と「体験過程理論」の臨床適用とをさらに推し進める。そこには、これまでの心理臨床実践にとどまらず、大学教育(心理臨床教育、学部教育)への活用や「体験の言語化」、さらに「対人援助職支援」などへの展開が含まれるが、これら実践からの研究を体系づけ、できるだけ早い時期に博士論文としてまとめ、学位取得を目指すとともに、山梨英和大学・大学院の教育と地域支援に向けて惜しみなく貢献することを目標とする。</p>

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年</p>	<p>5月</p>	<p>1日</p>
-----------------	--------------	-----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ダニー ブラウン Danny W. Brown	男	1961年	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士	専門分野	外国語教育	
学 歴	1979年 5月	Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A. 卒業		
	1979年 9月	Southwestern Assembly of God College, Texas, U.S.A. 入学(1980年12月まで)		
	1981年 1月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 編入学		
	1983年 5月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 卒業(学位、専攻:宗教学)		
	1985年 9月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 入学		
	1986年 8月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 卒業(修士号、専攻:英語教育)		
	1991年 9月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 入学		
	1996年 8月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 卒業(博士号、専攻:外国語教育)		
実 務 経 験	1987年 4月	駿台外語専門学校(大阪市)講師(1989年7月まで)		
	1989年 9月	Pittsburg State University, Kansas, U.S.A., Intensive English Program, lecturer(1991年8月まで)		
	1992年 9月	Austin Community College, Parallel Studies Department, ESL Program, part-time teacher(1997 1月まで)		
	1997年 4月	山梨英和短期大学英文学科、契約教師(2000年4月まで)		
	2000年 4月	山梨英和大学人間文化学部、契約教師(2005年4月まで)		
	2005年 4月	山梨英和大学人間文化学部、専任講師(現在まで)		
受 賞 歴	1979年 5月	German Student of the Year Award, German III class, Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A		
	1979年 5月	ROTC Student of the Year Award, High School Reserve Officer Training Corps (all classes), Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A.		
	1991年 9月	University Fellowship, Office of Graduate Studies, University of Texas, Texas, U.S.A. (for the 1987-88 school year)		
	1996年 12月	Nominated for Part-time Teacher of the Year Award, Austin Community College (all campuses).		
所属学会	1986年 4月	Member of Japan Association of Language Teaching (JALT)(現在まで)		
特 免 資 格 等 ・ ・	年 月			
	年 月	特になし		
	年 月			
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>As an English language teacher, I am not so concerned with teaching large amounts of information as I am concerned with developing skills within each individual. This becomes a highly personal task for each student, and learning language skill requires high motivations. For this reason, I deal a lot with the motivations of students as I teach. In some ways, I cannot deal directly with the various underlying motivations that bring students to school. But I try to take each student at face value as if I expect him/her to learn for learning sake. I try to deal with the students' most immediate motivations, which are social influences before and during the class, task motivations during class and homework, grade motivations, and achievement motivation. To do this, I make my learning objectives extremely clear and my grading policies extremely clear. I also give a lot of small assignments with very clear feedback. I use social motivations in the class, including my personal presence, small group work, and pair work. In small classes and in seminar classes, I often speak personally to students regarding how I view them, their learning, and their English ability. Students are often shocked that I will sit down with them and give them a basic description of their overall English ability, including grammar, and characteristics of their pronunciation, and I think they find it exciting. Not all classes can be so personal, so I follow basic educational principles, including clear objectives and plenty of practice so students can reach a "saturation point" in which they can truly master objectives.</p> <p>I cannot discuss most methods used in this small space, but let me say that I use a lot of what is called the "direct method" of teaching language, with presentation, testing, and immediate practice. I do break one of the direct method's primary rules, however, in that I give definitions in Japanese when large lists of vocabulary must be learned, which speeds the process immensely. When performing language tasks, such as speaking about topics or reading certain texts, I am concerned to teach the language necessary for each task beforehand and I frequently review vocabulary and grammar learned so students can maintain confidence in their speaking, writing, reading, and listening skills during the class time. The above is only a small portion of my actual teaching ideas and methods.</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>English Presentation: Using mostly materials that I wrote myself, students learn the rules of intonation, pronunciation of past tense, speech-giving techniques, and advanced grammar points. They also sing a song as a choir during class, memorize the Lord's prayer with correct intonation and pronunciation, give a personal speech before the whole class using notes, practice and tell a personal story before the whole class without notes, and write and give an academic speech before the class with notes and an outline.</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>I have not created any books. However, I personally write about 70% of all text material that I use in my classes.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>I presented a lecture titled "Grammar is not Communication," at Sundai Foreign Language Technical School (駿台外語専門学校高校で高校の英語の教師のための教育発表会). Also at the FD committee meeting of Yamanashi Eiwa College on July 21, 2013 I presented a lecture on how to teach English to low level students at Eiwa. That lecture was titled "Teaching English Methods in a Culture that is Ill-Suited for Language Learning: Opening Up Students' Hearts to English" 「外国語学習に適さない(てきさない)文化の中で英語を教える方法:学生の心を英語に開くこと」.</p>
担当授業科目	<p>2013年度の授業</p> <p>基礎ゼミ2、海外インターンシップ、英語コミュニケーション、English Reading 1, English Speaking 2, English Presentation, American Society and Culture, English Bible and Western Culture, 専門ゼミナール, 卒業研究</p>

代表的シラバス	専門演習:社会及び心理の諸問題について英語で読み、英語で討論する。本学の大学院を希望している学生にとっても、また英語を話す力をつけたい学生にとっても、最適なゼミである。 Student will study vocabulary and take multiple tests. Students will do oral readings in class about social problems: hikikomori, makein, drugs, gangs, etc. Students will discuss those social problems with the class. Each student will write a final paper over one social problem of his or her choice, in consultation with the teacher.
教育改善活動	I have purchased and learned how to use Adobe Photoshop software to help create pictures for my class Powerpoint presentations. I have studied the Japanese language so I can use it sometimes in class. I learned in graduate school that it is best to speak only the target (foreign) language in the class, but also that on occasion a few words in the students' own language can save much time and confusion. So I probably speak 95% to 98% English in the class. However I can also give word definitions in Japanese, and make short explanations to confused students in Japanese, so I feel that my teaching has greatly improved.
教育能力に対する評価	(1) 学生による授業評価 Students' evaluations of me always remain fairly high (4.6-4.8 out of 5). However, I am disappointed that, though students approve of my teaching, they sometimes report lower scores for their own participation than they report for my teaching. There is a saying, "Good teachers explain, great teachers inspire." I want to inspire more, so this year I have been working harder to talk to students on a personal basis, even in larger classes, and to be excited and more energetic as I speak to each class. (2) 同僚教員等による授業評価 Yamanashi Eiwa College does not give formal evaluations of their faculty. This seems to be Japanese culture, though Americans always give formal faculty evaluations. My colleagues informally have told me that my classes are popular and that I get along well with the faculty and staff of the college so they are pleased with my work.

研究業績

研究の特徴	I have only worked on few research projects in the last few years because I use much time for my church work, prayer, and in the evenings Japanese language study (now I can read and speak Japanese at an intermediate level). So my research has decreased for the last few years. Learning Motivations: Most of my research has focused on student motivations. My own research suggests that Japanese college students' motivations in college classrooms appear to be largely based on task motivation or external motivations provided by the teacher. Japanese students who want to learn English depend on the surrounding context of the classroom to motivate them more than their personal desires to learn English. For example, Japanese students typically do not play with language nor personally motivate other students in the class to study, which is very different than students from other countries, especially different from American education. (I am American.) Instead, the students watch the teacher to see what he will do. As a result, the students are longing for the teacher to motivate them. The teacher should impress or interest the students by using interesting stories, jokes, and other techniques so that help students pay close attention. The teacher should also frequently offer the students tasks to perform even during lecture classes to increase motivation, and the teacher should keep students active working together in pairs to stimulate interest. Furthermore, the teacher should slowly teach students to internalize their motivations for language learning by praising students and talking about their learning in an open way. These are some of the results of my research. At this time, I have collected more data regarding motivations, but due to my Japanese language study, that research is awaiting analysis.
研究の特徴	Vocabulary Knowledge/English Morphemes: I have also done one study regarding active vocabulary use of students in order to understand the level of language knowledge of students entering our college. I implemented those findings into my curriculum by focusing my teaching more on certain vocabulary groupings. Furthermore, I also did one study regarding the English morphemes used by Japanese students to learn more about the level of language knowledge of our school's students. I also implemented that research into my curriculum by encouraging particular grammatical points in my class that the students were weak in.

研究経歴	年 年 特になし 年
研究実績	<p>(1)著書 特になし</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1996年 8月 博士論文 The classroom-related beliefs and learning strategies of seven adult Japanese learners in a United States ESL program, 317 pp.</p> <p>2003年 2月 The Use of Vocabulary by Japanese Learners of English in Speaking Tests, 山梨英和大学紀要第1号</p> <p>2004年 1月 Natural Sequences in the Acquisition of English Morphology, 山梨英和大学紀要第2号</p> <p>2004年 1月 The Motivations of Japanese College Students to Participate in an English Vocabulary Learning Activity, 山梨英和大学紀要第2号</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
共同研究の実績・受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	特になし

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等 活動実績	2005年 4月 国際交流委員会委員(2011年3月まで) 2008年 4月 宗教委員会委員(現在まで) 2011年 4月 入試委員会委員(現在まで) 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	2000-2006年度 Advisor of the English Life Club (English conversation and friendship club) 2011年度 Advisor for the Maple Leaf Club (English conversation club)
後進育成活動実績	1997-Present I have taught numerous small weekly English Bible studies in my home and on campus to encourage understanding of Christian faith and morals. Many semesters I have held English Bible studies in my office at school.
社会貢献活動	(1) 講演会 年 月 特になし (2) 出前講座 年 月 特になし (3) 公開講座 年 月 特になし (4) 学外審議会・委員会等 年 月 特になし (5) その他 1999年3月 I am pastor of New Life International Church in Kofu, Japan. New Life is a bilingual church with English/Japanese. This church currently averages 40 people in attendance, many of whom are students of our college. The church meets in a large classroom at Yamanashi Eiwa College. As pastor, I plan and lead the church service one time each week, preaching before the church each time, leading prayer and social activities. I coordinate programs of the church including church Bible studies (Japanese and English), the council of elders and elders' meeting, the church worship band, the children's program, and missionary offering support. I also perform many small activities related to being a pastor, such as writing recommendations for jobs or school entrance, visiting the sick, and counseling those with personal problems. Furthermore, I coordinate temporary projects, such as our annual winter retreat at Lake Yamanakako. I organized a 4-day trip for 5 people (myself included) to do volunteer work in the area of the Noto Peninsula Earthquake (能登半島地震) in March 2007. I I organized another 4-day volunteer trip to the area of the Chūetsu Offshore Earthquake (新潟県中越沖地震) in July 2007 for 5 people. I have also lead our church in giving food to local refugees from the Miyagi-ken and Iwate-ken area who live in Kofu City area in March-May 2011. (1999年3月から、現在まで)

成果と目標

専門的成果	<p>① I have learned how to better motivate students in English classes by my teacher presentations and text writing.</p> <p>② I have learned more about the language knowledge (vocabulary and grammar) of Japanese college students for curriculum planning purposes.</p>
専門的目標	<p>① My first goal is a greater understanding of what content in teacher's lectures is most motivating to students. (That data is in my office waiting analysis now.)</p> <p>② My second goal is to learn more about how to encourage students to internalize language learning motivations so that they are not so dependent on the teacher and classroom context.</p> <p>③ My third goal is to learn more about students' language knowledge. One project that I hope to perform in the future is to analyze Japanese high school English textbooks to categorize the types of language exercises that they require, and then compare those exercises to the language knowledge that students bring to the college.</p>

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
モリ 森 稚葉	女	1972年	専任講師	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(人文科学)	専門分野	発達臨床心理学	
学 歴	1990年 3月	東京都立西高等学校 卒業		
	1990年 4月	慶應義塾大学 法学部法律学科 入学		
	1994年 3月	慶應義塾大学 法学部法律学科 卒業 学士(法学)		
	1999年 4月	お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 3年次編入学		
	2001年 3月	お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 卒業 学士(生活)		
	2001年 4月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程入学		
	2003年 3月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程修了 修士(人文科学)		
	2003年 4月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程入学		
2007年 3月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程単位取得退学			
実 務 経 験	1994年 4月	麒麟ビール(株)九州支社 福岡営業部(1997年10月まで)		
	2002年 10月	お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2003年2月まで)		
	2003年 4月	社会福祉法人相友会 浅川保育園 相談員(2010年3月まで)		
	2004年 4月	お茶の水女子大学学生相談室 カウンセラー(2006年3月まで)		
	2004年 4月	和泉短期大学児童福祉学部 非常勤講師(保育臨床)(2006年3月まで)		
	2004年 4月	お茶の水女子大学大学院 COE研究員(平成16・17年度)(2006年2月まで)		
	2005年 5月	お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2006年2月まで)		
	2006年 4月	社会福祉法人相友会 長房西保育園 相談員(2010年3月まで)		
	2006年 4月	山梨英和大学 人間文化学部 非常勤講師(発達心理学)(2007年3月まで)		
	2006年 4月	武蔵大学 非常勤講師(青年心理学Ⅰ・青年心理学Ⅱ)(2007年3月まで)		
	2006年 10月	青山学院短期大学 児童教育学科専攻科 非常勤講師(児童臨床心理学)(2007年3月まで)		
	2007年 4月	山梨英和大学 人間文化学部 専任講師 (現在に至る)		
		山梨英和大学大学院 臨床心理学専攻 専任講師(兼任) (現在に至る)		
		山梨英和大学 心理臨床センター 相談スタッフ(兼任) (現在に至る)		
	2007年 4月	山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)		
	2007年 4月	山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員 (2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に改名)(現在に至る)		
	2007年 4月	発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(平成19/20年度)		
	2008年 4月	発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員(2013年3月まで)		
	2009年 9月	山梨県適応指導教室(韮崎こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)		
	2010年 4月	私立かほる保育園(山梨県甲府市) カウンセラー(現在に至る)		
2011年 4月	山梨県立大学 非常勤講師(コミュニケーション基礎)(2013年3月まで)			
2013年 4月	こころのひかりメンタルクリニック カウンセラー(現在に至る)			
受 賞 歴	年 月			
	年 月	特になし		
	年 月			
所 属 学 会	2001年 月	日本心理臨床学会会員		
	2003年 月	日本発達心理学会		
	2004年 月	日本臨床心理士会会員		
	2004年 月	日本心理学会会員		

所属学会	2006年 月 日本教育心理学会会員 2006年 月 日本コミュニティ心理学会会員 2011年 月 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 2011年 月 日本保育学会 2013年 月 日本精神分析学会 等
特免資 許許格 等 . .	2004年 4月 臨床心理士(登録番号 12374) 年 月 年 月
e-mail	非公表

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>基礎教育においては、「知る」こと「学ぶ」ことの楽しさ(と自らの無知を知ることの痛み)を伝えたいと考えている。自分なりの疑問を持ち、その疑問を解決するために調査を行うワークを課し、そのプロセスを支えるような機会と時間を作っている。専門教育においては、学生が心理学を学ぶことを通して、自己理解を深めるとともに、自らの体験から離れて、より広く人間を理解できるようになることを目指している。講義・演習ともに、学生からのリアクションにできる限り応えて、主体的に考える姿勢を育み、人間の多様なあり方に心が開かれるように心がけている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>①心理臨床実践にかかわる演習科目における工夫 心理臨床実践は、知識を習得するだけでなく、自らの体験を通して習得することが求められる。学部生のうち、大学院進学を目指す学生の基礎力をつけるために、演習では、心理検査のロールプレイ、グループワーク、心理検査実習を通して、個々人が心理検査法について、体験的に理解できるよう、工夫をした。また、大学院への進学を目指す学生に対しては、自己理解・他者理解を深めることをねらいとして提示し、社会人生活とのつながりを意識させることを通して、演習への動機づけを高めるように工夫した。なお、2009年度からは、教員間の授業内容の検討を経て、大学院進学クラスを新設し、学生の目的意識にあわせた演習科目の達成目標を設定している。具体的には、各学生が共通した観点から体験を振り返ることができるようにワークシートの構成を工夫している。また、その体験をグループワークのなかで互いに語り合うという、自らの体験を他者に開く機会を通して、人間の多様性を実感できるように授業を組み立てている。</p> <p>②講義科目における教育方法の工夫 講義科目においては、目標への到達度を確認するために、毎回、リアクションペーパーの回収、途中2回程度の小テストを行っている。履修人数が100名を超える場合にも、双方向的な講義が展開するようにリアクションペーパーを用いて、質疑に答えるなどの工夫を行っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 大学院において、心理臨床の初学者をどのように教育・訓練することが有効であるのかについて共同研究し、学会で継続的に発表している。大学院修了生に対して、心理臨床センターにおける心理臨床の実践教育の体験がどのようなものであったのかを検討している。[森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子(2010) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回日本心理臨床学会大会(東北大学)他] さらに、英国タビストックセンターでの教育訓練に携わるスタッフ、および訓練経験のある臨床家へのインタビューを行い、日本の大学院に活かせるポイントについて検討、発表している。[森稚葉・黒田浩司・奥村弥生(2012) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9) 初学者の体験をコンテンツするためのスーパービジョンの検討 第29回日本心理臨床学会(愛知学院大学)他]</p>
担当授業科目	<p>2013年度 <学部>発達心理学、発達臨床心理学、心理検査演習、基礎ゼミナール、専門ゼミナール、卒業研究 <大学院>臨床心理査定演習、発達臨床心理学特論、臨床心理事例研究</p>
代表的シラバス	<p>いずれの科目においても、心理学(あるいは臨床心理学)における、当該科目が扱う領域の位置づけ、周辺専門領域との関係を理解するためのオリエンテーションを行い、他の講義科目・演習科目とのつながりを意識させる。講義科目では、基礎的な概念に一通り触れ、それらの考え方が実際の支援にどのように活用されているかを考えることができるよう、講義を計画している。演習科目では、学生が主体的に取り組み、課題意識を持てるよう、演習や課題に取り組むプロセスに関与している。取り組みやすい課題からはじめ、徐々に手続きの困難な課題へと進むよう、計画している。</p>
教育改善活動	<p>FD研修への参加:2008年8月、平成20年度FD推進会議(新任専任教員向け)に参加。模擬授業ワークショップを通して、講義の構成、到達目標の提示と達成度の確認、資料作成の工夫について学び、授業改善に活かした。</p> <p>教員間での情報共有による授業改善:学部授業のうち、複数の教員で、同一演習のクラスを担当した授業(心理臨床演習、心理検査演習)について、教員間で演習のねらいと教授方法について検討を行い、授業改善を行った。2009年度からは、学生の目的意識にあわせた達成目標を設定できるよう、大学院進学希望者クラスを新設し、心理検査演習を担当している。また、大学院におけるオムニバス授業(臨床心理基礎実習)では、他教員の担当時間に同席し、他教員の演習の運営方法を学び、自らの演習の改善に活用している。</p> <p>研究結果を活用した教育改善活動:大学院における研修・教育システムに関する研究結果から、授業改善の課題を見出し、臨床心理基礎実習の見直しを進めている。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>授業評価アンケートの結果：演習科目においては、4点代後半の高い評価が得られた。特に、心理検査演習、フィールド演習、基礎ゼミナール、卒業研究での評価は高い。自由記述には、実体験を通じた学び、小レポートを通じた理解の深まりに対する評価が書かれている。また、個別指導に対する評価も得られている。講義科目においては平均4点以上の評価が得られた。自由記述には、質問・コメントに対して授業中に応答すること、具体的な事例を含めて説明を行うことが評価される一方、シラバス通りの進行とならず全体的に進度が遅いことに対する批判・要望も出されている。</p> <p>今後の課題：150人程度の講義において全体の到達度を確認しながらも、一定の進行が保たれるよう（しかし、講義の速度を速めることなく）調整することを今後の課題と考えている。そのための具体的な方策として、授業途中で行った小テストの返却をタイムリーに行い、学生自身の復習を促すこと、質問に対する一部の回答をプリントとして配布することにより、時間の短縮を図ることを検討している。また、視聴覚教材を利用することに対する要望もでており、講義内容を補完するにふさわしい教材の検討を行いたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>同僚教員による授業評価は実施しておらず、今後の課題である。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>保育園、幼稚園、学校といった子どもが生活するフィールドにおいて、様々な心理的・行動的困難を抱える子どもの発達を促進する心理臨床的支援の方法について、他専門家との協働をとおした実践研究を続けている。発達臨床心理学の観点から、フィールドにおいて子どもの主観的な体験を理解するための枠組みや方法（行動観察・心理検査等）について検討するとともに、その子どもを養育・教育する保護者や関係者（例：保育者、教師）と子どもとの相互交流の理解を基盤とした心理的介入・支援の方法、その後の変化のプロセスについて、検討を進めていきたいと考えている。発達に困難を抱える（いわゆる発達障害）の子どもとその保護者への心理療法、地域における予防的支援（地域における子育て支援、心理教育の実践）にも関心があり、心理臨床センターならびに地域の支援機関との協力のもと、実践活動を行っている。</p> <p>また、臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについて、本学教員・センタースタッフとの共同研究を行っている。</p>
研究経歴	<p>2003年 社会福祉法人相友会浅川保育園相談員として、私立保育園障害児等研修会の運営スタッフの一員として、実践研究に参加（2010年3月まで）。</p> <p>2004年 お茶の水女子大学大学院 COE研究員（2004・2005年度）として、附属園・学校における幼児・児童・生徒のメンタルヘルスと園・学校における心理的支援に関する養護教諭との実践協働研究に従事。並行して、地域子育て支援に関するアクションリサーチに従事（2007年3月まで）</p> <p>2007年 山梨英和大学人間文化学部専任講師として、①保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究、②臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究に従事（現在に至る）</p> <p>2007年 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員（2007・2008年度）として、保育園・幼稚園における発達障害児（または発達障害が疑われる幼児）に対する個別支援シートの開発研究に参加（2008年3月まで）</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 森稚葉（2012）地域子育て支援事業における保育相談支援 小田豊編 吉田ゆり・若本純子・丹羽さかの編著 『保育相談支援（保育士養成課程）』 光生館 第5章第2節 pp89-110</p> <p>a. 森稚葉（2011）児童期の子どものメンタルヘルス 伊藤亜矢子編著 『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第1節 pp188-191</p> <p>b. 森稚葉（2011）児童期に多い問題 伊藤亜矢子編著 『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第2節 pp192-195</p> <p>c. 分担執筆（2008）青木紀久代・神宮英夫編著 『心理学：生活と社会に役立つ心理学の知識』 新星出版社 pp114-117, pp198-199, pp210-211（発達障害、心理教育プログラム、メンタルヘルスのセルフマネジメント、被害者支援に関する、初学者向けの概説と図説）</p>

研究実績	<p>(2)学術論文</p> <p>[論文]</p> <p>a.小野綾子・森稚葉(2011) 心理臨床センターにおけるいわゆる「中断・早期終了」事例の検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第6巻 2-10.</p> <p>b.森稚葉(2008) 保育場面でのコンサルテーションにおける行動観察に関する検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第3巻, 22-31</p> <p>c.森稚葉(2007) 学級観察ビデオを用いたカンファレンスの有用性に関する探索的検討 平成16・17・18年度公募研究成果論文集 お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学, 51-60</p> <p>[研究報告書]</p> <p>d.森稚葉(2007) 地域の親ピアサポートリーダー養成プログラム 財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ),62-79.</p> <p>e.森稚葉(2007) 学校メンタルヘルス尺度 幼稚園・小学校低学年用の検討 21世紀COEプログラムプロジェクトⅡ「幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究～心理的援助のためのアウトリーチプログラムの構築～」最終報告書(お茶の水女子大学),129-134.</p> <p>f.森稚葉(2006) 子育て広場担当者からの評価 財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に関する調査研究</p> <p>[その他]</p> <p>a.森稚葉(2013)「学生支援」について感じていること 山梨英和大学学生相談室報告書 6, 13-14.</p> <p>b.森稚葉(2011) 国際ロールシャッハ及び投映法学会第20回日本大会参加印象記 包括システムに</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.Chiyo Mori, Kikuyo Aoki, Kazuo Shimamoto, Kiyoko Tomita & Masako Yatsuda. (2008) "Collaboration with nursery specialists and psychologists on child-care support service in Japan - Effect of training of nursery specialists with psychologists on 'noticeable children' " The 11th World Congress of the world association of Infant Mental Health (Yokohama), Poster Session, <i>Infant Mental Health Journal</i>, 29(3A)Supplement</p> <p>b.Chiyo Mori,Kikuyo Aoki, Hiromi wafuji, Sumiko Yamawaki, & Yumiko Iume (2004) "The assessment of child mental health at transition to elementary school."The 28th International Congress of Psychology (China) ,Poster Session, Abstract Book. p961</p>
競争的資金採択課題	<p>2004年4月-2005年3月 平成16年度お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」公募研究 研究課題「学級場面におけるビデオ観察を用いたフィードバックの有用性に関する検討」(金額42万円)</p>
学会等発表・役員参加	<p>2013年 6月 シンポジスト「発達障害が疑われるケースの査定をめぐって」, 大会準備委員会事務局 第19回包括システムによる日本ロールシャッハ学会(山梨英和大学)</p> <p>2012年 9月 森稚葉・黒田浩司・奥村弥生(2012) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9) 初学者の体験をコンティンするためのスーパービジョンの検討 第29回日本心理臨床学会(愛知学院大学)</p> <p>2011年 9月 黒田浩司・森稚葉・小野綾子・篠原恵美 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(4) ケースカンファレンスにおけるアクションリサーチ 第31回心理臨床学会大会(九州大学)</p> <p>2010年 9月 森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回心理臨床学会大会(東北大学)</p> <p>2007年 9月 朝日香栄・青木紀久代・高木悦子・森稚葉 保健分野「心の発達と健康」における、仲間関係の変化に重点をおいた回想法授業の実践 第54回日本学校保健学会講演論文集(和洋女子大学)</p> <p>2007年 7月 森稚葉 保育園子育てひろばにおけるコミュニティワークの展開(事例発表) 日本コミュニティ心理学会研修委員会主催平成19年度7月研修「教育組織へのコミュニティ心理学的介入を考える」(九州大学)</p> <p>2006年 11月 森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・矢野由佳子 保育における心理臨床研修の実践(6)－研修参加歴・保育歴から見た研修効果の検討 日本心理学会第70回大会(九州大学)</p> <p>2006年 7月 森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・村木紘子・平山敦子・谷田征子 インターネットによる親ネットワーク形成の試みー保育園との協働を軸としてー(2)ひろば担当者から見た実践評価 日本コミュニティ心理学会第9回大会発表論文集(お茶の水女子大学)</p>

<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>2005年 9月 森稚葉・青木紀久代・武田(六角)洋子・山脇澄子・井梅由美子 学校コミュニティにおける発達臨床心理学的支援(8)ービデオを用いたフィードバックカンファレンスの意義について 日本臨床心理学会第24回大会発表</p> <p>2005年 9月 森稚葉・青木紀久代・矢野由佳子 保育における心理臨床研修の実践(4)ー3年間における「気になる子ども」の様子と対処の変化 日本心理学会第69回大会(慶應義塾大学)</p>
<p>共同研究・受託研究の実績</p>	<p>2011年 10月 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 第4回研究助成課題『初学者の体験をコンテンツする教育・訓練システムの研究』(代表者:黒田浩司)における共同研究者</p> <p>2009年 12月 山梨英和大学大学院・心理臨床センター協同研究 研究課題「臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究」(研究代表者:馬場禮子)における共同研究者</p> <p>2007年 4月 山梨県教育委員会 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(2007・2008年度)として、保育園・幼稚園における発達障害児(または発達障害が疑われる幼児)に対する個別支援シートの開発研究に参加(2008年3月まで)</p> <p>2006年 4月 財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2007年3月まで)</p> <p>2005年 4月 財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に関する調査研究 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2006年3月まで)</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>[臨床指導]</p> <p>① 定期的(面接初期は毎週、面接中期以降は隔週、または毎月)に、1回1時間の個人スーパーヴィジョンを行う</p> <p>② ウェクスラー式知能検査、発達検査の所見作成に関する個別指導を行う。</p> <p>③ インテーク面接担当者として、受理面接への研修生の陪席、発表用資料作成の個別指導を行う。</p> <p>④ 親子並行面接共同治療者として、コミュニティにおける環境調整支援のあり方を伝達し、大学院生が子ども治療者として自立した姿勢で事例に関与する姿勢を学びとれるよう、個別に情報共有の時間を設ける。</p> <p>[研究指導] 山梨英和大学大学院にて、副査をつとめる。</p> <p>2012年度 「「看護師のやりがい」に関する臨床心理学的研究」「自我体験に関する一考察ー体験時のイメージ、体験への“とらわれ”を通して」「発達障害を抱えた生徒との出会いと関わりに関する高校教師の 体験過程」</p> <p>2011年度 「心理臨床家の職業アイデンティティ形成過程についての研究」「不登校の子どもを持つ母親のセルフヘルプグループに関する一考察」</p> <p>2010年度 「日本版IFEEL-Picturesを通して見た母親の関係性評価の研究」「児童養護施設における心理的援助と他職種との連携ー施設心理士の発展を目指してー」</p> <p>2007年度 「虐待児の身体的・心理的発達の特徴ー虐待が発達におよぼす影響について」「障害児の親の障害否認・受容に関する一研究」</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>① 保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究:主に保育園・学校をフィールドとして、他専門家との協働実践を継続して行い、山梨県内での研修会において、その実践成果をもとに専門家への研修活動を行っている。研修後のアンケートによると、保育や教育実践における研修効果が認められ、現場の専門家との間で継続してきた協働実践の一定の成果があると考えている。しかし、2008年以降、当該テーマに関する学会発表、研究報告論文を発表・好評していない。これらの実践の成果をまとめ、対外的に発信することが課題である。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究では、心理面接に関する教育の課題が見出されている。その結果は、教育改善活動にも活かすことができている。対外的にその成果を発信しており、今後も研究を推進していくことが求められる。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 4月 教務委員会、入試委員会、入試実務委員会 委員(2008年3月まで) 2007年 10月 新教育課程カリキュラム検討委員会 委員(2009年3月まで) 2008年 4月 入試委員会、入試実務委員会 委員(2009年3月まで) 2009年 4月 心理社会コースコーディネーター、教務委員会、ハラスメント相談員(2011年3月まで)、ハラスメント防止委員会 委員(2010年3月まで) 2009年 12月 留学生教育体制等点検委員会 委員(2010年4月まで) 2010年 4月 広報委員会 委員(2011年3月まで)、図書館運営委員会、紀要委員会 委員(2012年2月まで) 2010年 9月 スポーツ・学芸特待生制度検討会 委員(2010年12月まで) 2011年 4月 国際交流委員会 委員(2012年2月まで) 2012年 2月 心理臨床コースコーディネーター(現在に至る) 2012年 2月 学生サービス部 委員(現在に至る) 2012年 5月 カリキュラム検討ワーキンググループ主査、カリキュラム検討委員会(現在に至る)
アドバイザー活動実績	2013年度は、2年生22名、3年生8名、4年生6名のアドバイザーを担当(例年、同数程度を担当)。週1回1コマのオフィスアワーの他、個別面接の時間を設け、履修、学業、生活、進学、就職に関する相談に応じ、適切な相談窓口(学生相談室、保健室、学生部)への紹介を行う。 各ゼミナールでは、懇親を広げる(または深める)ための時間を複数回とり、対人関係形成の機会を設けている。また、3年次以降は、専門教育の理解を深めるために、教員が実践で関わっているフィールド(保育園)への参加体験、ボランティアの紹介を行っている。
後進育成活動実績	2009年度は、大学院修了生(希望者)に、保育士との自主研究会への参加を通して、保育園でのコンサルテーションに関する卒後指導を行った。 2011年度より、大学院修了生(希望者15名程度)と知能検査・発達検査に関する研究会を立ち上げて、指導を行っている(年6回)。
社会貢献活動	(1)講演会 2013年 2月 山梨市保育士研修会において、講師をつとめ、「“気になる”子どもの保護者との関係について」講演を行った。 2012年 12月 甲府市保育士会 理論研修会 講師:「気になる」子どもの理解と対応—保護者への支援 2012年 8月 地域療育等支援事業保育所等職員研修会 講師: 子どもの”障害”をめぐる保護者の心理的体験について考える 2011年 2月 山梨ことばを育む親の会主催 教育講演会 講師:言語障害を持つ子どもの保護者、ことばの教室担当教員、保育士を対象に、「子どもと言葉と発達 ~臨床心理士の立場からみえてくるもの~」という題で、言語発達と情動発達との関連について、講演を行った。 2011年 1月 地域療育等支援事業保育所等職員研修会 講師:親子の関係性の問題を抱え、発達面での偏りがみられる子どもの理解と対応について、「『気になる』子どもの理解と対応」という演題で2回、講演を行った(2011年1月:大月、2010年11月:甲府) 2010年 10月 甲斐市愛育会主催 子育て講演会 講師:未就園児を子育て中の親を対象として、「子育てに正しい“答え”はあるの?」という演題で、講演を行った。 2010年 6月 山梨県義務教育課主催 山梨県園長等運営管理協議会 講師:特別支援教育における保護者支援の考え方と留意点について、「特別支援教育における保護者支援」という題で講演を行った。 2010年 3月 山梨県言語聴覚士会主催 学術講演会 講師:障害を持つ人の心理的体験と支援者との関係について「患者—支援者間のコミュニケーションを考える ~心理臨床の実践から~」という題で講演を行った 2009年 10月 山梨県情緒障害教育研究会 講師:不登校の心理面での理解と、保護者へのカウンセリングの基本方針について「不登校の子どもと親へのカウンセリング」の題で講義を行った。 その他、保育実践・母子保健・発達障害に関する研修会、子育て講演会、事例検討会を複数担当

社会貢献活動	(2)出前講座
	2010年 3月 南アルプス市子育て支援課主催 ファミリーサポート講習会：ファミリーサポーター候補者に対し、子育てをめぐる社会的変化と保護者の心理的特性、関与の仕方について、「いまどきの子育て事情とコミュニケーション」という題で、講習会を
	2008年 12月 山梨県発達障害者支援センター主催 発達障害児(者)サポーター養成講座：発達障害を持つ生徒への家庭訪問を行う大学生ボランティアを養成するための基礎講座を行った。
	(3)公開講座
	2011年 11月 東日本大震災後の市民への情報提供として、震災後の子どもの心を理解し、ケアするための基本的知識に関する講座を開催した(大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ「心のケアー臨床心理士としてできること」第3回「子どもの心のケア」担当)
	2008年 5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジにおいて、子育て中の母親によるグループワーク講座「子どもの育ちと親子の関わり」を開催した。
	2007年 9月 山梨英和大学主催 公開講演会(長野) 講師：「子どもの心を理解する：心の発達とメンタルヘルス」という題で、中学生・高校生のメンタルヘルスとその支援に関する講演を行った。
	(4)学外審議会・委員会等
	2012年 12月 笛吹市適正就学指導委員会委員として、特別支援学校進学児童・生徒についての検討会に参加した。
	2007年 4月 山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員(2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に名称変更)として、依頼された児童・生徒についての心理的な特性理解と適切な支援プランを検討し、学校現場に提案した。事例によっては、本学心理臨床センターにて、継続的な心理療法を提供した(2013年3月まで)
	(5)その他
	2012年 2月 平成23年度 生徒指導・進路指導総合推進事業 こすもす教室(山梨県適応指導教室)訪問指導実践事例集(山梨県教育委員会)の編集協力を行った。不登校のために自宅から出ることのできない児童・生徒に対するアプローチについて、こすもす教室の教員と検討を重ね、事例集を作成した。
	2012年 2月 リンキッズやまなし「心理研究室 立ち止まって考えてみる ～どうしてこうなの？親子の関係～」にて、子育て相談を連載する(隔月発行、現在に至る)。読者から寄せられる悩みを元に、親子の間に心理的に起こりうる現象を解説し、家庭の中で実践しうる関わりを提案している。
	2010年 8月 山梨日日新聞「虐待-子育て一人で背負わずに」(2010年8月14日13面)、虐待が疑われる親に対する予防的支援の必要性に関する意見が掲載された。
	2008年 10月 山梨県中北保健所長期療養児療育事業におけるピアサロン(新生児集中治療室に入院した経験を持つ子どもを育てる母親同士が集まり、悩みを語り合う場)に参加し、グループカウンセリングを行っている(年2回出席)(2013年2月まで)
	2008年 4月 山梨県発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員(2010年度より、山梨県特別支援教育巡回相談員に名称変更)として、複数の小中学校への巡回相談を行う。(2013年3月まで)
	2007年 7月 山梨市公立保育所保育士研修担当として、定期的に園訪問とコンサルテーション、研究会を開催し、毎年2回程度の研修会を実施する。(現在に至る)
	2007年 4月 山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラーとして、教室内での事例検討会、学習講演会講師、「訪問指導の手引」作成時の助言を行った(2010年3月まで。ただし、事例検討会担当は現在に至る)

成果と目標

専門的成果	① 山梨県内において複数の保育園での心理的支援実践を継続することを通して、支援の方略に関する実践的な理解を深めてきた。支援実践の過程に学生や修了生を参与させる機会を作り、教育上の効果も得られたと考えている。自船から得られた理解を活かし、保育・教育の場における支援に関する研修会を複数を行い、参加者・運営者より一定の評価と成果が得ることができた。
-------	--

<p>専門的成果</p>	<p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究において、調査分析の役割を担った。その成果として、心理面接の研修過程で、面接中断に至りやすい条件が一部明らかとなった。さらにその結果を活かし、心理臨床基礎実習のシラバスの見直しを進めた。</p> <p>③ 心理臨床センターにおいて、発達に困難を抱える子どもの保護者に対する心理面接を複数担当し、園・学校との連携を通じた支援を行うとともに、共同治療者として研修生と関わった。このことを通し、研修生にコミュニティ支援の実際を伝えることが可能になったと考えている。</p>
<p>専門的目標</p>	<p>① 保育園における心理的支援に関する実践事例を集約し、保育コンサルテーション、保育カウンセリングに関する実践的に役立つ支援の枠組みに関する知見を発信する。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究を進める。その知見を活かして、大学院カリキュラム、および個別指導のあり方を改善する。</p> <p>③ 発達に困難を抱える子どもとその保護者に対する心理療法技術を向上させる。自らが心理療法を担当するとともに、より適切な臨床指導を研修生に提供することを可能とし、心理臨床センターの臨床活動の充実と地域社会への貢献に寄与したい。</p>

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
スギウラ マナブ 杉浦 学	男	1980年	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(政策・メディア)	専門分野	学習支援システム, 教育工学	
学 歴	1999年	3月	東京都 私立 学習院高等科 卒業	
	1999年	4月	慶應義塾大学 環境情報学部 入学	
	2003年	3月	慶應義塾大学 環境情報学部 卒業 学士(環境情報学)	
	2003年	4月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士課程 入学	
	2005年	3月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士課程 修了 修士(政策・メディア)	
	2005年	4月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 後期博士課程 入学	
	2010年	3月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 後期博士課程 修了 博士(政策・メディア)	
実 務 経 験	2005年	4月	学習院高等科 情報科 非常勤講師(2013年3月まで)	
	2006年	4月	慶應義塾大学 環境情報学部 非常勤講師(現在に至る)	
	2007年	4月	慶應義塾大学 看護医療学部 非常勤講師(2007年9月まで)	
	2008年	10月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任研究員(2009年3月まで)	
	2009年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任助教(2010年3月まで)	
	2010年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任講師(2013年3月まで)	
	2012年	4月	慶應義塾大学 看護医療学部 非常勤講師(2012年9月まで)	
	2012年	4月	法政大学 兼任講師(2013年3月まで)	
	2013年	4月	東京都市大学 メディア情報学部 非常勤講師(現在に至る)	
	2013年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 客員研究員(現在に至る)	
	2013年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 専任講師(現在に至る)	
受 賞 歴	2008年	8月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 第10回情報教育シンポジウム 奨励賞	
	年	月		
所 属 学 会	2004年	1月	情報処理学会 会員(現在に至る)	
	2006年	2月	日本教育工学会 会員(現在に至る)	
	2007年	8月	CIEC会員(現在に至る)	
	2008年	7月	IEEE Computer Society 会員(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等	2005年	3月	高等学校 教育職員免許状 一種(情報) 慶應義塾大学	
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

国内学会発表・国際会議発表

解説

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	情報分野の専門教育に限らず、文系の学生も対象として、ICTを活用した問題発見・問題解決能力が獲得できる教育を目指す。そのため、基礎ゼミナールなどの初年次教育の段階から、ICTを活用した創造的な学習環境とカリキュラムを構築することを目標とする。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 日本語プログラミング言語を利用した初学者向けのプログラミング教育の実践等</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 慶應義塾大学SFCの初年次情報教育のカリキュラムなど多数 詳細は研究業績を参照</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 詳細は研究業績を参照</p>
担当授業科目	2013年度担当科目:ITリテラシー演習1・2, コンピュータと生活, アルゴリズム基礎, アルゴリズム応用, 情報システム実験演習 I, 基礎ゼミナール1
代表的シラバス	2013年度 情報システム実験演習 I 概要 音や光を検知できるセンサ、モータなどを含む電子回路と、それらを制御するためのコンピュータプログラムを組み合わせ、人間と意思疎通する物体(インタラクティブオブジェクト)をデザインする演習を行います。インタラクティブオブジェクトの例としては、電子制御の玩具やアクセサリ、メディアアート作品などが挙げられます。演習を通じて、センサやモータなどの電子部品や電子回路の基礎知識と、基礎的な制御プログラミングを学習し、コンピュータを活用した「ものづくり」の幅を広げることを目標とします。
教育改善活動	ITリテラシー演習において、授業評価と教育効果測定を目的としたアンケート調査を実施中である。結果は今後のカリキュラム設計等に活用していく予定である。 学内FD研修への参加と発表を通じて、学内におけるICTを活用した教育支援環境の提案を行いたいと考えている。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 2013年度着任のため、本学での授業評価結果はなし</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 2013年度着任のため、本学での授業評価結果はなし</p>

研究業績

研究の特徴	初学者に対するプログラミング教育のためのツール開発、教育学習支援情報システムに関する技術開発と学習効果測定等を中心とした、情報教育に関する研究活動を行っている。
研究経歴	<p>2009年 津田塾大学 女性研究者支援センター 特任教員(2013年3月まで) 教育ワークショップの実践手法と共創行動の分析(共同研究)に関する研究に従事 KinectやArduinoを活用した教育ワークショップの実践手法に関する研究に従事</p> <p>2013年 山梨英和大学 人間文化学部 専任講師(現在に至る) 情報教育、教育学習支援情報システムに関する研究に従事</p>

研究実績	<p>(1) 著書(共著)</p> <p>[1-1] 大岩 元 監修・松澤 芳昭 著・杉浦 学 編著, ことだま on Squeakで学ぶ論理思考とプログラミング, 株式会社 イーテキスト研究所, 2008.4</p> <p>(2) 学術論文(査読有の論文誌)</p> <p>[2-1] 宮田 義郎・杉浦 学・亀井 美穂子, ワールドミュージアム- 志を広げる多文化異年齢コラボレーション, Vol.37 No.3, 日本教育工学会 論文誌 (印刷中)</p> <p>[2-2] 杉浦 学・松澤 芳昭・岡田 健・大岩 元, アルゴリズム構築能力育成の導入教育: 実作業による概念理解に基づくアルゴリズム構築体験とその効果, 情報処理学会 論文誌, Vol.49 No.10, pp.3409-3427, 2008.2</p> <p>[2-3] 松澤 芳昭・杉浦 学・大岩 元, 産学協同のPBLにおける顧客と開発者の協創環境の構築と人材育成効果, 情報処理学会 論文誌, Vol.49 No.2, pp.944-957, 2008.2</p> <p>[2-4] 杉浦 学・大岩 元, テスト問題を改善するための協調作業を支援する環境構築, 日本教育工学会 論文誌, Vol.30 No.3, pp.171-181, 2006.12</p> <p>(3) 国内学会発表・国際会議発表(5年以内 抜粋)</p> <p>[3-1] 高岡 詠子・田村 啓・杉浦 学, 初心者のタイピング動作特性の解析, 情報処理学会 研究会報告(CE-120), 2013.7(発表予定)</p> <p>[3-2] Nobuko Kishi, Manabu Sugiura, Can Programming Concepts Learned through Physical Actions? (Poster), The 10th Asia Pacific Conference on Computer Human Interaction (APCHI 2012), 2012.8</p> <p>[3-3] 植原 啓介・杉浦 学・服部 隆志, 新時代の問題発見・問題解決のための情報技術関連基礎教育, 平成24年度 ICT利用による教育改善研究発表会, 2012.8</p> <p>[3-4] Stephen Howell, Nobuko Kishi, Manabu Sugiura, Anders Berggren, Scratch and Kinect Computer Camps: Best Practices and Future Developments (Panel Discussion), Scratch@MIT (Massachusetts Institute of Technology), 2012.7</p> <p>[3-5] 岡田 健・杉浦 学・大岩 元, オブジェクト指向を実現する日本語プログラミング言語の試作, 日本ソフトウェア科学会第27回大会, 2011.9</p> <p>[3-6] 宮田 義郎・杉浦 学・原田 泰, 複数大学, 小学校をつなぐ協同制作による異文化・異年齢の創造的学び, 日本教育工学会研究報告集 11(1), pp.297-304, 2011.3</p> <p>[3-7] Daishi Kato, Manabu Sugiura PaPeRoch: A Research Project for Co-Creation Using a Communication Robot and Scratch (Posters and Demonstrations), Scratch@MIT (Massachusetts Institute of Technology), 2010.8</p> <p>[3-8] 杉浦 学・小館 亮之・来住 伸子・加藤 大志・植村 弘洋・國枝 和雄・山田 敬嗣, 創造的ワークショップを実現するロボット制御プログラミング環境, 情報処理学会 研究会報告(CE-103) Vol.2010 No.12, 2010.2</p> <p>[3-9] Ken Okada, Manabu Sugiura, Yoshisaki Matsuzawa, Megumi Araki, Hajime Ohiwa, Programming in Japanese for Literacy Education, IFIP International Federation for Information Processing History of Computing and Education 3(WCC2008), Vol.269, pp.171-176, 2008.9</p> <p>[3-10] 荒木 恵・松澤 芳昭・杉浦 学・大岩 元, プログラミング教育への導入のための 情報システム概念に基づくアンブラグドワークショップ, 情報処理学会 情報教育シンポジウム(SSS2008), pp.163-170, 2008.8</p> <p>[3-11] 杉浦 学・荘司 泰徳・大岩 元, 大学における情報技術に関する能力認定試験の分析—古典的テスト理論による分析と項目反応理論の適用可能性—, 情報処理学会 情報教育シンポジウム(SSS2008), pp.87-93, 2008.8</p> <p>[3-12] 荒木 恵・松澤 芳昭・杉浦 学・大岩 元, プログラミング授業の導入としての「お絵かきプログラム開発演習」, 日本教育工学会研究報告集 Vol.8 No.3, pp.111-118, 2008.7</p> <p>[3-13] 水野 邦太郎・杉浦 学, Interactive Writing Communityにおける学びの共同体創りとライティング能力の育成, 平成20年度 全国大学IT活用教育方法研究発表会, 2008.7</p> <p>(4) 解説</p> <p>[4-1] 来住 伸子・小館 亮之・杉浦 学, 女子大学生のための情報科学教育—最近の海外事例紹介—, 情報処理学会誌 53巻11号 ペタ語義, pp.1222-1225, 2012.11</p> <p>[4-2] 杉浦 学・来住 伸子・小館 亮之, 女子中高生の理系進路選択支援を目的としたプログラミングワークショップ, 情報処理学会誌 53巻9号 ペタ語義, pp.978-981, 2012.9</p> <p>[4-3] 来住 伸子・小館 亮之・杉浦 学・高橋 裕子, 情報通信分野における女子中高生対象の啓蒙活動—津田塾大学女性研究者支援センターの取り組み—, 産学官連携ジャーナル, Vol.8 No.8 2012, pp.23-25, 2012.9</p>
競争的資金採択課題	特になし

学会等発表・役員参加	学会発表については研究業績欄に記載 役員参加特になし
共同研究・受託研究の実績	<p>2009年 4月 教育ワークショップの実践手法と共創行動の分析(2011年3月まで, 3,000千円) NEC C&Cイノベーション研究所との共同研究 研究代表者</p> <p>2011年 4月 平成23年度 女子中高生の理系進路選択支援事業(2012年3月まで) 科学技術振興機構による津田塾大学への委託事業 実施分担</p> <p>2011年 6月 iRobot社自動掃除機の子供向けプログラミング環境の開発・実証実験(継続中) iRobot日本総代理店との共同研究</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>日本語プログラミング環境を活用した教育実践に関する研究に関しては、教科書[1-1]としての出版や査読付き論文誌[2-2]に採録されており、一定の評価を得ていると考えている。なお、教科書[1-1]は複数の教育機関での利用実績がある。</p> <p>教育学習支援システムをテーマとした研究については、論文誌[2-4]と査読付きの国際学会に1件の掲載実績がある。</p> <p>プログラミングをテーマとした教育ワークショップの実践手法に関しては、[4-1]や[4-3]の解説として研究活動の成果を広く公表している。複数大学におけるコラボレーションを取り入れた学習活動に関しては、論文誌[2-1]に採録が決定している。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	特になし
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし

社会 貢 献 活 動	(1)講演会 特になし
	(2)出前講座 2013年 6月 2013年度第1回 オープンキャンパス模擬授業担当
	(3)公開講座 特になし
	(4)学外審議会・委員会等 特になし
	(5)その他 2010年 8月 日本教育大学院大学 教員免許講習 講師(現在に至る)

成果と目標

専門的成果	<p>①プログラミング教育用のソフトウェアおよび教材コンテンツの開発: Squea Etoysをベースとした日本語プログラミング環境の構築を行い、アルゴリズム構築能力を育成するためのカリキュラム作成を行った。</p> <p>②教育学習支援情報システムに関する技術開発: 既存の教育学習支援システムに関する機能拡張を行うことで、試験問題の作問作業と状態遷移管理を支援し、作問やレビューの負担を軽減するシステムを開発した。</p> <p>③プログラミングをテーマとした教育ワークショップ手法の実践: コミュニケーションロボットやKinectやArduinoなどの教材を活用したワークショップのカリキュラムを開発し、実践を行った。</p>
専門的目標	<p>①Webプログラミング支援環境の研究推進: 現在開発中のWebプログラミングの支援環境に関する評価結果をまとめた論文を執筆し、多くの教育機関での活用を促進するためのマニュアル、カリキュラム作成を含めた広報活動を行いたいと考えている。</p> <p>②プログラミング教育の教育効果測定: ①と関連し、日本語プログラミング環境を使った授業などにおいて、既に実施しているテスト結果の分析作業等を行い、学習効果を具体的な数値として測定するための手法を検討する。</p> <p>③タッチタイピングの練習環境の評価: オンラインで動作するタッチタイピング練習ソフトウェアの練習ログを解析し、具体的な教育効果の測定と効果的な練習手法の分析を行う。</p>

最新データ入力日

2013年 5月 1日

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
オクムラ ヤヨイ 奥村 弥生	女	非公表	助教	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(人間環境学)	専門分野	臨床心理学	
学歴	2001年	3月	九州大学教育学部卒業	
	2001年	4月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース修士課程入学	
	2003年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース修士課程修了	
	2003年	4月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース聴講生	
	2004年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース博士課程入学	
	2010年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース博士課程単位取得退学	
実務経験	2001年	4月	九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター心理相談部門相談員 (2007年3月まで)	
	2005年	4月	九州大学大学院ティーチングアシスタント(2007年3月まで)	
	2007年	4月	大川看護福祉専門学校非常勤講師(「老人・障害者の心理」「人間関係論」担当) (2010年3月まで)	
	2008年	10月	福岡教育大学 非常勤講師(「生徒指導」担当)(2010年3月まで)	
	2009年	4月	中村学園大学短期大学部 非常勤講師(「臨床心理学」担当)(2010年3月まで)	
	2010年	4月	山梨英和大学人間文化学部 助教(現在に至る)	
受賞歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所属学会	2001年	7月	日本心理臨床学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	8月	日本心理学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	8月	日本教育心理学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	11月	日本感情心理学会 会員 (現在に至る)	
	2008年	8月	日本精神分析学会 会員 (現在に至る)	
特免資格 等・・・	2004年	4月	臨床心理士(No.12220)	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>心理学は、「人間の心」という身近であり、かつ奥深い対象について学ぶ学問である。第一に、心について学ぶことは、自らの心を見つめ問い直すことにつながる。そのような作業は、自身についての理解を深め、日々の営みを豊かにする一助となるであろう。第二に、科学としての心理学的方法論—すなわち、先行研究を概観し、問いを立て、データ収集を行い、分析し、結果について考察するというプロセスについて学ぶことは、既知と知っている事象を改めて問い直し、科学的知見や実証的なデータを踏まえて多角的に物事を捉える姿勢につながる。以上のようなことを十分に習得することは、社会の中で自分自身を生かしながら他者のために貢献することにつながるものと考えており、そのような人間の育成が教育理念である。その達成のためには、講義を通して基本的な知識を教授すること、さらに、演習を通して、自ら問いを立てて学習し、議論する場を提供することが重要と考える。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 a.臨床心理学に関連するフィールドを見学するなどの校外学習を取り入れた演習 b.演習におけるブレインストーミングの活用 c.臨床心理学に関する体験学習の積極的導入 (2)作成した教科書、教材等 特になし (3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度： はじめてのカウンセリング, 臨床心理フィールド演習, カウンセリング演習, アドバンスト心理学研究演習, 心理学研究法, 心理学文献講読</p>
代表的シラバス	<p>[はじめてのカウンセリング]カウンセリングとは、適応上の問題をもつ個人が、専門家の援助によって問題解決を図る過程といえる。その過程を支える心理療法の理論と技法には様々なものがある。この授業では、代表的な心理療法を体系的に学び、その理論と技法についての基本的理解を得ることを目的とする。</p> <p>[アドバンスト心理学研究演習]この授業では「感情」をテーマとして取り上げ、心理学研究についての理解を深める。人間の感情は、感情心理学はもとより、臨床心理学、発達心理学、社会心理学など様々な分野にまたがるテーマである。また、感情全般についての研究から、喜びや悲しみ、怒り、恐怖、不安、抑うつなど、様々な種類の感情を個々に検討するものまで幅広く研究されている。</p> <p>この授業では、グループごとに感情について関心のあるテーマを自ら設定し、文献を読み、発表と討論を通して理解を深める。また、そのような過程を通して、文献を検索・収集しまとめる力や、批判的な観点からも文献を評価し、議論する力をつける。</p>
教育改善活動	<p>a.学内FD研修への参加 b.体験学習における学生の意見・創意工夫の反映 c.授業評価アンケートの活用</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 過去3年間の学生による授業評価(総合的な満足度:5段階評価)は下記のとおりであり、平均4.27である。 2010年度前期:4.30、4.45/2010年度後期:3.45、4.67、4.90、4.18/2011年度前期:4.24、4.50、4.94/2011年度後期:3.82、3.67、4.09/2012年度前期:4.07、3.91、4.80。 講義ではポイントを絞ったわかりやすい説明を工夫し、また、適宜小テストを実施して学生自身の主体的な学習を促した。演習では課題やワークを積極的に取り入れたり、学生自身の発表した内容を膨らませるコメントを加えるなどの工夫を行った。2010年度の満足度が3.45と相対的に低い科目については特に改善を加え、徐々に評価は上がっている。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	人間の感情や情動、情緒について研究を行っている。具体的には、「情動への評価」という概念を提起し、その測定方法(尺度)を開発するとともに、それが当人の情動の取り扱いおよび適応状態にどのように関連するかを研究している。また、情動は人間の適応に深く関わっており、心理療法においても人間の情緒的要素に目を向ける重要性が指摘されていることから、研究成果の臨床的活用にも力を入れている。	
研究経歴	2010年 山梨英和大学人間文化学部 助教(現在に至る) 年 年	
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.奥村弥生「噛み締める」日常臨床語辞典 北山修監修 妙木浩之編 誠心書房 2006</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.奥村弥生「母親と子どもの情動特性の関連性」九州大学心理学研究 6, 159-166, 2005</p> <p>b.奥村弥生「情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連」教育心理学研究 56, 403-413, 2008</p> <p>c.奥村弥生「情動への評価」研究の展望—概念, 情動過程での位置づけ, その形成について—九州大学心理学研究 11, 109-118, 2010.</p> <p>d.奥村弥生「情動の抑制と統制可能感による二次元表出統制モデルの検討—情動への評価と関連から—」山梨英和大学紀要10,58-67,2011</p> <p>e.奥村弥生「情動への評価と愛着との関連」山梨英和大学紀要11, 18-26, 2013</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. Yayoi Okumura "Evaluation of Emotion and Attachment" XXIX International Congress of Psychology 2008 (Berlin)</p> <p>b. Yayoi Okumura "Evaluation of emotion and regulation of emotional expression in sadness and anger: Perspectives of emotional suppression and controllability of emotion" 27th International Congress of Applied Psychology 2010 (Melbourne)</p> <p>c.奥村弥生訳「治療同盟、交渉、決裂の修復」安達圭一郎監訳「エヴィデンスベースト精神力動心理療法—科学性と実践性を架橋する」北大路書房 2012</p> <p>d. 奥村弥生(分担訳) 繁榎算男・四本裕子監訳「APA心理学大辞典」培風館 2013</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2010年	9月 奥村弥生・三沢良「愛着スタイルによる情動エピソードの開示抑制理由の違い」日本心理学会第74回大会発表論文集(大阪大学)
	2010年	9月 奥村弥生「情動の両刃の矛先を左右する要素とは」日本心理学会第74回大会ワークショップ「情動の両刃を研ぎなおす—情動知性への提言—」
	2009年	8月 奥村弥生「情動制御と情動への評価との関連」日本心理学会第73回大会発表論文集p.1005.(立命館大学)
	2008年	9月 奥村弥生「情動への評価スタイルの分類～情動認識困難・言語化困難および愛着との関連を含めて～」日本心理学会第72回大会発表論文集p.930.(北海道大学)
	2007年	9月 奥村弥生 プレイに象徴化される子どもの内的世界の理解～カエルから王様に戻ったAとの面接過程を通して～ 日本臨床心理学会第26回大会発表論文集p.87.(東京国際フォーラム)
受託共同研究の実績	2010年	4月「初学者のケース担当における体験をコンテインする教育・訓練システムの研究」2011年度日本臨床心理士資格認定協会一般研究助成受託研究(研究代表者:黒田浩司)
	年	月
	年	月
	年	月
	年	月

大学院生指導	大学院生の実習機関である山梨英和大学附属心理臨床センターにおいて大学院生への実習指導・ケーススーパーヴィジョンを行っている。
研究能力に対する評価	情動や感情に関する研究は、近年研究が増加し研究内容も多岐に渡る領域であるが、その中でも、「情動への評価」という新しい概念を提起し、個々人が自らの情動をどのように評価するか（怒りを悪いもの／必要なものと評価する等）ということが、当人の感情の取り扱いおよび適応状態にどのように関連するかを明らかにしていくことは、情動が人の適応に關与するメカニズムの一端を明らかにする一助となることが期待される。また、心理療法においても人間の情緒的要素に目を向ける重要性が指摘されていることから、研究成果の臨床的活用についても今後の展開が期待される。

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年 4月 図書館運営委員会 委員（2012年2月まで） 2011年 4月 紀要委員会 委員（2012年2月まで） 2011年 4月 心理臨床センター紀要編集委員 2010年 4月 エクステンション委員会 委員（2012年2月まで） 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	山梨英和大学附属心理臨床センターにおける大学院生への実習指導・ケーススーパーヴィジョン
社会貢献活動	(1) 講演会 特になし (2) 出前講座 2011年 6月 山梨県教育委員会 適応指導教室(葦崎こすもす教室) 事例検討会講師 2010年 11月 山梨県教育委員会 適応指導教室(葦崎こすもす教室) 事例検討会講師 2009年 11月 北九州市立高生中学校 家庭教育学級(保護者研修)講師 2007年 1月 北九州市立二島中学校 教職員研修講師 (3) 公開講座 特になし (4) 学外審議会・委員会等 2010年 4月 山梨県臨床心理士会 会計 (5) その他 2010年 4月 山梨英和大学附属心理臨床センター兼任カウンセラー(現在に至る) 2008年 8月 第38回九州地区大学保健管理研究協議会一般演題発表「学生への心理教育グループの実践」

成果と目標

専門的成果	①情動に関する研究：心理学の中でも現在活発に研究が行われている情動に焦点を当て、「情動への評価」という概念を提起し、その測定方法(尺度)を開発するとともに、適応との関連を明らかにした。継続して、情動が人間の適応に寄与するメカニズムの解明を行っている。
-------	---

<p>専門的成果</p>	<p>②心理臨床活動： 医療領域や教育領域等において心理臨床経験を積み、現在、山梨英和大学心理臨床センターにて心理臨床活動の実践を行っている。</p> <p>③研究および心理臨床活動の成果発表： 情動研究および心理臨床活動について学会発表及び論文発表を行ってきた。</p>
<p>専門的目標</p>	<p>①情動に関する研究： これまでの情動についての研究を展開させることに加え、心理臨床活動の実践から得られる知見についても統合させて博士論文にまとめることを目標としている。</p> <p>②心理臨床活動： 山梨英和大学心理臨床センターにおける心理臨床活動等を通して臨床経験を積み、心理臨床技術の向上を目指している。</p> <p>③研究および心理臨床活動の統合と成果発表： 研究知見の心理臨床活動への反映および、心理臨床実践から得られる知見の研究への反映という相互プロセスを行き来しながら両者を展開・統合していくことと、それらの成果を適宜学会等で発表していくことを目標としている。</p>

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
アキツキ タクマ 秋月 拓磨	男	1983年	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(工学)	専門分野	情報学/人間情報学/ソフトコンピューティング	
学 歴	2004年	3月	国立熊本電波工業高等専門学校 電子制御工学科 卒業	
	2004年	4月	豊橋技術科学大学 工学部 生産システム工学課程 3年次編入学	
	2006年	3月	豊橋技術科学大学 工学部 生産システム工学課程 卒業 学士(工学)	
	2006年	4月	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科修士課程 生産システム工学専攻 入学	
	2008年	3月	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科修士課程 生産システム工学専攻 修了 修士(工学)	
	2008年	4月	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科博士課程(後期課程) 電子・情報工学専攻 入学	
	2012年	3月	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科博士課程(後期課程) 電子・情報工学専攻 修了 博士(工学)	
実務 経 験	2008年 年 年	3月 月 月	豊橋技術科学大学グローバルCOE「インテリジェントセンシングのフロンティア」リサーチ・アシスタント(2012年3月まで)	
受 賞 歴	2004年	3月	電子情報通信学会九州支部 平成15年度成績優秀賞(高等専門学校)	
	2010年	10月	豊橋技術科学大学 グローバルCOE センシングアーキテクトシンポジウム ADIST2010 ポスター発表最優秀賞	
	2011年	3月	豊橋技術科学大学 グローバルCOE センシングアーキテクト優秀活動賞	
	2012年	3月	豊橋技術科学大学 グローバルCOE センシングアーキテクト特別賞	
所 属 学 会	2007年	10月	人工知能学会会員(現在に至る)	
	2008年	9月	ヒューマンインタフェース学会会員(現在に至る)	
	2009年	1月	計測自動制御学会会員(現在に至る)	
	2009年	6月	米国電気電子学会(IEEE)会員(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>人文学系を中心とした本学教育カリキュラムの中で、理工系のエッセンスを取り入れることで、文理の枠をこえた広い視野と柔軟な思考力を兼ね備えた人材の育成を目指している。そのための方針として、情報科学の基礎となる数理的・論理的な思考力を身につけるとともに、自分の考えを他者に伝えるためのコミュニケーション能力を修得することを教育の達成目標と考える。</p> <p>現代社会において、ビジネスや研究のあらゆる場面で情報を自ら収集し、分析、説明する能力が求められている。これら情報の利活用能力を身につけるには、事例やプロジェクト課題をとおして学生自らが主体となって考えることが最重要であると考え。そこで、講義・演習においては、できるだけ具体的な問題や例を多く取り上げ、現象を客観的に捉え、定量的な分析ができること、また、それらの結果を図表等を用いて文書および口頭にて説明できることに重点をおいた指導を目指す。その結果、将来、ビジネスや研究の場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、学生が興味関心をもって主体的に参加できるような講義・演習を展開したい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 豊橋技術科学大学 工学部にて、実験・実習科目における教育補助(ティーチング・アシスタント)として、「物理実験」(主に学部2年生を対象とした実験科目)、および「生産システム工学創造実験」(学部3年生を対象とした実習科目)の二つの科目を担当した。それぞれの科目で、実験の手順や原理、器具の扱い方、また報告書のまとめ方の指導補助にあたった。とくに、後者の科目では、DSP(デジタル信号処理装置)による音響信号処理の指導補助に携わったが、必要な事前知識に受講生の間で大きなバラツキが見られた。そこで、従来の資料のみならず、実験に必要な基礎理論(サンプリング定理やFFT)をまとめた補助資料を新たに作成し、受講者全体の理解度向上に努めた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	2013年度: ITリテラシー演習1および2、情報システム実験演習IおよびII、専門ゼミナール
代表的シラバス	演習・講義の方針として、学生が主体性をもって問題に取り組むとともに、実践的な問題解決能力を身につけることのできるよう配慮している。そのため、演習や講義では、ビジネスや研究の場で実際に起こりえる問題を演習課題として用意し、教員からの説明を必要最小限にとどめることで、課題解決の方法を学生自らが模索できるよう心がけている。さらに、その結果を自分のことばでわかりやすく他者に説明できるよう成果報告と情報共有の機会を演習・講義中に設けている。
教育改善活動	特になし
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 演習・講義の全体評価(講義アンケートより): 担当の演習科目では、コンピュータを利用した情報の利活用能力、および、問題解決能力を養うことを主な目的とした。演習では毎回、コンピュータを活用したデータ集計やグラフ作成の課題を出題するとともに、学生自身が実際に手を動かしながら問題や疑問点を発見できるようにした。また、課題の解決に向けて教員とTAで協力しながら受講生をサポートする体制を取った。アンケートの結果、「この授業がねらいとしていた知識や技能を習得できたと思いますか」という問いに対し、5段階評価のうち上位2つ(5または4)に回答した学生はアンケート回答者の約9割に達しており、学生の理解度は概ね高い傾向にあったといえる。また、学生の出席率も概ね高い傾向にあった。</p> <p>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より): 本科目では、毎回の演習課題への取り組みを中心にすすめ、難しい操作や機能、IT用語についての補足を適宜おこなった。その結果、「説明が十分で分かりやすくてよかった」、「分からないところを気軽に質問でき、丁寧に教えてくれたところが良かった」、「パソコンの使い方がよくわかった」、「自分のペースで演習ができた」など概ね好評を得ている。一方、改善して欲しい点として、「教員の説明が聞き取りづらいことがあった」という意見があった。この指摘に対しては、まだ日本語に不慣れな留学生も本科目を受講していることから、口頭で説明する場合はゆっくり・はっきりと、できるだけ平易な言葉で説明するとともに、配布資料を併用する等工夫したい。</p>

教育能力に対する評価	<p>改善に向けた今後の方針：コンピュータに関する知識やスキルが受講生間で大きく異なり、演習の進度をクラス全体で揃えることは難しい。そのため、今後も各自のペースで演習課題に取り組めるようにし、そのなかで受講生が気軽に質問したり、意見を述べたりしやすい環境をつくるのが有効であると考え。また、進度の早い受講生やコンピュータに関心の高い受講生に対しては、さらなるスキルアップのための課題を用意するなど工夫し、各受講生の学習意欲を高めるための方法を今後も模索検討したい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>生体の脳における情報処理の仕組みを模倣した計算モデル(ニューラルネットワークや非線形力学系)について、その性質を理論と数値実験の両面から解明し、データ分類や診断、予測といった工学の諸問題に応用することを目指して研究を行っている。具体的には、1) セルラニューラルネットワーク(CNN)を用いた連想記憶システムの設計とその病名診断システムへの応用、2) 力学系理論に基づく時系列データ解析手法の開発とその運動分析への応用、の大きく二つのテーマに取り組んでいる。</p>
研究経歴	<p>2008年 豊橋技術科学大学 グローバルCOE リサーチ・アシスタントとして、ニューラルネットワーク、および、力学系理論を用いたデータ解析に関する研究に従事(2012年3月まで)</p> <p>2012年 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教として、力学系理論を用いた時系列データ解析に関する研究に従事(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書 特になし</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから記載)</p> <p>1. Toward Symbolization of Human Motion Data –Statistical Analysis in Symbol Space–, T.Akiduki, Z.Zhang, T.Imamura, T.Miyake, H.Takahashi and M.Namba, ICIC Express Letters, Vol.7, No.5, pp.1475–1480, 2013</p> <p>2. アトラクタを用いた時系列データからの動作特徴の抽出, 秋月, 章, 今村, 三宅, 電気学会論文誌C, Vol.132, No.6, pp.975–982, 2012.</p> <p>3. Design of Multi-Valued Cellular Neural Networks for Associative Memories, T. Akiduki, Z. Zhang, T. Imamura, T. Miyake, Int. J. of Innovative Computing, Information & Control, Vol.8, No.3, pp.1575–1589, 2012.</p> <p>4. Time-Series Analysis of Motion by Using Nonlinear Dynamical Systems, T. Akiduki, Z. Zhang, T. Imamura, T. Miyake, ICIC Express Letters, Vol.6, No.4, pp.1077–1082, 2012.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. Toward Symbolization of Human Motion Data –Statistical Analysis in Symbol Space–, T.Akiduki, Z.Zhang T.Imamura, T.Miyake, H.Takahashi and M.Namba, The 7th Int. Conf. on Innovative Computing, Information & Control, In Shanghai, Nov. 2012.</p> <p>2. Time-Series Analysis of Motion by Using Nonlinear Dynamical Systems, T.Akiduki, Z.Zhang, T.Imamura, and T.Miyake, The 6th Int. Conf. on Innovative Computing, Information & Control, In Kitakyushu, Dec. 2011.</p> <p>3. Human Motion Analysis from Inertial Sensor Data Based on Nonlinear Dynamics, T. Akiduki, Z. Zhang, T. Imamura, and T. Miyake, Proc. of the 18th World Congress of the International Federation of Automatic Control, In Milano, pp.7396–5194, Aug. 2011.</p> <p>4. A New Design Method of Multi-Valued Cellular Neural Networks for Associative Memory, Z. Zhang, R. Taniai, T. Akiduki, T. Imamura, and T. Miyake, the 4th Int. Conf. on Innovative Computing, Information & Control, In Kaohsiung, Dec. 2009.</p> <p>5. Associative Memories with Multi-Valued Cellular Neural Networks and Its Application to Disease Diagnosis, T. Akiduki, Z. Zhang, T. Imamura, and T. Miyake, The 2009 IEEE Int. Conf. on Systems, Man, and Cybernetics, In Texas, pp.3924–3929, Oct. 2009.</p> <p>6. Realization of Multi-Valued Associative Memory with Cellular Neural Network, Z. Zhang, T. Akiduki, T. Imamura and T. Miyake, The 2007 IEEE Int. Conf. on Systems, Man, and Cybernetics, In Montreal, pp.1205–1210, Oct. 2007.</p>

競争的資金採択課題	<p>(最新のものから記載)</p> <p>1. 日本学術振興会、科学研究費助成事業・若手研究(B)(2013年4月から2016年3月まで):「相空間を用いた身体動作の特徴抽出と運動動作解析への応用」、研究代表者(計3,200千円)</p> <p>2. 日本学術振興会、科学研究費補助事業・基盤研究(C)(2013年4月から2016年3月まで):「力覚提示ジョイスティックによる操作型注湯ロボットの操作支援・訓練システムの開発」、研究分担者(400千円)</p> <p>3. (公財)日本科学協会 平成25年度笹川科学研究助成(2013年4月から2015年2月まで):「力学系を用いた身体動作の特徴抽出に関する研究」、研究代表者(800千円)</p> <p>4. 第20回(財)堀科学芸術振興財団 研究助成(2011年4月から2012年3月まで):「モーションセンサを用いた自動車運転の計測と動作特徴抽出アルゴリズムの開発に関する研究」、研究代表者(1,000千円)</p> <p>5. 豊橋技術科学大学グローバルCOEセンシングアーキテクト・ポスターコンペ(2011年5月から2012年3月まで):「Extraction of motion patterns from time-series data by using attractors」、研究代表者(300千円)</p> <p>6. 豊橋技術科学大学 未来技術流動研究センター 学生研究プロジェクト(ARPS)(2009年7月から2010年3月まで):「力学系を利用した時系列データからの人の動作情報抽出」、研究代表者(200千円)</p>
学会等発表・役員参加	<p>2012年 9月 相空間上のアトラクタを用いた動作特徴の抽出, 秋月, 章, 今村, 三宅, 第18回創発システムシンポジウム「創発夏の学校2012」資料p.12, 2012</p> <p>2011年 5月 慣性センサ群による自動車運転操作における上肢動作計測法の開発, 秋月, 章, 今村, 三宅, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門講演会, pp.2P2-O10(1)-(2)</p> <p>2011年 3月 非線形力学系を用いた慣性センサデータからの動作特徴抽出とそのアトラクタ表現における物理的意味の考察, 秋月, 章, 今村, 三宅, 第38回知能システムシンポジウム, pp.423-426</p> <p>2010年 10月 ハンドル操作における動作特徴の抽出とそのアトラクタ表現, 秋月, 章, 今村, 三宅, 第20回インテリジェント・システム・シンポジウム, PaperID 60</p> <p>2009年 9月 力学系の設計とその連想記憶への応用についての一考察, 秋月, 章, 今村, 三宅, 第19回インテリジェント・システム・シンポジウム, pp. 61-62</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	<p>豊橋技術科学大学 大学院工学研究科にて、自身の研究テーマと関連の深い大学院生の研究遂行の指導補助に携わっている。具体的には、定期的な進捗報告やミーティングを適宜実施し、研究の進捗や実験結果の妥当性についてディスカッションを交わしている。また、その成果の一部は国際会議や国内会議での発表に至っている。</p> <p>2009年度: 一般化固有値最小化問題を用いた多値連想記憶セルラニューラルネットワーク設計法に関する研究</p> <p>2011年度: 動的関係ネットワークを用いた異常診断法の開発に関する研究</p>
研究能力に対する評価	<p>音声や画像といった多様なデータから特徴を抽出し、あるカテゴリに分類する操作はデータ解析における重要な基本操作の一つである。ヒトがこのような操作を難なく実行する一方で、計算機による実現は困難を伴う。本研究では、生体における情報処理の仕組みを模倣し、非線形力学系の有する性質を情報の記憶・想起に応用し、ノイズやゆらぎに対して柔軟で頑健な情報処理システムの構築を目的としている。とくに、血液検査データや運動データといった生体データを対象とし、ノイズや個人差に由来するゆらぎを含んだデータからの特徴抽出および分類の手法を構築している。それらの成果は、学術論文2編、レター2編として掲載された他、国内外の学術会議でも発表し、学術的に高い評価を得ている。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2013年 2月 情報セキュリティーポリシーWG 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1) 講演会 年 月 特になし (2) 出前講座 年 月 特になし (3) 公開講座 年 月 特になし (4) 学外審議会・委員会等 年 月 特になし (5) その他 2012年 6月 国際会議 Int. Conf. on Innovative Computing, Information & Control 2012 の査読

成果と目標

専門的成果	<p>①連想記憶多値セルラニューラルネットワーク(多値CNN)の設計と応用:セルラニューラルネットワーク(CNN)を用いた知的診断システムの実現を目的とし、多値CNNの設計とそのパターン分類問題への応用に取り組んでいる。我々の研究グループでは、従来2値または3値のパターンしか記憶できなかったCNNを多値化する方法を提案し、さらに肝疾患名分類問題への応用例を通して実問題での有効性を確認した。これまでに、学術雑誌1編、国際会議 5 編(レフリー有り)を中心とし、国内外における成果の積極的な公表に努めている。</p> <p>②アトラクタを用いた時系列データ解析法の開発:運動データから作業者のくせやスキルといった動作特徴を抽出することを目的とし、非線形力学系のアトラクタを用いた時系列データ解析法を提案した。アトラクタ(attractor)とは、解を求めることが困難な力学モデルにおいて、解の性質を幾何的に把握するための数学的概念のことである。アトラクタを利用することで、運動データに含まれる運動の様式や個性を幾何的に表現でき、作業スキルの抽出や定量評価の実現を期待できる。これまでに数値実験によって提案法の有効性を検証し、それらの結果を学術雑誌1編、レター2編として公表した。</p> <p>③研究成果の発信等:論文誌への投稿および国際会議での発表を通して研究成果を公表すると共に、個人ホームページにて発表論文・講演のリストを掲載し、幅広く研究成果を発信できるよう努めている。</p>
専門的目標	<p>①連想記憶多値セルラニューラルネットワーク(多値CNN)の設計と応用:CNNの設計問題は、出力関数の設計と素子間結合係数の設計問題に大別できる。これまでに多値出力を実現する新たな出力関数設計法を提案し、さらに近年、多値CNNのための一般化固有値最小化問題に基づく結合係数設計法を提案した。この手法は、自己想起能力を維持しつつCNNの特徴である疎なネットワークを実現できる可能性を有する。今後は、このスパース性を積極的に活用することで、CNNの数値計算の高速化やハードウェア化を容易なものとし、新たなセンシング情報処理デバイスの開発を期待できる。</p>

専門的目標	<p>②アトラクタを用いた時系列データ解析法の開発: 従来、人間のくせや身体スキルといったものは定量的に分析・表現することが難しく、またその手法も未だ確立していない。その中で本手法は、人体の動きが物理法則に従うある力学モデルとして記述できることを踏まえ、力学特性を考慮した動作特徴量(アトラクタ)をセンサ信号から抽出する方法を提案した。これまでに、主に方法論を中心として検討していたが、今後は被験者実験を通じた実データでの検討を進め、スキルの抽出およびモデル化手法の構築を目指したい。</p>
	<p>③研究成果の発信等: 今後もWebなどを通じて社会・国民に対して研究成果を発信するよう努める。また、本学で実施している高等学校向けの出張講義や市民講座、オープンキャンパス等、様々な機会を利用して、研究成果の解説を行い、本研究を含めた計測・制御工学分野における研究成果を幅広く発信したい。また、これまでの研究基盤を維持するためにも、外部資金の獲得に積極的にチャレンジする。そのためには、上述の①、②の研究テーマのみならず、関連の研究者と連携して新たな共同研究テーマの創出にも積極的に取り組みたい。</p>

最新データ入力日	2013年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
イダ トシハル 飯田 敏晴		男	非公表	助教	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号		博士(心理学)	専門分野	臨床心理学、健康心理学・健康開発	
学 歴	1998年	3月 千葉市立稲毛高等学校卒業			
	2004年	3月 明治学院大学文学部心理学科卒業			
	2004年	4月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻修士課程入学			
	2006年	3月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻修士課程修了			
	2008年	4月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程入学			
	2013年	3月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程修了			
実 務 経 験	2002年	9月 渋谷けやき福祉作業所 非常勤指導員(～2004年9月)			
	2005年	4月 国立国際医療センター戸山病院精神科 非常勤心理療法士(～2010年3月)			
	2005年	4月 東京都港保健所 非常勤グループワーカー(～2007年3月)			
	2006年	5月 亀有メンタルクリニック 非常勤カウンセラー(～2008年3月)			
	2006年	10月 東邦大学医学部 非常勤講師 健康心理実習 担当(～2010年3月)			
	2007年	4月 四谷ゆいクリニック 非常勤カウンセラー(2008年3月)			
	2008年	4月 明治学院大学 特別ティーチングアシスタント 心理統計法担当(～2008年7月)			
	2008年	9月 明治学院大学 ティーチングアシスタント 心理支援論担当(～2009年1月)			
	2009年	4月 明治学院大学 ティーチングアシスタント 心理統計法担当(～2009年7月)			
	2010年	4月 公益財団法人エイズ予防財団 リサーチ・レジデント(～2012年3月)			
	2012年	4月 国立国際医療研究センター病院精神科 非常勤心理療法士(～2013年3月)			
	2012年	5月 北里大学健康管理センター学生相談室 非常勤カウンセラー(2013年3月)			
	2013年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 助教(現在に至る)			
	2013年	4月 国立国際医療研究センター病院精神科 嘱託心理療法士(現在に至る)			
受 賞 歴	2008年	7月 日本コミュニティ心理学会 若手学会員 研究・実践奨励賞			
	年 月 年 月				
所 属 学 会	2004年	4月 日本コミュニティ心理学会(現在にいたる)			
	2004年	6月 日本応用心理学会(現在にいたる)			
	2004年	6月 日本心理臨床学会(現在にいたる)			
	2004年	6月 日本カウンセリング学会(現在にいたる)			
	2006年	2月 日本教育心理学会(現在にいたる)			
	2006年	1月 多文化間精神医学会(現在にいたる)			
	2010年	6月 日本エイズ学会(現在にいたる)			
	2011年	8月 日本健康心理学会(現在にいたる)			
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・ ・	2007年	4月 臨床心理士(17736号)			
	年 月				
	年 月				
	年 月				
e-mail	tiida[at]yamanashi-eiwa.ac.jp				

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>心理臨床学は、実践の学問である。そして、その根底を支える理論は、その実践を基に探求し構築されてきたものである。したがって、学生に、そこでの知見を伝えるにあたっては、学生にとって身近なところからの理解を深めていくことが大切と考えている。また、具体的な理解を得ることは、問題意識や自らの問いの発生につながる。その意識や問いを、理論と結びつけることでより有機的なものとなる。実際の教育においては、学生のニーズや理解度を確認しつつ、適宜工夫を加えていくことで、講義がより有意義な時間となるよう心がけているつもりである。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 a)「異常心理学」は、本学に赴任して初めての授業である。履修者は100名を越える。学生によって学習の進度は様々である。その進度に応じた授業を展開させるために、毎回の講義終了前には、質問・感想シートを配布し、次回の講義では、授業内容にそのことを反映させるとともに、毎回、担当教員が、質問に対するコメントを付したフィードバックシートを配布している。また、視聴覚教材を積極的に用いて、体系的な理解を促進するよう心がけている。「臨床心理フィールド演習」では、外部の臨床実践の機関での見学において、より学びを得られるようつとめるとともに、講義では、講師のこれまでの臨床現場での経験を学生と適宜共有することを通じて、内容の理解を深めていけるよう展開している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 市販されている書籍を参考書として使用・紹介している。その他、講義ではパワーポイント、市販の映像教材などを多用して、聴覚的な理解に留まらず視覚的な学習を促進する教材を使用している。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 看護短大の新入生を対象としたオリエンテーションにおいて、学校生活への見通しを得、適応を促進するために企画されたグループワークの効果について、日本教育心理学会第53回総会において、次の演題と演者で共同発表した。益子洋人・岸太一・飯田敏晴・川島義高・木村真人・近藤育代・富沢貞雄・山本菜樹・稲津教久・加藤真子・善福正夫・片野真・佐藤真由美・副久美代・竹内信・高橋有子 2011 看護短大新入生における入学前グループワークの効果測定の試みー学校生活への見通しと過剰適応行動に焦点を当ててー</p>
担当授業科目	2013年度:【学部】異常心理学、カウンセリング演習、ココロと現代社会、ストレス・マネジメント法、臨床心理フィールド演習
代表的シラバス	<p>異常心理学</p> <p>概要: 人間の「異常」を考えていくうえでは、一つの視点からだけではなく、様々な観点からなされるのが通常である。本講義では、歴史的に、こころの異常がどのように理解され、分類・整理されてきたのか、また、それが、どのようなものなのかについて、映像(DVD)や文献を基にして学んでいく。そして、その理解を基にして、心理学を学んだ者が、どのようなアプローチをとることが可能かについて学んでいく。</p> <p>到達目標: 1. 「異常」についての、その歴史や現在の問題点など、いくつかの観点から述べる事が出来る。 2. 代表的な精神疾患の基礎を理解し、そこで心理学的アプローチについて学ぶ。 3. 正しい知識を学ぶことで、偏見をなくすことの大切さを理解する。</p>
教育改善活動	<p>座学形式の講義においては、『感想・メモシート』と題したものを配布、回収している。シートでは、①当日授業の理解したこと、感じたこと、②不明・質問点、③教員へのメッセージを尋ねている。①と②については、座学講義内容が、学生の理解力に沿ったものであるかどうか、あるいは、説明が適切であったかどうかの確認を可能とする。②については、毎回の講義開始時に、前回の講義時に寄せられた不明・質問点などへのコメントシートを配布することで、不明点が残ったままにしないことで、学生の理解が深まるようにつとめている。このことで、学生は他学生の質問にも触れ、また違った視点から講義内容を捉えることにつながっているようである。③については、受講学生に開示することはしないが、適宜講義内容の改善に役立っている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 本年度は、着任初年度であるため、2013年4月、学生による授業評価アンケートは行っていない。今後、授業評価アンケートを実施し、学生の理解度、講義の改善点等について評価分析する。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	総合病院における心理臨床、あるいは地域援助での実践を踏まえた課題のもとで、質問紙、面接法、あるいは、PET-MRSなどの画像と心理検査を組み合わせた研究を行ってきた。事例研究を通じて、総合病院における心理職の職能についても検討を続けている。マイノリティ支援、Help-Seeking行動、などをキーワードに進めている。
研究経歴	<p>2010年 公益財団法人エイズ予防財団リサーチレジデントとして、国立国際医療研究センター病院エイズ治療・研究開発センターにて、「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」に従事(2012年3月まで)</p> <p>2013年 山梨英和大学 人間文化学部 助教(大学院兼任) 臨床心理学、病院臨床、健康開発に関する研究に従事(現在にいたる)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 飯田敏晴・渡邊愛祈 HIV/エイズとともに生きる人への臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー 井上孝代編『臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー』p123-141 風間書房 2013.3</p> <p>b. 飯田敏晴 パーソナリティ障害 日本応用心理学会編『応用心理学辞典』丸善株式会社 2007.12</p> <p>(2) 学術論文(最新5年間のもの)</p> <p>a. 飯田敏晴 エイズ相談促進の為に健康信念モデルに基づいた検討 明治学院大学大学院心理学研究科 学位論文 全108頁 2013.3.31</p> <p>b. 飯田敏晴・いとうたけひこ・井上孝代 2012 HIV自己イメージ尺度(HIVSIS)の信頼性と妥当性の検討: 予防的介入に役立つ尺度の開発 コミュニティ心理学研究 16(1), 39-54.</p> <p>c. 飯田敏晴 2011 急性リンパ性白血病の青年の移植前後における心理過程—チーム医療における臨床心理士の役割 心理臨床学研究 29, 397-408.</p> <p>d. 飯田敏晴・いとうたけひこ・飯田敏晴 2011 高等学校のステークホルダーの葛藤対処方略スタイルと適応—教職員のバーンアウト傾向及び学校特性認知との関連 心理学紀要(明治学院大学) 21, 1-12</p> <p>e. 野内類・飯田敏晴・阿部裕・井上孝代・平野裕子・野田文隆 2010 日本に暮らす外国人のメンタルヘルス上のHelp-seeking行動の研究(第3報)—ペルー人のうつと統合失調症の概念と対処行動—こころと文化 9, 118-129.</p> <p>f. 飯田敏晴・いとうたけひこ・井上孝代 2010 日本の大学生におけるHIV感染経路に関する知識と偏見との関連—性差に焦点を当てて— 応用心理学研究 35, 81-89.</p> <p>g. 飯田敏晴・伊藤武彦・井上孝代 2008 日本の大学生におけるHIV感染者・AIDS患者に対する偏見・知識—中国との比較— 応用心理学研究 32, 142-143.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. Iida T, Ito T, Inoue T. HIV-related knowledge and attitude toward people living with HIV/AIDS among university students in Japan. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. October, 2008. Tokyo, Japan.</p> <p>b. Iida T, Sugiyama Y, Koyama T. Assessing Neurocognitive Function of HIV infected client: Neuropsychological Assessments Availabilities in Japan. The 10th International Congress on AIDS in Asian and the Pacific. August, 2011. Busan, Korea.</p>
競争的資金採択課題	<p>a. 2008年度 日本コミュニティ心理学会若手学会員研究・実践活動奨励金 HIV/AIDSの感染予防教育と偏見予防教育—HIV/AIDSに対するコミュニティスティグマ尺度の開発。[研究代表者]</p> <p>b. 2013年度～2015年度 厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 HIV母子感染児における神経学的予後についての研究。[研究分担者]</p>

学会等発表・役員参加	1) 学会等発表(最近5年間のもの。第一発表者であるもののみ)	
	2013年	6月 飯田敏晴・貫井祐子・今井公文 HIV感染時の治療過程で自殺企図を繰り返した 在日外国人。第16回多文化間精神保健アドバイザー研修会, 事例提供
	2013年	5月 飯田敏晴・田沼順子・小松賢亮・渡邊愛祈・今井公文・岡慎一 神経心理検査を 用いたHIV陽性者の認知機能の検討 第2回MIND & EXCHANGE研究会 口頭発表
	2013年	5月 飯田敏晴 HAND診断に有用なスクリーニング検査は何か?: 国際医療研究セ ンターからの報告 第2回MIND & EXCHANGE研究会 話題提供
	2012年	11月 飯田敏晴・田沼順子・諸岡都・窪田和雄・今井公文・岡慎一 神経心理学検査を 用いたHIV陽性者の認知機能の検討 第26回日本エイズ学会学術集会・総会 口頭発表
	2011年	6月 飯田敏晴 HIV治療過程で受療行動が不安定となった一事例 平成23年度HIV医 療におけるカウンセリング研修会(厚生労働省科学研究) 事例提供
	2010年	11月 飯田敏晴・いとうたけひこ・井上孝代 大学生におけるHIV感染想定時の自己イ メージ尺度作成の試み 第24回日本エイズ学会学術集会・総会 口頭発表
	2010年	9月 飯田敏晴 HIV医療における援助要請行動について 日本心理学会第74回大会 自主企画ワークショップ 援助要請研究の新たな展開ー届かない援助をどう繋 げていくか 話題提供
	2010年	9月 飯田敏晴 HIV/AIDSと共に生きる人々にとっての語り合い 日本心理学会第74 回大会自主企画ワークショップ 援助要請研究の新たな展開ー届かない援助を どう繋げていくか 話題提供
	2009年	9月 飯田敏晴 移植前後での心理過程と危機介入ー急性リンパ性白血病治療下 における一事例 日本心理臨床学界第28回大会 口頭発表
2009年	8月 飯田敏晴・伊藤武彦・井上孝代 想像されたヒト免疫不全ウイルス感染後の自己 イメージ尺度の作成 日本応用心理学会第76回大会 ポスター発表	
2) 学会等の役員参加		
2012年	11月 第26回日本エイズ学会学術集会・総会 共催セミナー シンポジスト	
2011年	9月 日本健康心理学会第24回大会大会企画シンポジウム シンポジスト	
2011年	9月 第18回多文化間精神医学会学術総会 一般演題 座長	
共同研究の実績・受託研	2009年	4月 HIV医療包括ケア体制の整備(カウンセラーの立場から)(平成21年度 厚生労働 省科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV感染症の医療体制の整備に関 する研究。研究代表者:濱口元洋)における研究協力者(至 2010年3月)
	2011年	4月 邦人海外渡航者の渡航前・渡航中・渡航後のメンタルヘルスサービスの需要に 関する研究 平成23年~平成24年度科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究, 研究代表者:山本栄樹)における連携研究者(至 2013年3月)
大学院生指導	大学院生の実習機関である山梨英和大学付属心理臨床センターにおいて、大学院生へ の実習指導を行っている。	
研究能力に対する評価	これまでの青年を対象とした、エイズ相談の利用促進及び、HIV/AIDSに関する偏見低減を扱った 研究では、信頼性の高い質問紙尺度を開発するとともに、研究目的に対応する成果として一定の ものを挙げてきたと考えられる。この研究領域は、本邦での心理学分野での検討は乏しく、基礎的な研 究として位置づけられると考えられる。研究成果のいくつかは国内の学会誌等を通じて公表をしてい るが、一部に留まっている。今後、さらに研究を進め知見の公開をはかり、研究をより広く、深くしてい くことを課題としている。なお、これらの研究成果の一部は、日本コミュニティ心理学会から若手学会 員実践・研究活動奨励賞を受賞した。	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2013年	4月	心理臨床センター紀要編集委員(現在に至る)
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		a. 山梨英和大学付属心理臨床センターにおける大学院生への実習指導 b. 国立国際医療研究センター精神科における研修心理療法士(大学院生・修士修了生)への臨床指導	
社会貢献活動	(1)講演会		
	2011年	11月	明治学院大学社会学部付属研究所主催 第25回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会 講師 「被災地での心のケアをめぐる～専門家の役割とは～」
	2011年	7月	広島県臨床心理士会『第1回 HIV/AIDS専門カウンセラー研修会(広島ブロック)』講師 「HIV医療における心理支援について」
	2009年	11月	東京家政学院大学社会学部『ジェンダー論』講師 「HIV感染/AIDSについて」
	(2)出前講座		
	2013年	1月	日本測地株式会社 第142回“まちづくり研究会” 講師 「気分障害 うつ病とは？」
	(3)公開講座		
	特になし		
	(4)学外審議会・委員会等		
	2012年	3月	平成23年度公益財団法人エイズ予防財団主催 HIV感染者等保健福祉相談事業 相談員連絡会議 世話人
2010年	4月	多文化間精神医学会在日外国人支援委員会委員	
2011年	3月	多文化間精神医学会多文化災害支援委員会委員	
(5)その他			
2013年	4月	山梨英和大学付属心理臨床センター兼任カウンセラー(現在に至る)	

成果と目標

専門的成果	<p>① 青年のエイズ相談の利用の促進及び、HIV/AIDSに関する偏見を低減するための必要なツールとして、視聴覚教材の有効性を実証的に示した。</p> <p>② 青年のエイズ相談の利用を考えていく上で、その行動を説明する上で、健康信念モデル(Health Belief Model)の有用性を支持する実証的資料を得た。</p> <p>③ 論文、事例発表(飯田, 2011a, 2012b; 飯田・貫井・今井, 2013)などを通じて、一貫して、総合病院における心理臨床実践について検討している。そして、「井上孝代編 臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー(風間書房)」において、上記で得られた成果の一部の公表した。</p>
専門的目標	<p>① 総合病院における心理臨床実践における、コンサルテーション、リエゾン(橋渡し)活動について事例を基にしながら考察を深めたい。</p> <p>② 在日外国人、在外邦人支援、セクシュアリティ、HIV/AIDS、等での心理臨床実践において重要な能力である、文化を理解する力(Multicultural Competencies)の教育について理解を深めていきたい。</p> <p>③ 博士論文で扱ったエイズ相談の促進に関する研究は、研究の初期段階としての検討に留まっており、今後さらに深めていきたい。</p>

最新データ入力日	2013年	5月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
コトウ アキラ 後藤 晶	男	1984年	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(情報コミュニケーション学)	専門分野	人間情報学・理論経済学	
学 歴	2003年	3月	神奈川県立横浜翠嵐高等学校 全日制普通科 卒業	
	2004年	4月	中央大学 総合政策学部 政策科学科 入学	
	2008年	3月	中央大学 総合政策学部 政策科学科 卒業	
	2008年	4月	明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 修士課程 入学	
	2010年	3月	明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 修士課程 修了	
	2010年	4月	明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 博士後期課程 入学	
実 務 経 験	2008年	4月	明治大学 情報コミュニケーション学部 ティーチング・アシスタント	
	2010年	4月	明治大学 情報コミュニケーション学部 助手	
	2012年	4月	貞静学園短期大学 非常勤講師	
受 賞 歴	2010年	3月	第一回 明治大学大学院 院長賞 受賞	
	2013年	3月	情報コミュニケーション学会 優秀発表賞 受賞	
所 属 学 会	2011年	4月	行動経済学会(現在に至る)	
	2011年	10月	人間行動進化学会(現在に至る)	
	2013年	4月	情報コミュニケーション学会(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

略

○最新データ入力日

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>従来、人文系大学における「情報系」科目においては情報処理教育及び情報モラル教育が中心となっていた。しかし、この高度に技術革新が進み情報量が増加し続ける現代社会においては目先の技術及び知識だけでは対応し続けることは非常に困難である。このような現状を踏まえると、「情報処理教育」、「情報リテラシー教育」だけではなく、情報量が増加し続ける社会に適応していくために種々の事象を「クリティカル」に認識し、判断・意思決定を行うための「クリティカル・シンキング」能力の育成も情報教育の一環として組み込む必要がある。</p> <p>いわゆる「クリティカルシンキング」は物事を正しく認識し、考えるということであるが、二重過程理論の観点からは「システム1」による「ラテラルシンキング」及び「システム2」による「ロジカルシンキング」の二つから成り立つものである。「ロジカルシンキング」とは帰納法や還元法などに基づいて論理的に構築していく思考法である。一方、「ラテラルシンキング」とは自由な発想に基づいて新境地を切り開いていく、直感に基づく思考法である。この両者を私は情報教育の核として据え、高度に発展し続ける情報社会に対する「適応能力」を育成する必要があると考えている。クリティカルシンキング能力は現代社会において必要な「教養」である。特に実業の世界では重要視されている一方で、いずれも十分に理論的かつ体系的に示されているわけではない。これらの点を踏まえ、理論的かつ体系化を試みることにより、現代社会に貢献する学生の育成をしたいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>【学部生の指導について】 ゲーム実験研究に興味を持つ学生に対し、明治大学情報コミュニケーション学部の学部生論文集である『情コミ・ジャーナル』投稿に際して実験経済学用プログラムであるz-Treeを用いた公共財ゲーム実験の指導を行った。 指導した点はプログラミングだけではなく、経済ゲーム実験の実施方法や論文の書き方など多岐に渡った。なお、当該学生は2011年度「情コミ・ジャーナル」にて最優秀賞を受賞し、情報コミュニケーション学会にて共同発表を行った。</p> <p>【「脳科学入門」講義担当】 明治大学情報コミュニケーション学部開講科目、「情報コミュニケーション学(欲望)」にて「脳科学入門」の講義を担当した。当該講義では様々なヴィジュアルエイドを用いて脳科学の基本用語を説明した。また、それを踏まえて、脳科学を用いた社会科学(神経経済学・ニューロマーケティング)・人文科学(神経倫理学)研究についても言及した。脳科学的な知見は意思決定プロセスを解明する為には必要な不可欠な視座であり、リアクションペーパーを見ても、脳科学的視座からの「欲望」に対する発想の基礎を示唆することが出来たと考えられる。</p> <p>【「情報機器操作入門」・「情報機器操作応用」担当】 貞静学園短期大学保育学科にて1年次配当科目である「情報機器操作入門」を担当した。当該科目はOffice系ソフトであるWord, Excelの操作方法を中心に実習形式で授業を進行した。 また、後期は2年次配当科目である「情報機器操作応用」にてPowerPointアニメーション作品の作成及びインターネット上の個人情報の取扱を中心に講義・実習を行った。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2013年度 ITリテラシー1及び2</p>
代表的シラバス	<p>【ITリテラシー1及び2】 教育理念及び方針に基づき、Word, Excel, PowerPointに関する基礎的技術及び情報化社会におけるリテラシーに加え、WordやExcel, PowerPointを用いて「ロジカルシンキング」や「ラテラルシンキング」が養成できるようにカリキュラムを組んでいる。</p>
教育改善活動	<p>特になし</p>

教育能力に対する評価	(1) 学生による授業評価
	特になし
	(2) 同僚教員等による授業評価
	特になし

研究業績

研究の特徴	<p>研究の特徴はその学際性にある。現在は特に①二重過程理論研究と②実験ゲーム研究を中心に行なっている。</p> <p>①二重過程理論とは、意思決定に際して直感／感情に関わるシステム1と論理／理性に関わるシステム2の双方が影響するという理論である。従来の二重過程理論の観点からはシステム1とシステム2の対立が前提とされてきた。しかし、現実的な認知プロセスを考慮すると、システム1がシステム2としての情報処理を必要とするか否かも判断するという「統合型二重過程モデル」を提唱し、理論的検討を行なっている。</p> <p>また、②実験ゲームの観点からは、人間が自発的貢献(自発的貢献行動)に至るプロセスについて社会的ジレンマゲームをベースとして検討している。現在は特に社会的ジレンマゲームをベースとして「社会的潜在リスク」が突如として「現実化」した災害発生時のような状況の人間行動について実験研究及びシミュレーション研究を行なっている。</p>
研究経歴	<p>年</p> <p>年</p> <p>年 特になし</p> <p>年</p> <p>年</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>後藤 晶(他4名), 2012, 『情報コミュニケーション学際研究論集 第1号』, 明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科</p> <p>…「囚人のジレンマゲーム研究から見えてくる共存共栄」(外部招聘講師である上智大学川西諭教授の講義とその後の質疑応答を編集)</p> <p>後藤 晶, 2012, 「2-3防災と情報」, 「2-4避難所等の情報」, 「2-6安否確認」, 野上 修市(他7名編), 2012, 『地域・マンションの防災ハンドブック』, 地域マネジメント学会・大成出版社</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>a. 後藤 晶, 2013, 「「カタストロフ」は自発的貢献行動を促進するか: 「カタストロフゲーム」の提案と予備的実験」, 『貞静学園短期大学研究紀要』, 貞静学園短期大学, pp.15-25..</p> <p>b. 後藤 晶, 2013, 「「線形性の期待」を崩壊するカタストロフ」, 『貞静学園短期大学研究紀要』, 貞静学園短期大学, pp.5-13.</p> <p>c. 後藤 晶, 2012, 「社会的ジレンマに関する一考察: 囚人のジレンマゲームを例として」, 『情報コミュニケーション学際研究論集 第1号』, 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科, pp.31-43.</p> <p>d. 後藤 晶, 2011, 「意思決定の神経科学的基盤: 近赤外線分光法を用いた実験による予備的考察」, 1, 第2号, 明治大学大学院, pp. 1-19.</p> <p>e. 後藤 晶, 2010, 「社会的感情の機能とその進化に関する一考察 -社会的行動に対する二重過程理論的アプローチ-」, 『情報コミュニケーション研究論集』, 第1号, 明治大学大学院, pp.1-19.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>特になし</p>

競争的資金採択課題	<p>a.修士論文執筆の為の研究調査プログラム(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科), 2009年度, 「感情が意思決定に与える影響」, 研究代表者, 125,000円</p> <p>b.修士・博士論文執筆の為の研究調査プログラム(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科), 2010年度, 「感情が意思決定に与える影響:二重過程理論アプローチ」, 研究代表者, 125,000円</p> <p>c.明治大学大学院 研究調査プログラム, 2011年度, 「意思決定における社会的感情の影響とその進化」, 研究代表者, 142,590円</p> <p>d.明治大学大学院 研究調査プログラム, 2012年度, 「感情が意思決定に与える影響:カタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 研究代表者, 135,000円</p>	
学会等発表・役員参加	<p>2013年</p> <p>2013年</p> <p>2013年</p> <p>2012年</p> <p>2012年</p> <p>2012年</p> <p>2011年</p> <p>2012年</p>	<p>3月 a.「内集団バイアス-外集団バイアスに関する事例研究:情報機器操作に関する授業を通じて」,(単独発表),第10回情報コミュニケーション学会全国大会, 武庫川女子大学中央キャンパス</p> <p>2月 b.「災害の発生は自発的貢献行動を促進するか:災害発生による協力促進メカニズムに関する一考察」,(単独発表),第10回情報コミュニケーション学会全国大会, 武庫川女子大学中央キャンパス</p> <p>1月 c.「一部のプレイヤーに生じた「非人為的な損失」による自発的貢献の促進可能性に関する一考察:「部分カタストロフゲーム」による実験的アプローチ」,(単独発表), 特定領域総括シンポジウム, 学術総合センター一橋講堂</p> <p>12月 d.「「非人為的な損失」による自発的貢献の促進可能性に関する一考察:カタストロフゲームによる実験的アプローチ」,(単独発表),日本人間行動進化学会第5回大会, 東京大学駒場キャンパス.</p> <p>3月 e.「公共財ゲームにおける協力関係形成と維持のメカニズム—実験的研究—」,共同発表(鈴木翔氏と共同発表), 第9回情報コミュニケーション学会全国大会, 青山学院大学青山キャンパス</p> <p>3月 f.「コミュニケーションによる規範形成の検討:繰り返しゲームアプローチ」, 単独発表, 第9回情報コミュニケーション学会全国大会, 青山学院大学青山キャンパス</p> <p>12月 g.「災害における喪失体験の考察:死の認知と受容」, 共同発表(岩崎美香氏と共同発表), 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会, 関西大学堺キャンパス</p> <p>3月 h.「Moodが意思決定に与える影響:意思決定タイプを変容させる情報としての感情」, 単独発表, 第8回情報コミュニケーション学会全国大会, 園田女子学園大学</p>
共同研究の実績・受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	<p>現在は特に災害時の自発貢献メカニズムの解明を実験及びシミュレーション的な手法により試みている。この問題は2011年, 未曾有の大災害である東日本大震災に直面した我が国にとって非常に重要な課題である。その一方で, 現状では情報学や経済学, 心理学など様々な学術領域の知見にたっても理論的解明が十分になされていない。しかし, より広い応用可能性を持つ実験ゲームの枠組みに用いることにより, 社会科学及び人文科学にも応用可能な研究が推進可能であると確信している。</p> <p>また, 同研究テーマについて学会発表にて優秀発表賞を受賞したり, 外部の研究機関との共同研究も準備が進行しているなど一定程度の評価を受けていると考えられる。</p>	

サービス活動業績

学内委員会・作業部 会等活動実績	年 月 年 月 年 月 年 月 特になし 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1) 講演会 年 月 特になし</p> <p>(2) 出前講座 年 月 特になし</p> <p>(3) 公開講座 年 月 特になし</p> <p>(4) 学外審議会・委員会等 年 月 特になし</p> <p>(5) その他</p> <p>2008年 9月 横浜市の少年野球チーム、宮前パワーズ寺子屋にて小学生の論理的思考力のトレーニング活動に従事(現在に至る)。</p> <p>2008年 9月 横浜市少年野球チーム、宮前パワーズ日常の練習活動のサポート及び合宿等の行事の企画を担当している。(現在に至る)。</p> <p>2011年 3月 2011年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」に参加。宮城県内で津波の被害にあった女川町から山元町の沿岸部にかけての避難所にてアセスメント活動に従事した。 その他、学生時代より横浜市で企画する小学生対象の宿泊行事にボランティアとして参加をしたり、小学校の体験学習の運営サポート、学生の合宿形式の研究会イベント等の企画・代表を経験している。</p>

成果と目標

専門的成果	<p>①自発的貢献行動の促進メカニズムに関する研究： 複数の学術領域に渡り研究が積み重ねられている自発的貢献行動の促進メカニズムについて、社会的ジレンマの枠組みを踏まえて実験研究を積み重ねている。特に現在は災害時の自発的貢献メカニズムについて実験研究及びシミュレーション研究を実施し、学会発表等を積み重ねている。</p> <p>②自発的貢献行動と二重過程理論の接合点の検討： 自発的貢献行動は「感情・直感」的なものなのだろうか。もしくは、「理性」的なものなのだろうか。実験研究を踏まえて二重過程理論の観点から、進化心理学的な観点を考慮しつつこの問題について理論的解明のために蓄積を行なっている。また、近々論文の形でまとめる予定である。</p> <p>③文化や慣習が意思決定に与える影響の検討： これは現在行なっている研究テーマである。文化・慣習は意思決定に対して多分なる影響を与えていることは間違いない。現在は仮説を立てて理論的検討をしており、これからの成果が期待される。</p>
-------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①自発的貢献行動の促進メカニズムに関する研究： 今年度は本学での実験環境を構築すると同時に実験を実施し、学会発表・論文投稿を積み重ねていくことを目標とする。</p> <p>②自発的貢献行動と二重過程理論の接合点の検討： 実験研究及びシミュレーション研究によって、自発的貢献行動に対する「外部からの」影響は明らかに出来る一方で、「内部でのプロセス」は十分に明らかに出来るものではない。従って、認知科学や行動経済学、実験社会科学など様々な学術領域の知見を踏まえて解明を試みることを目標とする。</p> <p>③文化や慣習が意思決定に与える影響の検討： ヒトは自身の「短期的な利益」だけで意思決定を行いがちである。しかし、本来ならば短期的な利益だけでなく、「長期的な利益」を考慮しなければならない。この考慮すべき「長期的な利益」を伝える手段の一つが文化・慣習・規範であると考えられる。文化・慣習・規範が意思決定に与える影響について二重過程理論の観点から理論的考察を加える事を目標とする。</p>
--------------	---

<p>最新データ入力日</p>	<p>2013年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------